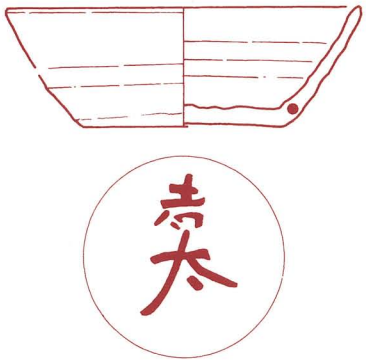
茨城県稲敷郡美浦村

大作台遺跡

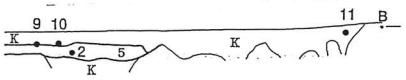
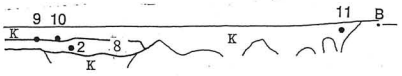
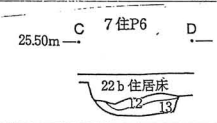
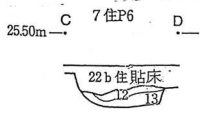
—第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書—



2011

美浦村教育委員会

『茨城県稲敷郡美浦村　大作台遺跡ー第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書ー』正誤表

箇所	誤	正
18頁左段7行目	北ー南3.2方向m	北ー南方向3.2m
18頁右段15行目	平面形はや	平面形や
20頁左段7～8行目	高杯形、杯形、坩形、壺形、甕形の土器である。	削除
29頁左段29行目	第7号	第3号
32頁左段5行目	ローム層の遺存状態はやや良い。	ローム層の遺存状態はやや良い（本章図ではⅡ次調査の基本土層でⅡ層とした黄褐色ローム層をⅢ層と表記）。
36頁第27図A-B断面図		
36頁第27図土層説明		８層：暗褐色土層　大形のロームブロックが目立つ。層相は２，３層が混在したような土層。白色粘土ブロックが点在。締まり有り。上部はロームブロックが集中し、固く締まっている。
46頁左段17行目	覆土下	貼床下
50頁キャプション	第39号	第39図
50頁C-D断面図		
75頁第62図	22c住P3	22住P3
75頁第62図	22c住P8	22住P8
82頁右段20行目	いずれも	１，５は貼床中から、他は
108頁表Ⅲ次25ｂ号住居跡第67図１の出土位置欄		貼床中
108頁表Ⅲ次25ｂ号住居跡第67図５の出土位置欄		貼床中
136頁キャプション	双孔円坂	双孔円板
137頁キャプション	双孔円坂	双孔円板

茨城県稲敷郡美浦村

大作台遺跡

—第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書—

2011

美浦村教育委員会

Ⅲ次１号住居跡の赤色土と棒状土製品

・左上　Ⅲ次９号住居跡出土丸鞆

・左下　Ⅲ次 22b 号住居跡出土巡方

・右上　Ⅲ次 19c 号住居跡出土石製紡錘車

序

美浦村の「信太（しだ）」は、昔の郡名に由来する由緒ある地名です。信太郡は、奈良時代に編纂された『常陸国風土記』によると、７世紀中頃に、筑波郡と茨城郡の一部を分けて新たに置かれたとされ、その範囲は今の稲敷郡（市部も含む）とおおよそ一致します。現在、信太という旧郡名を地名に残しているのは当地だけであり、古くより郡の中心的な場所のひとつであったと考えられてきました。

今回の大作台遺跡の発掘調査は、その信太地区内において、初めて実施された本格的な考古学調査であり、調査の結果、今まで謎に包まれていた同地区内の古代史をひも解くための、重要な手掛りが得られました。特に、「志太」と墨で書かれた土器や、当時の役人が着用していた腰帯の装飾具、そして村内では初めてとなる皇朝十二銭の「隆平永寶」が出土したことは、律令体制のもとに営まれていた当時の人々の暮らしを考える上で貴重な発見といえます。本書の刊行により、このような調査成果が広く活用され、私たちの郷土をより良くしていく思索や活動に役立てば幸いです。

最後に、調査の実施にあたっては、丸太建設株式会社、有限会社マキヤ緑化土木、株式会社タケホをはじめ、多くの方々に、ご尽力・ご支援を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成23年3月

美浦村教育委員会

例　言

1．本書は、茨城県稲敷郡美浦村大字信太字作久保2052外地内に所在する大作台遺跡において、平成15, 18～20年度に、３次にわたって現地調査が実施された発掘調査の報告書である。

2．調査は土砂採取事業に伴う事前の記録保存を目的として実施されたもので、委託者及び受託者は以下のとおりである。

Ⅰ次調査（平成15年度）　委託者　丸太建設株式会社　受託者　美浦村大作台遺跡調査会

Ⅱ次調査（平成18～19年度）　委託者　有限会社マキヤ緑化土木　受託者　美浦村

Ⅲ次調査（平成19～20年度）　委託者　株式会社タケホ　受託者　美浦村

3．発掘調査の主体者及び調査組織は以下のとおりである。

Ⅰ次調査（平成15年度）

主体者　美浦村大作台遺跡調査会　会長　堀越健一郎

調査担当者　美浦村教育委員会　学芸員　川村勝

調査参加者　馬場信子（美浦村教育委員会　学芸員）、石川キミ子、宮本よし子

Ⅱ次調査（平成18～19年度）

主体者　美浦村教育委員会　教育長　葉梨修

調査担当者　美浦村教育委員会　学芸員　川村勝

調査参加者　馬場信子（美浦村教育委員会　学芸員）、小泉琢也、高橋敦子、高橋道夫、沼崎忠夫、秦野悦子

Ⅲ次調査（平成19～20年度）

主体者　美浦村教育委員会　教育長　葉梨修

調査担当者　美浦村教育委員会　学芸員　川村勝

調査参加者　馬場信子（美浦村教育委員会　学芸員）、安藤春枝、寺田恵利、沼崎忠夫、秦野悦子、谷畑節子

整理作業（平成21～22年度）

主体者　美浦村教育委員会　教育長　葉梨修（～平成22年10月1日）、門脇厚司（平成22年10月2日～）

調査担当者　美浦村教育委員会　学芸員　中村哲也

調査参加者　馬場信子（美浦村教育委員会　学芸員）、阿井朋子（美浦村教育委員会　主任）、堀恭介（調査員）、大津則子、島田裕子

4．本書の編集・執筆は中村が行った。

5．調査で出土した金属製品の保存処理等については、筑波大学の松井敏也氏にご指導を賜り、古銭のＸ線写真撮影については、奈良県立橿原考古学研究所の奥山誠義氏のご協力を得た。また、土壌の分析調査については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託している。

6．調査に関わる図面・写真・遺物等の資料は、美浦村教育委員会が一括して保管している。

7．発掘調査の実施と本書の刊行にあたっては、下記の諸氏、諸機関に指導・ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略、五十音順）

市川暠一、川井正一、菊池芳文、木村愛子、木村正、窪田恵一、小泉光子、神保光夫、高橋久夫、高橋道夫、高橋林之助、林こう、宮本治男、吉田尚子

茨城県教育庁文化課、伸和エステート株式会社、地質標本館

目　次

口絵／序／例言／目次／凡例

Ⅰ．遺跡と調査の概要 …… 1

遺跡の位置と地形／歴史的環境／調査に至る経緯／検出された遺構と遺物

Ⅱ．第Ⅰ次調査で検出された遺構と遺物 …… 7

調査地点の地形／塚状遺構／第１号住居跡／第２号住居跡／第３号住居跡

Ⅲ．第Ⅱ次調査で検出された遺構と遺物 ……15

調査地点の概要／第１号住居跡／第２号住居跡／第３号住居跡／第４号住居跡／第５号住居跡
／第６号住居跡／第７号住居跡／土坑とピット／塚状遺構／遺構外出土遺物

Ⅳ．第Ⅲ次調査で検出された遺構と遺物 ……32

調査地点の概要／縄文・弥生時代遺物／第１号住居跡／第２ａ，ｂ号住居跡／第３号住居跡
／第４号住居跡／第５号住居跡／第６号住居跡／第６ｂ号住居跡／第７号住居跡／第７ｂ号住居跡
／第８号住居跡／第９号住居跡／第９ｂ号住居跡／第10号住居跡／第11号住居跡／第14号住居跡及び土坑とピット
／第16号住居跡／第24号住居跡／第18号住居跡／第19号住居跡／第19ｂ号住居跡／第19ｃ号住居跡
／第20号住居跡／第21号住居跡／第22号住居跡／第22ｂ号住居跡／第22ｃ号住居跡／第23号住居跡
／第25，25ｂ号住居跡

Ⅴ．まとめ …… 83

引用・参考文献

付編 …… 86

大作台遺跡で検出された赤色土の分析調査

縄文・弥生土器観察表／土師器・須恵器観察表／土製品観察表／石器観察表／金属製品観察表／滑石製品観察表

写真図版 …… 117

報告書抄録

凡　例

本書における図中の表記は、特に指示の無い限り下記の事項を示す。

1．文章中のゴチック数字は、遺物番号を示す。

2．図中の「住」は住居跡を、「土」は土坑を、「Ｐ」はピットを示す。

3．遺構実測図における、網点は焼土の範囲を、長い破線は床面硬化部の範囲を、一点破線は撹乱の範囲を、－数字はピットの深さを示す。また、「Ｋ」は撹乱を示す。

4．土器実測図における、●印は須恵器であることを、石器実測図における空白部は磨滅部を示す。

5．縮尺は、遺構実測図は1/60を基本とし、土器実測図は1/4，土器拓本図・支脚・磨石・敲石は1/3、土製品（含ミニチュア土器）、石斧、石製紡錘車は1/2、腰帯具、滑石製品、剥片石器、石核、剥片、古銭は2/3である。

Ⅰ．遺跡と調査の概要

遺跡の位置と地形

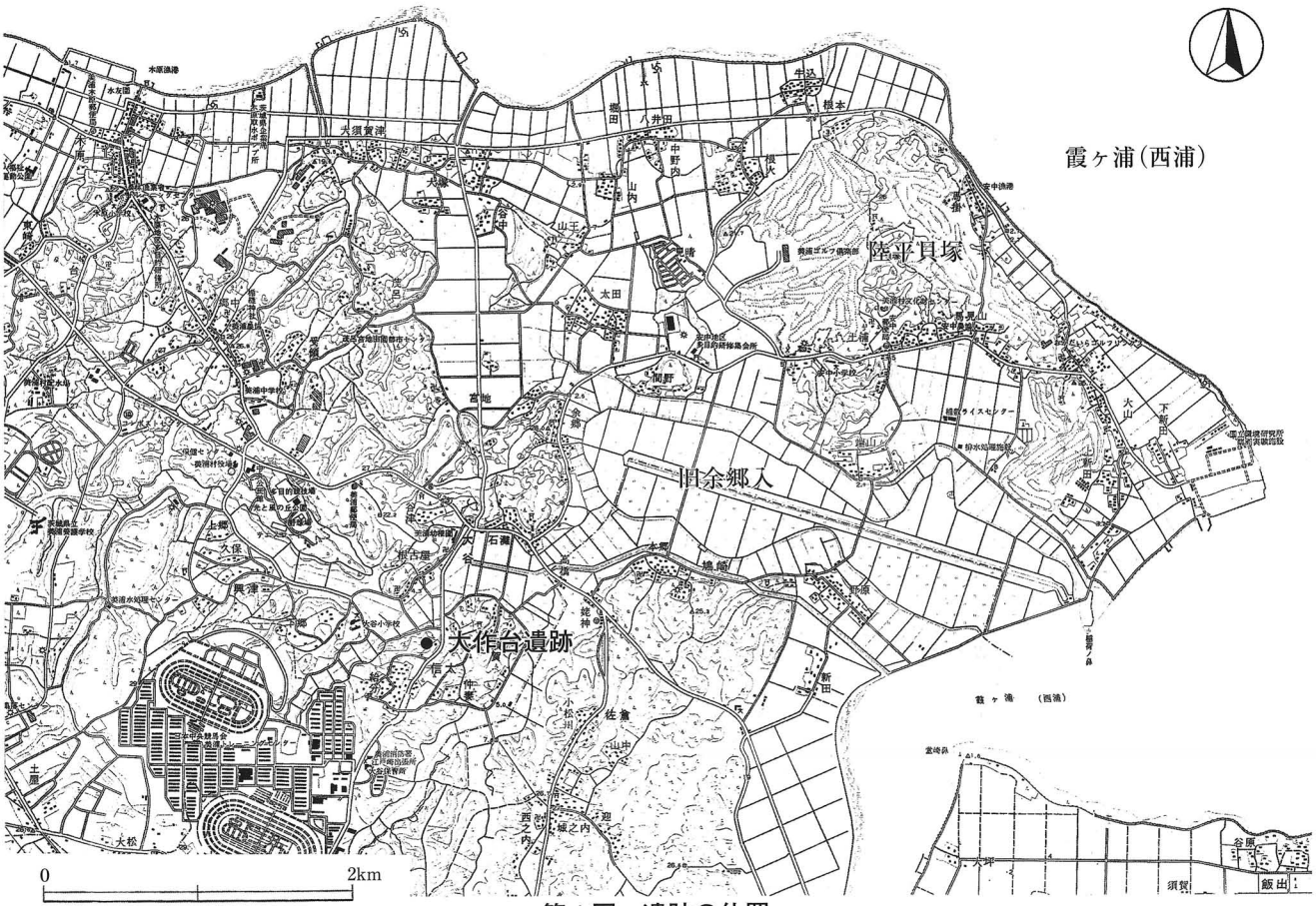
大作台遺跡は、霞ヶ浦の南岸、茨城県稲敷郡美浦村大字信太に所在する。霞ヶ浦南岸と利根川下流の間には、「稲敷台地」と呼ばれる更新世の地形面を基盤とする台地が形成されており、遺跡は霞ヶ浦に近い稲敷台地北部に位置する。（第１図）

当該地域には、1950年代に干拓された霞ヶ浦の旧入江「余郷入」に至る２本の谷筋によって区切られた、南西から北東方向に延びる台地が存在し、遺跡はその北西部の、標高25ｍ程の尾根状部に立地する。やや広い谷に面した尾根状部の北側は、沖積地との比高差20ｍ程の急斜面になっており、斜面中央部には崩落地形と思われる窪みがみられる。一方、南東側は小規模な支谷に面しており、沖積地との比高差約15ｍのやや緩い斜面になっている。また、西側は谷状に抉られた斜面地形によって、南側の台地部と区画される。（第３図）

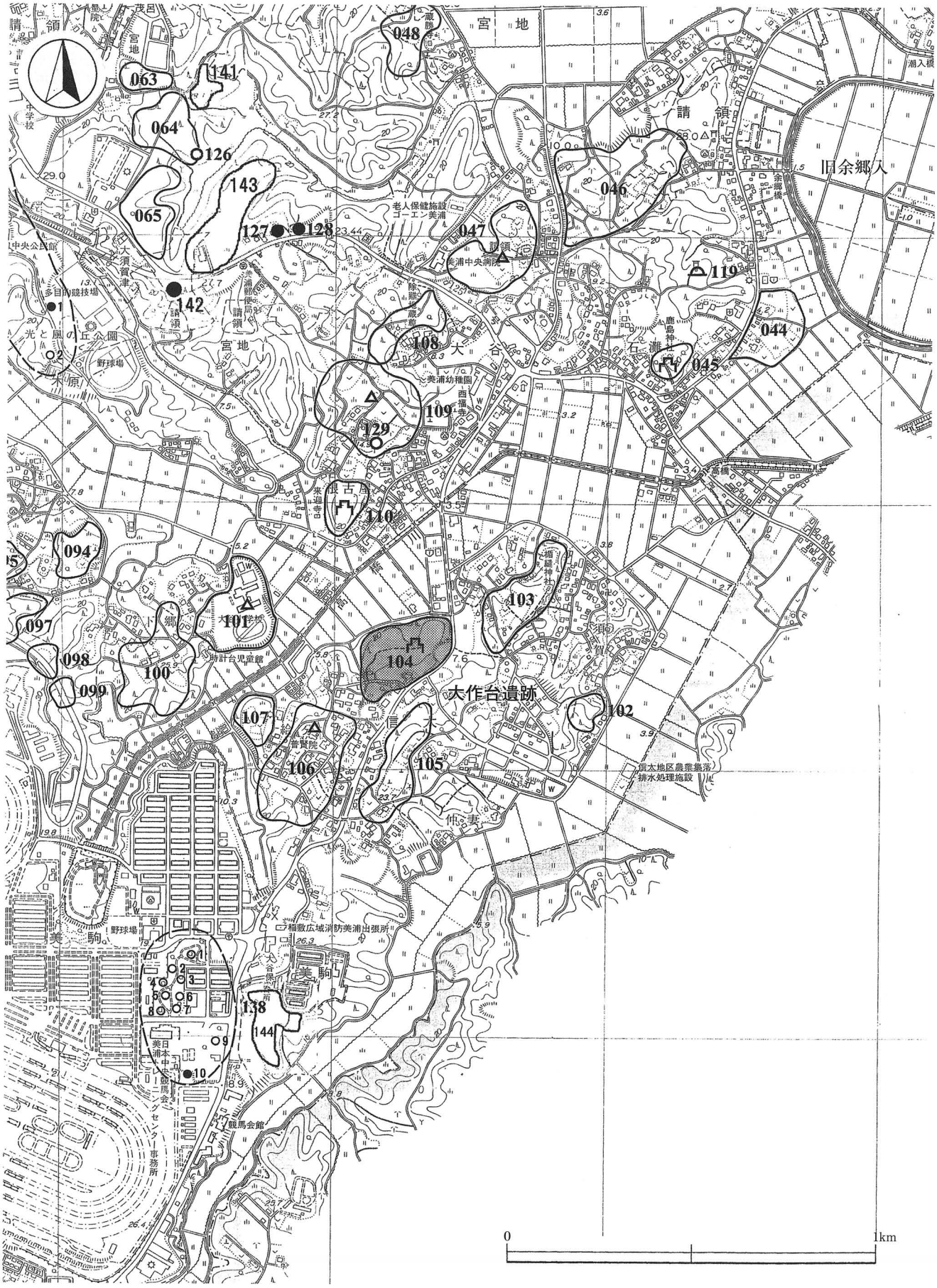
歴史的環境

美浦村の信太地区は、古代常陸国信太郡信太郷に比定され、郡名を冠した地域として、古くから古代信太郡の中心地のひとつと考えられ、郡衙の推定地にもされてきた。しかし、当地域において、郡衙や郡寺、駅家などの郡の中心的な施設を示す遺跡の存在は知られておらず、不明な点が多い。［豊崎 1970］

周辺の遺跡分布としては（第２図）、大作台遺跡の北側に東西に延びる谷筋に面して、各時代の遺跡が多く認められ、いくつかの遺跡で発掘調査も実施されている。この谷筋は縄文海進時には、途中まで海が入り込んでいたと思われ、興津貝塚［西村 1968］や虚空蔵貝塚（101以下番号は第２図に対応）［大川・大島 1977］、大谷貝



第１図　遺跡の位置


048
063
141
064
126
143
065
127
128
142
046
047
119
044
045
108
109
129
110
094
097
098
099
100
101
103
104
大作台遺跡
102
107
106
105
138
144
旧余郷入
0
1km

第２図　周辺の遺跡

塚（109）［駒澤 2009］など、縄文時代の貝塚遺跡が集中する。弥生時代では、中期の集落跡である笹山遺跡［大竹他 1986］が一番谷奥に存在し、下流にあたる大作台遺跡対岸の大谷貝塚（109）では、後期の住居跡が検出されている。古墳時代では、虚空蔵貝塚（101）、大谷貝塚（109）で集落跡が確認されており、奈良・平安時代では、下流にあたる大谷貝塚（109）や大谷谷津台遺跡（108）の他、谷南岸のやや奥に入った原畑遺跡（098）や稲荷山遺跡（099）で集落跡が検出されている［奥富他 1996］。

一方、大作台遺跡東方の、余郷入から南下する谷筋沿いでは、近年、信太入子ノ台遺跡（144）が発掘調査され、縄文時代前期、弥生時代後期、古墳時代前期、奈良・平安時代の集落跡の存在が明らかになった。この遺跡からは、灰釉陶器や蓋に「大伴」と書かれた蔵骨器、大作台遺跡と同じく「志太」と書かれた墨書土器が出土しており注目される。また、信太入子ノ台遺跡から浅い谷を挟んだ西側の台地上には、円墳を中心とした美駒古墳群（138）が展開する。

調査に至る経緯

大作台遺跡の発掘調査は、３次にわたって実施された（第３図）。

現地調査や遺物の整理作業に際しては、それぞれ「第１次」、「第２次」、「第３次」という表記で呼称・記録を行っているが、本報告書の記載にあたっては、遺構番号との区別を明瞭にするために、「第Ⅰ次」、「第Ⅱ次」、「第Ⅲ次」という表記に置き換えている。

第Ⅰ次調査

平成 15 年２月、周知の遺跡である大作台遺跡地内における土砂採取事業の計画に伴い、事業者より美浦村教育委員会（以下「村教委」）に、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。これに対し、村教委では、現地踏査を行った上で、開発予定地内に遺跡が所在する旨回答した。これを受けて、事業者と村教委で遺跡の保護対策について協議をおこなったが、現状保存することが困難なことから、事業者より、平成 15 年４月付で茨城県教育長（以下「県教育長」）に、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘の届出が提出され、これに対し県教育長から工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知された。

同年５月には、事業者と村教委、美浦村大作台遺跡調査会（以下「調査会」）の三者で協定が結ばれ、事業者が調査会に委託して発掘調査を実施することとなり、調査会は埋蔵文化財発掘調査の届出を県教育長に提出の上、平成 15 年５月 23 日～同年７月４日の期間、約 100 ㎡の範囲を対象に現地における発掘調査を実施した。

第Ⅱ次調査

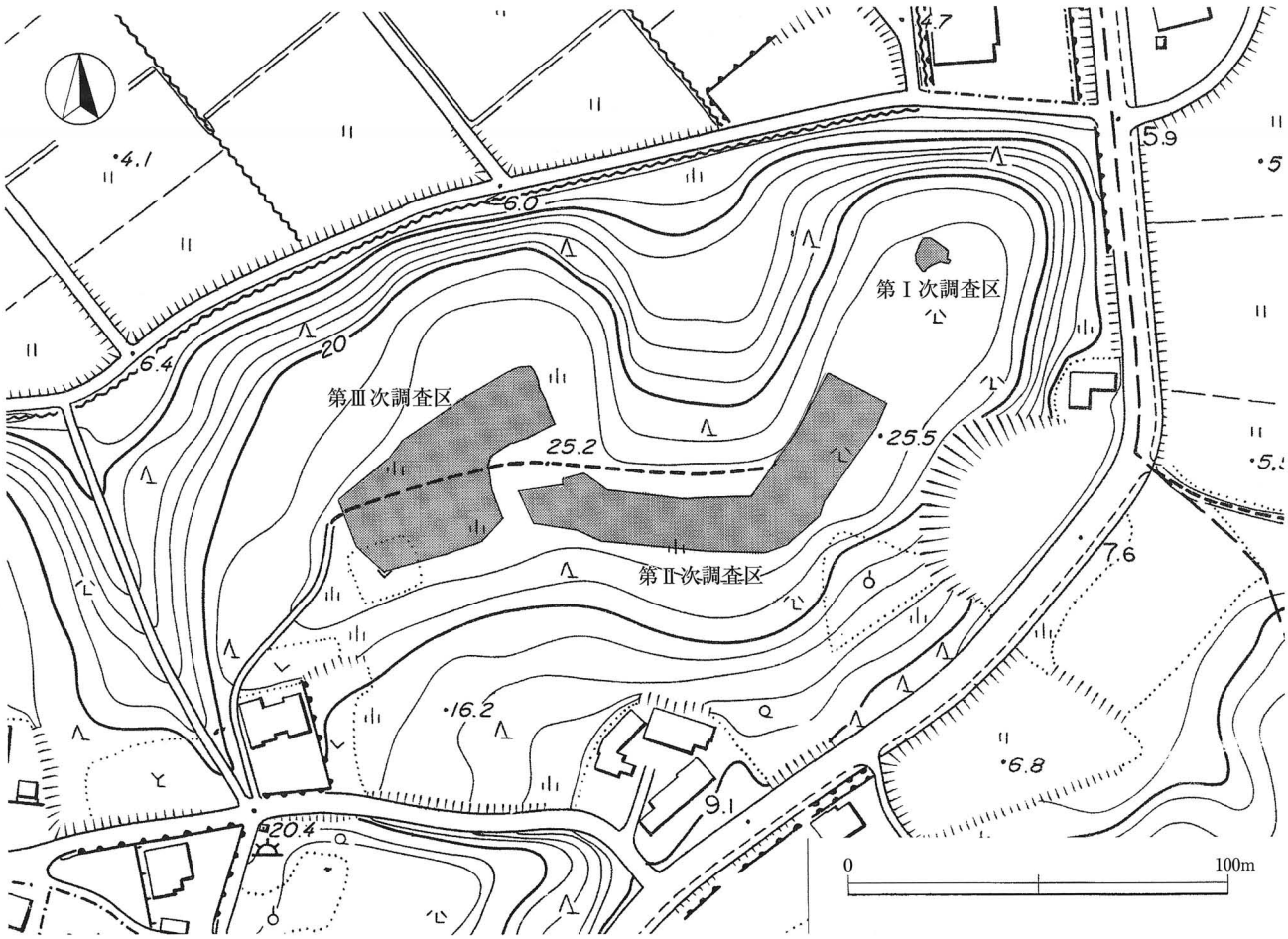
平成 18 年 11 月、再び、大作台遺跡地内の未発掘地域において、土砂採取事業の計画に伴う、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があり、村教委では、試掘調査を行った上で、開発予定地内に遺跡が所在する旨回答した。これを受けて、事業者と村教委で遺跡の保護対策について協議をおこなったが、現状保存することが困難なことから、事業者より、平成 19 年１月付で県教育長に、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘の届出が提出され、これに対し県教育長から工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知された。

これを受けて、事業者が美浦村（以下「村」）に委託して発掘調査を実施することとなり、調査主体者である村教委は埋蔵文化財発掘調査着手の報告を県教育長に行った上、平成 19 年２月 19 日～同年３月 29 日の期間、約 1,500 ㎡の範囲を対象に現地における発掘調査を実施した。

第Ⅲ次調査

平成 19 年 11 月、三度、大作台遺跡地内の未発掘地域において、砂利採取事業の計画に伴う、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があり、村教委では、試掘調査を行った上で、開発予定地内に遺跡が所在する旨回答した。事業者と村教委で遺跡の保護対策について協議をおこなったが、現状保存することが困難なことから、事業者より、同年同月付で県教育長に、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘の届出が提出され、これに対し県教育長から工事着工前に記録保存のための発掘調査を実施するよう通知された。

これを受けて、事業者が美浦村（以下「村」）に委託して発掘調査を実施することとなり、調査主体者である村教



第３図　遺跡の地形と調査区の位置

委は埋蔵文化財発掘調査着手の報告を県教育長に行った上、平成20年1月21日～同年5月12日の期間、約1,700㎡の範囲を対象に現地における発掘調査を実施した。

検出された遺構と遺物

現地での発掘調査は、塚状遺構の調査が主体であった第Ⅰ次調査を除き、第Ⅱ, Ⅲ次調査とも表土をバックホーで掘削後、遺構の確認に入っている。

第Ⅰ～Ⅲ次調査全体で検出された遺構としては、弥生時代住居跡１軒、古墳時代住居跡21軒、奈良・平安時代住居跡16軒、時期不明の住居跡２軒、中・近世の塚状遺構２基で、他に土坑11基、ピット39基、焼土５ヶ所が検出された。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器等の土器類をはじめ、管状（球状）土錘、土製紡錘車、土製支脚、磨製石斧、磨石、敲石、砥石、スクレイパー、研磨・摩滅が認められる石器、滑石製模造品、石核、剥片・砕片、石製紡錘車、鉄製鎌、古銭、銅製巡方、銅製丸鞆などである。弥生土器は第Ⅰ次３号住居跡で、後期の土器が、第Ⅲ次調査区遺構外で中期の土器がまとまって出土している。奈良・平安時代の遺物の中では、第Ⅱ次５号住居跡出土の「志太」と墨書された須恵器や、第Ⅲ次調査区の住居跡から出土した、腰帯具（巡方, 丸鞆）、皇朝十二銭の「隆平永寶」などが注目される。

表１は遺構別の遺物出土数である。土器類の分類は概要を示す程度の大まかな分類で、土師器の小破片については、高杯形土器、坩形土器、轆轤成形ではない杯形土器や、刷毛目、赤色塗彩が施されたもの等を古墳時代に、轆轤成形の杯形土器等を奈良・平安時代にあてている。須恵器については、稜や受部がある蓋や杯を古墳時代に、底部から直線的に立ち上がる杯や、つまみの有る蓋を奈良・平安時代に該当させたが、時期不明の須恵器破片と灰釉陶器は、奈良・平安時代の須恵器に入れている。なお、土製品類その他には被熱粘塊を含み、同一個体と識別できた土器類の破片群は、１点として数えている。

表１　遺構別遺物出土数

	遺構	土器類									土製品類		石器類				金属類
		縄文	弥生	古墳		奈良・平安		中近世	不明	小計	土錘	その他	模造品	剥片	礫	その他	
				土師器	須恵器	土師器	須恵器										
Ⅰ次	第１号住居跡	6	492	101			5	3	208	815	2	4			31	3	
	第２号住居跡		184	136			6		242	568	1			1	2	1	
	第３号住居跡		49	3		2	2		25	81						1	
	塚状遺構		29	1		1	2		21	54		3			1		
	遺構外	1	8					4	13	26		13			1		
	計	7	762	241	0	3	15	7	509	1544	3	20	0	1	35	5	0
Ⅱ次	第１号住居跡			1		25			24	50		1			1		
	第２号住居跡		2	5		142			28	177		7			2		
	第３号住居跡	2	38	41		3			130	214	3	6	1	1	8	1	
	第４号住居跡		1	14		79			193	287	1	10			7		
	第５号住居跡			10		91			140	241		6			2		1
	第６号住居跡					17			14	31		1		1	1		
	第７号住居跡	1	8	80					18	107		2					1
	(第 11 号土坑)	2	9	75					42	128			1	2	4		
	第１号土坑			10		3			4	17		1		1			
	第２号土坑					7			19	26		1					
	第３号土坑								2	2							
	第４号土坑									0							
	第５号土坑			14					31	45							
	第６号土坑	1	2	7					8	18							
	第７号土坑			2		3			9	14					1		
	第８号土坑			2		6			12	20							
	第９号土坑			4		5			5	14							
	第 10 号土坑	2	3	82					15	102					3		
	1 P								1	1							
	2 P					2				2							
	3 P					2				2							
	4 P								2	2							
	6 P					4				4							
	8 P					2				2							
	11 P					4			1	5							
	12 P					2			1	3							
	13 P			1					2	3							
	14 P			1						1							
	15 P					2			1	3							
	16 P		3	2		3			2	10							
	18 P								1	1							
	20 P								2	2							
	24 P								7	7							
	26 P								1	1							
	31 P	1		1		12			7	21		1					

	遺構	土器類									土製品類		石器類				金属類
		縄文	弥生	古墳		奈良・平安		中近世	不明	小計	土錘	その他	模造品	剥片	礫	その他	
				土師器	須恵器	土師器	須恵器										
Ⅱ次	32 P					2			3	5							
	33 P			2		2			7	11							
	34 P			2		3				5							
	35 P		1			3			6	10					2		
	37 P					2				2							
	塚状遺構		1					3	5	9						5	3
	試掘・表土剥					15			7	22		3					
	グリッド・表採	4	15	88		16			112	235	1	3			1	1	
	計	13	83	444		457		3	862	1862	5	42	2	5	32	7	5
Ⅲ次	第1号住居跡	53	372	165	1				336	927	1	5	2	39	28	8	1
	第2 a 号住居跡	5	23	27					5	60					4		
	第2 b 号住居跡	1	10	8						19				1	2		
	第3号住居跡	29	162	187	2	7			546	933	4	2	2	11	56	2	
	第4号住居跡	33	162	174	7	266	6	1	622	1271	8	14		8	35	6	1
	第5号住居跡	4	35	94	1	4	1	1	70	210	2	1		2	3		
	第6号住居跡	26	219	284	4	4	2	3	919	1461	10	11		12	41	3	
	第6 b 号住居跡	7	44	45					117	213	1			2	9	1	
	第7号住居跡	21	130	137	1	42	119		722	1172	3	2	135	64	127	6	
	第7 b 号住居跡	4	24	25	2	16	50		122	243	1	1	1	8	6	1	
	第8号住居跡	4	63	46		6	1		162	282	4	1	1	2	20	1	
	第9号住居跡	10	129	130	6	74	67		442	858	2	2	1	9	21	3	1
	第9 b 号住居跡	4	35	33	1	76	82		166	397	9			4	16	1	
	第10号住居跡	3	41	69	2	11	11	4	183	324	3	1		1	10	1	
	第11号住居跡	6	180	13			4		282	485	2	1			5		
	第14号住居跡	13	106	30	1	24	33		581	788	1			6	10	1	1
	第16号住居跡	2	19	6		2	5		116	150		1	1	3	11	1	
	第18号住居跡	1	6				4		18	29					17		
	第19号住居跡	9	45	17	2	1	61	2	395	532	2		4	7	24		
	第19 b 号住居跡	8	17	10		15	196	4	719	969	4		1	13	34		
	第19 c 号住居跡	7	41	13		7	255		900	1223	5		2	5	21	1	
	第20号住居跡	5	62	21					149	237	7	2		1	9	4	
	第21号住居跡	6	98	90				1	339	534	3			2	28	1	
	第22号住居跡	7	13	11		2	1		7	41	2			40	9		
	第22 b 号住居跡	3	33	42	4	30	77		381	570	2	1		13	11		1
	第22 c 号住居跡	9	14	37	2	19	18		102	201				4	17		
	第23号住居跡		20	5			2		76	103		1		2	14		
	第24号住居跡	4	26	8			1		105	144				1	5		
	第25号住居跡	3	31	19	1	5	12		88	159	1	1		3	14		
	第25 b 号住居跡	5	33	1		70	32	1	143	285		1		2	4		
	グリッド・表採	12	22	53	1	30	13		74	205		1	1			1	
	計	304	2215	1800	38	711	1053	17	8887	15025	77	48	151	265	611	42	5

Ⅱ．第Ⅰ次調査で検出された遺構と遺物

調査地点の地形（第４図）

第Ⅰ次調査区は、高橋川の低地を望む標高24ｍの遺跡北東端に位置する。狭い尾根状台地の突端部に塚状遺構１基が存在し、その周りには基壇状の部分とそこから尾根状地形に沿って、南西方向に延びる段状の地形が認められた。塚状遺構については全域を発掘し、基壇状部や段状部についてはトレンチによる確認を実施している。調査の結果、塚状遺構の下からは重複した住居跡３軒が検出され、基壇状部や段状部では人為的改変の痕跡が確認されている。基本土層は、上位から表土の腐植土層（Ⅰ層）、暗褐色土層のⅡ層、ローム層のⅢ層、ロームが粘土化したⅣ層、砂質粘土層のⅤ層である。

基壇状部は北東－南西方向約15ｍ、北西－南東方向約12ｍ、高さ１ｍ以下の長方形に近い平面形を呈するもので、標高24ｍと23.5ｍの等高線にその形が表れている。基壇状部の基部にＴ－４トレンチを設定したところ、ローム層の上に盛土をしている状況が観察された。また、基壇状部の北辺に沿って、腰曲輪状の平坦部が認められ、明治時代の墓石が存在した。

段状部は比高差１ｍ程で、基壇状部南西隅から延びており、段の低位側に北東－南西方向20ｍ程の平坦な曲輪状の地形を形づくる。段の高位側に設定されたＴ－２トレンチではⅡ層が認められず、段部に設けられたＴ－３トレンチではⅣ，Ⅴ層を削り出して段を形成している状況が確認された。さらに、段の低位側のＴ－１トレンチでは、Ⅳ層もしくはⅤ層の直上にⅡ層が堆積しており、段に囲まれた曲輪状の地形は、Ⅱ層堆積中以前にⅢ～Ⅴ層を掘削して形成されたものと理解される。また、Ｔ－１トレンチでは、Ⅱ層下面を検出面とする道状遺構（覆土１，３層）や土坑（覆土４，５層）が、Ｔ－２トレンチではⅢ層を掘り込んだ竪穴状遺構（覆土６，７層）の一部が確認された。

後述する塚状遺構も含め、以上の地形改変は中世の城郭に関わる痕跡と思われる。

次に、検出された遺構とその出土遺物について記載するが、観察された土層の状況については図中の土層説明を、個々の遺物の出土層位や文様、法量等の詳細については、本書末尾の遺物観察表を、遺物の大まかな出土数についてはⅠ章の表１をそれぞれ参照されたい。

塚状遺構（第５図）

検出状況　基壇状部にのる形で築かれており、南東斜面には、雲母片岩製の寛永５年銘のある大日如来板碑［美浦村史編さん委員会1986］が、銘文がある方を内側に向けて立てかけてあった。なお、地元の方の話だと、戦後まもなくの頃、一度掘られているらしい。

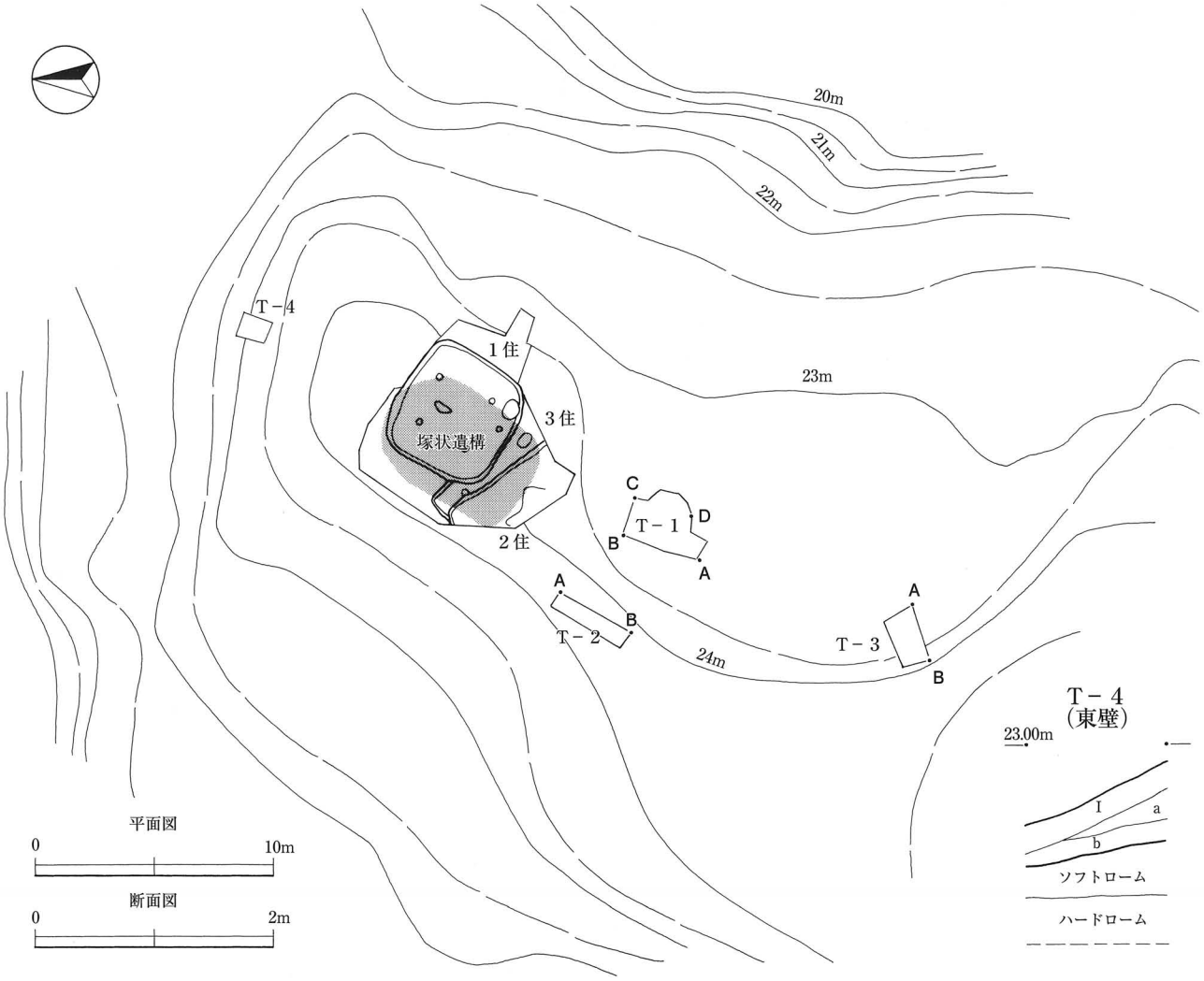
規模・形態　北東－南西方向の長軸6.75ｍ、北西－南東方向の短軸4.7ｍの楕円形の平面形をなし、現地表からの高さ約１ｍ、盛土の厚さ1.5ｍを測る。

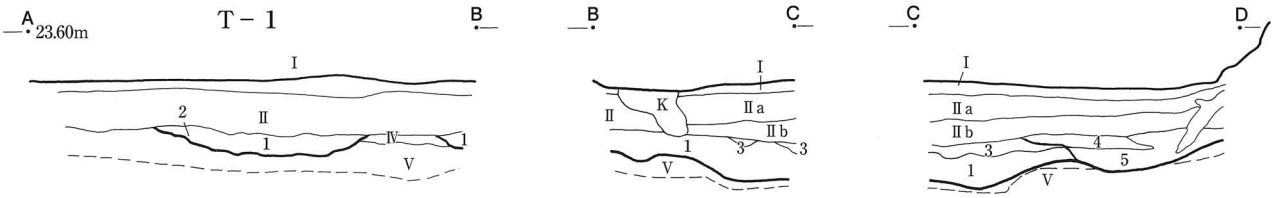
盛土の状況　木根や竹根が著しく、土層観察用の畔を設定するのが難しかったため、平面を４分割し北西の区画と南東の区画をまずは発掘し、残された断面で盛土の状況を観察した。下位の住居跡の覆土直上からなされた盛土は主体となる土質の違いによって６層に分層される。基本的に下位から６～１層の順に盛られているが、５，６層は中央部で高く盛られ、３，４層は中央部では認められず周辺部に堆積する。

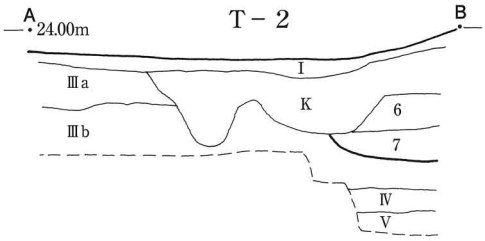
遺物の出土状況　遺物としては、盛土中から土器の小片が出土している。弥生土器が中心だが、奈良・平安時代の土師器片１点と同須恵器片２点も認められたことから本遺構の構築時期は、奈良･平安時代以降と思われる。

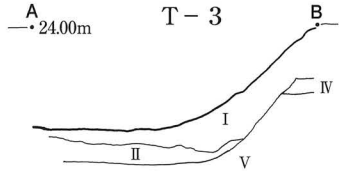
第１号住居跡（第６，７図）

検出状況　塚状遺構の盛土直下からは３軒の重複した住居跡（第１～３号）が検出された。第１号住居跡と第２号住居跡は隣接して検出され、その間にある第３号住居跡が両住居跡と重複する。新旧関係は第３号の覆土を掘り込んで第１，２号がつくられていた。



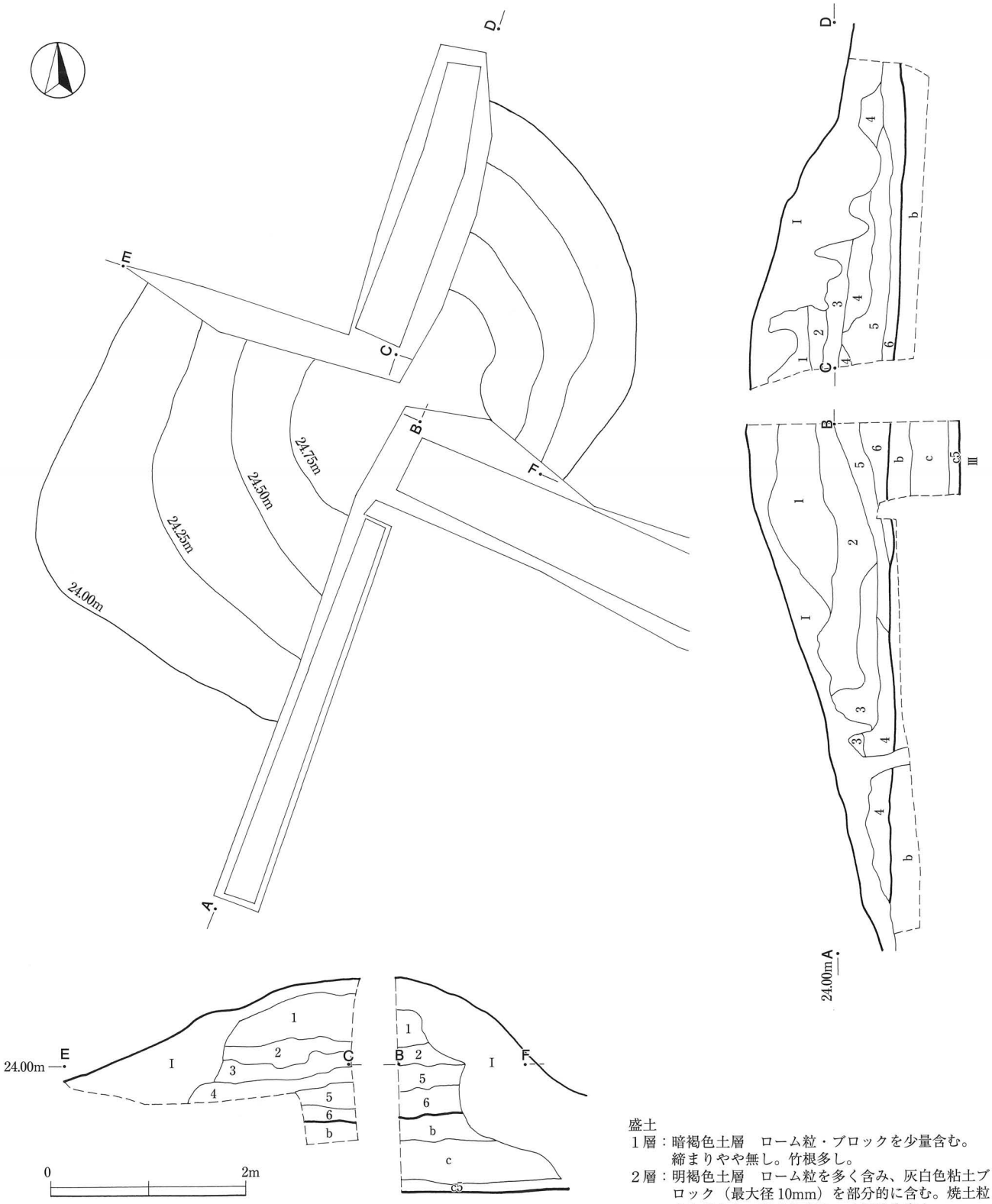






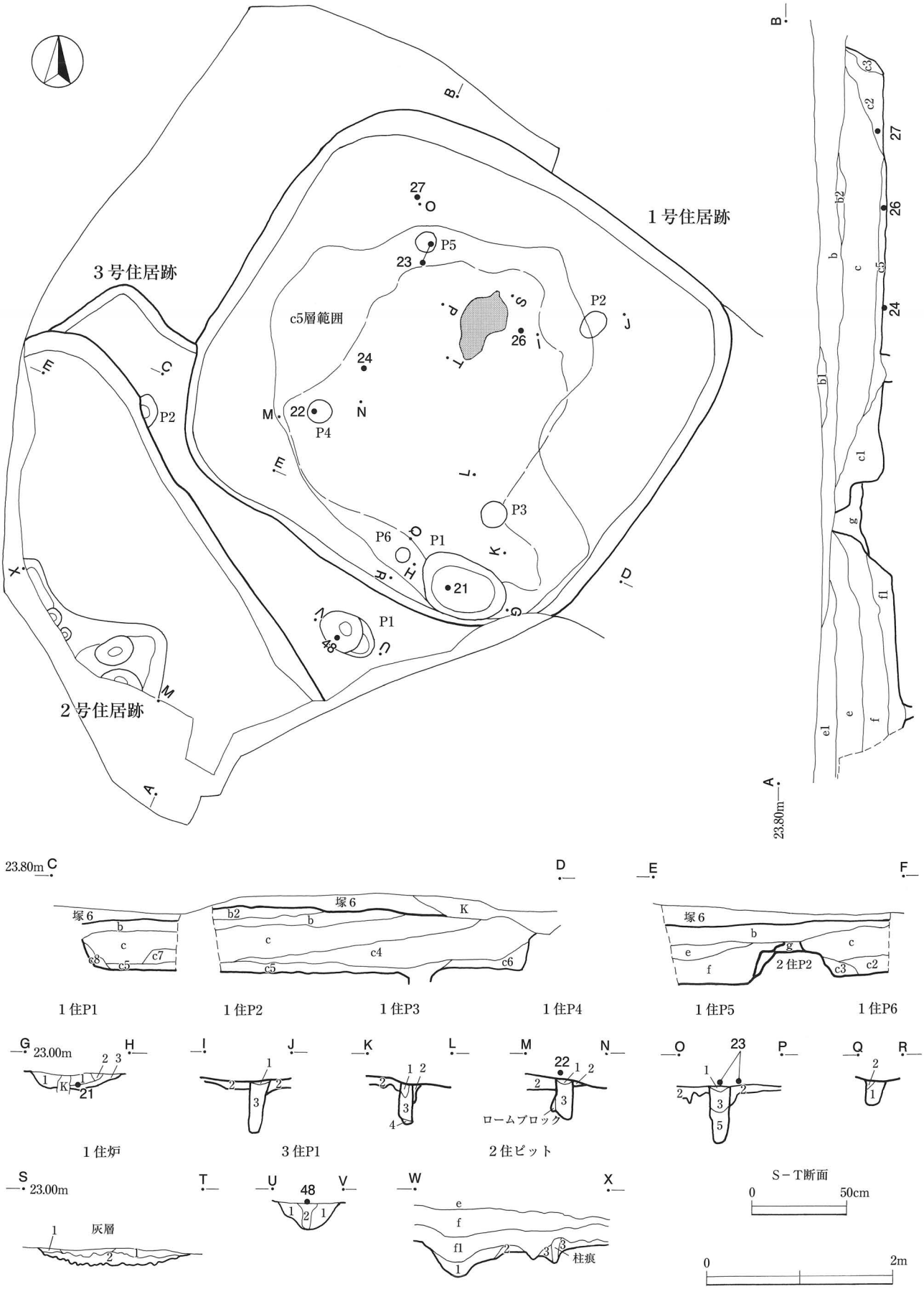
Ⅰ層：腐植土層　上部は竹葉の層。竹根・木根が著しい。フカフカ。
Ⅱ層：暗褐色土層　やや茶褐色のⅡａと色調の暗いⅡｂに分けられる。根が多い。炭化物粒、焼土粒、砂粒、ロームブロックを少量含む。
Ⅲａ層：暗橙褐色土層　木・竹根が多い。ローム主体。フカフカ、粘性無し。
Ⅲｂ層：橙褐色ローム層　地山ローム層。締まり有り、上部にハードロームブロックを含む。
Ⅳ層：暗褐色～橙褐色粘土質土層　ロームが粘土化したもの。硬く締まっている。
Ⅴ層：暗灰白色砂質粘土層　砂粒、礫、黒色粒子を多く含む。硬く締まっている。
遺構？覆土
１層：明褐色土層　砂粒を少量含む。　均質な土質。硬く締まっているが、西壁では締まりをやや欠く。
２層：暗褐色土層　焼土粒、炭化物粒を含む。締まりを欠く。
３層：橙褐色ローム質土層　砂粒を少量含み、硬く締まっている。平面では踏み固めたように見える。
４層：暗褐色土層　砂粒、炭化物粒、焼土ブロックを多く含む。白砂粘土ブロックを含む。
５層：暗灰白色砂質粘土ブロック層　暗褐色系土と、Ⅴ層ブロック土が斑状に混在した層。焼土ブロック、炭化物粒を少量含む。締まり、粘性有り。人為的埋土。
６層：明褐色土層　パサパサしており、締まり、粘性無し。ローム粒を多く含み、根多し。
７層：暗褐色土層　パサパサしており、締まり、粘性無し。ローム粒を少量、焼土粒、炭化物粒を微量含む。
盛土
ａ：暗黄褐色土　ロームを主体。根が多く、締まりを欠く。
ｂ：暗～黒褐色土　ローム粒、焼土粒を少量含む。下部に焼土ブロックが見られる。締まり有り。

第４図　第Ⅰ次調査区遺構及びトレンチ配置図



盛土
1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを少量含む。締まりやや無し。竹根多し。
2層：明褐色土層　ローム粒を多く含み、灰白色粘土ブロック（最大径10mm）を部分的に含む。焼土粒を少量含む。締まり有り。土師器片出土。
3層：暗褐色土層　ローム粒、灰白色粘土ブロック（径7～8mm）を少量含む。締まり無し。
4層：明褐色土層　ローム粒を多く含む。締まり有り。
5層：暗褐色土層　全体的にやや黒っぽい。ローム粒を少量含む。均質な土質。
6層：黄褐色土層　ロームを主体とする均質な土質。締まり有り。須恵器片出土。
※b，c，c5層は住居跡覆土。

第5図　Ⅰ次塚状遺構実測図



第6図　Ⅰ次住居跡実測図

第１号住居跡覆土
ｂ層：暗～明褐色土層　ローム粒、ロームブロックを多く含む。灰白色砂ブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む。締まり有り、粘性無し。
ｂ１層：暗褐色土層　ローム粒を多く含む。黒褐色土を斑状に含む。締まり有り、粘性無し。
ｂ２層：明褐色土層　ｂ層と同質だが、灰白色砂ブロック、礫が目立つ。
ｃ層：暗黄褐色ローム質土層　ローム主体。大形のロームブロックが多く、一気に埋め戻された様な状況を示す。締まり、粘性無し。ｃ４層との層界は不連続。
ｃ１層：暗黄褐色土層　褐色土を主体にローム粒を多く含む。ｃ層より色調が暗く、ロームブロックも少ない。締まり有り、粘性無し。
ｃ２層：暗黄褐色土層　ｃ１層と同質。
ｃ３層：暗橙褐色ローム質土層　ほぼ地山ロームに近い土質。若干褐色土を含む。締まり有り、粘性無し。
ｃ４層：暗黄褐色土層　ロームを主体にロームブロックを含む。ｃ層より暗い色調。締まり有り、粘性無し。
ｃ５層：黒～暗褐色土層　層相がまだらな土層。ローム粒・ブロックを含み、焼土粒、炭化物粒を多く含む。締まり有り、粘性無し。床面上の土層。
ｃ６層：暗黄褐色土層　ｃ４層よりやや明るい色調。ロームを主体でロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。
ｃ７層：暗黄褐色土層　ｃ層より暗い色調。ロームと暗褐色土が斑状に混じる。ロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。
ｃ８層：暗黄褐色土層　ｃ層より明るい色調。ロームを主体でロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。

第２号住居跡覆土
ｅ層：黒褐色土層　黒色土を主体に、褐色土が斑状に混じる。ローム粒、赤色粒を少量含む。締まり有り、粘性無し。
ｅ１層：茶褐色土層　茶褐色土を主体に、ローム粒、赤色粒を少量含む。締まり有り、粘性無し。
ｆ層：暗褐色土層　ロームを主体とし、ローム粒を多く含む。締まり有り、粘性無し。
ｆ１層：暗褐色土層　ロームを主体とし、ｆ層より色調が暗い。ロームブロックを少量含む。締まり、粘性無し。

第３号住居跡覆土
ｇ層：暗褐色土層　ｃ１層、ｆ層より黒っぽい色調で、ロームブロックが目立つ点で区分できる。ローム粒子を多く含む。締まり有り、粘性無し。

１住 P1 覆土
１層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り、粘性無し。
２層：赤褐色土層　１層土を基調に、焼土粒が多く集中する。
３層：暗黄褐色土層　ローム主体で、ロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。

１住 P2～６覆土
１層：黒褐色土層　住居跡覆土。
２層：暗黄褐色土層　貼床。ローム主体で、大きなロームブロックを多く含む。ローム粒子を多く含む。
３層：暗褐色土層　締まり無く、フカフカしている。粘性やや有り。
４層：暗黄色ローム質土層　地山ローム層とほとんど同質。壁の一部が脆くなっているような状態。
５層：暗黄色土層　３層よりも締まり、粘性無し。砂のようにサラサラしている。

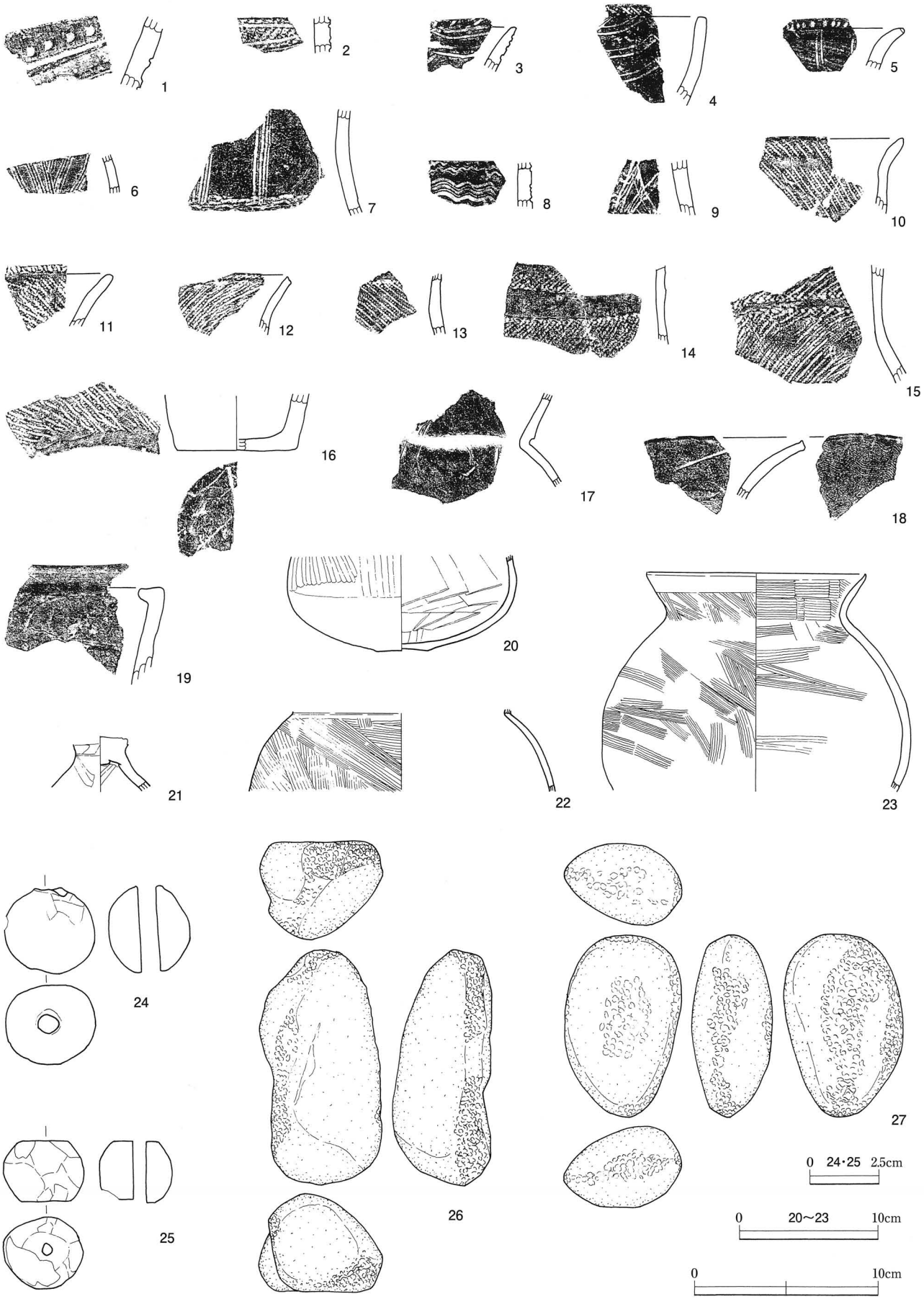
１住炉覆土
１層：黒色土層　焼土粒、炭化物粒・灰を多量に含む。締まり有り、粘性無し。
２層：赤褐色土層　地山ロームが被熱赤化した部分。ブロック状にボロボロに割れている。

２住 P1 覆土
１層：暗黄褐色ローム質土層　ｆ１層より黄色味の強い明るい色調。
２層：暗黄褐色ローム質土層　ほぼ地山ロームに近い色調であるが、締まりが無い。ロームブロックを含む。粘性無し。
３層：暗黄褐色ローム質土層　１層とほぼ同じ、柱痕状に暗褐色土が分布する。ロームブロックを含む。締まり有り、粘性無し。

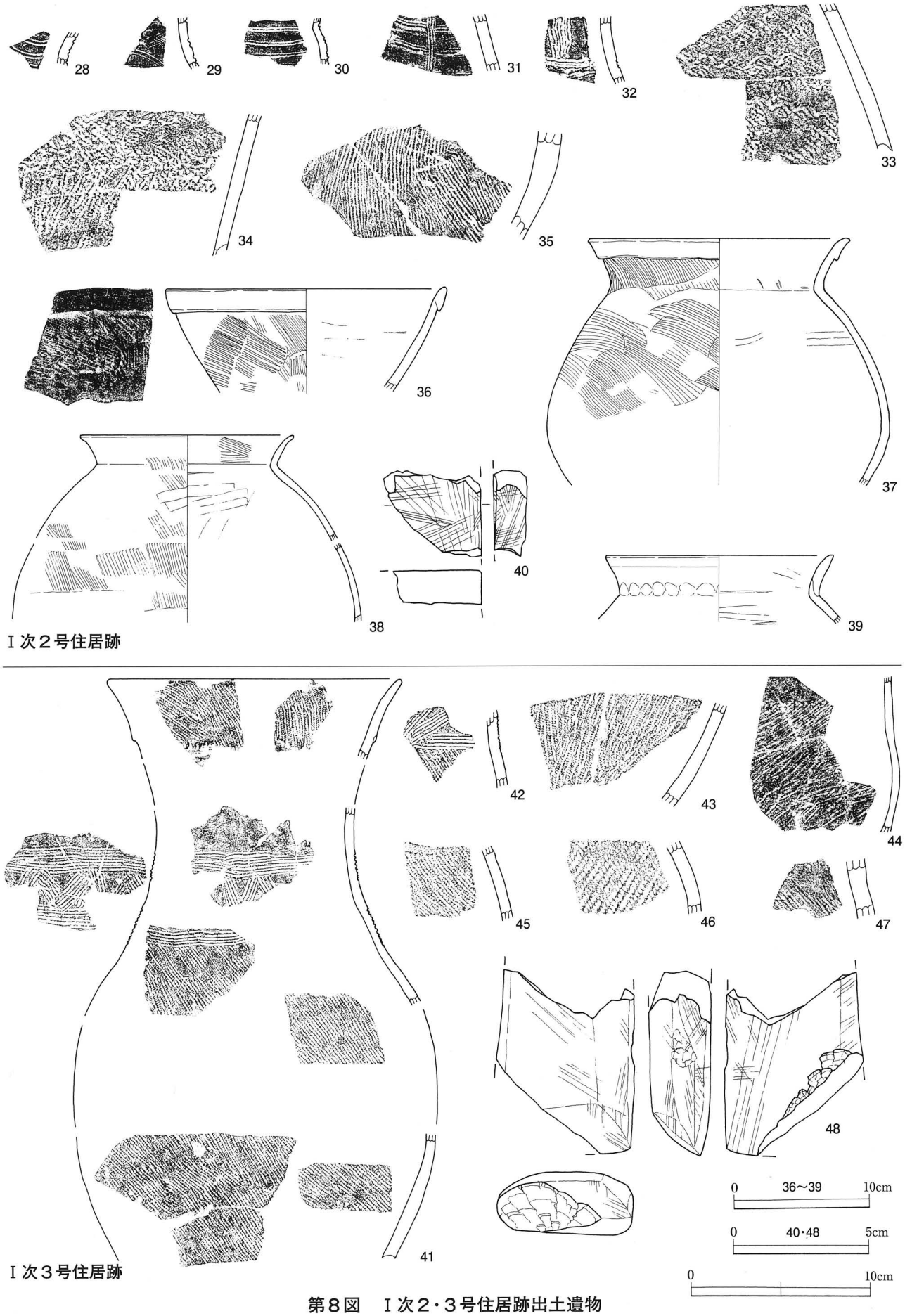
３住 P1 覆土
１層：暗黄褐色ローム質土層　ロームブロックを多く含む。締まり有り、粘性無し。
２層：暗黄褐色土層　褐色味が強い。ローム粒を多く含み、ロームブロックを少量含む。締まり有り、粘性無し。柱痕部。

規模・形態　北東－南西方向4.9ｍ、北西－南東方向5.2ｍの隅丸方形を呈し、壁の高さ50cmを測る。炉を通る中心軸は北－37°－東である。中央やや北東寄りに、長径90cmの地床炉が設けられており、その上面には灰層が認められた。主柱穴と思われる深さ45～60cmの４つのピット（Ｐ２～５）が炉を取り囲んで方形に並び、南東隅からは長径105cm、深さ約15cmを測る楕円形のⅢ状のピット（Ｐ１）と、Ｐ６とした小ピットが検出された。主柱穴の内側からＰ１にかけての床面は硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　本住居跡はⅢ層を掘り込んでつくられている。床面の多くの部分には貼床が施され、ピットは貼床を切る形で穿たれていた。図でｃ番号が付いた土層が第１号住居跡の覆土に相当する。その上位にはｂ番号を付けた土層が堆積していたが、この土層は第２，３号住居跡の覆土上にまで及んでおり、Ｔ－４トレンチで認められた基壇状部の盛土と同様なものと思われる。また、床面硬化部とほぼ対応する範囲の床面



第７図　Ⅰ次１号住居跡出土遺物



第８図　Ⅰ次２・３号住居跡出土遺物

直上には、ｃ５層とした黒褐色の薄層が貼りつくように存在していた。

覆土中からは多くの弥生土器の破片が出土しているが、床面上及び床面付近からは、22，23の刷毛目が施された古墳時代前期の甕形土器の大形破片や、24の球状土錘、26，27の敲石が出土している。22，23の出土状況から、本住居跡の時期は古墳時代前期と思われる。

出土遺物（第７図）　1は縄文時代早期の沈線文系の土器片で、2は縄文時代前期後葉の土器片。3～16は弥生土器。3～5は半截竹管状工具による平行沈線が、6～8は櫛歯状工具による多条沈線が描かれた土器で、9は２条の単沈線間に刻みを付けた文様が施されている。11～16は縄文が施された破片で、13，14には無文帯が、16の底面には木葉痕が認められる。17は頸部に段を持つ無文の壺形土器の破片で、18は内面に櫛歯状工具による浅い波状文がみられる酸化焔焼成の硬質な土器。19は焙烙か土鍋の口縁部破片と思われる。20～23は古墳時代の土師器。20は壺形土器、21は器台形土器、22，23は刷毛目が施された甕形土器である。24，25は球状土錘で、25の開孔部は面取りがされている。26，27は円礫を用いた敲石である。

第２号住居跡（第６，８図）

規模・形態　一部が検出されたのみなので、全体像は分からないが、確認された北隅は隅丸を呈し、北東壁は北－35°－西の方向に延びている。壁の高さは50cmを測る。南西部には複数のピットが重なったような掘り込みが存在する。

覆土の堆積と遺物の出土状況　本住居跡はⅢ層を掘り込んでつくられている。図でｅ，ｆ番号が付いた土層が第２号住居跡の覆土に相当する。

床面上及び床面付近からは、36～38の刷毛目が施された古墳時代前期の土師器大形破片が出土しており、本住居跡の時期は古墳時代前期と捉えられる。

出土遺物（第８図）　28～35は弥生土器。28～30は半截竹管状工具による平行沈線が、31，32は櫛歯状工具による多条沈線が描かれている。33～35は縄文が施された破片。36～39は古墳時代の土師器。36は無文の複合口縁部を持つ鉢形土器、37～39は甕形土器で、36～38には刷毛目が施されている。40は砥石の破片である。

第３号住居跡（第６，８図）

規模・形態　ほとんどが第１，２号住居跡に壊されており一部が残存するに過ぎないが、確認された北隅は角を有する。Ⅲ層からなる床面は第１，２号住居跡より高く、壁の高さ30cm程である。柱穴と思われるピットが２基（Ｐ１，２）検出されている。Ｐ１には柱痕部が認められた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　ｇ層が第３号住居跡の覆土に相当する。

覆土中からは弥生土器が主体に出土しており、Ｐ１の覆土上面には48の磨製石斧が残されていたことから、本住居跡の時期は弥生時代に比定される。

出土遺物（第８図）　42～47は弥生土器。41と42は同一個体と思われる破片群で、広口の壺形土器に復元される。複合口縁の下端には刻みが付けられ、無文地の頸部には櫛歯状工具による多条沈線で鋸歯状の文様が描かれている。口縁部と胴部には付加条縄文がみられる。43～47は縄文が施された破片。48は片刃の磨製石斧の欠損品で、刃部の一部と基部が欠損する。

Ⅲ．第Ⅱ次調査で検出された遺構と遺物

調査地点の概要（第９図）

第Ⅱ次調査区は、遺跡が展開する台地の中でも、北側から窪みが入り込み最も台地の幅が狭まった、標高25.5ｍ程の尾根状部にあたり、その地形に合わせて東西方向に細長い形で設定された。基本土層は、上位から表土の耕作土層（Ⅰ層）、暗黄色ローム層のⅡ層、ローム質粘土層のⅢ層、淡青灰白色粘土層のⅣ層である。

表土層の掘削は、調査区北東端に存在する塚状遺構部分を除き、バックホーで行った。表土の耕作土下は、直接地山であるⅡ層もしくはⅢ層となっており、土層の遺存状態は悪い。

遺構は塚状遺構１基をはじめ、調査区全域に散在する形で、住居跡７軒、土坑10基、ピット36基、焼土２ヶ所が検出された。やはり、全体的に遺存状態は良くなく、土砂の流失や削平などで、失われてしまった遺構もあるものと思われる。

次に、検出された遺構とその出土遺物について記載するが、遺構の詳細や図示した遺物の出土位置については、各遺構実測図を、観察された土層の状況については、図中の土層説明を、個々の遺物の出土層位や属性については、本書末尾の遺物観察表を、遺物の大まかな出土数については、Ⅰ章の表１をそれぞれ参照されたい。

第１号住居跡（第10図）

検出状況　調査区の東部に位置する。北東隅には住居跡の床面より浅い土坑状の掘り方が付随するが、別遺構か否か不明である。南西部の壁は遺存していない。

規模・形態　平面は北－南方向3.75ｍ、東－西方向3.3ｍの方形を呈し、壁の高さは最高14cmを測る。竈を通る主軸はほぼ南北方向に一致する。北壁西寄りに壁より突出した形の竈を有し、火床面が残されていた。ピットは５基検出されており、その内４基は長方形に並び柱穴と思われる。床面は地山の粘土層からなる。北東隅に存在する土坑状の掘り方と重複する部分では、住居跡の床面は、土坑状部の底面に合わせ高くなっており、土坑状部の一部には、砂質土と焼土が多くみられた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　壁際に暗褐色土層の１，２層が、中央部床面上には明褐色土層の３層が堆積する。

土器の小片が出土したのみであるが、奈良・平安時代のものが多かったことから、本遺構の時期を奈良・平安時代と捉える。

第２号住居跡（第11図）

検出状況　調査区の中央部に位置する。東壁は遺存していない。

規模・形態　平面は北－南方向4.0ｍの方形を呈し、壁の高さは西壁で10cmを測る。竈を通る主軸方向は北－20°－東である。北壁に壁より突出した形の竈の掘り方が残されていた。南西部からはピット１基が検出された。床面は地山の白色粘土層からなるが、北壁西部と南壁に接する２ヶ所では、その白色粘土が３cm程盛り上がって高くなった部分が存在する。残存する壁に沿っては周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的に覆土は暗褐色土層の単一層であるが、竈掘り方内では白色粘土や焼土のブロックと炭化物が多く認められた。

床面直上からは、**2**の土師器甕形土器と**4**の須恵器が出土し、覆土下部からは**1**，**3**の土師器甕形土器が出土している。本遺構の時期は、以上の甕形土器の形態から奈良・平安時代と思われる。

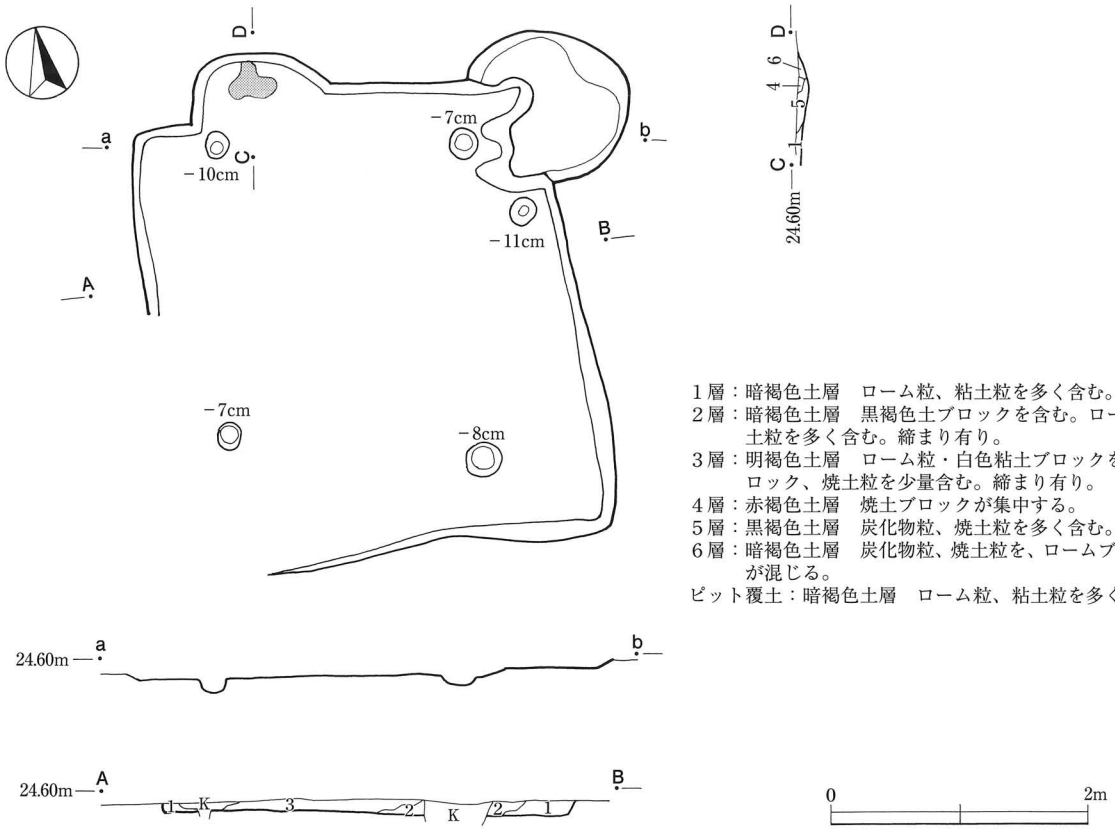
出土遺物　**1**～**3**は土師器の甕形土器で、面取り、摘み上げがなされた口縁部が外側に強く屈曲する。**4**は須恵器の高杯脚部で、透かしがみられる。

第３号住居跡（第12，13図）

検出状況　調査区の西部に位置する。北東部は調査区を拡張して調べたが遺存していない。貼床下からは、明

I層：暗褐色土層　ローム粒子を多く含む。締まり有り。
　　均質な土質。耕作土。
II層：暗黄色ローム層　硬く締まっている。
III層：暗黄色ローム質粘土層　ロームが粘土化したもの。
　　硬く締まっている。
IV層：淡青灰白色粘土層

第９図　第Ⅱ次調査区遺構配置図



1層：暗褐色土層　ローム粒、粘土粒を多く含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層　黒褐色土ブロックを含む。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
3層：明褐色土層　ローム粒・白色粘土ブロックを多く含み、ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
4層：赤褐色土層　焼土ブロックが集中する。
5層：黒褐色土層　炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり、粘性有り。
6層：暗褐色土層　炭化物粒、焼土粒を、ロームブロック（径5mm程）が混じる。
ピット覆土：暗褐色土層　ローム粒、粘土粒を多く含む。締まり有り。

第10図　Ⅱ次1号住居跡実測図

褐色土を覆土に持つ30Pが検出されている。また、南壁が第10号土坑と接するが、切り合い関係は捉えられなかった。

規模・形態　平面は南壁長7.1mの方形を呈し、壁の高さは南壁で15cmを測る。西壁の方向は北－10°－西である。西壁と南壁の一部に沿って、幅50～120cm、段差5cm程のベッド状の高まりがみられる。ピットは南東部で4基が方形に並んで検出されている。また、南西隅には貯蔵穴が存在する。床面はベッド状部も含め全面に貼床が施されており、貯蔵穴上面も白色粘土によって塞がれていた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的に1，3層とした褐色系土層が床面上に堆積する。

床面直上から**3**，**4**の古墳時代土師器と**7**の球状土錘が、貼床中から**1**の土師器と**5**の球状土錘が出土していることから、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　**1**～**4**は土師器で、**1**，**2**が模倣杯、**3**が甑形、**4**が甕形の土器である。**5**～**7**は球状土錘で、**8**は土製紡錘車、**9**は滑石製模造品の双孔円板。**10**は剥片を素材にした石器で、剥片背面の礫面の部分と端部両面に摩耗が認められ、とくに刃部状の端部で摩耗が著しい。

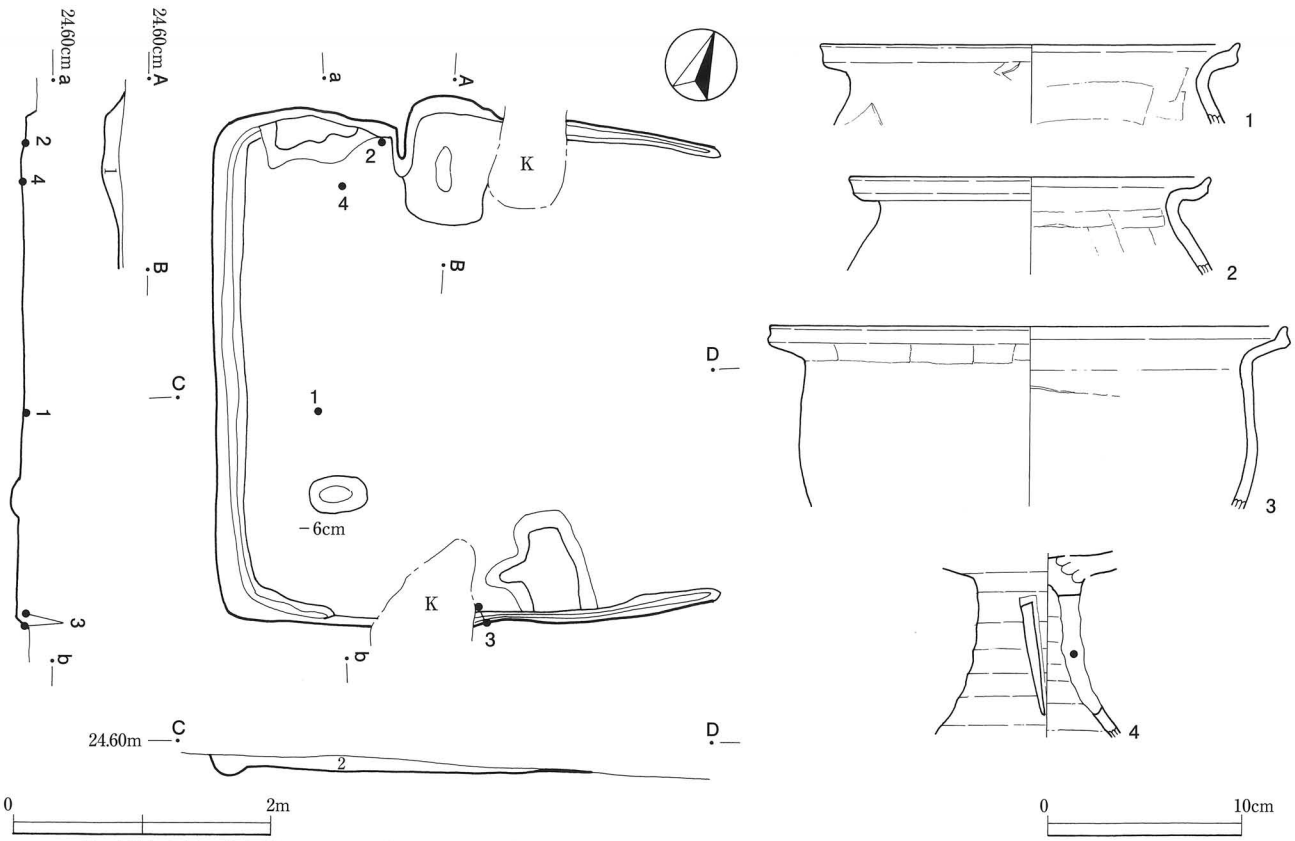
第4号住居跡（第14図）

検出状況　調査区の中央に位置する。

規模・形態　平面は北－南方向3.0m、東－西方向2.95mの方形を呈し、壁の高さは15cmを測る。竈を通る主軸方向は北－10°－東である。北壁中央に壁より突出した形の竈を有し、火床面と崩落した天井材が残されていた。ピットは5基検出されており、内4基が方形に並び主柱穴と思われる。床面は地山の白色粘土層からなり、東壁、南壁、西壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的に床面と崩落した竈天井材と思われる砂ブロックを含む3層を覆って、1，2層とした暗褐色土層が堆積する。また、竈火床面前には浅い窪みがみられ、その中に炭化物粒と焼土粒を多く含む暗灰色土が落ち込んでいた。

床面直上から**1**の土師器甕形土器と**4**の摘みの付いた須恵器蓋が出土している。**4**の須恵器から本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。



1層:暗褐色土層　白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物を多く含む。ローム粒を少量含む。締まり、粘性有り。竹根著しい。竈部。
2層:暗褐色土層　白色粘土ブロック、焼土ブロック、ロームブロックを少量含む。締まり、粘性有り。竹根著しい。

第11図　Ⅱ次２号住居跡実測図及び出土遺物

出土遺物　1，2は土師器の甕形土器。3は稜を有する須恵器杯身で、4は須恵器蓋。5は管状土錘の欠損品である。

第５号住居跡（第15図）

検出状況　調査区の中央部に位置する。南壁部が第５号土坑を壊して作られている。

規模・形態　平面は北－南3.2方向m、東－西方向3.2mの方形を呈し、壁の高さは20cmを測る。竈を通る主軸方向は北－10°－東である。北壁中央部に壁より突出した形の竈を有し、袖部と燃焼部に相当する浅い窪みが残されていた。ピットは検出されていない。床面は地山の白色粘土層からなり、北壁、東壁、西壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況　床面上は暗褐色土層の１層が覆っており、竈燃焼部の窪みには３層とした黒褐色土が堆積し、その上に焼土ブロックが目立つ２層がみられた。

覆土中からは**1**～**5**の須恵器坏と**6**，**7**の土師器が出土し、南東部の覆土中からは**9**の鉄製品が検出された。また、竈内の覆土中には**8**の支脚が残されていた。須恵器杯の出土状況から、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

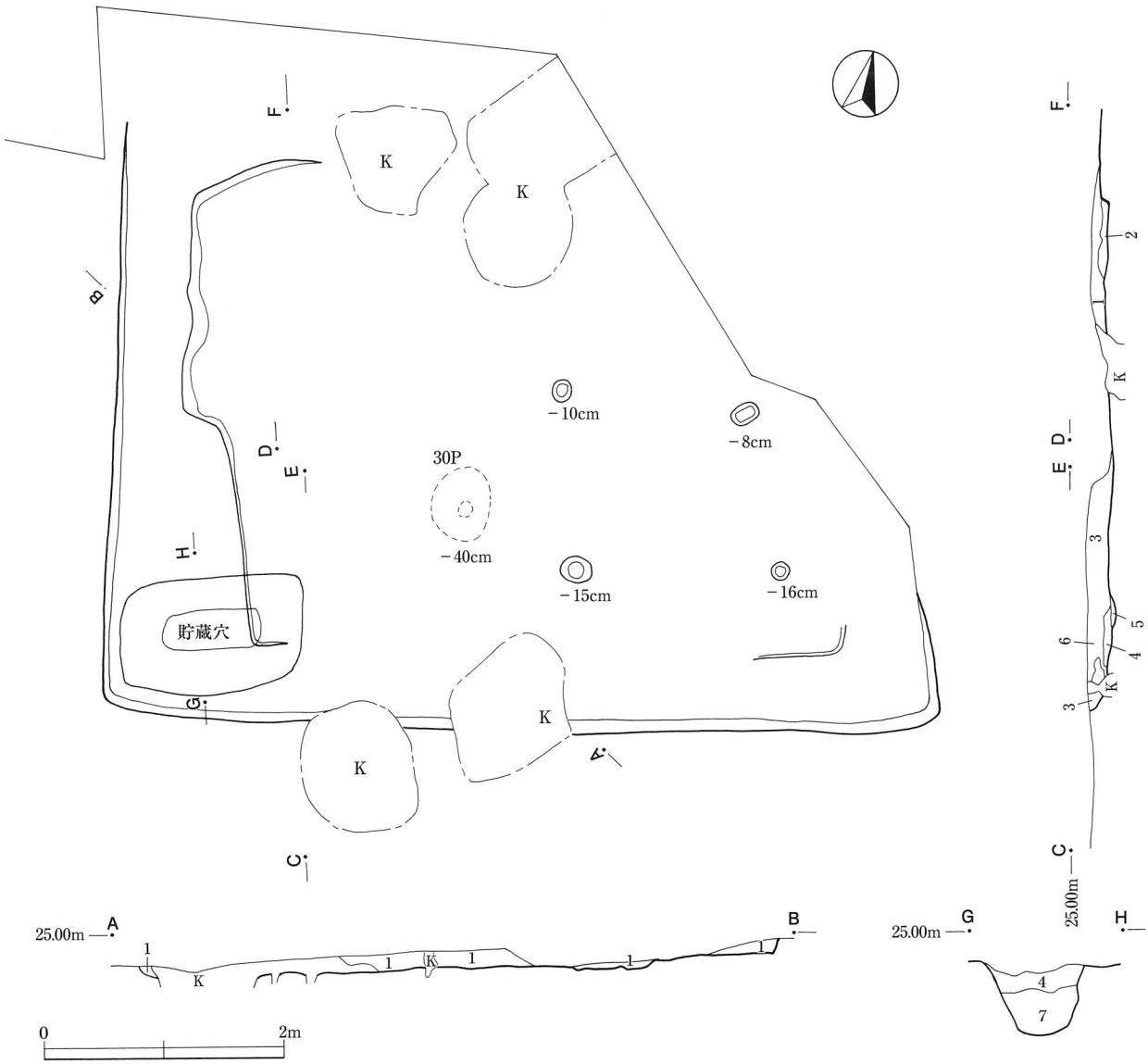
出土遺物　**1**～**5**は底部に篦削りや撫でが施された須恵器杯である。**5**の底部外面にうっすらと墨書の痕跡が認められたため、画像処理により確認したところ、「志太」の文字が確認された。**6**，**7**は土師器の甕形土器、**8**は内部が未焼成の支脚、**9**は曲刃の鉄製鎌である。。

第６号住居跡（第16図）

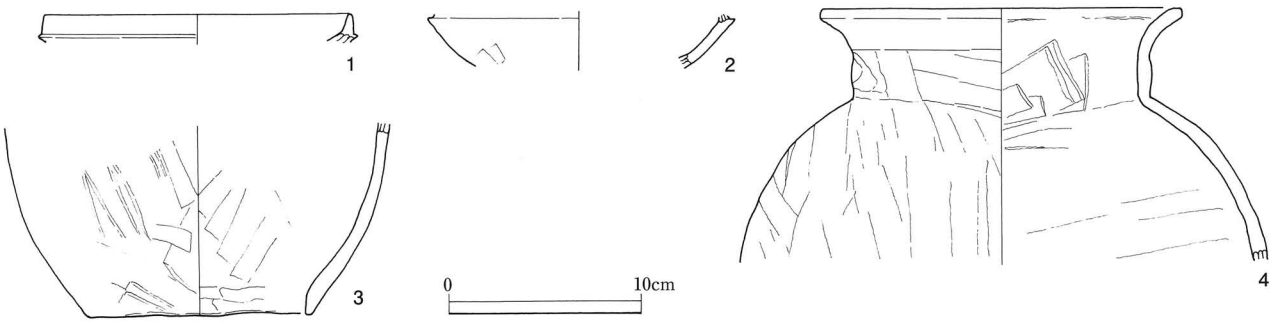
検出状況　調査区の中央部に位置する。遺存状態が悪く、南西隅の壁と竈の一部が検出できたに過ぎない。また、付近から24～26Ｐとした３基のピットが検出されたが、位置から本住居には伴わないものと思われる。

規模・形態　残っていた南西隅は角をなし、壁の高さは4cmを測るが、全体の平面形はや規模はわからない。西壁の残存部はほぼ南北方向に一致する。竈は燃焼部と思われる深さ4cm程の窪み内に、火床面が確認された。

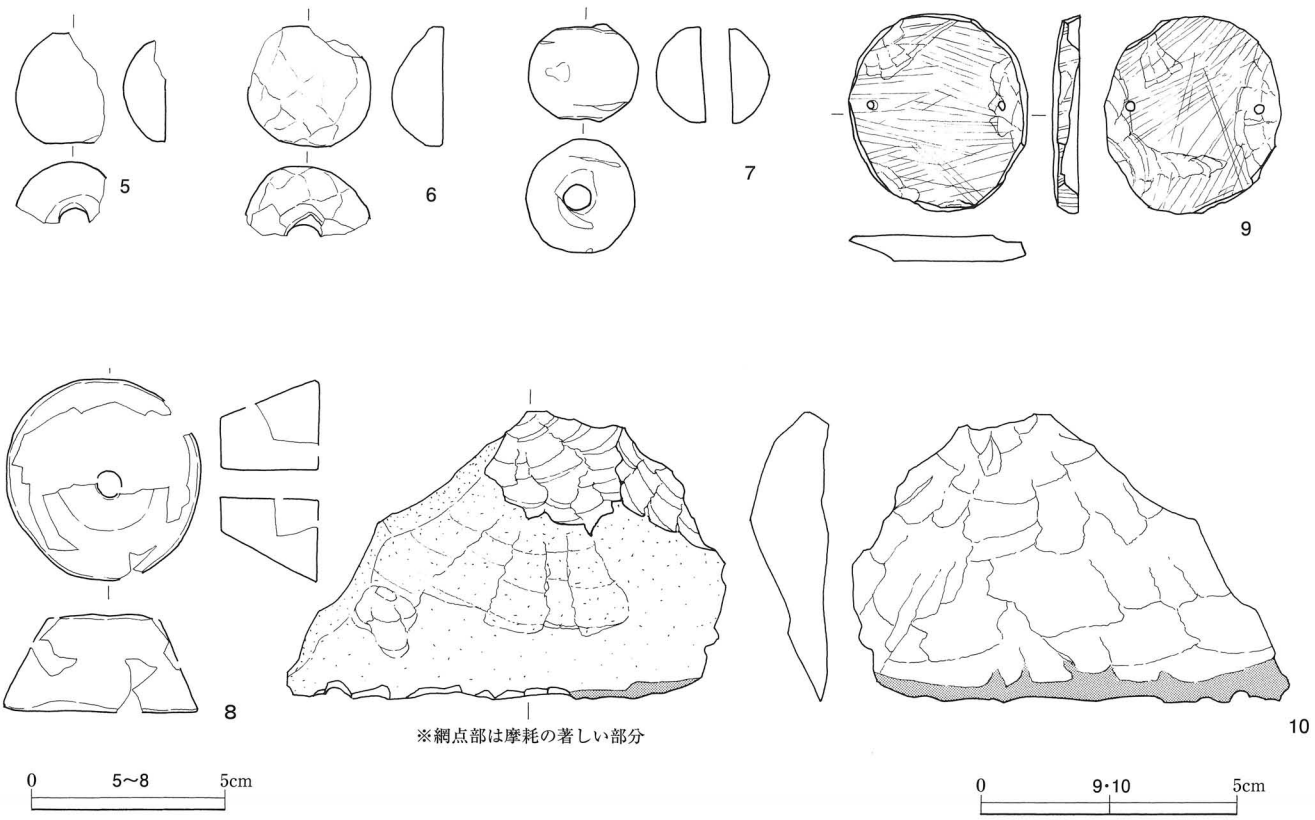
覆土の堆積と遺物の出土状況　24，25Ｐの覆土はロー



1層：明褐色土層　ローム主体で、ロームブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗黄褐色土層　ロームを基調に、炭化物粒を少量含む。締まり、粘性有り。
3層：暗褐色土層　1層よりやや色調が暗い。ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒も含む。下部に白色粘土ブロックを含む。締まり有り。
4層：白色粘土層　土塊として存在。貯蔵穴覆土上の貼床土。
5層：淡茶褐色粘土層　ローム系粘土を基調に、焼土粒、白色粘土粒を少量含む。締まり有り。
6層：赤褐色土層　焼土粒・ブロックを多量に含む。締まり有り。
7層：暗黄褐色土層　ロームとローム系粘土が斑状に混じる。白色粘土ブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く締まっている。埋め戻し土か。



第12図　Ⅱ次３号住居跡実測図及び出土遺物（１）



第13図　Ⅱ次３号住居跡出土遺物（２）

ム粒、炭化物粒、焼土粒を多く含む暗褐色土で、ロームブロック、灰ブロックをまばらに含む。26 Pの覆土はローム粒を少量含む暗褐色土である。

床面直上からは**1**～**4**の須恵器と**5**の土師器が出土しており、本遺構の時期は奈良･平安時代と捉えられる。

出土遺物　**1**～**3**は須恵器杯で、**4**は須恵器の高台付盤である。高杯形、杯形、坩形、壺形、甕形の土器である。**5**は底部に木葉痕が残る土師器甕形土器の破片。

第７号住居跡（第17図）

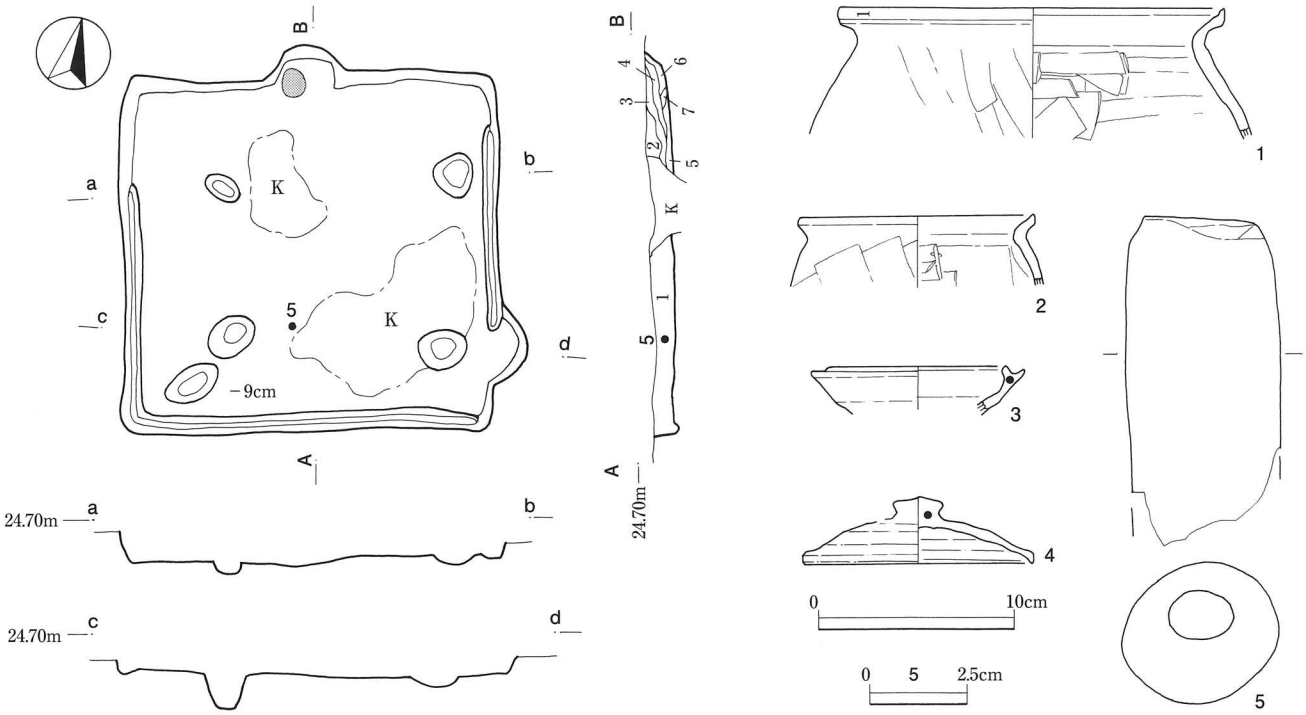
検出状況と規模・形態　調査区の西端に位置する。遺存状態は悪く、北西部で壁、床面、火床面、柱穴１基が確認された他、南西部で貯蔵穴と柱穴と思われるピット２基が検出できたに過ぎない。南西部では床面が残っておらず、貯蔵穴は第11号土坑として、柱穴は39 Pとして、それぞれ別の遺構として調査に取りかかったが、位置からみて最終的に本住居跡に伴うものと判断した。また、北西隅には本住居跡の覆土を切って、床面まで達するピットが確認されている（覆土１層とした部分）。

全体像は不明だか、北－南方向6.5 m以上の方形の平面を呈するらしい。残存していた西壁の高さは12cmを測り、方向は北－30°－西を示す。床面は粘土化したローム層のⅢ層からなる。

覆土の堆積と遺物の出土状況　壁際には２層とした明褐色土層がみられ、２層と床面を覆って３層とした暗褐色度が堆積する。貯蔵穴（11土）の覆土は、ローム粒やブロックを多量に含む暗褐色土の単一層で、人為的に埋め戻されたものと思われる。

北西部の床面直上からは**1**～**4**の古墳時代土師器が出土し、貯蔵穴（11土）の覆土中からは**7**～**13**の古墳時代土師器が出土している。以上の出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　**1**～**13**は土師器で、**1**が杯形、**2**が鉢形、**3**～**5**, **12**, **13**が小型の甕形、**7**～**10**が杯形、**11**が椀形、**6**が甕形の土器である。**3**と**6**の底部には焼成前の線状痕が残る。**14**は滑石製模造品の双孔円板。



1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、焼土粒を多く含む。白色粘土ブロック、炭化物粒を少量含む。締まり、粘性有り。
2層：暗褐色土層　1層と同質だが、大きな焼土ブロックが目立つ。
3層：明褐色砂質土層　大形の焼土ブロックが目立ち、淡黄褐色砂ブロックを多く含む。炭化物粒を含む。締まり有り。
4層：暗灰褐色土層　。焼土粒を多く含み、白色粘土粒、炭化物粒を少量含む。締まり、粘性有り。灰層か。
5層：暗褐色土層　ロームブロック、砂粒を含み、焼土粒を少量含む。締まり、粘性有り。
6層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒を少量含む。硬く締まっている。
7層：赤褐色土層　焼土ブロック。

第14図　Ⅱ次４号住居跡実測図及び出土遺物

土坑とピット

第１号土坑（第18，21図）

検出状況と規模・形態　調査区東部の第１号住居跡の北東隣に位置する。

長径2.4 m、短径1.2 mの楕円形の皿状を呈し、北西隅に３ヶ所の、南東隅に１ヶ所のピット状の掘り込みがみられるが、覆土の断面観察から南東隅のピットは皿状部を掘り込む別の遺構と捉えられた。深さは皿状部で10cm、最も深い南東隅のピットで25cmを測る。

覆土の堆積と遺物の出土状況　皿状部の覆土は４，５層としたもので、南東隅のピットの覆土は１～３層としたものが対応する。

皿状部の覆土中から出土した**1**の土師器からみて、皿状部の土坑の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　**1**，**2**は土師器杯形土器で、**3**は削り痕が残された滑石の剥片である。

第２号土坑（第18図）

検出状況と規模・形態　調査区東部の第１号住居跡の南側に位置する。

長径2.2 m、短径1.05 mの楕円形の皿状を呈し、西隅と東隅にそれぞれ１ヶ所づつのピット状の掘り込みがみられる。深さは皿状部で10cm、最も深い東隅のピットで15cmを測る。

覆土の堆積と遺物の出土状況　覆土は分層できなかったが、全体的にはロームブロックを斑状に含み、下部には白色粘土ブロックが多く認められた。

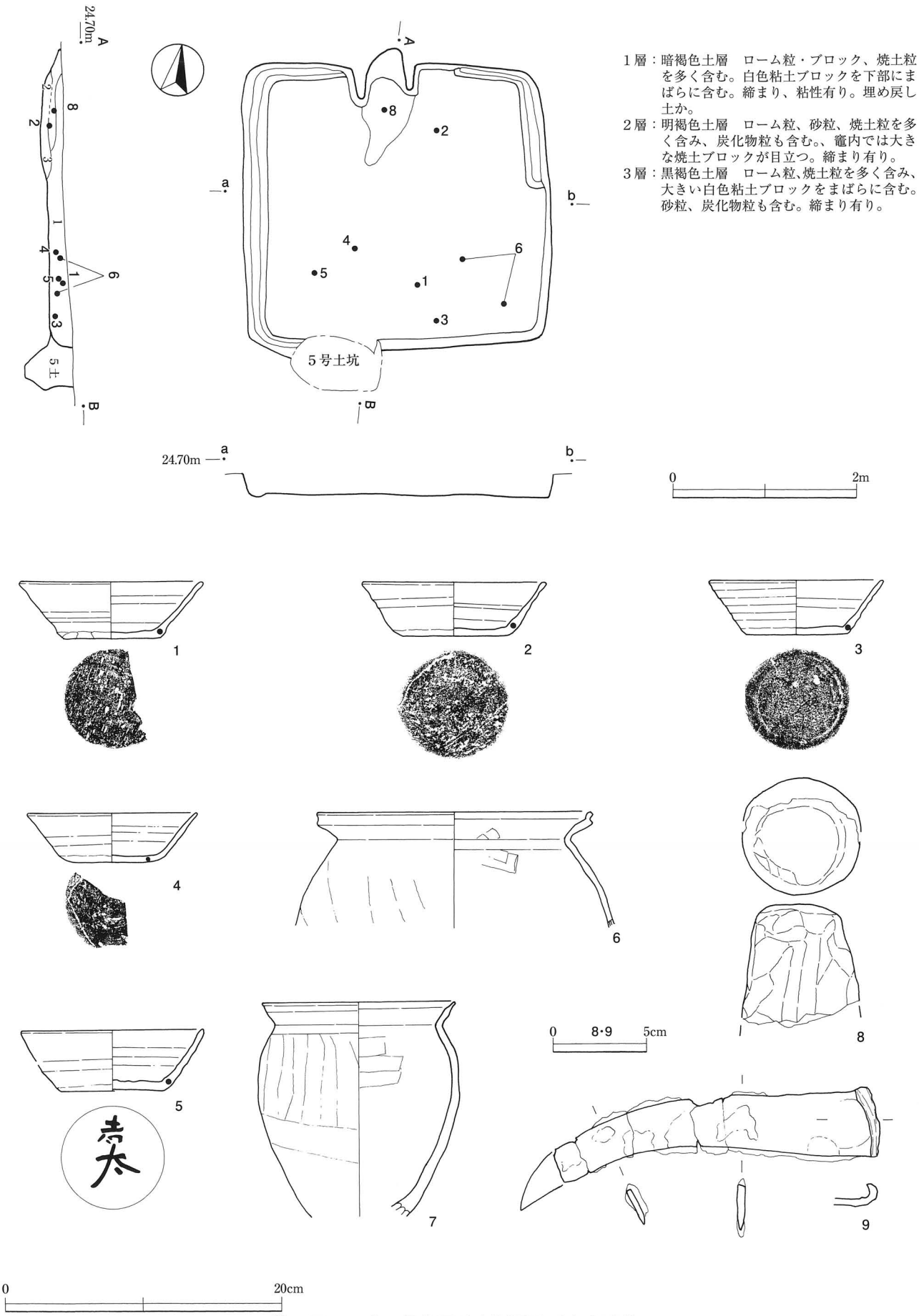
覆土中から奈良・平安時代の土器小片が出土していることから、本遺構の時期は奈良・平安時代以降と思われる。

第３号土坑・１～５Ｐ（第18図）

検出状況と規模・形態　調査区東部の第２号住居跡の北東側にまとまって位置する。

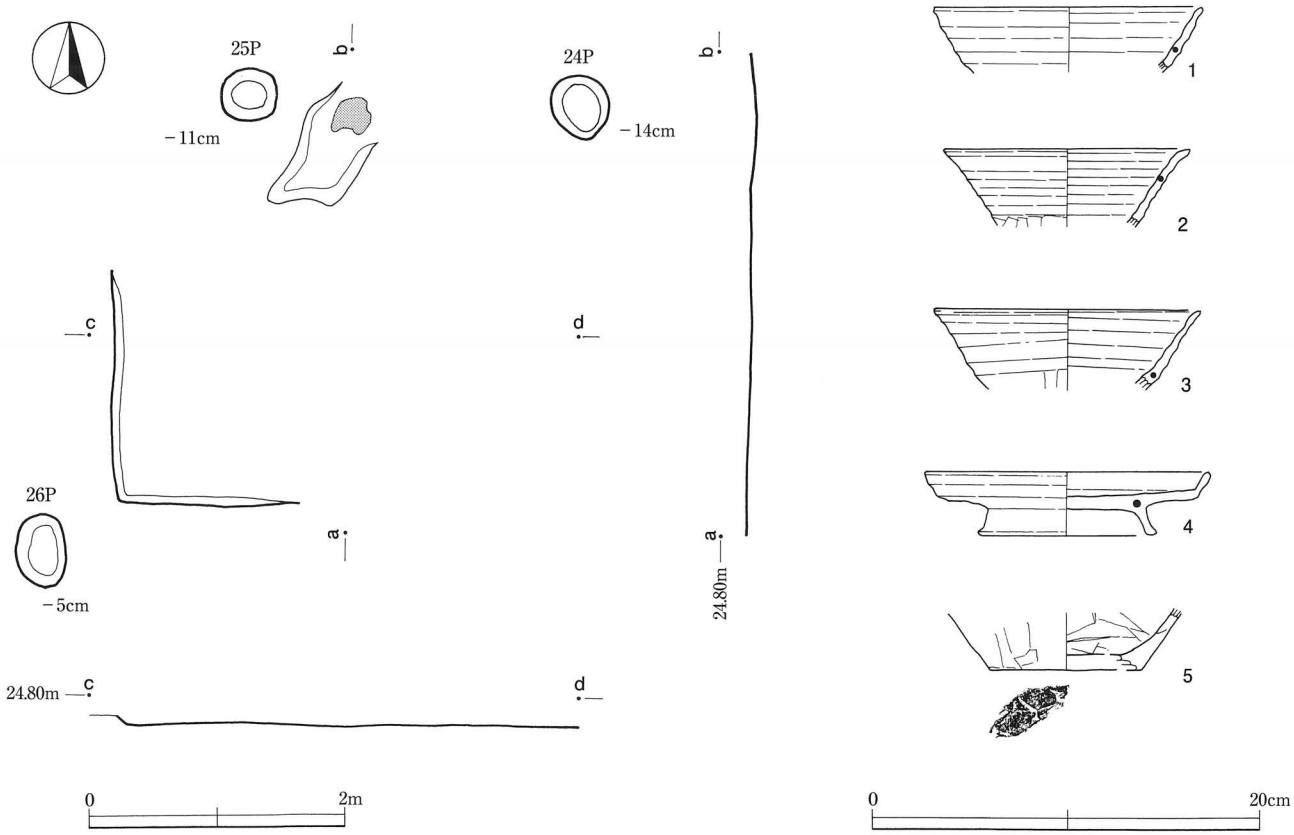
第３号土坑は長径1.05 m、短径0.5 m、深さ30cmの楕円形の土坑で、北西隣には深さ68cmの斜めに穿たれた５Ｐが付随する。一方、１～４Ｐは深さ10～25cm程の浅いピットで、一辺3.35～3.7 mの方形に並ぶ。

覆土の堆積と遺物の出土状況　第３号土坑の覆土は



1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、焼土粒を多く含む。白色粘土ブロックを下部にまばらに含む。締まり、粘性有り。埋め戻し土か。
2層：明褐色土層　ローム粒、砂粒、焼土粒を多く含み、炭化物粒も含む。、竈内では大きな焼土ブロックが目立つ。締まり有り。
3層：黒褐色土層　ローム粒、焼土粒を多く含み、大きい白色粘土ブロックをまばらに含む。砂粒、炭化物粒も含む。締まり有り。

第15図　Ⅱ次５号住居跡実測図及び出土遺物



第16図　Ⅱ次６号住居址実測図及び出土遺物

ロームを基調とする暗黄褐色土で、ロームブロックを多量に、白色粘少量含む。１～４Ｐは明褐色土の共通する覆土を有するのに対し、５Ｐは第３号土坑と同様なロームを基調とする暗黄褐色土を覆土とする。遺物としては、２，３Ｐの覆土中からそれぞれ**20**，**21**の須恵器蓋をはじめとする奈良・平安時代の土器小片が出土している。以上のことから、１～４Ｐは奈良・平安時代の住居跡に伴った柱穴の可能性があり、第３号土坑と５Ｐについては、その形態から古墳時代住居跡の貯蔵穴と柱穴の可能性が考えられる。また、１～４Ｐの配列が、近くの第２号住居跡の主軸方向とほぼ平行することも、前者の可能性を示唆する。

出土遺物　**20**，**21**は返りの付いた須恵器蓋で、両者とも酸化焔焼成である。

第５号土坑（第18，21図）

検出状況と規模・形態　調査区中央部に位置し、第５号住居跡の南壁に、覆土の一部を壊されている。

長径1.0 m、短径0.55 m、深さ50cmの楕円形を呈する。

覆土の堆積と遺物の出土状況　覆土は３層に分かれ、覆土中から**4**～**7**とした古墳時代土師器が出土している。この内、**6**，**7**は北壁に貼り付くように検出されている。

出土遺物　**4**～**6**は土師器杯形土器で、**7**は高杯形土器の脚部である。

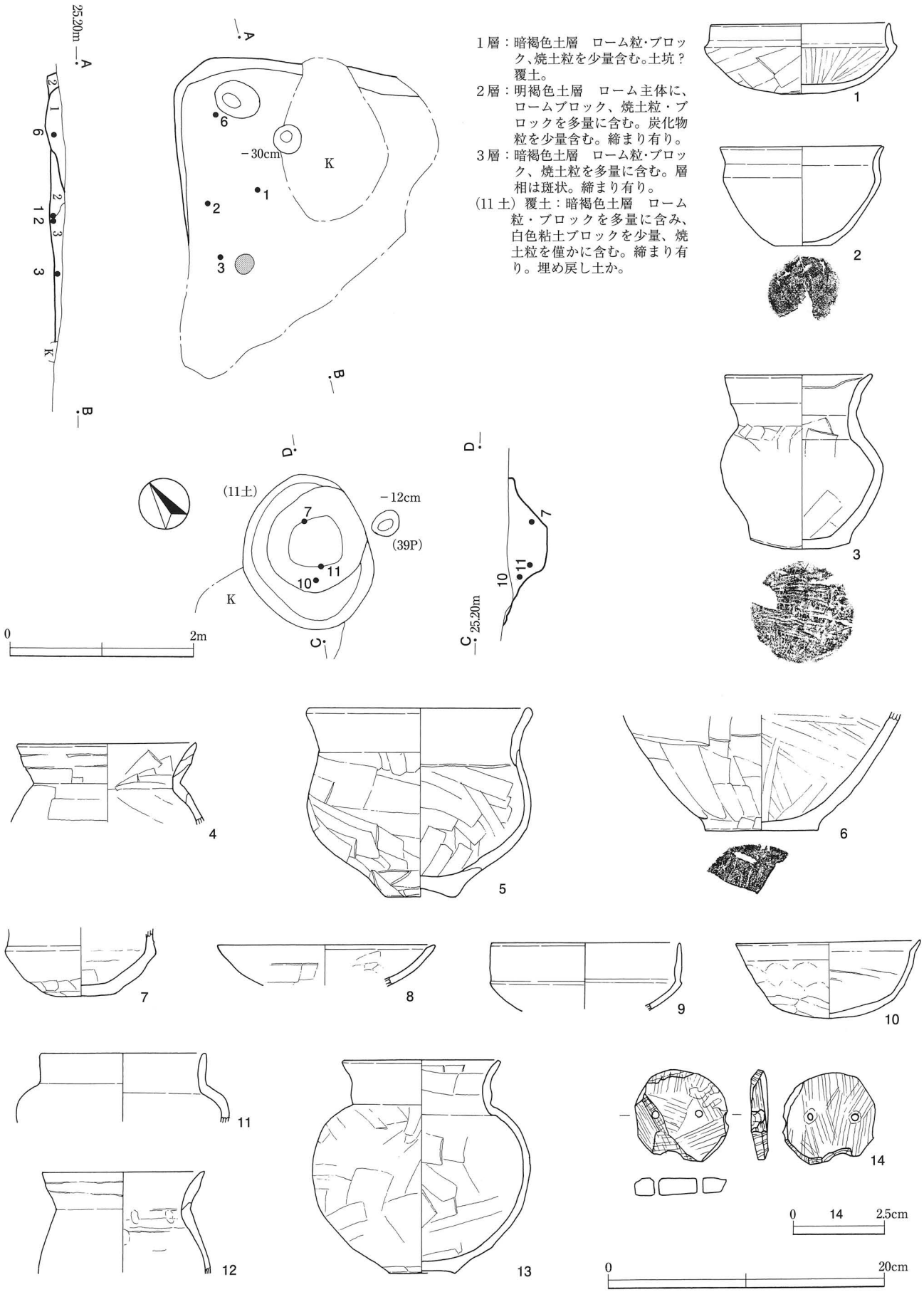
第８，９号土坑（第18，21図）

検出状況と規模・形態　第７号住居跡の西側にあたる調査区西端に、両土坑は接して位置する。

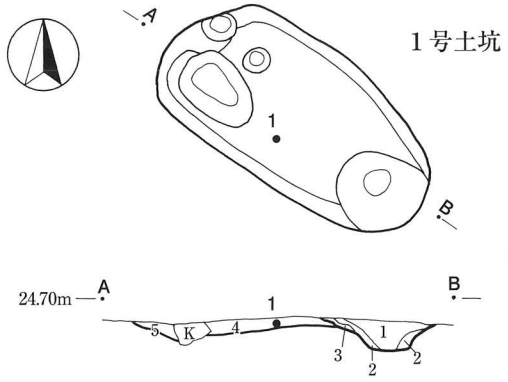
第８号土坑は短径0.9 m、深さ12cm、第９号土坑は長径1.15 m、深さ12cmの、それぞれ円形に近い平面形を有する皿状土坑で、第８号土坑の南西部は攪乱を受けている。

覆土の堆積と遺物の出土状況　覆土は第９号がローム粒・ブロックと砂粒、焼土ブロックを多く含むのに対し、第８号はブロックをあまり含まない。接する部分にはちょうど大きなロームブロックが挟まっており、新旧関係は把握できない。

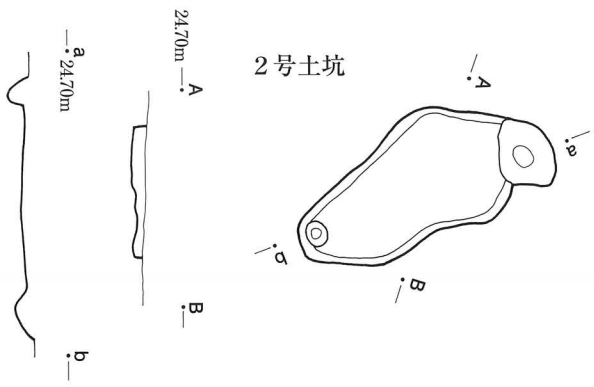
第８号の覆土中からは**11**，**12**の平安時代の土師器が、第９号の覆土中からは、**13**の土師器が出土しており、



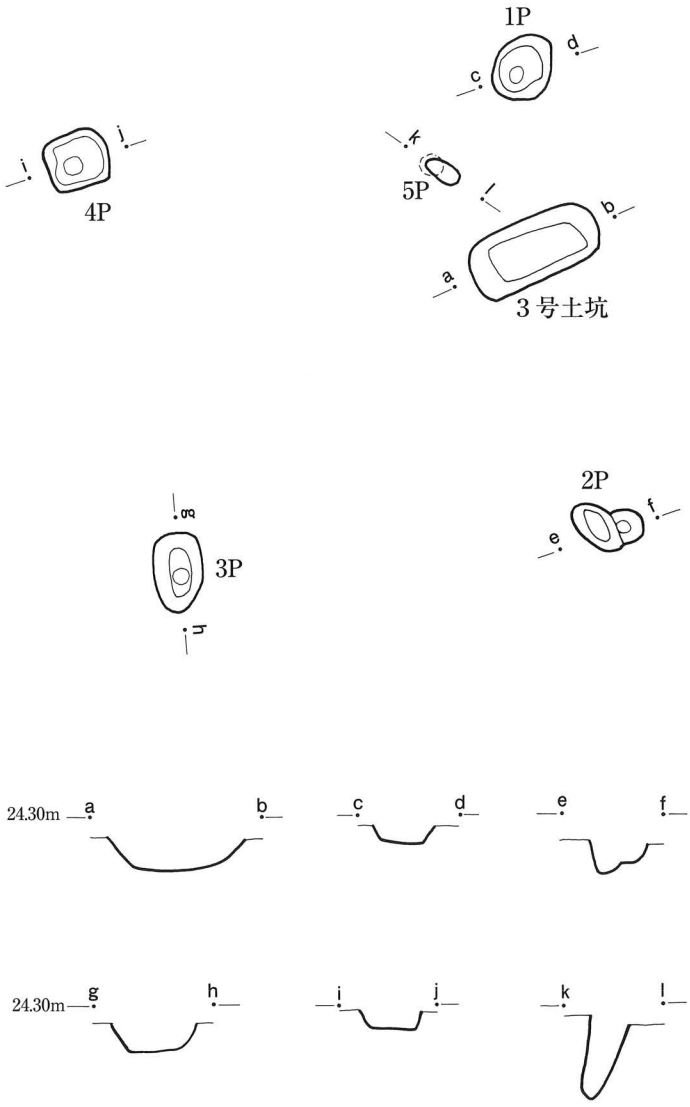
第17図　Ⅱ次７号住居跡実測図及び出土遺物

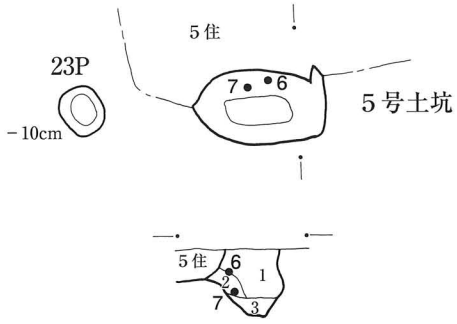


1・3層：暗褐色粘質土層　ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗褐色粘質土層　基調は1層と同質だが、白色粘土ブロックを多く含む。締まり有り。
4・5層：明褐色土層　ローム粒を多く含む。締まり、粘性有り。

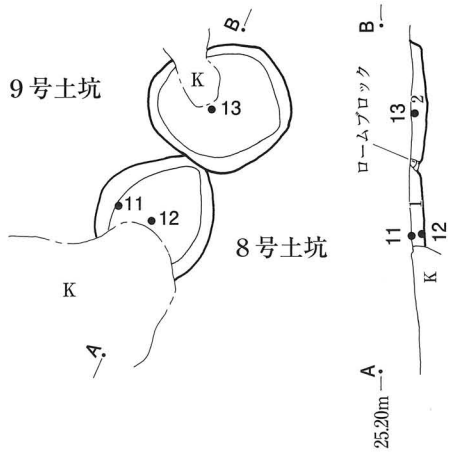


覆土：明褐色土層　白色粘土ブロックを下部に含む。ロームブロックを斑状に多く含む。焼土粒を多く含む。締まり有り。





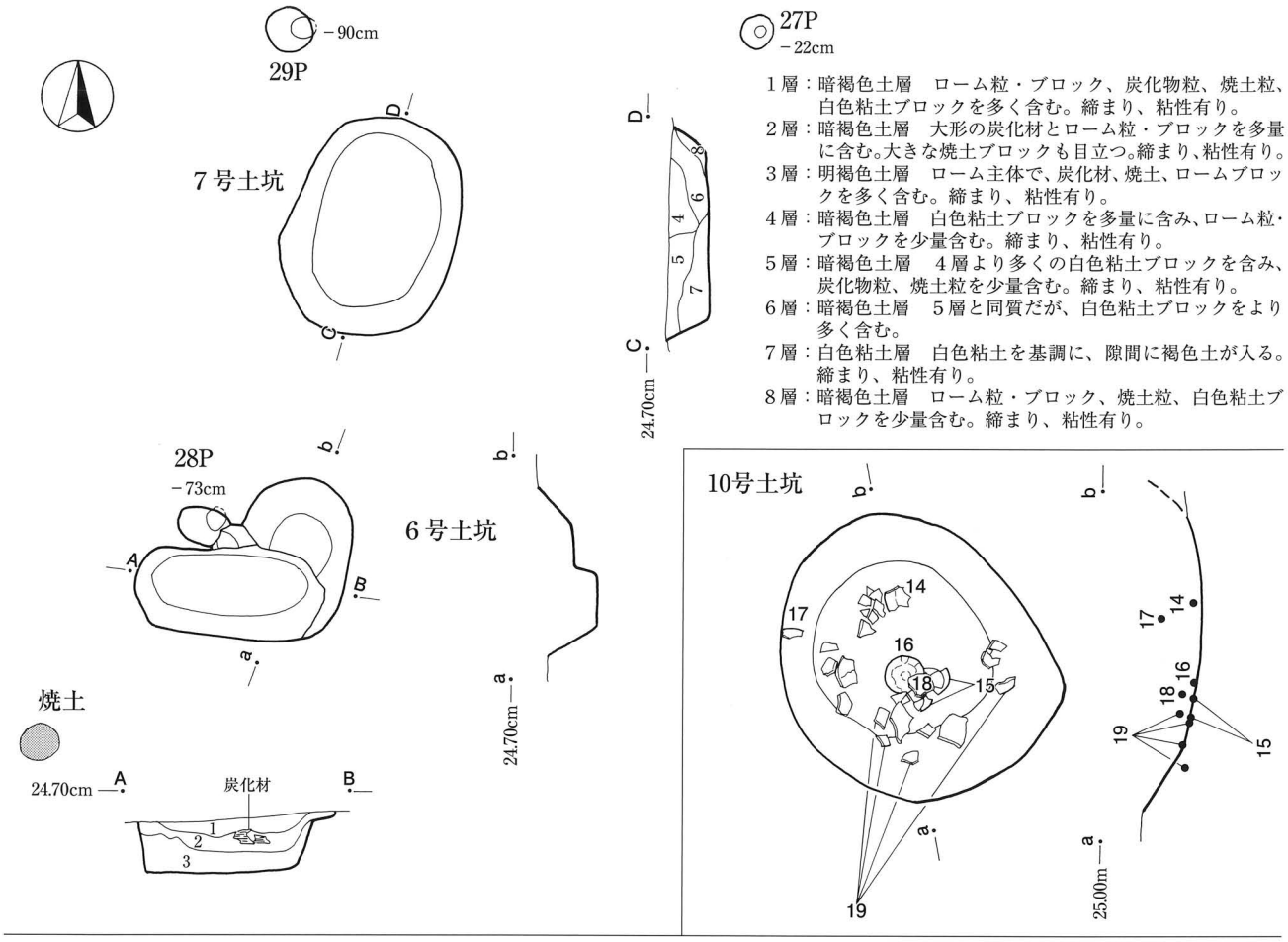
1層：暗褐色土層　ローム主体に、ロームブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く締まっている。埋め戻し土か。
2層：暗褐色土層　1層土と同質だが、色調がやや暗い。
3層：暗褐色土層　ロームブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少量に含む。締まり有り。



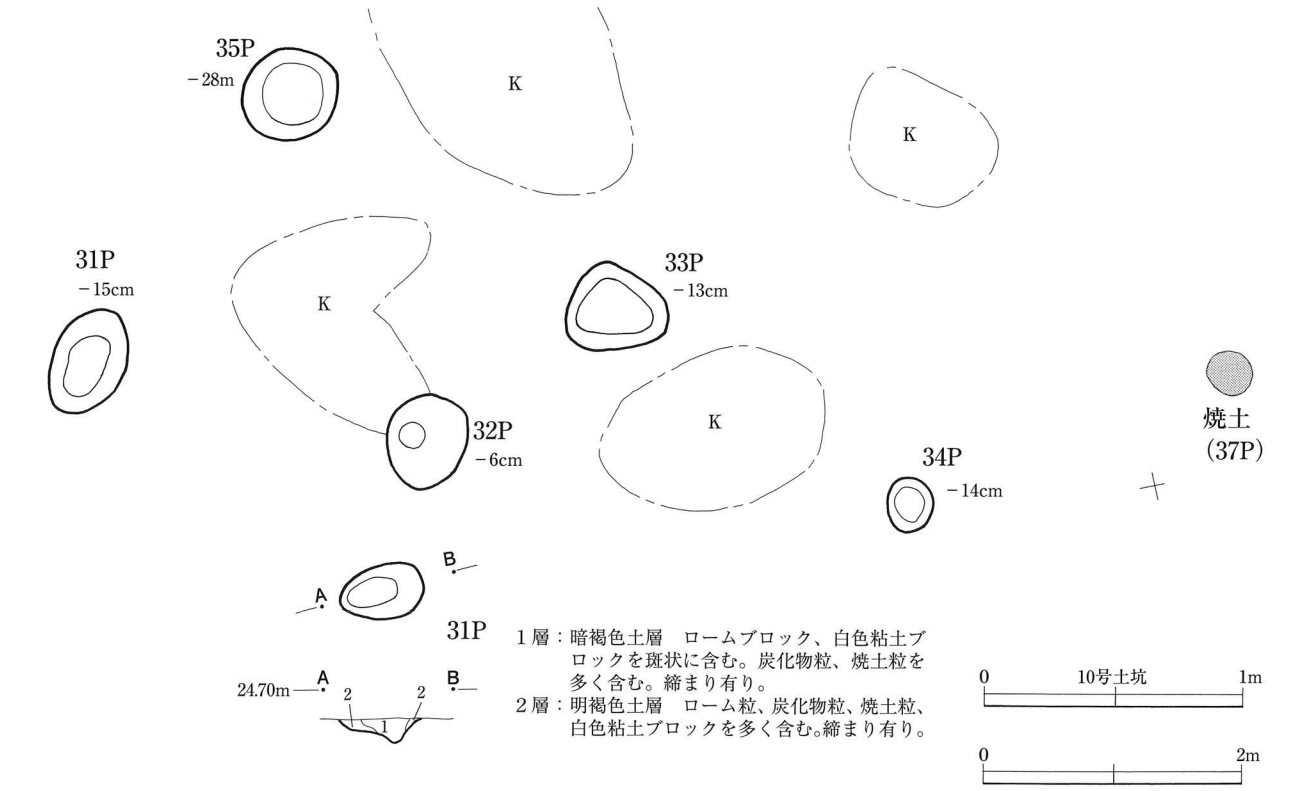
1層：明褐色土層　ローム粒・ブロック、砂粒、焼土ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、焼土粒を少量含む。

0　2m

第18図　Ⅱ次土坑・ピット実測図



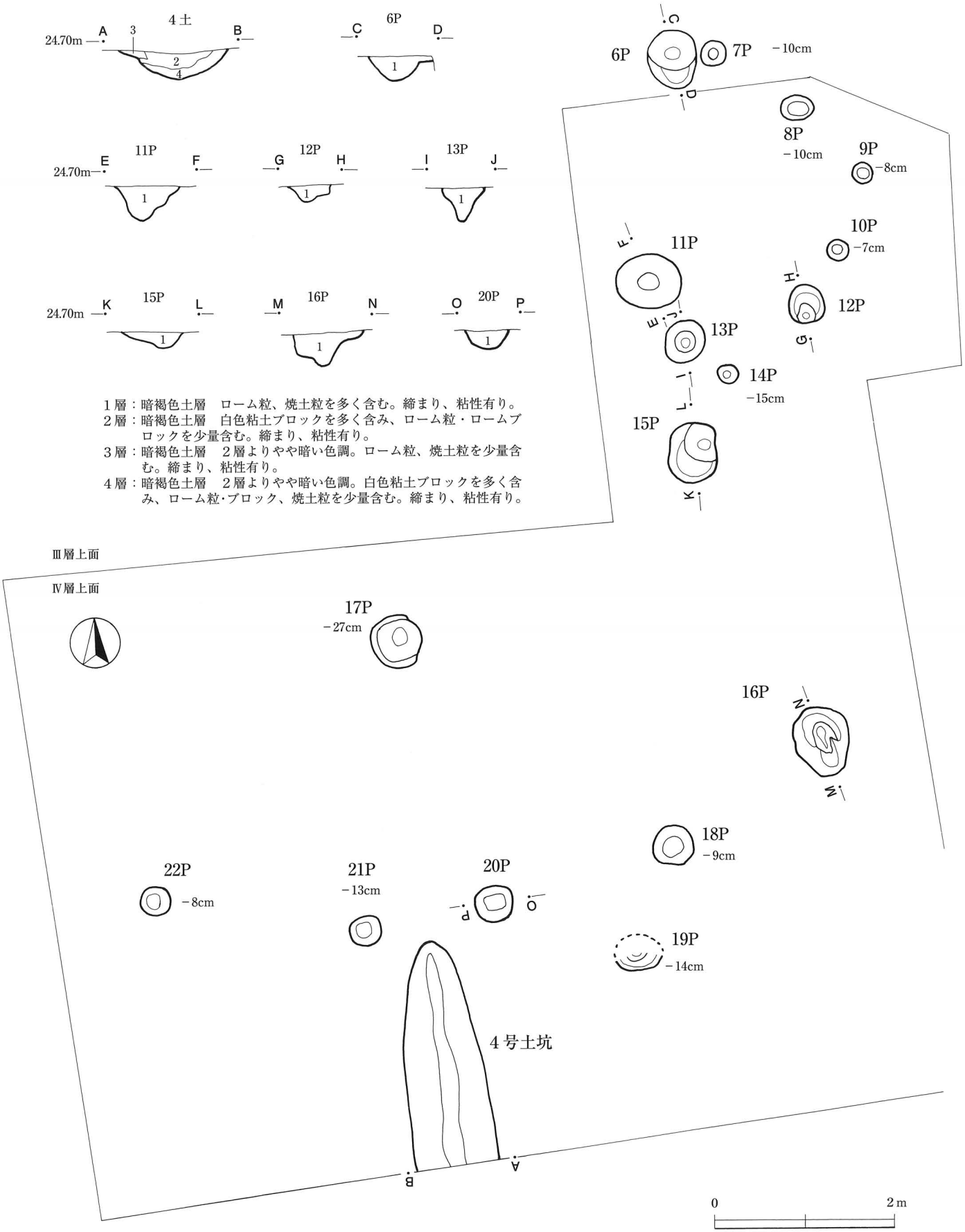
1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒、白色粘土ブロックを多く含む。締まり、粘性有り。
2層：暗褐色土層　大形の炭化材とローム粒・ブロックを多量に含む。大きな焼土ブロックも目立つ。締まり、粘性有り。
3層：明褐色土層　ローム主体で、炭化材、焼土、ロームブロックを多く含む。締まり、粘性有り。
4層：暗褐色土層　白色粘土ブロックを多量に含み、ローム粒・ブロックを少量含む。締まり、粘性有り。
5層：暗褐色土層　4層より多くの白色粘土ブロックを含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり、粘性有り。
6層：暗褐色土層　5層と同質だが、白色粘土ブロックをより多く含む。
7層：白色粘土層　白色粘土を基調に、隙間に褐色土が入る。締まり、粘性有り。
8層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、焼土粒、白色粘土ブロックを少量含む。締まり、粘性有り。



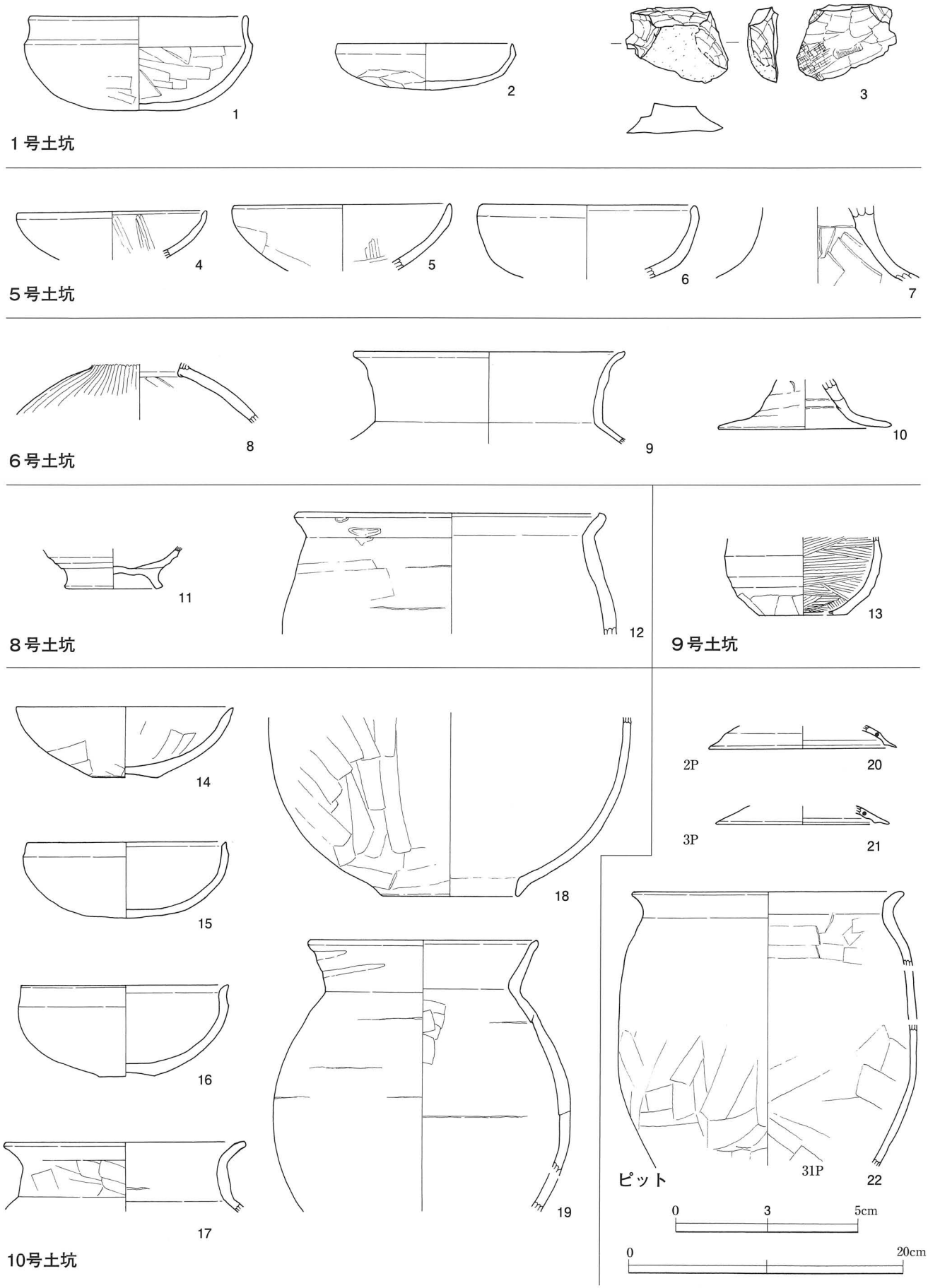
1層：暗褐色土層　ロームブロック、白色粘土ブロックを斑状に含む。炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
2層：明褐色土層　ローム粒、炭化物粒、焼土粒、白色粘土ブロックを多く含む。締まり有り。

0　10号土坑　1m
0　2m

第19図　Ⅱ次土坑・ピット実測図（2）



第20回　Ⅱ次土坑・ピット実測図（3）



第21図　Ⅱ次土坑・ピット出土遺物

第８号は平安時代の所産と捉えられる。

出土遺物　11は土師器高台付土器で、12は土師器の甕形土器で頸部に砂混りの粘土塊が付着する。13は轆轤成形で内面が磨かれた土師器。

第６，７号土坑・28，29Ｐ（第19，21図）

検出状況と規模・形態　調査区中央部の第６号住居跡の西側にまとまって位置する。

第６号土坑は深浅２つの楕円形の土坑が重なった形態をなし、長径1.65ｍ、短径1.35ｍ、深い土坑部の深さ45cm、浅い土坑部の深さ30cmを測る。第７号土坑は長径1.8ｍ、短径1.35ｍ、深さ30cmの平面楕円形の皿状を呈する。28，29Ｐはともに深さ70cmを超えるもので、28Ｐは第６号土坑に接して穿たれている。また、第６号土坑の南西側には焼土が存在する。

覆土の堆積と遺物の出土状況　第７号土坑の覆土はブロック状の堆積を示し、人為的な埋土と思われる。第６号土坑の覆土は、凹レンズ状の自然堆積の様相を示すが、炭化材を含んでいる。

遺物としては、第６号の8～10とした古墳時代土師器が出土し、第７号の覆土中からは奈良・平安時代の土器小片が出土している。以上のことから、第６号は古墳時代に、第７号は奈良・平安時代以降の所産と捉えられる。また、第６号土坑と28，29Ｐはその位置や規模から、ともに、古墳時代住居跡の貯蔵穴と柱穴の可能性が考えられる

出土遺物　8～10は土師器で、8は壺形、9は甕形、10は高杯形土器の脚部である。

第10号土坑（第19，21図）

検出状況と規模・形態　調査区西部に位置し、第７号住居跡の南壁に接する。

長径1.15ｍ、短径1.0ｍ、深さ15cmの円形皿状を呈する。

遺物の出土状況　底面直上から14～19とした古墳時代土師器が密集して検出された。

出土遺物　14～16は土師器杯形で、17，19は土師器甕形、18は土師器甑形土器である。

31～36Ｐ（第19，21図）

調査区西部にまとまって位置し、近くには37Ｐとした焼土も存在する。深さは13～28cmを測る。

31Ｐから22の土師器甕形土器が出土したのをはじめ、36Ｐを除くピットの覆土からは、奈良・平安時代の土器片が出土している。

第４号土坑・６～22Ｐ（第20図）

調査区中央部にまとまって位置する。当該地域では表土下のⅢ層上面での確認が明瞭にできなかったために、下位のⅣ層上面まで掘り下げて、遺構の確認を実施した。第４号土坑は幅0.85ｍ、深さ25cmの南北方向に細長い土坑で、６～22Ｐは深さ７～32cmを測る。

６～12，15，16Ｐからは、奈良・平安時代の土器小片が出土している。

塚状遺構（第22，23図）

検出状況　調査区の北東端に位置する。

規模・形態　塚の現況は、南北径6.3ｍ、東西径4.3ｍの南北方向に長い不な円形を呈し、現地表からの高さ1.5mを測る。頂部の標高は26,5ｍで、北側は抉られたように急傾斜になっており、南側は傾斜が緩やかである。塚北側の裾に沿って幅１ｍ、深さ10cm程の溝が廻り、その内径は5.8ｍを測る。

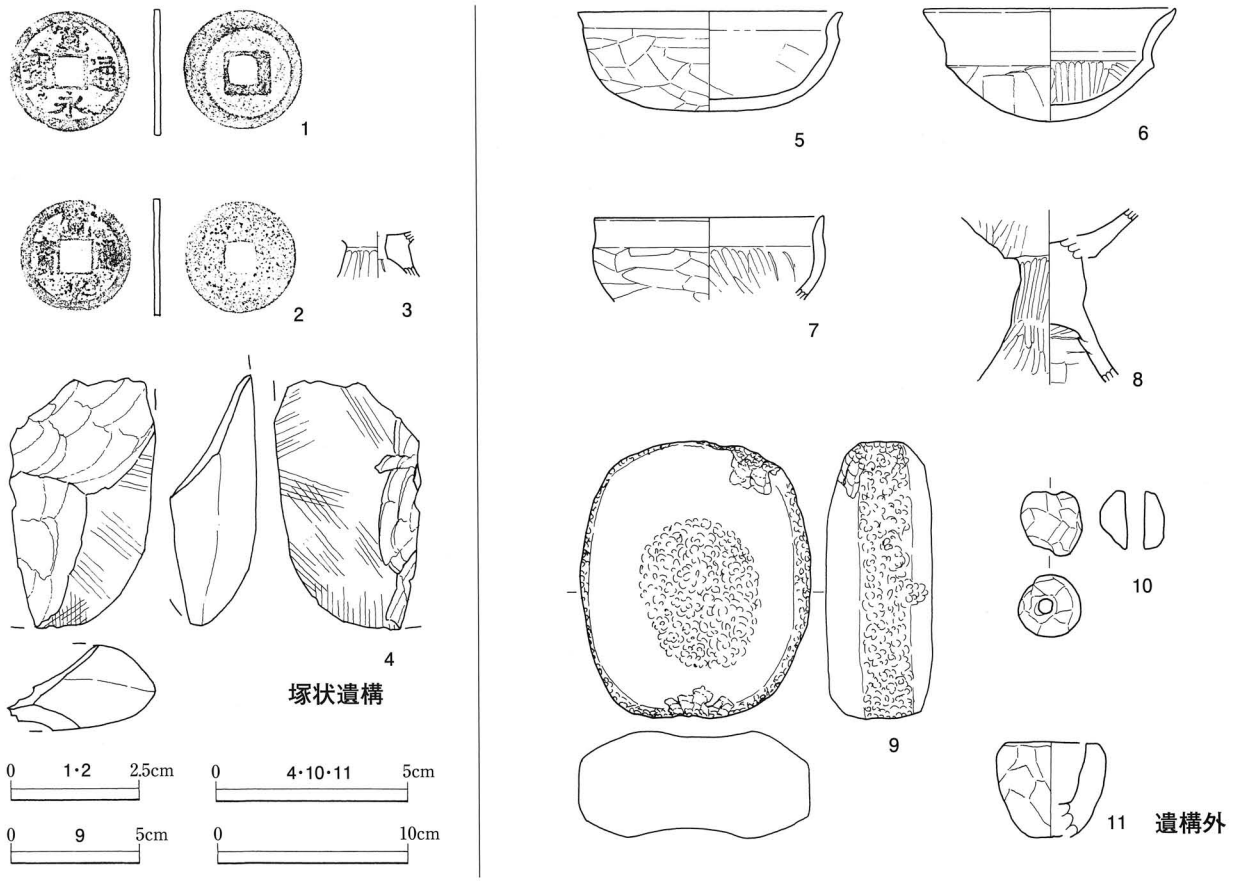
盛土の堆積と遺物の出土状況　盛土下の標高は25.6ｍで、以下は地山ローム層と粘土層を切り出して塚の基部を形づくっている。周溝の底面も粘土層に達しており、南側では削平部の地山粘土層上に崩落土と思われる４層が堆積する。盛土は表土層（１層）と２，３層ととした土層がらなるが、北側では周溝底面上に、２層土が入り込んでおり、南側では崩落土の４層に被さって２層土が堆積していた。これらは盛られた２層の一部が流れたものと捉えられ、不整な塚の平面形もこれに由来すると思われる。

一方、周溝の底面外壁部には６層とした白色粘土ブロックを含む土層が認められ、周溝内の２層土と６層の上には５層とした暗褐色土層が堆積する。また、周溝内側の平坦なローム層上には、部分的に砂の薄層（７層）が認められた。

遺物としては、盛土から4の磨製石斧や3の古墳時

1層：黒褐色土層　表土層。竹根著しく、締まりに欠ける。ローム粒を含む。
2層：暗褐色土層　盛土層。ローム主体。竹根著しく、締まりに欠ける。
3層：暗褐色土層　盛土層。ロームを主体に、ロームブロックを斑状に含む。炭化物粒、焼土粒、黒色土ブロックを部分的に含む。締まり無し。
4層：暗褐色土層　崩落土。炭化物粒、焼土粒を少量含み、粘土ブロックを含む。締まり、粘性有り。
5層：暗褐色土層　周溝覆土。均質な土質で、ローム粒、焼土粒を僅かに含む。締まり、粘性無し。
6層：暗褐色土層　周溝覆土。５層に近似するが、色調がやや明るい。焼土粒を少量含む。締まり、粘性無し。
7層：青灰色砂層　周溝覆土。周溝の掘り方の内側にあたる地山ローム上面を中心に、外側や覆土中に薄層として堆積。
8層：黄褐色ローム層　地山ローム層。締まり、粘性有り。
9層：橙褐色ローム層　地山ローム層。ブロック状に存在する。締まり、粘性有り。
10層：暗灰色粘土層　地山の粘土層。硬く締まっている。

第22図　Ⅱ次塚状遺構実測図



第23図　Ⅱ次塚状遺構及び遺構外出土遺物

代土師器片とともに、中近世の土器小片が出土しており、本遺構の構築時期は中近世以降と捉えられる。また、表土層と周溝内からは寛永通宝が2枚出土している。

出土遺物　1, 2は寛永通宝。3は土師器の器台形土器、4は両刃の磨製石斧の破片である。

遺構外出土遺物（第23図）

5～8は土師器で、5～7は杯形土器、8は高杯形土器の脚部である。9は磨石、10は球状土錘、11はミニチュア土器。

Ⅳ．第Ⅲ次調査で検出された遺構と遺物

調査地点の概要（第24図）

第Ⅲ次調査区は、遺跡が展開する台地の東部、標高25ｍ程のやや広い台地上平坦部に位置する。調査区内に旧村道が東西方向に横断する。基本土層は第Ⅱ調査区と同様だが、ローム層の遺存状態はやや良い。旧耕作土や根による撹乱が著しい表土層の掘削は、バックホーで行ったが、撹乱の影響は遺構覆土や地山にまで複雑に及んでおり、遺構同士の著しい重複も相まって、遺構の確認や発掘は困難を極めた。最終的に、住居跡30軒、土坑１基、ピット３基、焼土３ヶ所が検出された。

縄文・弥生時代遺物（第25，26図）

第Ⅲ次調査では、縄文時代や弥生時代の遺構は検出されなかったが、後世の遺構内を中心に、当該期の遺物が出土しており、ここでまとめて紹介する。

1～26は縄文土器。１は条痕文が施された早期後葉の土器。2～7は胎土に繊維を含む前期前半の土器で、その中でも、2，3は口縁部が肥厚し、縄文や貝殻腹縁文が施された土器で前期初頭に位置づけられよう。8～21は前期後半の土器で、8～11には連続爪形文が、12～17には変形爪形文もしくは有節平行線文が、18～20は貝殻腹縁文が施されている。胎土に繊維を含む8と、浅鉢形の9、それに縄文が施された10は諸磯式に、他は浮島式あるいは興津式に相当すると思われる。21は輪積痕が残され、縄文が横方向に付けられたもので、前期末葉の土器か。22～26は中期後葉の加曽利Ｅ式土器で、22，23は磨消帯が垂下し、25，26には微隆起線が認められる。

27～61は弥生土器。27～35は、半截竹管状工具を用いた平行沈線で文様が描かれた土器で、27，28は広口壺、29，30は細頸壺の破片と思われる。36～45は３本歯の櫛描文が、46～50は３本歯以上の櫛描文が施された土器であるが、50は焼成が堅緻で、他の土器と異なる。古墳時代以降の土器かもしれない。51は浅い櫛描文と隆帯、円形刺突文が施された壺形土器の肩部破片。52は刷毛目が、53～55は附加条縄文が施されたもので、55は蓋形土器の可能性もある。56～59は口縁部の破片で、56，57，59は複合口縁になっており、56～58には刻みもしくは刺突列が，58，59には貼瘤が伴う。60は単沈線で格子目文が描かれたもので、61は附加条縄文が施された底部破片で、底面に布目痕が認められる。

62は両面が研磨された板状の石器で、縁辺の一部に刃状に研磨された部分が認められるが、磨滅痕は確認できない。周縁や裏面の剥離面は、研磨後の剥離もしくは破損によるものと思われる。また、上端の孔状の抉りは意図的なものと思われるが、擦痕は認められない。第19ｃ号住居跡の床面から出土したもので時代も不明だが、本項で記載した。63は平基無茎鏃で、片面に礫面を残す。

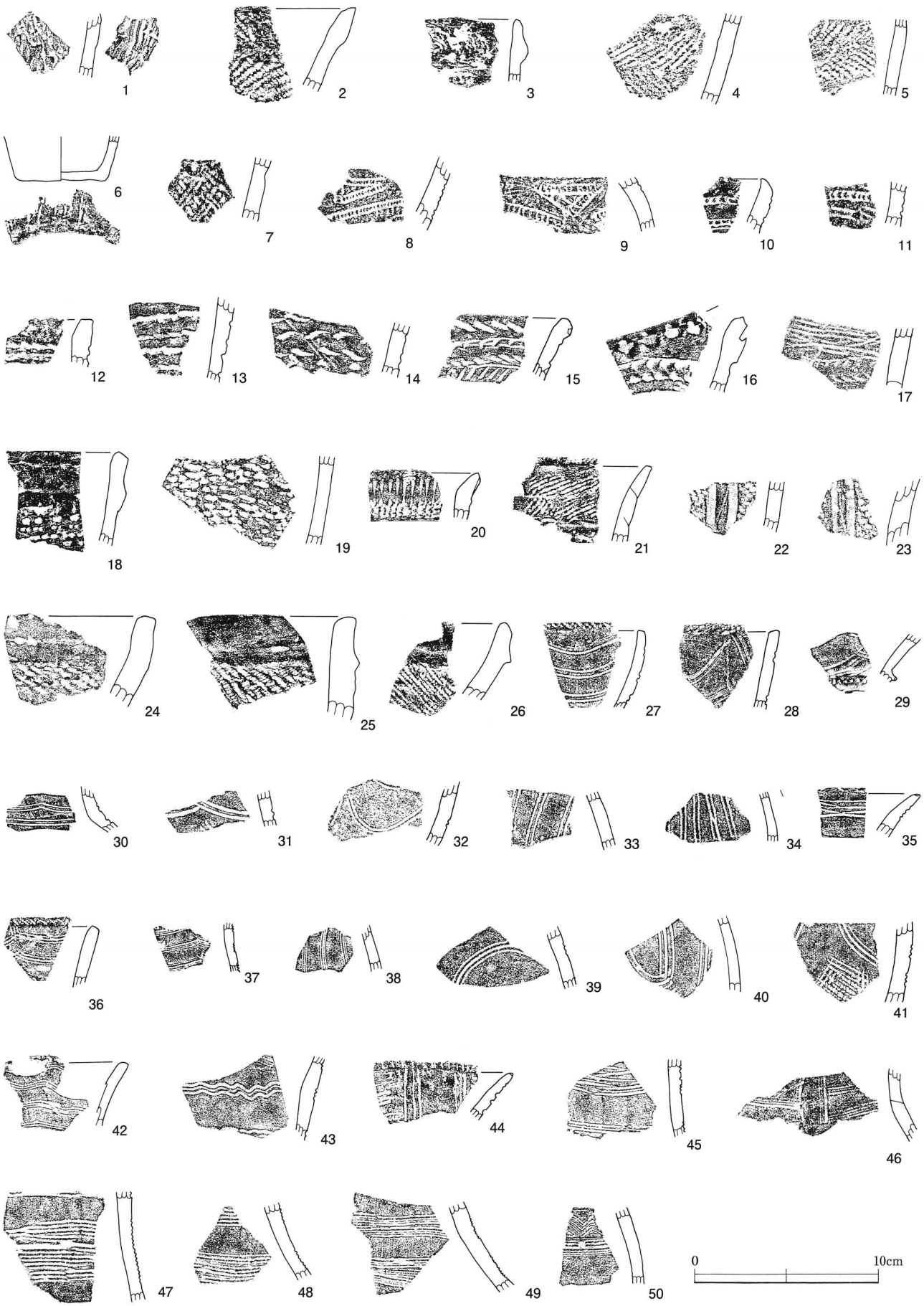
第１号住居跡（第27，28図）

検出状況　調査区の北東隅に位置する。北東部は調査区外に延び、南西隅が第３号住居跡に壊されている。検出面はローム層上面である。

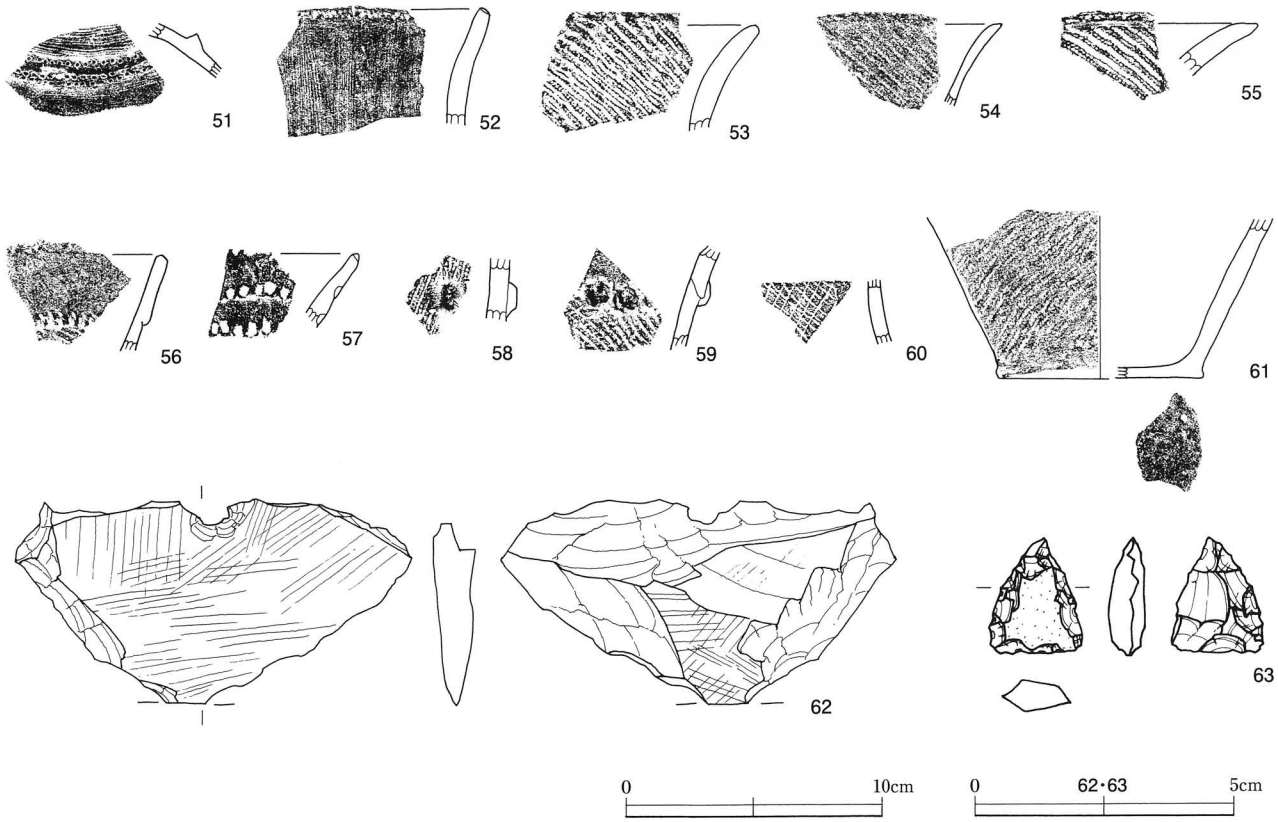
規模・形態　撹乱が著しく全体像は不明だが、平面形は隅丸方形になるものと思われる。残存していた南西壁は、南－68°－東方向に延び、壁の高さは15cmを測る。南西壁に沿っては、10cm程ベッド状に床面が高くなった部分が認められる。床面は全面、貼床から構成される。貼床は地山ローム層上に、３層とした暗褐色土と、２層としたロームを主体とする土を順に貼ったもので、いずれも硬く締まっていた。ピットは２ヶ所検出されている。

調査区北東隅の住居跡の中央付近にあたる床面からは、長径140cm以上にわたって赤色化した部分が検出された。通常の地床炉の焼土と異なり、ほとんど劣化しておらず、その表面は光沢を有する程硬化していた。また、表面には炭化物粒が少量散っており、部分的に橙色化した部分も存在する。断面観察では赤色化は貼床の２，

第24図　第Ⅲ次調査区遺構配置図



第25図　第Ⅲ次調査区出土縄文・弥生時代遺物（1）



第26図　第Ⅲ次調査区出土縄文・弥生時代遺物（2）

3層や地山ローム層まで及んでいた。この赤色土の成因を調べるために、赤色土と通常の貼床土のサンプルを試料に、偏光顕微鏡観察とX線回析分析を委託したところ、貼床土と地山ロームが被熱のため赤化したものという結果が得られた（付編参照）。なお、後述する第3号住居跡の貼床下から検出された方形の土坑は、位置的に本住居跡の貯蔵穴にあたる可能性がある。

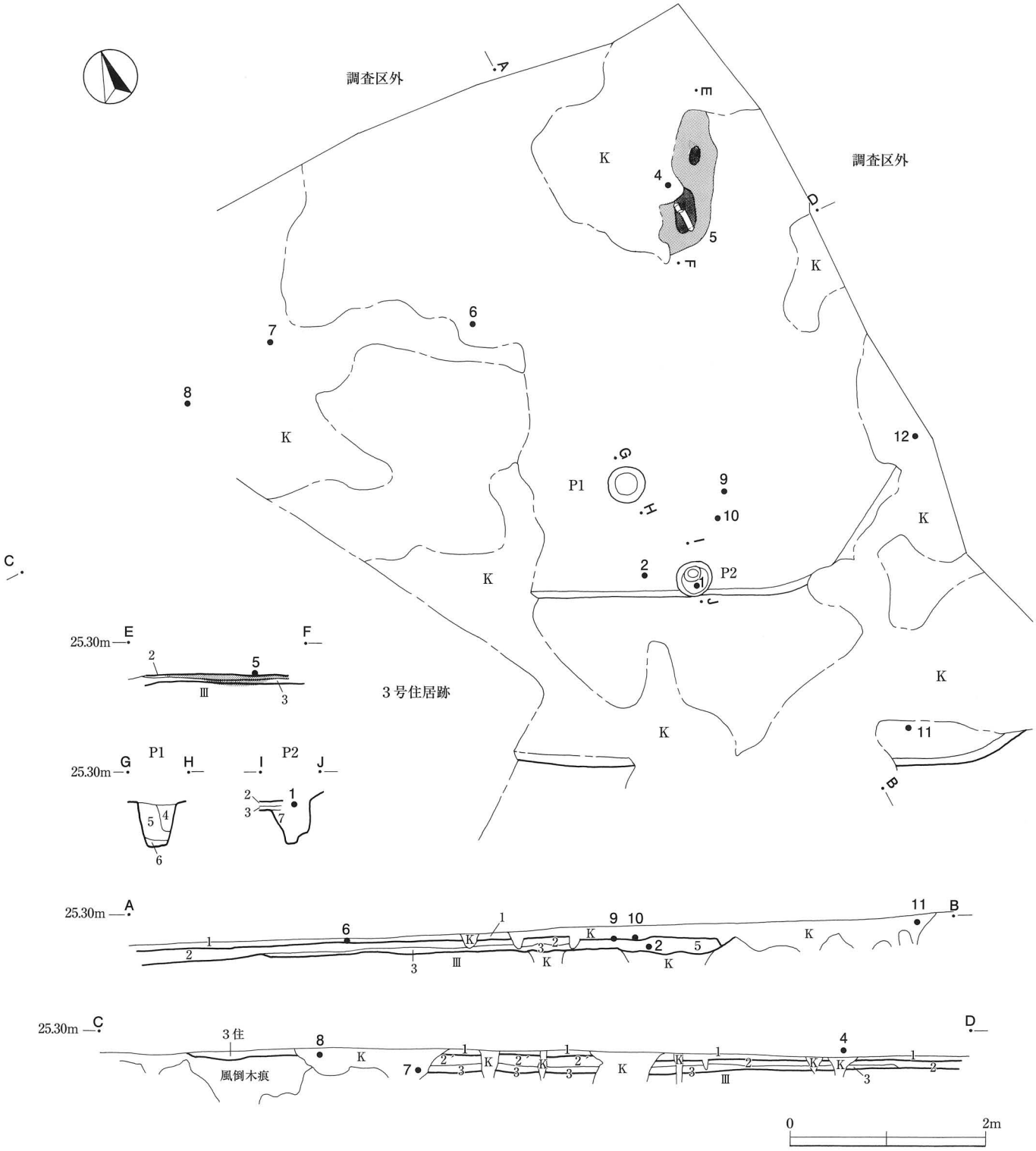
覆土の堆積と遺物の出土状況　貼床上の覆土は基本的に1層とした暗褐色土であるが、その上面も硬化していた。赤色土の橙色部分直上からは**5**の棒状土製品が、床面直上からは**2**の土錘と**3**の土製勾玉？が出土し、貼床中からは**13**のミニチュア土器が出土している。また、ベッド状遺構の段部にあるピットの覆土上部から、古墳時代土師器の**1**がほぼ完形の状態で検出されており、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　**1**は土師器杯形土器。**2**は球状土錘。**3**，**4**はやや粗雑につくられた土製品で、**3**は貫通していないが孔状の凹みが付けられており勾玉と思われ、**4**は円板状を呈する。**5**は扁平棒状の土製品で、裏面は平坦で、両端に丸みを帯びた突起が付く。**6**，**7**は砥石で、**8**は刃部を欠いた磨製石斧。**9**～**12**は滑石製品。**9**，**10**は周囲が折断によって整形された剥片で、**10**には研磨が施されている。**11**は研磨で仕上げられた無孔の円板だが、有孔円板の未成品か？ **12**は背面に礫面を残す大型の剥片。**13**は手捏ねのミニチュア土器。

第2a，b号住居跡（第29図）

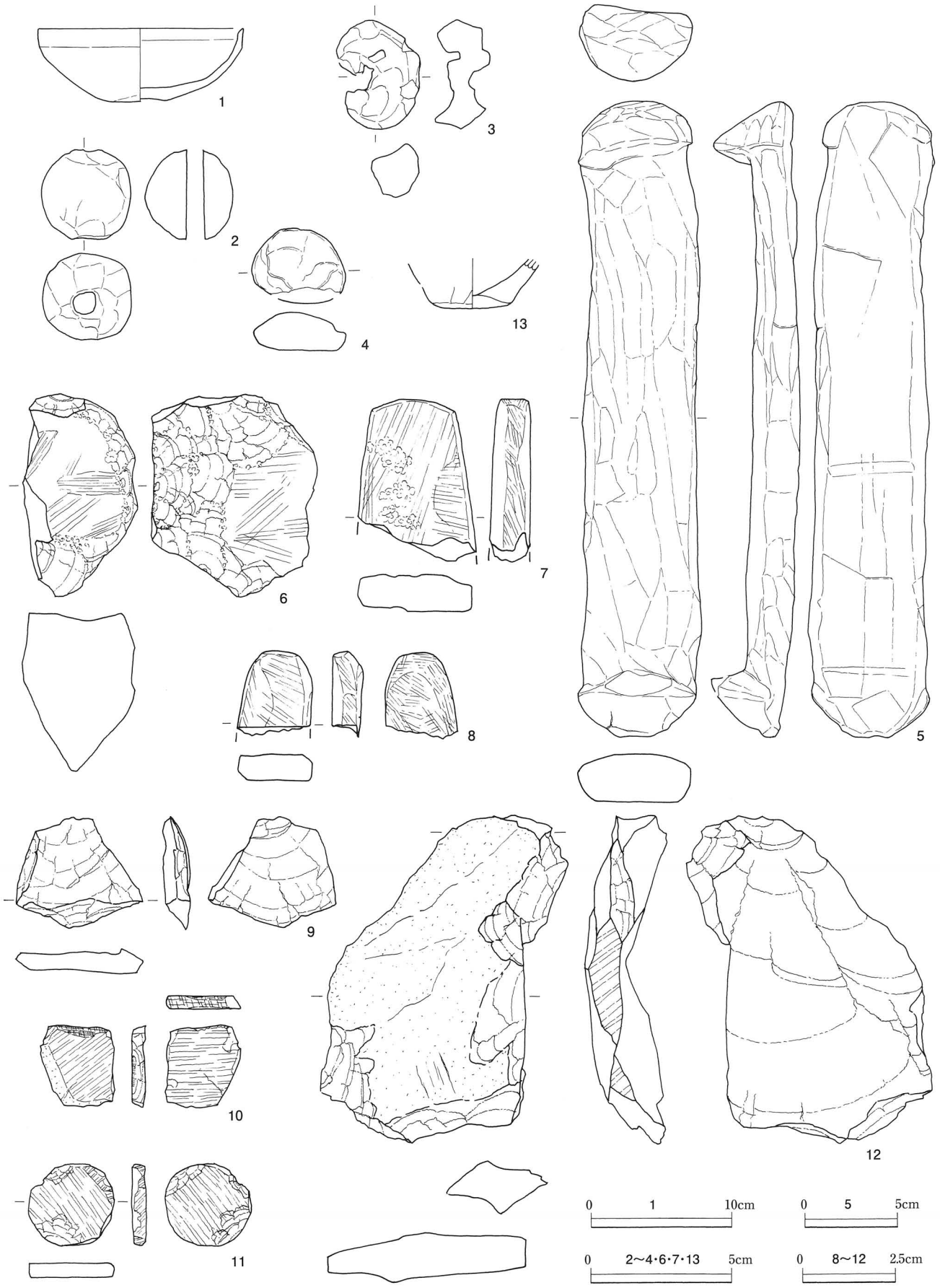
検出状況　調査区の東端から2軒重複して検出されたもので、両住居跡とも東部は調査区外に続く。床面まで及ぶ攪乱が著しく、新旧関係は捉えられていない。

規模・形態　2a号は平面方形を呈し、壁の高さは最も高い南部で15cm、最も低い北部で4cmを測る。2b号も方形を呈し、確認できた西壁は2.0m、壁の高さは15cmを測る。両住居跡で確認できた西壁同士は平行し、その方向は北－13°－西である。両住居跡ともピットや火処は検出されていないが、ともに床面上から盛り上がる焼土ブロックが存在する。床面は大半が地山ローム層からなるが、2b号の方が12cm程低く、その一部に貼床が認められた。また、床面はかなり攪乱の影響を受け

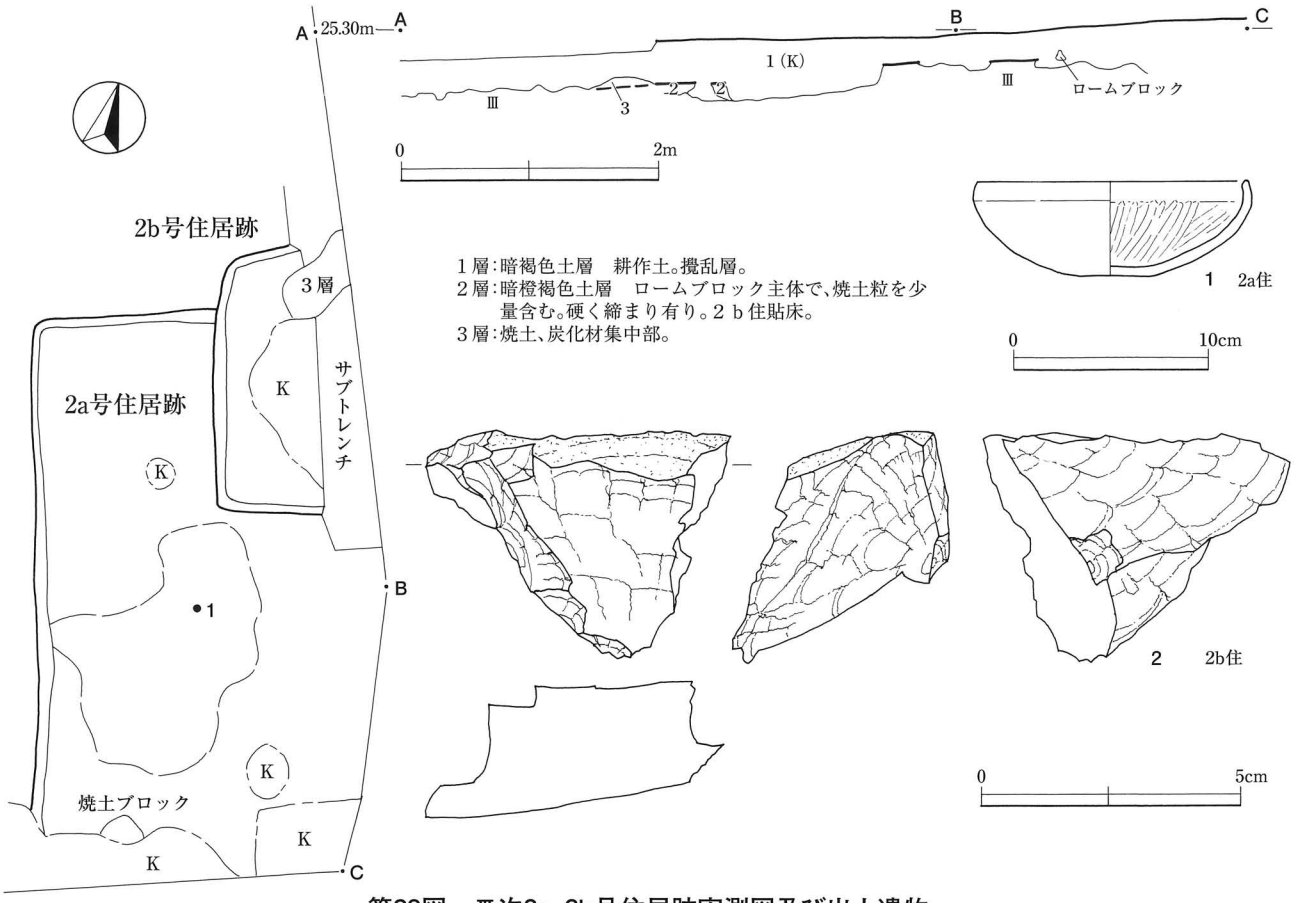


1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。上面が硬化。
2層：暗黄色土層　ロームを基調とした貼床土。根の攪乱により褐色土が斑状に入り込む。硬く締まり有り。
2´層：暗黄褐色土層　2層と同質だが、ロームブロックの大きさが小さく、褐色土の割合が多い。焼土粒を少量含む。
3層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒少量含む。締まり有り。
4層：暗褐色土層　ローム粒を多く、ロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。締まりやや無し。
5層：暗褐色土層　ロームブロックを多く、白色粘土ブロックを微量含む。締まり有り。
6層：白色粘土ブロック主体の土層。
7層：暗褐色土層　ロームブロックを少量含む。締まり有り。

第27図　Ⅲ次1号住居跡実測図



第28図　Ⅲ次１号住居跡出土遺物



第29図　Ⅲ次2a、2b号住居跡実測図及び出土遺物

ており、図示した2a号の破線範囲は、ロームブロックが認められる範囲で、元床面硬化部であった部分と想定した。

覆土の堆積と出土遺物　両住居跡とも覆土はほとんど遺存しておらず、表土層の耕作・攪乱層が直接床面まで達していた。2a号の床面ロームブロック範囲直上から出土した1の土師器杯形土器から、2a号の時期は古墳時代と捉えられる。一方、2b号の覆土中からは2の滑石製模造品の素材となる剥片が出土しており、また、古墳時代より新しい時期の土器が出土していないことから、2b号の時期も古墳時代に想定される。

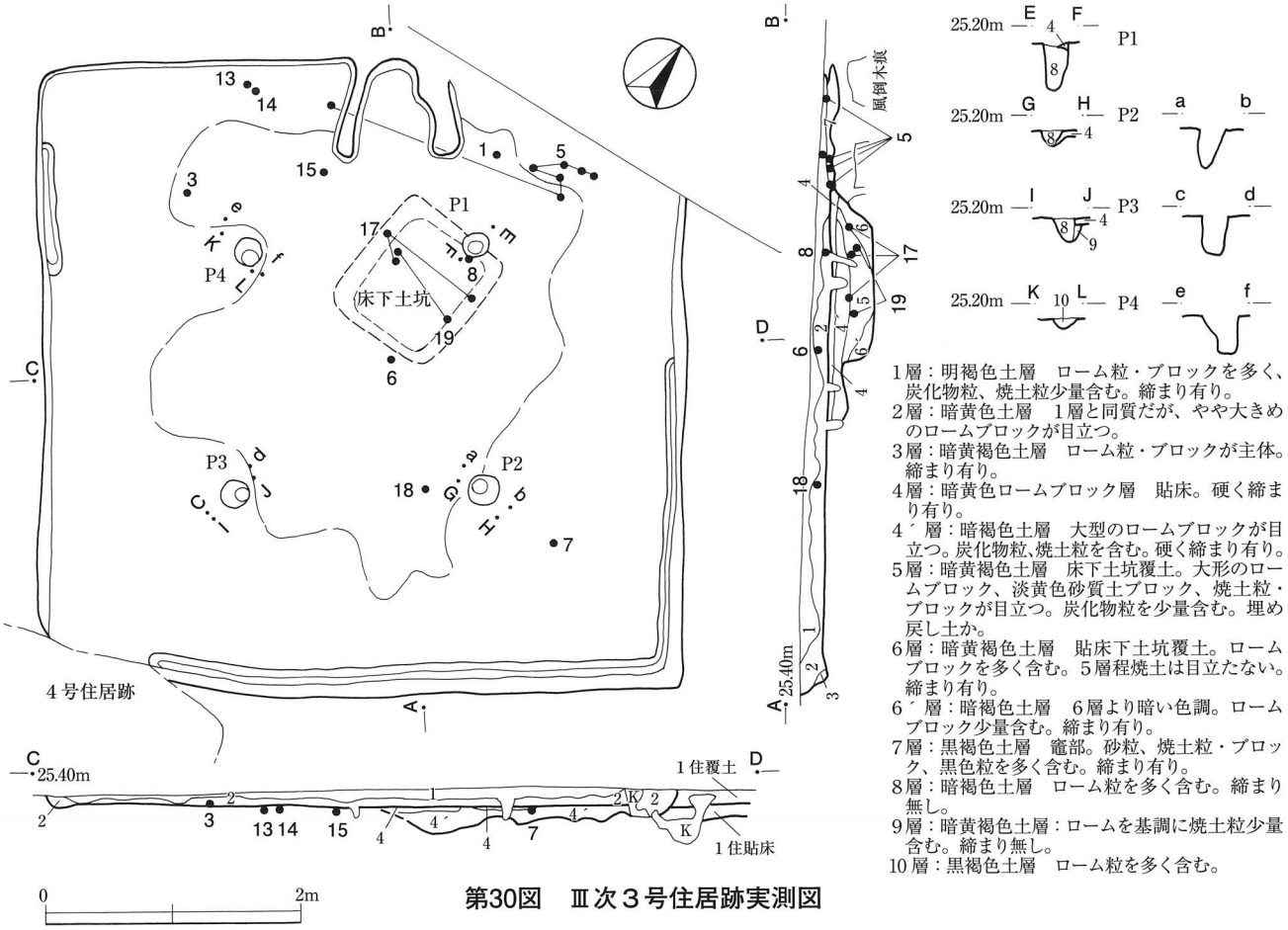
第3号住居跡（第30, 31図）

検出状況　調査区の東部に位置する。南隅が第4号住居跡に壊され、東部が第1号住居跡を壊してつくられている。西隅は第21号住居跡に接し、北隅の壁は遺存していない。また、貼床下からは土坑が1基検出された。

規模・形態　平面は一辺5.15mの方形を呈し、壁の高さ20cmを測る。竈を通る主軸方向は北－37°－西である。北西壁中央に竈を有し、袖部が残されていた。ピットは方形に並ぶ4基（P1～4）が検出され、柱穴と思われる。床面は、柱穴に囲まれた部分から竈にかけて硬化していた。また、北東壁から南東壁にかけてと、南西壁の一部に周溝が巡る。竈手前の床面下からは、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ35cmの方形の土坑が検出されたが、その上部には、ロームブロックを基調とする貼床（4，4′層）が施されていた。この土坑は、その軸方向や位置から、第1号住居跡の貯蔵穴の可能性がある。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的に壁際と床面上は2層とした暗褐色土層が覆い、その上位には明褐色土層の1層が堆積していた。床面直上から、1, 2, 5の古墳時代土師器と7の球状土錘、11の砥石、15の滑石製剥片が出土し、10の球状土錘は貼床土から、16, 17, 19の土師器は床下土坑からの出土である。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　1～5, 18は土師器で、1, 2は杯形、3は高杯形の脚部、4, 5は甕形、18が鉢形の土器で、5の胴部には磨きが施され、18の底部以下には脚部が続くかもしれない。6はミニチュア土器、7～10は球状土錘。11は砥石で、表面と側面が砥面となっている。



第30図　Ⅲ次３号住居跡実測図

12は両極打法によって分割されたチャート製の円礫。13～15は滑石製品で、13は板状の勾玉、14は双孔円板、15は打面と背面に礫面を残す剥片である。16, 17, 19は床下土坑内出土の土師器。16が高杯形の杯部、17が同脚部で、同一個体と思われる。19は杯形土器。

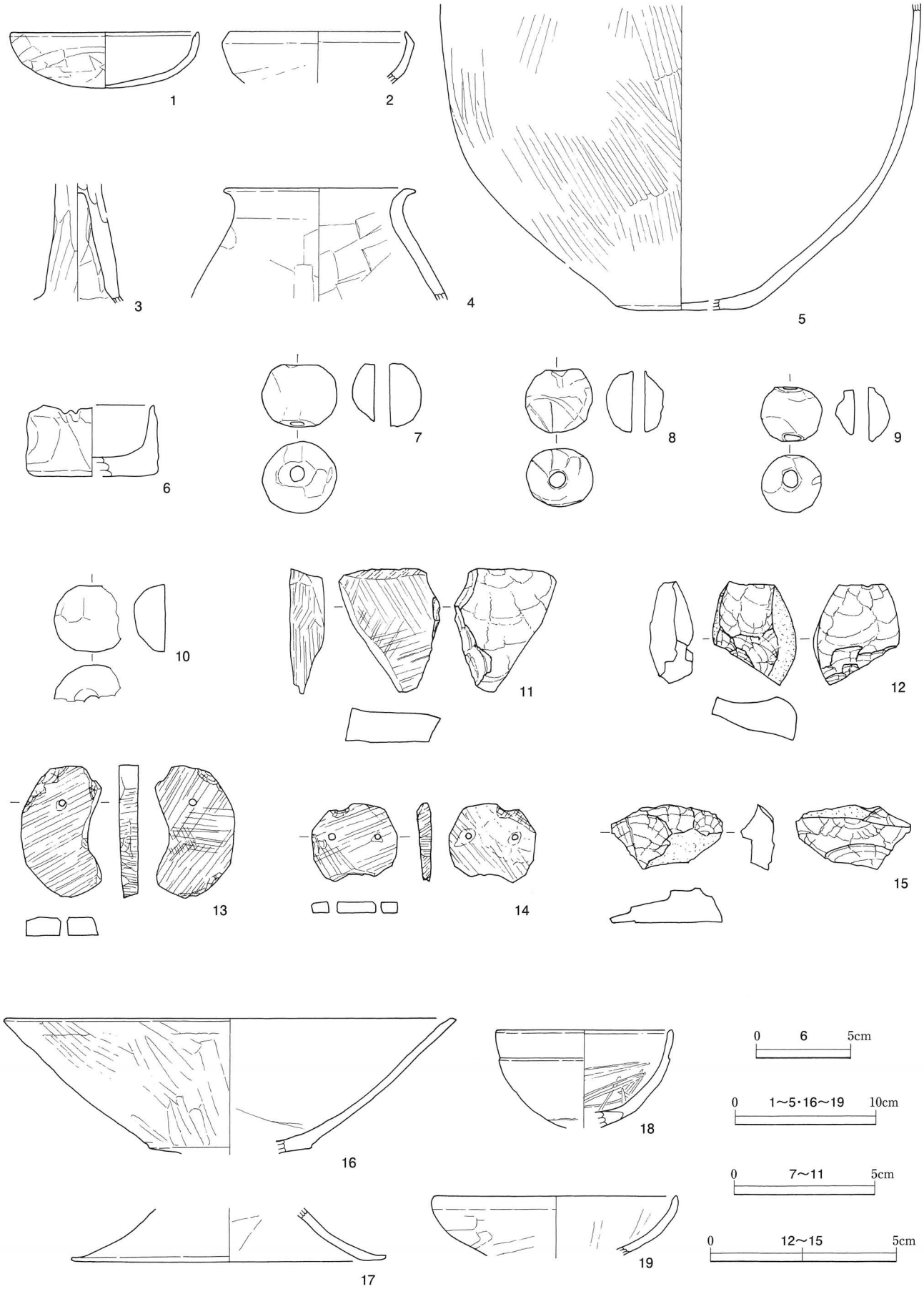
第４号住居跡（第32～34図）

検出状況　調査区の東部に位置する。北壁東部が第３号住居跡を壊し、北西隅が第21号住居跡に接する。

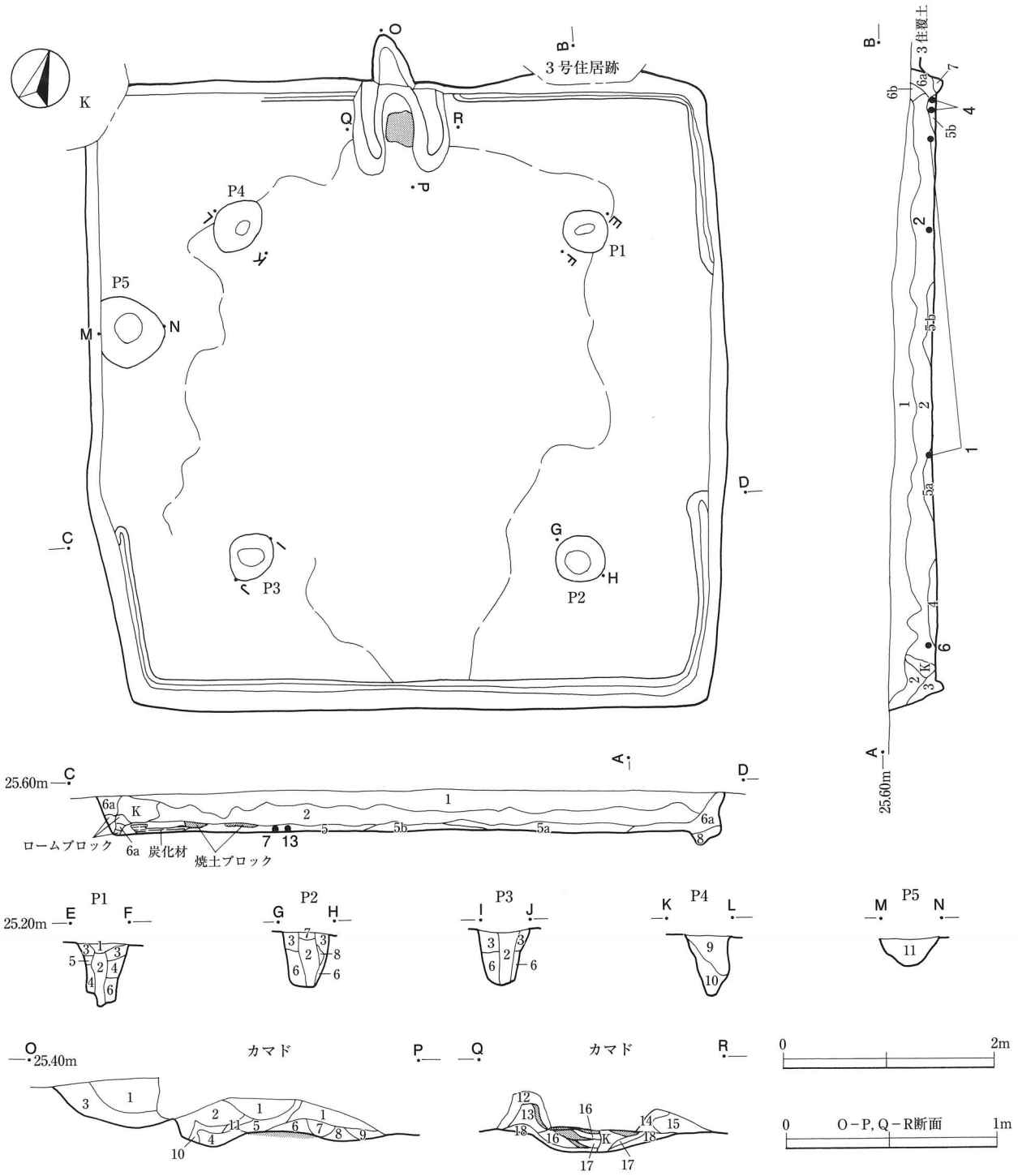
規模・形態　一辺6.2ｍの方形を呈し、壁の高さは南壁で45cmを測る。竈を通る主軸方向は北－18°－西である。北壁中央に竈を有し、袖部と火床面、それに壁より突出する煙道部の掘り方が残されていた。竈の火床面と袖部の下には皿状の掘り方が存在したが、その底面上には明褐色土層（18層）が堆積し、その上位には、２枚の被熱赤化層とロームを基調とする土層（16, 17層）が互層になっていた。このことから火床面は３回つくり直されているらしい。ピットは５基検出されており、うち深さ55～60cmで方形に並ぶＰ１～４が主柱穴と思われる。また、西壁際に深さ27cmのＰ５が存在する。四隅の床面では貼床が施されており、床面は柱穴に囲まれた部分から竈にかけて硬化していた。また、南部と北東部の壁に沿って周溝が巡る。住居跡は地山のローム層を掘り込んでつくられており、主柱穴のＰ１～４の底部付近は、白色粘土層に達していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　床面上には、燃焼現象を示す炭化物や焼土を多く含む暗褐色土層（５層）が堆積し、南西部を中心に炭化材や焼土ブロック（５ａ，５ｂ層）が散在する。また、中央部には炭化材の小片が集中した部分が認められた。５層上には下位から２層とした暗茶褐色土層と１層とした暗褐色土層が、住居跡全域を覆って堆積する。ピットではＰ１～３で柱痕部が確認され、全てのピット底面で、柱のあたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。床面直上からは、1の須恵器と4, 6, 7の土師器、10, 13の球状土錘、19の滑石製素材が出土し、2の灰釉陶器がＰ１覆土上面から検出された。

出土遺物　1は底面が回転篦削りで整形された須恵器杯。2は内面施釉の灰釉陶器。3～18は土師器で、3は杯形、4～7は甕形の土器で、7の胴下半部には磨き



第31図　Ⅲ次３号住居跡出土遺物

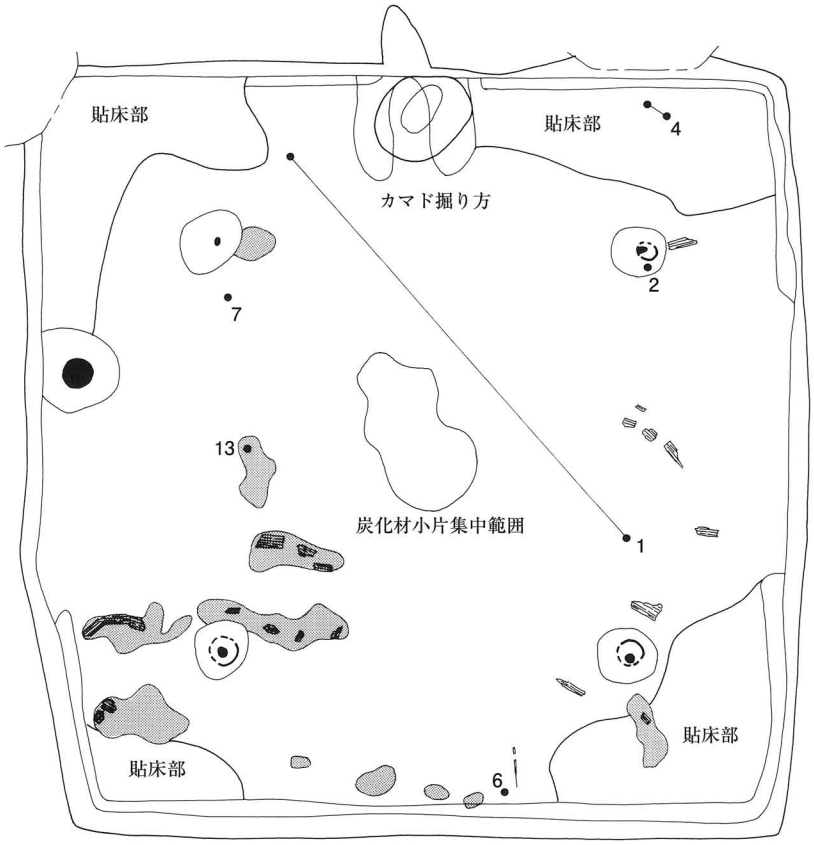


住居跡覆土　1層：明褐色土層　ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。耕作の影響有り。
2層：暗茶褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。
3層：明褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒を少量含む。締まり有り。　4層：明褐色土層　3層に近似するが、焼土粒がやや目立つ。締まり有り。
5層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、炭化物粒・材、焼土粒・ブロックを多く含む。締まり有り。焼土主体を5a層、炭化材主体を5b層とした。
6a層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。　6b層：暗褐色土層　6a層と同質であるが、ローム粒を多く含み、明るい色調。
7層：明褐色土層　ローム粒を多く含む。締まり有り。

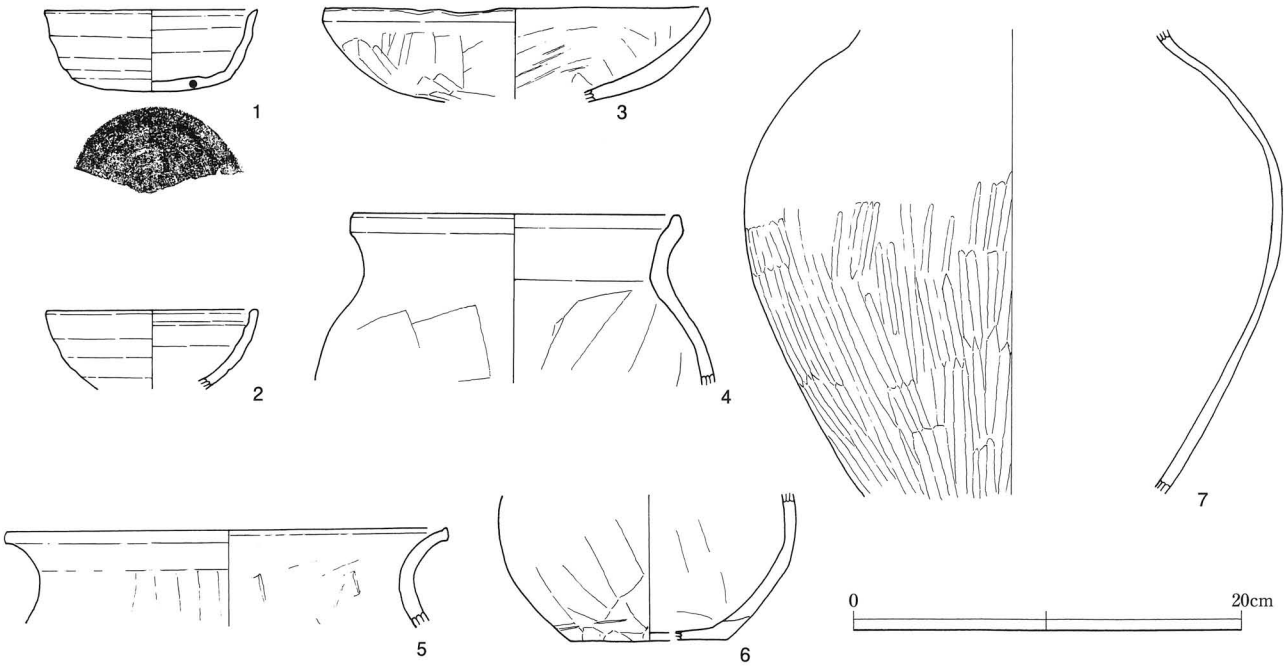
ピット覆土
1層：暗黄褐色土層　ローム粒を多く、炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く締まる。　2層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、白色粘土ブロックを少量含む。締まり無し。
3層：黄褐色ローム質土層　ロームを基調に白色粘土ブロックを少量含む。硬く締まる。　4層：暗褐色粘質土層　白色粘土ブロックをまばらに含む。硬く締まる。
5層：暗褐色粘質土層　白色粘土ブロックを多く含む。4層に近似。　6層：暗褐色粘質土層　白色粘土ブロック主体。粘性有り。
7層：暗褐色土層　2層と同質だが、焼土粒が多い。締まり有り。8層：暗褐色土層　2層土を基調にローム・白色粘土ブロックを含む。締まり有り。
9層：暗茶褐色土層　大形のローム・白色粘土ブロック、炭化物粒・焼土粒を含む。締まり有り。　10層：白色粘土層　褐色土（9層土）を斑状に少量含む。締まり無し。
11層：暗茶褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を含む。締まり有り。

第32図　Ⅲ次4号住居跡実測図

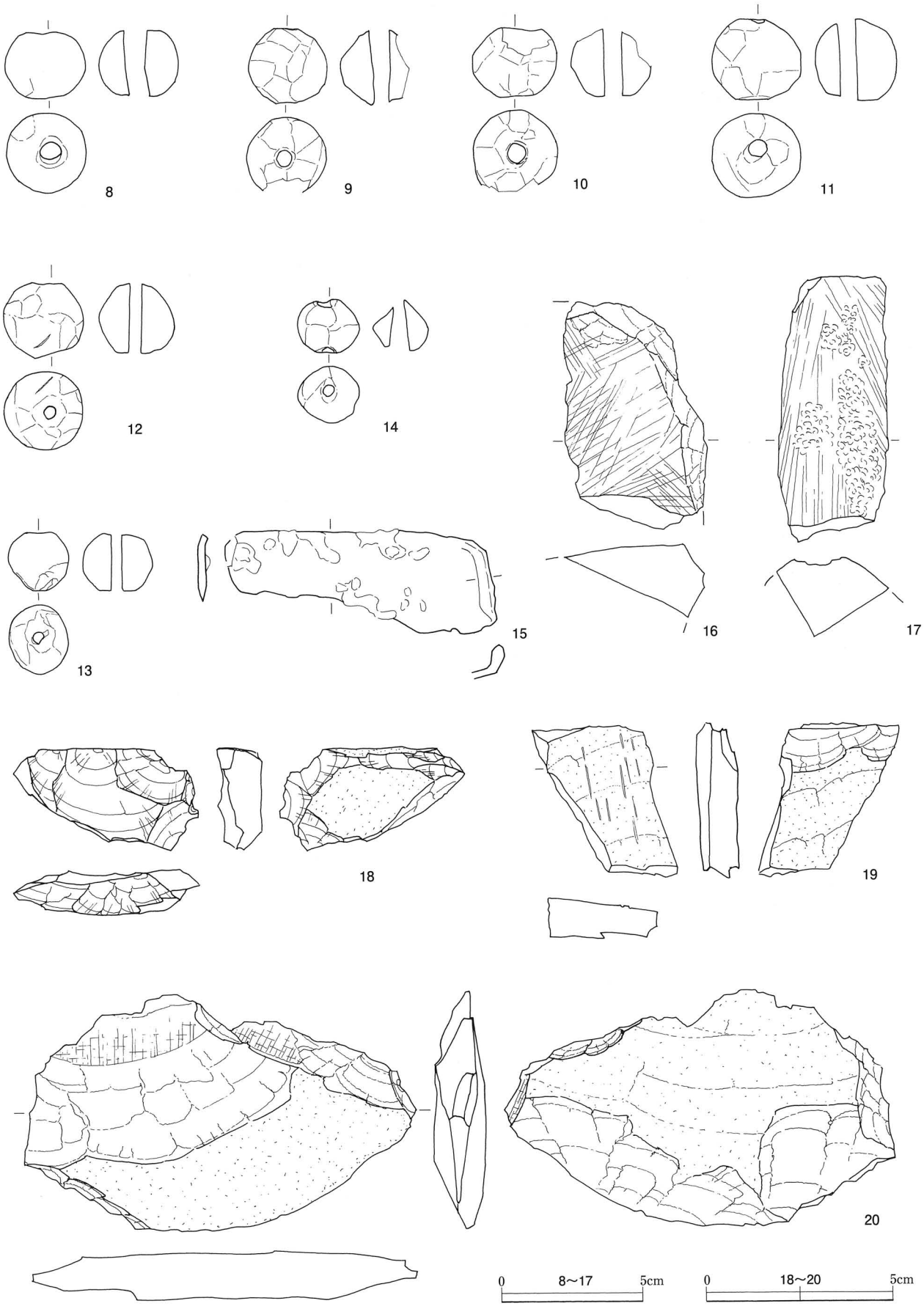
カマド覆土
1層：暗黄褐色土層　ロームを基調に、ロームブロックを多く含み、砂粒を含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗灰褐色砂質土層　砂を多く含む。ローム粒を少量、炭化物粒、焼土粒をやや多く含む。締まり有り。
3層：暗黄褐色土層　1層より黒味強い。ロームブロックはやや大きいものが目立ち、焼土粒を少量含む。締まり有り。
4層：暗黄褐色土層　ロームを基調とする。地山ローム層よりやや褐色を呈する。
5層：黒褐色土層　炭化物粒、焼土粒を多く含み、砂粒を含む。締まり有り。
6層：暗茶褐色土層　焼土粒を多く、焼土粒、砂粒を少量含む。締まり有り。
7層：暗灰褐色土層　焼土粒を少量含む。締まりやや無し。灰層か。
8層：暗黄褐色土層　ロームを基調とする。4層に近似。
9層：黒褐色土層　炭化物粒を多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。
10・11層：地山ロームが攪乱をうけたものと思われる。
12層：暗褐色砂質土層　炭化物粒、焼土粒を多く含む。
13層：明褐色砂質土層　竈袖部。
14層：黒褐色砂質土層　炭化物粒を多く含む。
15層：暗褐色砂質土層　焼土粒を多く含む。
16層：ローム主体の土層。
17層：ローム粘土。
18層：暗褐色土層　ローム粒を多く含む。



網点は焼土ブロック、縞線は炭化材
ピット内の太線は、覆土上面で観察された柱痕部
ピット内の黒色部は、柱あたり痕と思われる地山が…変色した部分



第33図　Ⅲ次4号住居跡焼土・炭化材等検出状況及び出土遺物（1）



第34図　Ⅲ次４号住居跡出土遺物（２）

が施されている。8～13は球状土錘で、15は鉄製鎌。16，17は砥石の破片で、17には敲打による整形痕も残る。18はチャート製の石核。19，20は滑石製品で、19は板状の原石を折断したもの。20は剥片状の原石に剝離を加えたもので、剥離面の打点付近に擦れたような削り痕が残る。石核か？

第5号住居跡（第35～37図）

検出状況　調査区の東部に位置する。南東側の約半分が第6号住居跡に壊され、北隅が第20号住居跡に接する。

規模・形態　平面は方形を呈し、北－南方向が4.3 m、壁の高さは8 cmを測る。残存する西壁の方向は北－15°－東である。西壁中央に竈を有し、袖部が残されていた。ピットは残存部で3基（P1～3）検出されており、重複する第6号住居跡内から検出された2基（P4，5）も位置的に本住居跡に属するものと思われる。うち方形に並ぶP1，2，4，5が主柱穴と思われ、長径1.0 m、深さ43cmのP3は貯蔵穴と思われる。また、床面はローム層からなる。

覆土の堆積と遺物の出土状況　遺構内には明褐色土層が堆積する。床面直上からは1, 3, 6の古墳時代土師器と、9の滑石原石が出土し、P1内からは7の、P3内からは8の球状土錘が出土している。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　1～6は土師器で、1，2，4が杯形、3が椀形？、5，6が甕形の土器で、6の胴部には磨きが施されている。7，8は球状土錘で、9は板状の滑石原石。

第6号住居跡（第35，36，38図）

検出状況　調査区の東部に位置する。西部が第5号住居跡の床面を、南東部が第6b号住居跡の覆土を壊してつくられている。第6b号住居跡の覆土中に作られた南東壁は、土層観察用のベルト断面では確認できたが、平面的には明確に捉えられなかった。また、南北両隅部は攪乱のため遺存状態が悪い。

規模・形態　平面は北東－南西方向6.8 m、北西－南東方向7.0 mの方形を呈し、壁の高さは20cmを測る。竈を通る主軸方向は北－34°－西である。北西壁中央に壁より突出した形の竈を有し、袖部と掘り方が残されていた。ピットは5基検出されており、うち深さ45～75cmを測り方形に並ぶP1～4が主柱穴と思われる。また、北隅に位置し深さ50cmを測るP5は貯蔵穴と思われる。床面は基本的にローム層からなるが、西隅部や第6b号住居跡との重複部では、ロームブロックを基調とする貼床（3，6，6′層）が施されていた。床面は主柱穴に囲まれた部分から竈にかけて硬化していた。また、平面では確認できなかったが、ベルトの断面では南東壁際に周溝（9層部）が確認されている。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的に床面上を覆って2層とした暗茶褐色土層が堆積する。竈の燃焼部の掘り方内には、15層としたロームブロックを基調とする土が貼られ、その上に14層とした支脚の基部が残されていた。床面直上からは、14，15，17，23の古墳時代土師器、25，26の管状土錘、27の土製紡錘車、30，31の球状土錘が出土し、P5内からは24の支脚と29の球状土錘が出土している。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

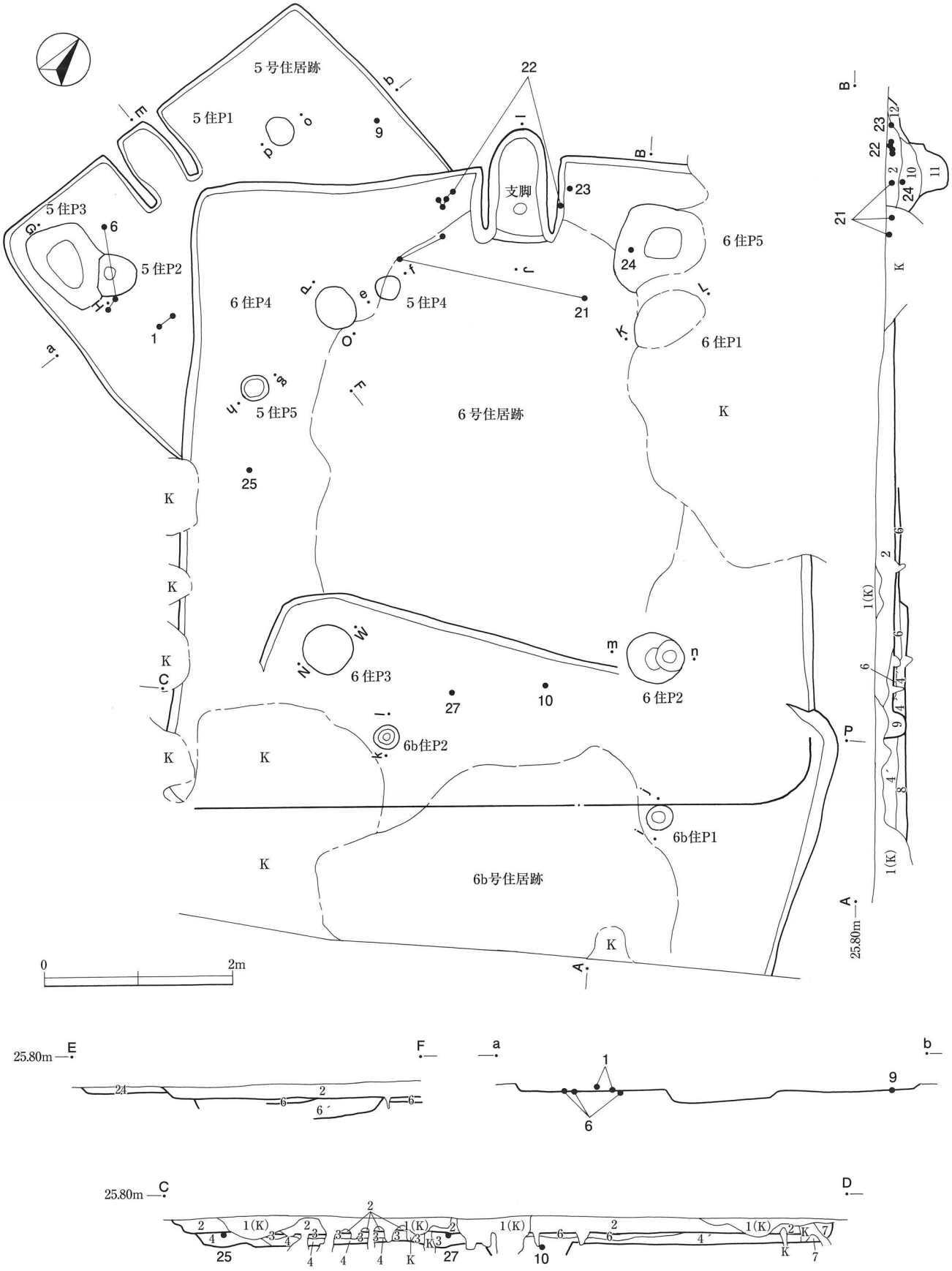
出土遺物　13～23は土師器で、13～18は杯形、19は鉢形、20～23は甕形の土器で、22の胴部には磨きが施されている。24は支脚の上半部。25，26は管状の、7～10は球状の土錘。32は板状の砥石で表裏面と側面が砥面となっている。33は小型の滑石原石で一部剥離痕が残る。

第6b号住居跡（第35～37図）

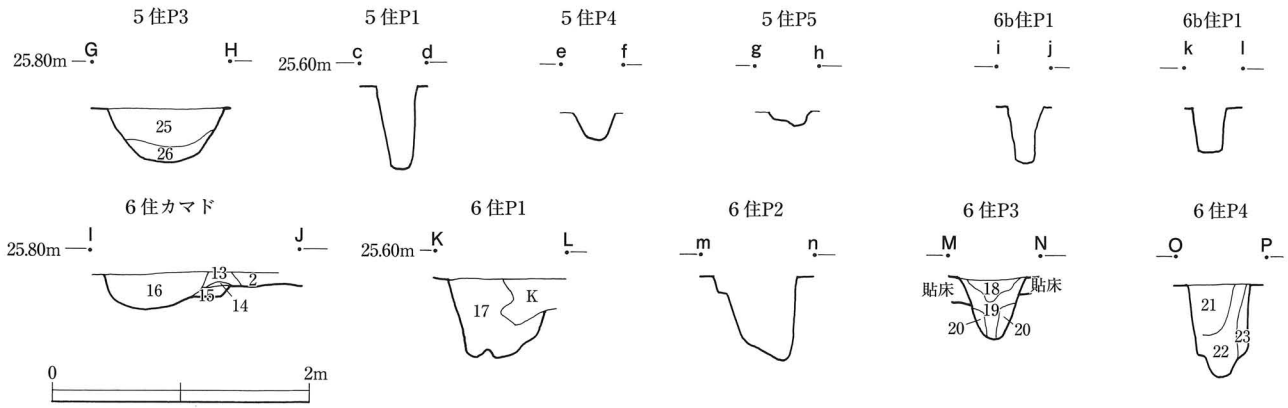
検出状況　調査区の東部に位置する。北西部の覆土が第6号住居跡に壊されているが、床面や壁の下部は残存する。南東半分は調査区外に伸びる形だが攪乱が著しい。

規模・形態　平面は東－西方向6.25 mの方形を呈し、壁の高さは30cmを測る。北壁の方向は北－70°－東である。ピットは柱穴と思われる深さ35～45cmのP1，2が検出された。ローム層からなる床面は、柱穴に囲まれた範囲が硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物　4，4′，7，8層とした土層群が、当住居の覆土に相当する。第6号住居跡との重複部では、第6号住居跡の貼床である3層が直接床面上に堆積する部分も認められたが、その他では基本的に4，



第35図　Ⅲ次５、６、6b号住居跡実測図（１）



1層：黒褐色土層　耕作土及び藤根の攪乱層。　2層：暗茶褐色土層　ローム粒・ブロック、焼土粒を多く含む。締まり有り。
3層：暗褐色土層　貼床。ロームブロックを多く含み、白色粘土ブロックを混じえる。焼土粒を少量含む。硬く締まり有り。
3´層：暗褐色土層　3層と同質だが、ロームブロックが水平に堆積する。　4層：暗黄褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を含む。締まり有り。
4´層：暗黄褐色土層　ロームを基調に、ロームブロックを多く含む。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
5層：暗黄褐色土層　ロームブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を含む。硬く締まり有り。6層：暗黄褐色土層　貼床。ロームブロックを基調とする。硬く締まり有り。
6´層：明褐色土層　貼床。6層と近似するが、褐色土が斑状に混じる。　7層：暗茶褐色土層　ローム粒を多く含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
8層：暗茶褐色土層　7層に近似するが、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。　9層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
10層：暗褐色土層　ロームブロックをまばらに含み、砂っぽい黒化した部分のある焼土を少量含む。締まり無し。
11層：暗褐色土層　10層と同質だが、焼土が目立たず、ローム粒が多く明るい色調。締まり有り。
12層：暗黄褐色土層　ロームを基調に、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。
13層：茶褐色土層　ローム粒・ブロックを少量、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
14層：茶褐色土層　焼土ブロックが目立つ。締まり有り。支脚痕。15層：暗黄褐色土層　ロームブロックを基調に焼土粒が少量混じる。硬く締まり有り。
16層：暗褐色土層　砂粒を多く含み、ローム粒・ブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
17層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり無し。　18層：明褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。
19層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを少量含む。締まり有り。　20層：暗黄褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。21層：暗褐色土層　17層と同質。
22層：暗褐色土層　ロームブロックが目立ち、白色粘土ブロックを少量含む。締まり無し。23層：白色粘土ブロック。
24層：明褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。
25層：暗褐色土層　ローム粒を多く、ロームブロックをまばらに含む。炭化物粒、焼土粒、白色粘土ブロックを僅かに含む。締まり有り。
26層：暗黄褐色土層　ローム粒を多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。

第36図　Ⅲ次5，6，6b号住居跡実測図（2）

4´層とした暗黄褐色土層が床面を覆っていた。床面直上からは**10**の滑石製剥片が出土している。覆土中から出土した**11**の土師器杯形土器をもって、本遺構の時期を古墳時代と捉える。**12**は周縁に剥離による調整が施された板状の剥片で、片面に研磨痕が残る。砥石か？

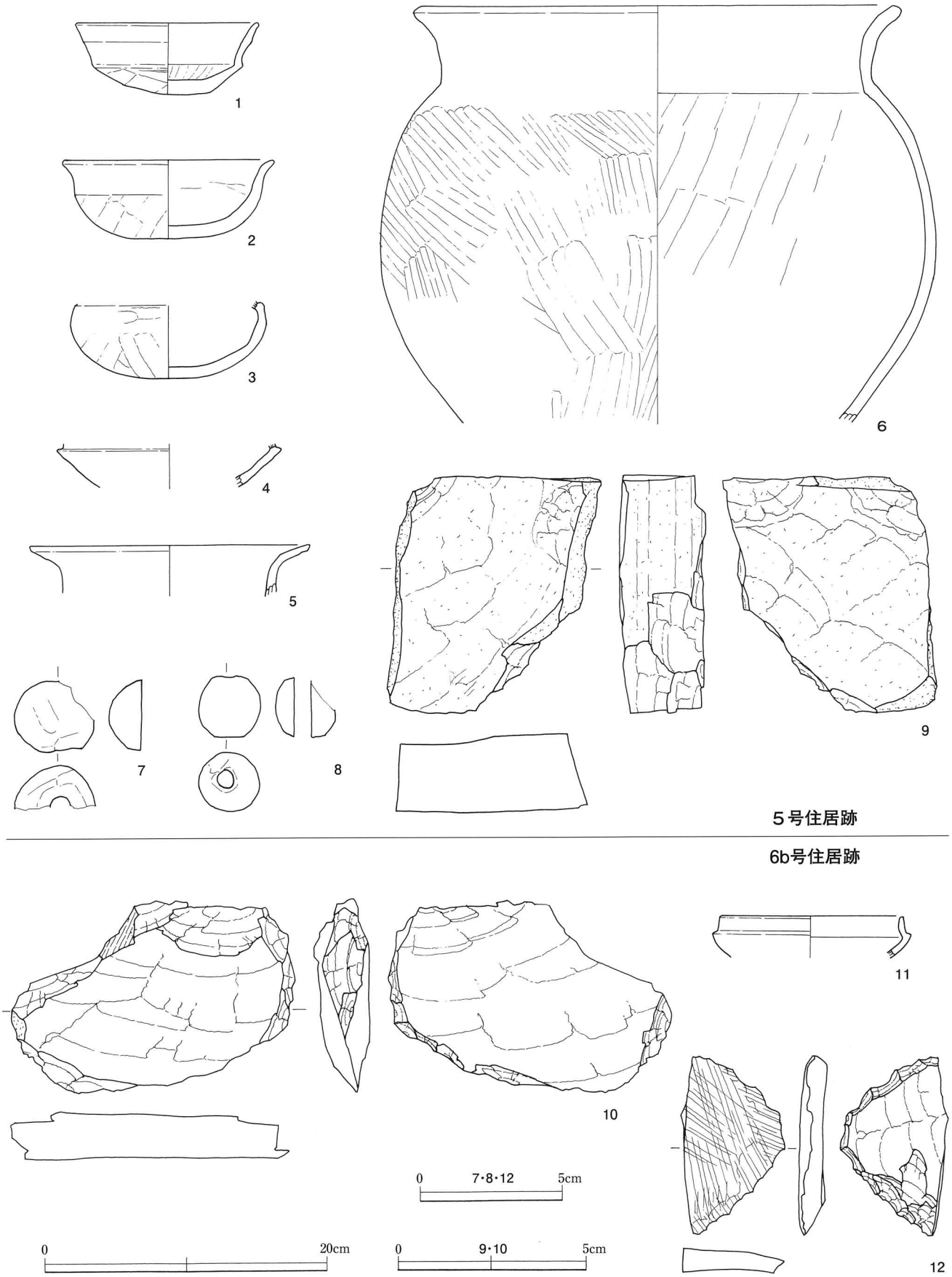
第7号住居跡（第39～42図）

検出状況　調査区の中央北部に位置する。第7b号住居跡によって中央部の床面が、第22b号住居跡によって、南西隅の壁と床面が壊されている。北東部は遺存しない。

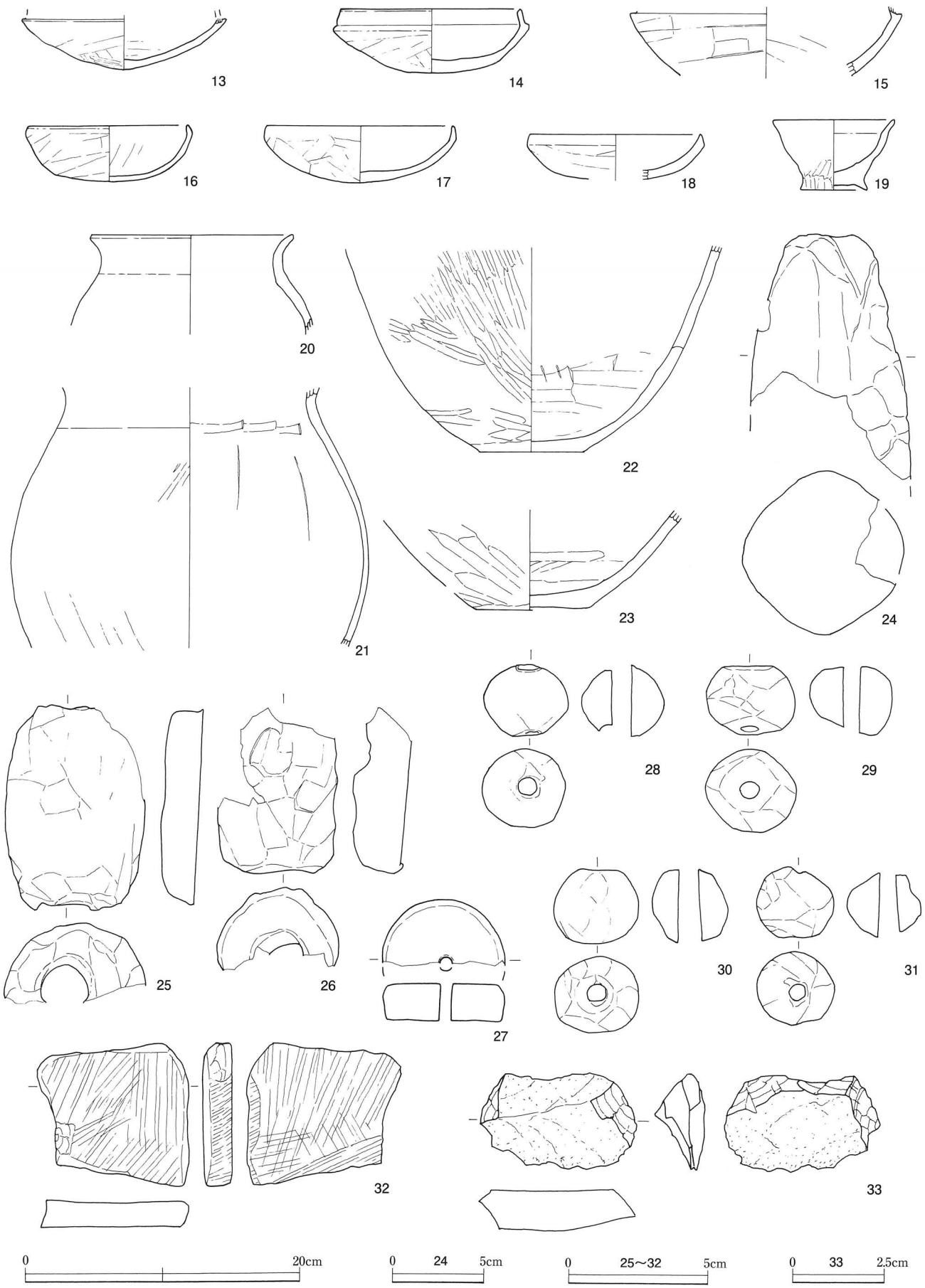
規模・形態　残存する南東隅は角をなし、壁の高さは18cmを測る。遺存する東壁の方向は北－17°－西である。ピットは6基検出されており、そのうち方形に並ぶP1，3～5が主柱穴と思われる。P2も柱穴状のもので、南西隅にあたる位置に存在し、一辺95cm、深さ20cm程の方形のP6は貯蔵穴に相当しよう。なお、P4は第7b号住居跡の貼床下から、P6は第22b号住居跡の覆土下から検出されている。ローム層からなる残存する床面のうち、主柱穴に囲まれた部分は硬化していた。また、南壁際の床面は、ローム粒・ブロックを多く含む土（10層）によって貼床されていた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的に床面上には9層とした明褐色土層が堆積する。P3では柱痕部が観察され、P1～5の底面には、柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。南壁東部の壁際床面には、長径105cm、深さ14cmの掘り方が存在し貼床が施されていたが、そこを中心に滑石製模造品や、その製作のために生じたと思われる滑石の剥片・砕片類が集中して多量に検出された。その中でも特に集中する箇所を「滑石集中区」としている。滑石製品の出土層位は覆土、床面直上から貼床中に及び、覆土から床面直上からは、勾玉1点、双孔円板32点、臼玉84点が、貼床中からは、双孔円板4点、臼玉14点が出土した。他に、床面直上から**7**の、滑石集中区から**3**の、P5覆土から**2**の、P6覆土から**6**の、貼床中から**5**の古墳時代土師器が出土しており、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　**1**～**7**は土師器。**1**は高杯形の杯部、**2**～**5**は杯形、**6**，**7**は甕形の土器で、**7**には刷毛目整形がみられる。**8**は球状土錘。**9**～**79**は滑石製遺物。**9**は小型



第37図　Ⅲ次5，6b号住居跡出土遺物



第38図　Ⅲ次６号住居跡出土遺物

の原石に剥離が加えられた石核状の素材。**10～15**は剥片で、**10～14**には折断面がみられ、**15**の側面は研磨されている。また、**12**の折断面の打点付近には擦れたような削り痕が残る。**16**は板状の勾玉で、**17～44**は臼玉。**45～79**は双孔円板であるが、孔間距離を0.5mm単位で計測したところ、第41図の左上の棒グラフに示したように、7つのまとまりが認められた。一方、孔間距離と円板の幅との関係をみると、必ずしも相関関係は確認できない。また、孔が穿孔時のずれによって、正円ではなく楕円形や達磨状になっているものが存在する。以上のことを考え合わせると、円板を重ねて穿孔した状況も想定される。いずれにせよ、孔間距離が近似するものは、一連の作業の中で製作されたものといえよう。なお、本住居跡出土の双孔円板は、他の住居跡出土のものに比べると、幅に対して孔間距離が小さい傾向がある。孔間距離は**45**が0.75cm、**46～48**が0.9cm、**49～54**が1.05～1.1cm、**55～64**が1.2～1.25cm、**65～72**が1.35～1.45cm、**73～77**が1.65～1.7cm、**78, 79**が1.85～1.9cmである。

第7b号住居跡（第39, 43図）

検出状況　調査区の中央北部に位置する。第7号住居跡にすっぽり収まる形で、同住居跡の床面を壊してつくられている。北部と西壁は確認できていない。

規模・形態　残存していた南壁は4m弱で、方向は北－78°－東である。平面は隅丸の方形を呈するらしく、南壁の高さは18cmを測る。ピットは検出されておらず、南壁に沿って周溝がみられる。床面は暗黄色系の4，6，6′層土と暗褐色系の7層土によって貼床が施され、南壁から北へ向けて帯状に硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　床面上には5層とした暗灰色の薄層がみられ、それを覆って1層とした暗褐色土層が堆積する。床面直上からは**80, 81, 84**の須恵器と、**86**の土師器、**90**の紡錘車が、貼床中からは**83**の須恵器と**87, 88**の土師器が出土している。また、**92**の滑石製円板は竈内から検出された。須恵器の出土状況から、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物　**80～85**は須恵器で、**80～82**は杯、**83**は高台付杯、**84**は高台付盤、**85**は甕もしくは甑である。**86～88**は土師器甕形土器で、胴部破片の**88**には磨きが施されている。**89**は球状土錘、**89**は土製紡錘車、**91**は砥石の破片である。**92**は滑石模造品の単孔円板。

第8号住居跡（第44図）

検出状況　調査区の中央北部に位置し、ローム層を掘り込んでつくられている。北側の大半は遺存していない。

規模・形態　残存する南東壁は6.65m弱で、方向は北－60°－東である。平面は方形を呈するらしく、南壁の高さは12cmを測る。ピットは柱状のものが3基検出されており、うち深さ11～14cmのP1，2が主柱穴と思われる。南壁に沿って周溝が巡るが、東西隅では大型のロームブロックが目立つ貼床の掘り方と一体になっている。

覆土の堆積と遺物の出土状況　床面上にロームを基調とする1，2層が堆積するが、2層上には焼土粒を多量に含む部分（3層）が存在する。遺物はいずれも覆土あるいは撹乱から出土した。覆土中出土の**1**の須恵器破片から、本遺構の時期を奈良・平安時代と捉える。

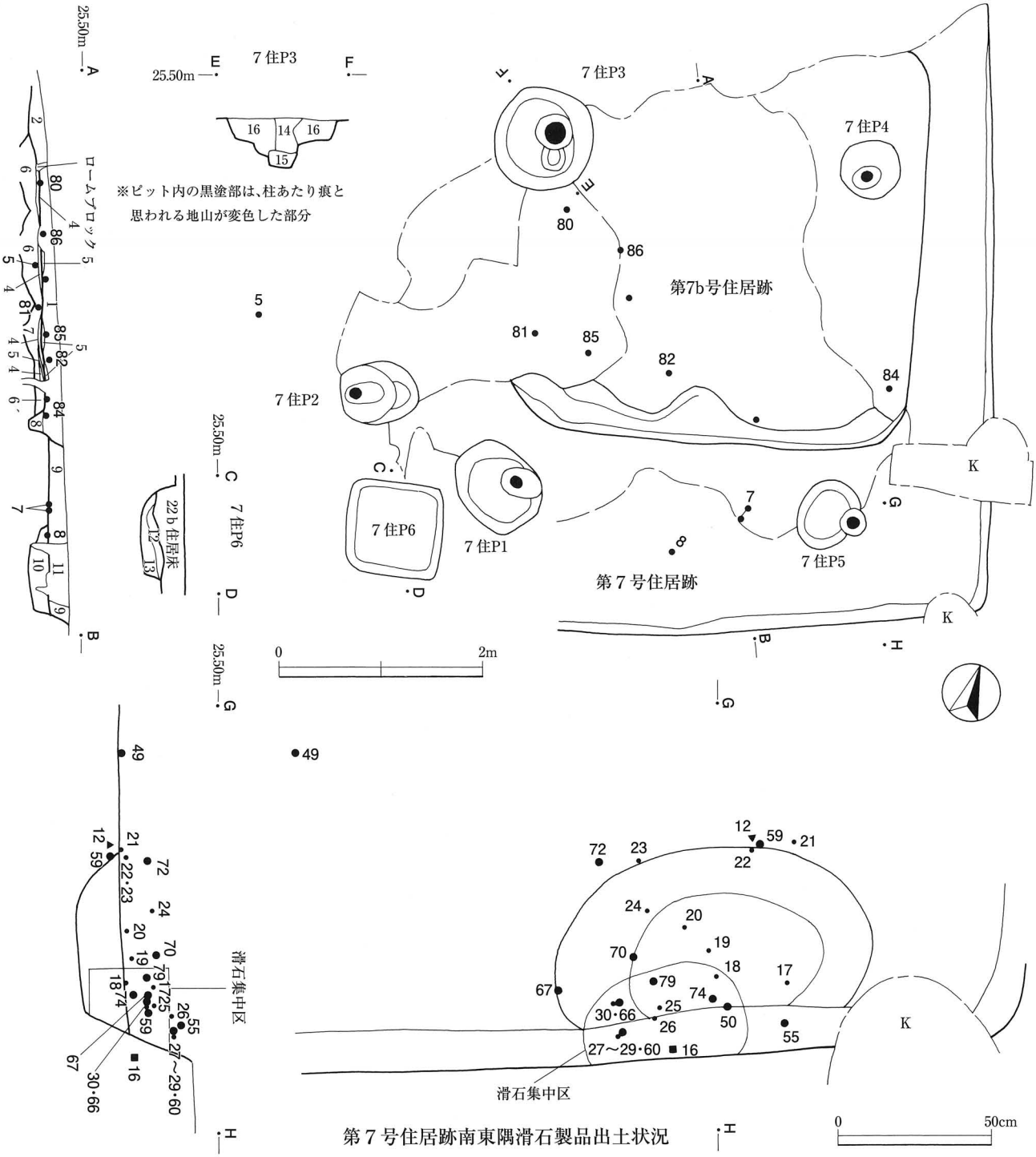
出土遺物　**1**は底面回転篦削りの須恵器杯で、**2, 3**は球状土錘。**4**は滑石製の無孔円板もしくは有孔円板の未成品。

第9号住居跡（第45, 46図）

検出状況　調査区の中央北部に位置する。西部を第9b号、第22b号住居跡に壊され、残存する西壁は第22c号住居跡を壊してつくられている。また、北東隅は第7号住居跡と接する。

規模・形態　平面は北－南方向6.0m、東－西方向5.9mのやや隅丸の方形を基本とするが、北壁の竈より西側は、東側よりかなり張り出す。壁の高さは23cmを測る。竈を通る主軸方向は北－14°－西である。北壁中央につくられた竈には袖部が残されていた。ピットは6基検出されており、うち方形に並ぶ深さ25～57cmのP1～3が主柱穴と思われる。床面はロームを基調とする暗黄褐色土によって全面貼床が施されており、主柱穴に囲まれた範囲が硬化していた。東側半分の壁に沿って周溝が巡る。

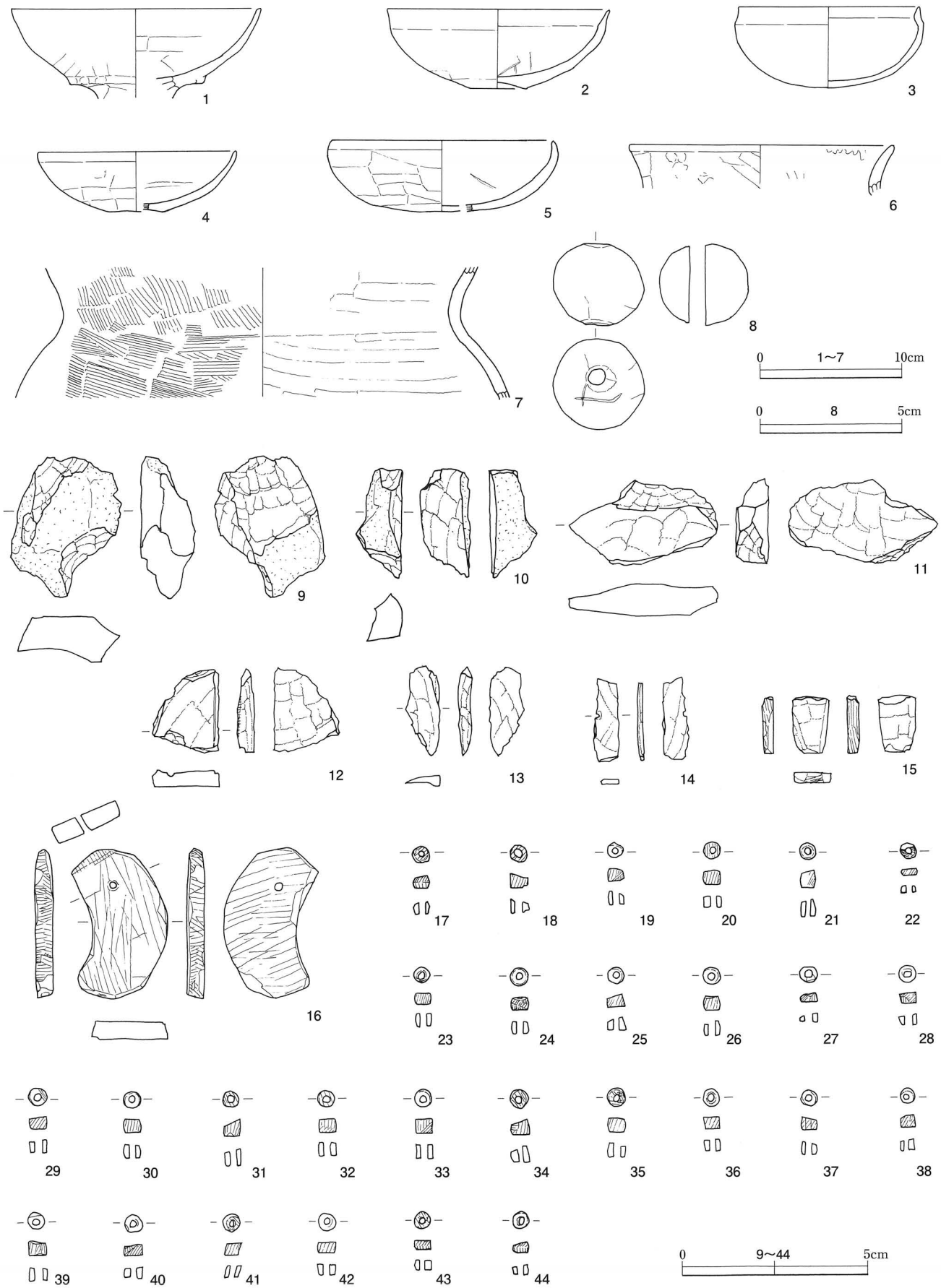
覆土の堆積と遺物の出土状況　床面上と壁際には2，3層とした暗褐色土層が堆積し、その上位を1層とした



第7号住居跡南東隅滑石製品出土状況

1層：暗褐色土層　7b住覆土。ロームブロックをまばらに含み、炭化物粒、焼土ブロックが目立つ。締まり有り。
2層：暗褐色土層　7b住覆土。1層よりやや黒味が強い。ロームブロックを少量含み、炭化物粒、焼土粒ブロックが目立つ。締まり有り。
4層：暗黄色土層　7b住貼床。ロームブロックと褐色ロームが混じったもの。硬く締まり有り。　5層：暗灰色土層　7b住覆土。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
6層:暗黄褐色土層　7b住貼床。大形のロームブロックが目立つ。焼土粒を僅かに含む。締まり有り。　6´層:暗黄褐色土層　7b住貼床。6層土と同質だが、焼土ブロックが目立つ。
7層：暗褐色土層　7b住貼床。6層土より黒味強い。炭化物粒、焼土粒が目立つ。竈材のような砂と灰白色ブロックを含み、ロームブロックも少量含む。
8層:暗褐色土層　7b住覆土。1層土と同質だが、ローム粒を多く含み、やや明るい色調。　9層:明褐色土層　7住覆土。ローム粒を少量、ロームブロックをまばらに含む。締まり有り。
10層：暗黄褐色土層　7住貼床。ローム粒・ブロックを多く、炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く締まり有り。
11層：明褐色土層　7住覆土。9層土を基調にしたものだが、攪乱を受け層相が乱れている。やや黒っぽい。
12層:暗褐色土層　7住貯蔵穴覆土。ロームブロックを少量含む。硬く締まり有り。　13層:暗黄褐色土層　7住貯蔵穴覆土。大形のロームブロックを斑状に多く含む。締まり有り。
14層：暗褐色土層　7住P3覆土。ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
15層：暗褐色土層　7住P3覆土。14層土より黒味強い。ロームブロックを少量含み、炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。本層下に柱あたり痕有り。
16層：暗褐色土層　7住P3覆土。基調土は1層土に近似し、大形のロームブロックが目立ち、炭化物粒、焼土粒もやや目立つ。硬く締まり有り。
7住4，5P覆土：暗黄褐色土層　ロームブロックを少量含む。底面に柱あたり痕有り。

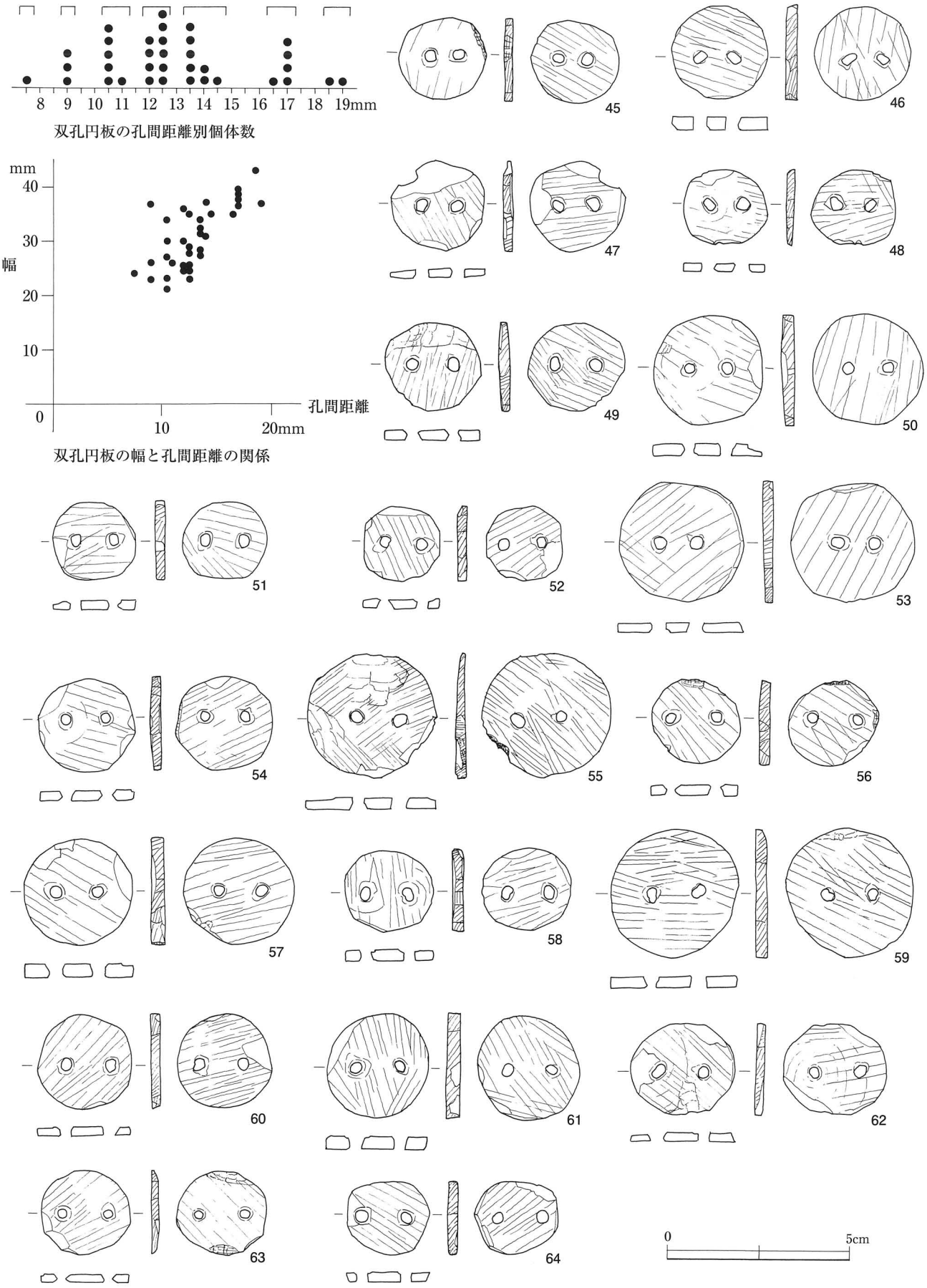
第39号　Ⅲ次第7，7b号住居跡実測図



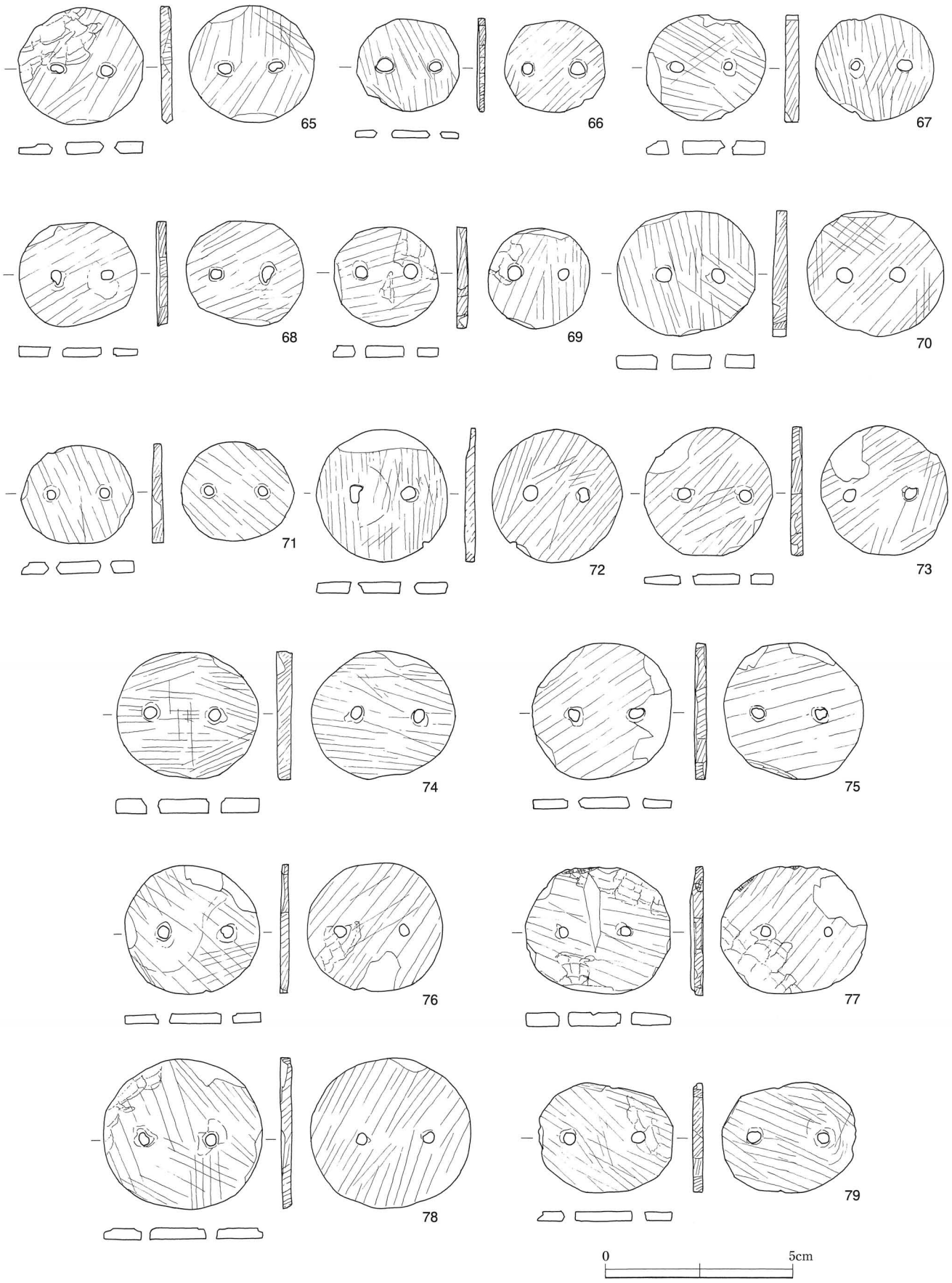
第40図　Ⅲ次７号住居跡出土遺物（１）

双孔円板の孔間距離別個体数

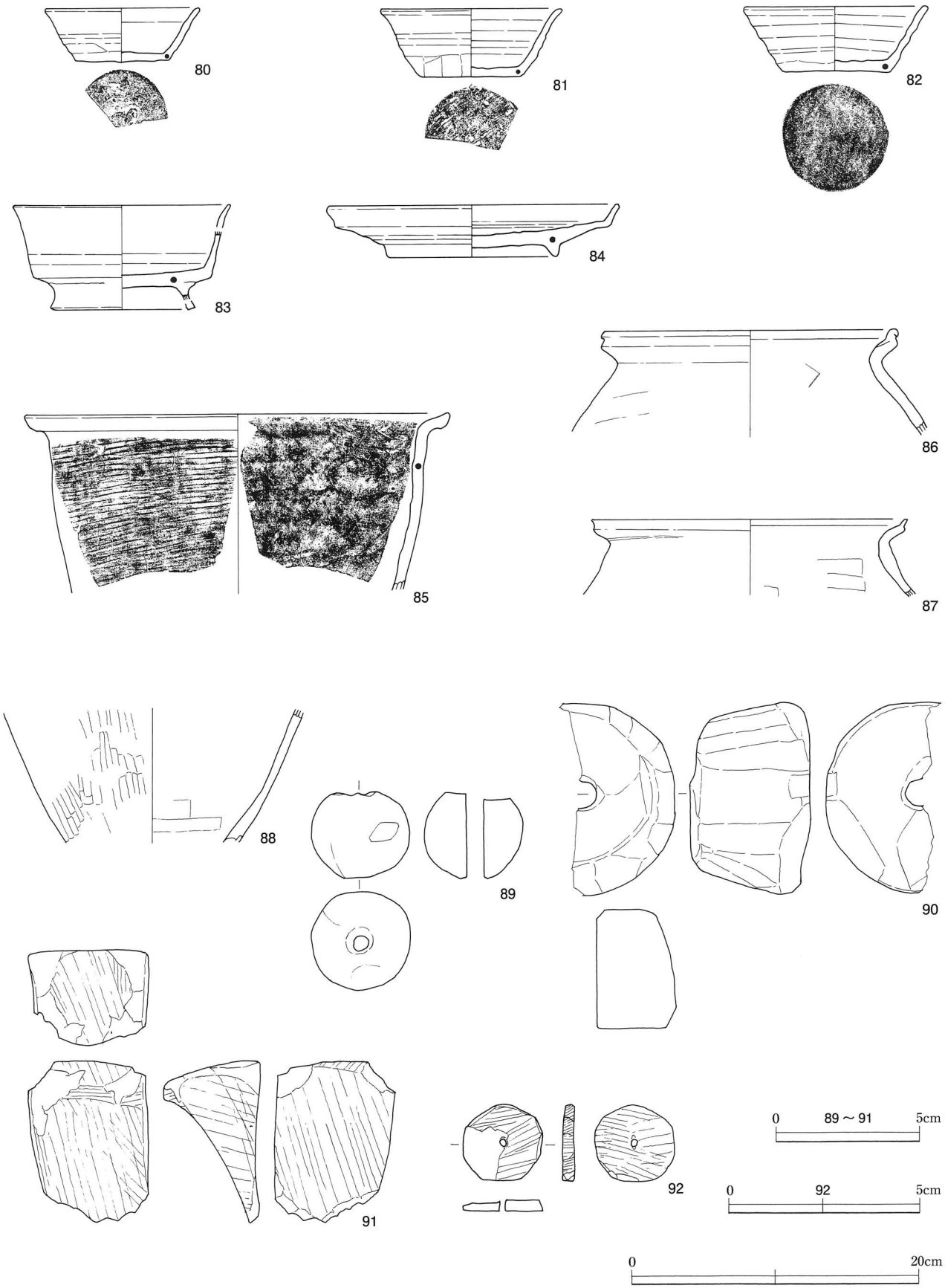
双孔円板の幅と孔間距離の関係



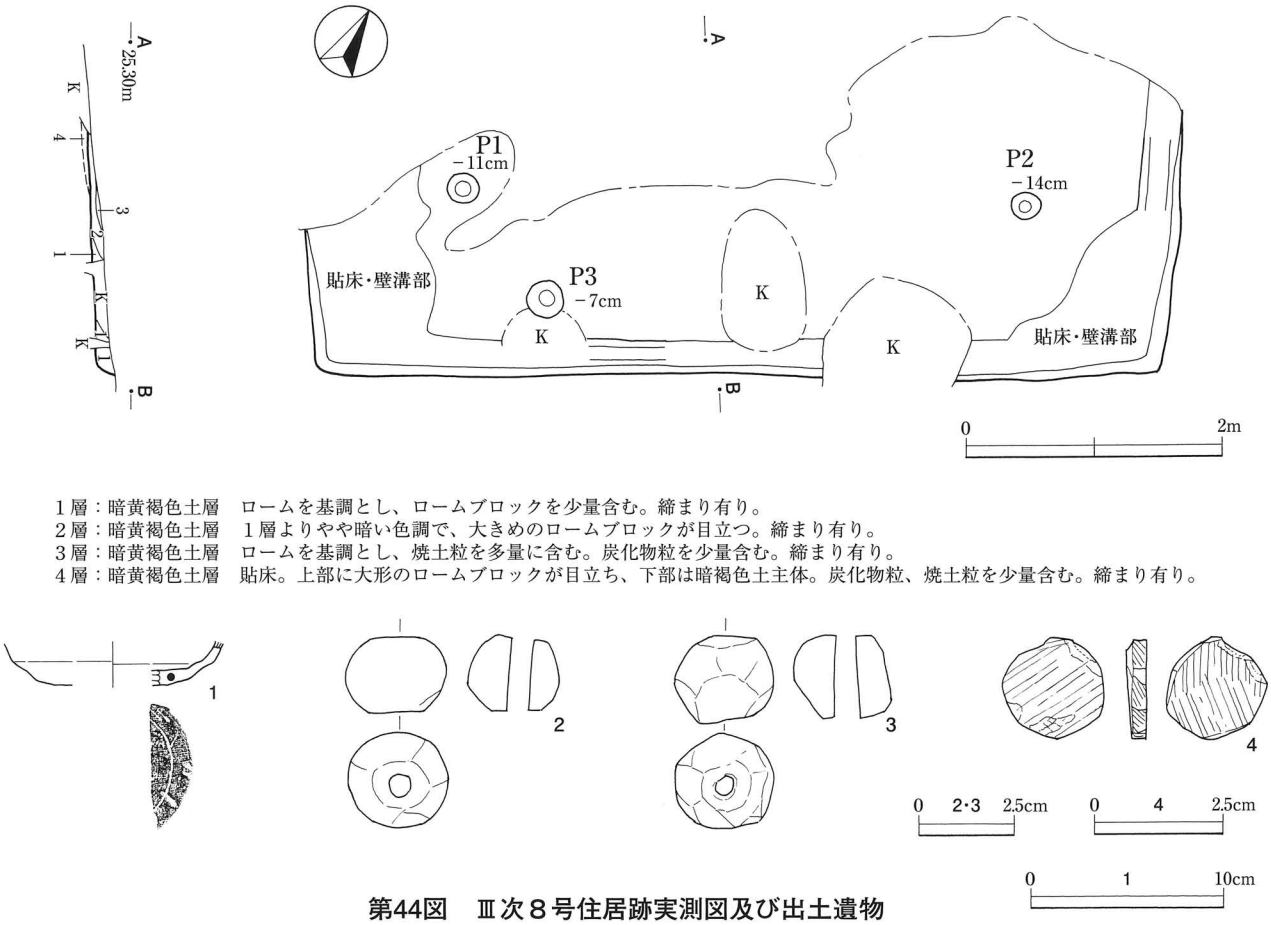
第41図　Ⅲ次７号住居跡出土遺物（２）



第42図　Ⅲ次７号住居跡出土遺物（３）



第43図　Ⅲ次7b号住居跡出土遺物



1層：暗黄褐色土層　ロームを基調とし、ロームブロックを少量含む。締まり有り。
2層：暗黄褐色土層　1層よりやや暗い色調で、大きめのロームブロックが目立つ。締まり有り。
3層：暗黄褐色土層　ロームを基調とし、焼土粒を多量に含む。炭化物粒を少量含む。締まり有り。
4層：暗黄褐色土層　貼床。上部に大形のロームブロックが目立ち、下部は暗褐色土主体。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。

第44図　Ⅲ次８号住居跡実測図及び出土遺物

暗褐色土層が覆う。竈部は４，４′，５層とした暗黄褐色土の貼床の上に、火床面と支脚が設けられている。また、Ｐ１～５の底面には、柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。床面直上からは**2**の土師器と**10**の石器が、Ｐ４からは**6**の球状土錘が出土している。支脚は竈内に設置されていたものの他に、竈東側の床面直上から**4**の支脚が、覆土中から**5**の支脚が出土している。また本住居跡で**9**の銅製丸鞆が表採されている。床面直上から出土した**2**の土師器から、本遺構の時期を奈良・平安時代と捉える。

出土遺物　**1**，**2**は土師器甕形土器で、**3**は須恵器甕の胴部破片。**4**，**5**は土製支脚で、いずれも内部は焼成が弱く脆い。**6**，**7**は球状土錘で、**8**は剣形の滑石模造品。**9**は銅製腰帯具の丸鞆で、裏板と３ヶ所の留具も観察される。**10**は背面が礫面の剥片を素材とし、端部に剥離によって刃部状の調整を施した石器。

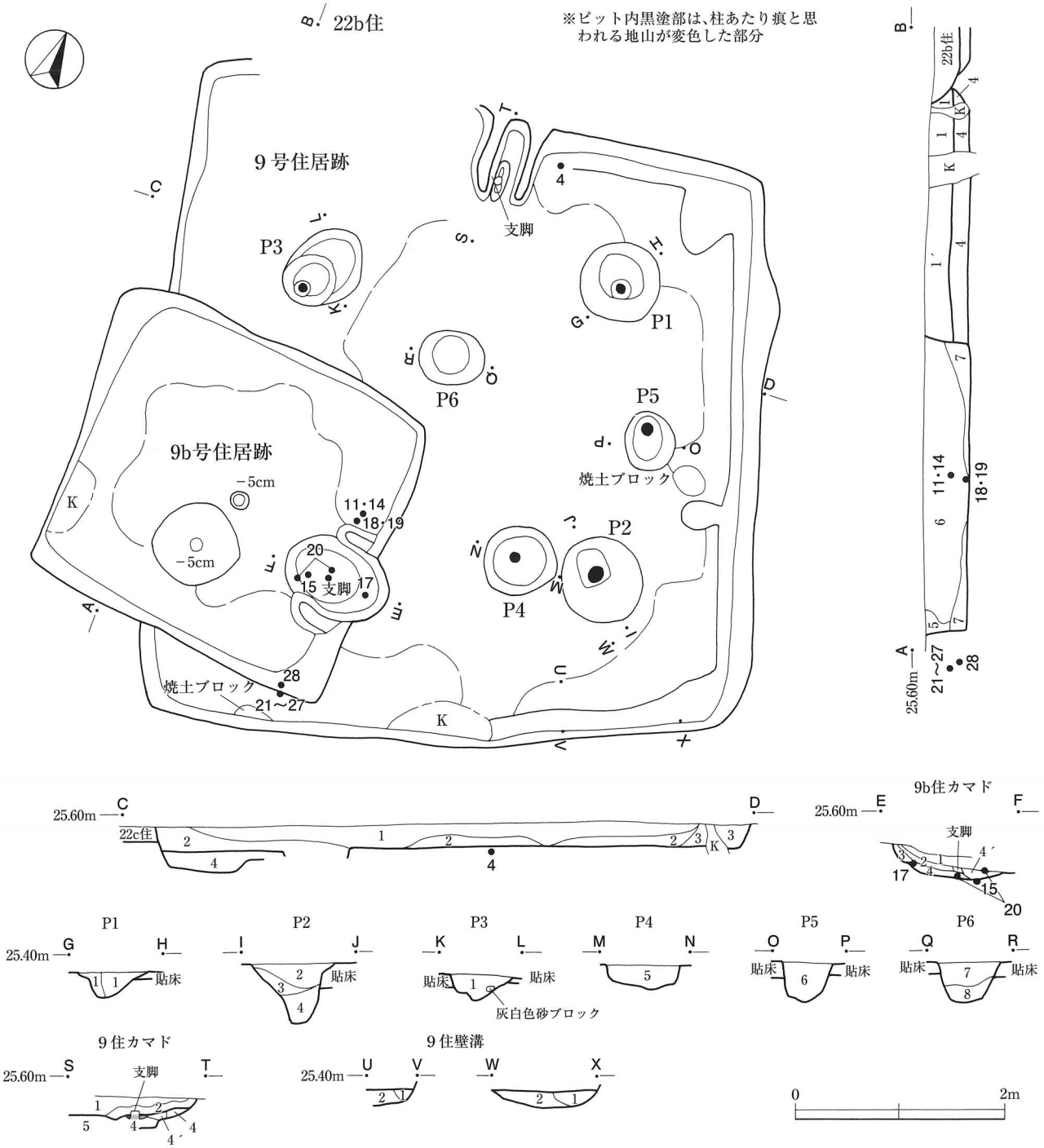
第９ｂ号住居跡（第45，47図）

検出状況　調査区の中央部に位置する。第９号住居跡に東側約3/4が重複し、残りの西側は第22ｃ号住居跡と重なる。本住居跡が第９，22ｃ号住居跡を壊している。

規模・形態　平面は北－南方向3.0ｍ、東－西方向3.1ｍのやや隅丸の方形を呈し、壁の高さは45cmを測る。東壁やや南寄りに壁より煙道部が張り出した形の竈を有し、袖部が残されていた。ピットは柱穴状のもの１基と皿状のもの１基が検出されたが、いずれも深さ５cmの浅いもので、位置的に第７号住居跡に伴うものである可能性がある。ローム層からなる床面の中央部から竈にかけての範囲は硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的に床面上から壁際にかけて、７層とした暗褐色土層が堆積し、その上を６層としたやや明るい暗褐色土層が覆っていた。竈の燃焼部にあたる部分に火床面は確認されなかったが、底面上には炭化物や炭化材片と焼土を含む４，４′層が堆積し、その上に土製の支脚が据えられていた。

床面直上からは**12**，**14**の須恵器が、竈内覆土からは**13**の須恵器と**20**の土師器が出土している。また、**21**～**28**の球状土錘が、南東隅壁際の床面直上から覆土中にかけてまとまって出土した。床面直上出土の須恵器か



住居跡覆土　1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。　1´層：暗褐色土層　焼土粒、炭化物粒が目立つ。　2層：暗褐色土層　1層よりやや暗い色調で、ロームブロックが少ない。炭化物粒、焼土粒がやや目立つ。締まり有り。　3層:暗褐色土層　1,2層よりやや明るい色調で、ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。　4層:暗黄褐色土層　貼床。ロームを基調とする。上部はロームブロックが目立ち、下部はロームと褐色土が混じる。焼土ブロック、炭化材を含む。硬く締まり有り。　5層：暗褐色土層　2層よりやや明るい色調。ローム粒を多く、ロームブロックを少量含む。締まり有り。　6層：暗褐色土層　ローム粒を多く、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。　7層：暗褐色土層　黒っぽい色調。ローム粒を多く、ロームブロックを少量含む。、炭化物粒、焼土ブロックも含む。締まり有り。

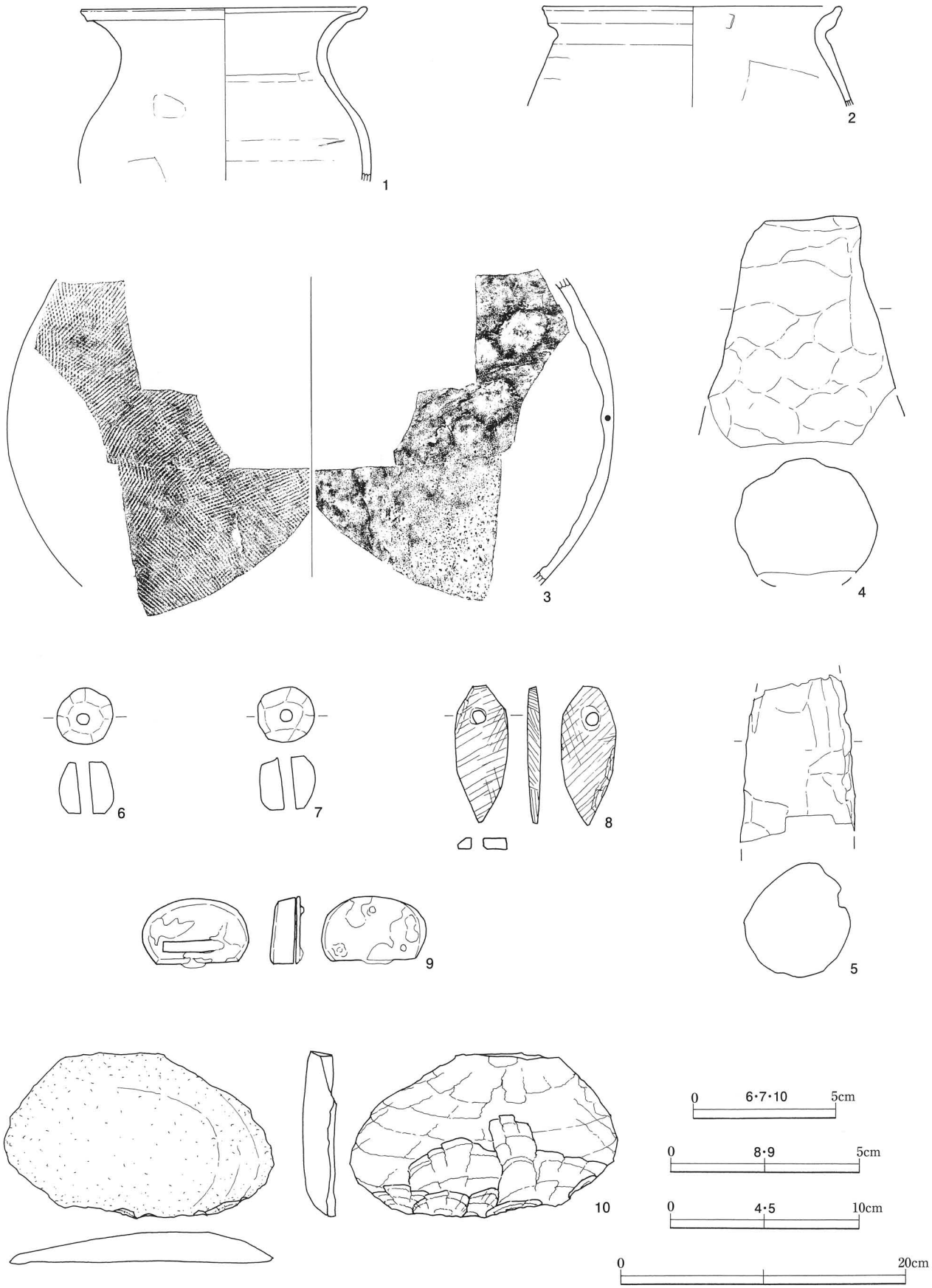
ピット覆土　1層：暗褐色土層　ロームブロックを多く含む。締まり有り。　1´層：暗黄褐色土層　1層土を基調とし、ロームブロックが目立つ。締まり有り。2層：暗褐色土層　ロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。　3層：赤褐色土層　焼土とロームブロックを多量に含む。締まり有り。　4層：暗褐色土層　2層よりやや明るい色調で、大きめのロームブロックが目立ち、焼土粒を少量含む。締まり有り。　5層：暗褐色土層　やや黒っぽい色調。ローム粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。　6層：暗褐色土層　ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。　7層：暗褐色土層　ロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。　8層：暗褐色土層　7層に近似するが、硬く締まり有り。ロームブロックを多く、炭化物粒も少量含む。

9住竈　1層:暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。灰白砂ブロック、焼土ブロック目立つ。締まり有り。　2層:暗褐色土層　砂粒、炭化物粒、焼土ブロックを多く含む。締まり有り。4層:暗黄褐色土層　ロームブロックが目立つ。締まり有り。　4´層:暗黄褐色土層　4層よりやや暗い色調で、焼土が混じる。　5層:暗黄褐色土層　貼床。4層より暗い色調。ローム主体。硬く締まり有り。

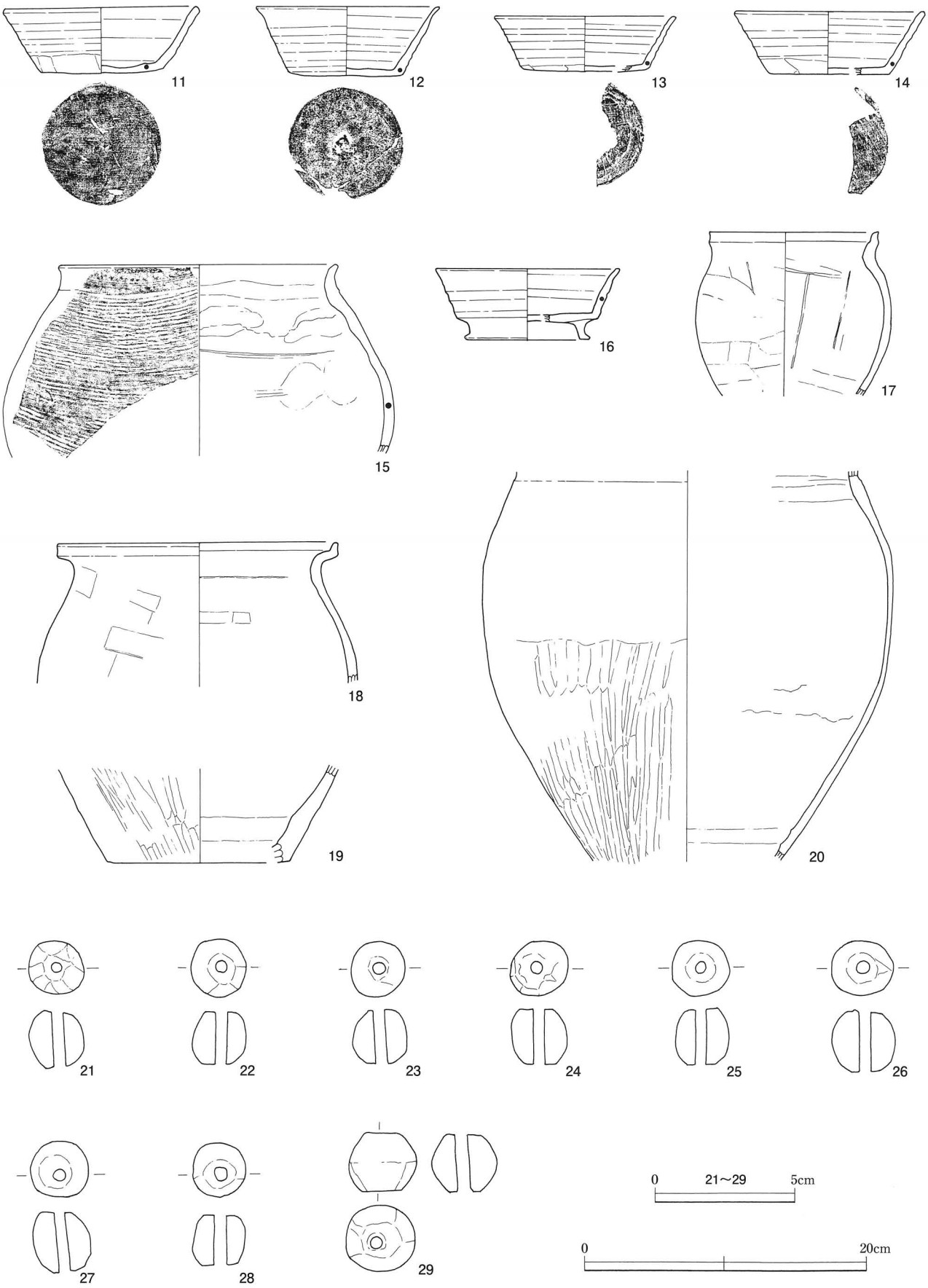
9b住竈　1層:暗褐色土層　ローム粒、灰白色砂ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。　2層:黒褐色土層　炭化物粒、焼土ブロック、灰白色砂ブロックを多く含む。締まり有り。　3層：黒褐色土層　締まり有り。4層：黒色土層　炭化物層、炭化材片有り。焼土を多く含む。締まり無し。　4´層：黒色土層　4層と同質だが、焼土粒が少ない。

9住壁溝　1層:暗褐色土層　ロームブロック、炭化物粒を少量含む。締まり有り。　2層:暗黄褐色土層　貼床。ロームブロックを多く、炭化物粒少量含む。締まり有り。

第45図　Ⅲ次9，9b号住居跡実測図



第46図　Ⅲ次９号住居跡出土遺物



第47図　Ⅲ次9b号住居跡出土遺物

ら、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物　11～16は須恵器で、11～14が杯、15が短頸壺、16が高台付杯である。17～20は土師器甕形土器で、胴下部の整形は、小型の17が篦削り、19, 20は磨きである。21～29は球状土錘で、まとまって出土した21～28は大きさが揃っている。

第10号住居跡（第48図）

検出状況　調査区の中央部に位置し、南半分は旧村道によって壊されている。残存部も撹乱が著しく、遺存状況は良くない。

規模・形態　残存していた北壁は5m強で、方向は北－62°－東である。平面は方形を呈するらしく、北壁の高さは25cmを測る。北壁中央に壁より煙道部が張り出した形の竈を有し、袖の先端部が残されていた。ピットは検出されていない。床面の大部分はロームブロック主体の土（2，2′層）で貼床が施されており、竈から南に向けて硬化部が認められた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　覆土は1層とした暗褐色土層の単一層である。床面直上からは古墳時代に該当する3の須恵器と4の土師器が出土しており、本遺構の時期も同時代と捉えられる。また、竈内からは7の土師器が出土している。

出土遺物　1，2，4～7は土師器で、1は坩形、2は単孔の甑形、4は杯形、6，7は甕形の土器である。3は稜がある須恵器杯蓋。8～10は球状土錘で、11は指頭圧痕による筋がみられる土製品。12は棒状礫の両端部に敲打痕が残る敲石。

第11号住居跡（第49図）

検出状況　調査区の中央南部に位置し、南半分は斜面のため遺存していない。残存部も撹乱が著しく、遺存状況は良くない。

規模・形態　残存していた北壁は5.05m強で、方向は北－70°－東である。平面は隅丸の方形を呈するらしく、北壁の高さは10cmを測る。北壁中央に壁より煙道部が若干張り出した形の竈を有し、袖部と火床面が残されていた。ピットは2基（P1，2）検出されたが、本住居跡に伴うものかどうか不明である。残存する床面は地山のローム層からなるが、それ以南の地山は粘土化したローム層となる。竈から帯状に床面の硬化部が認められた。

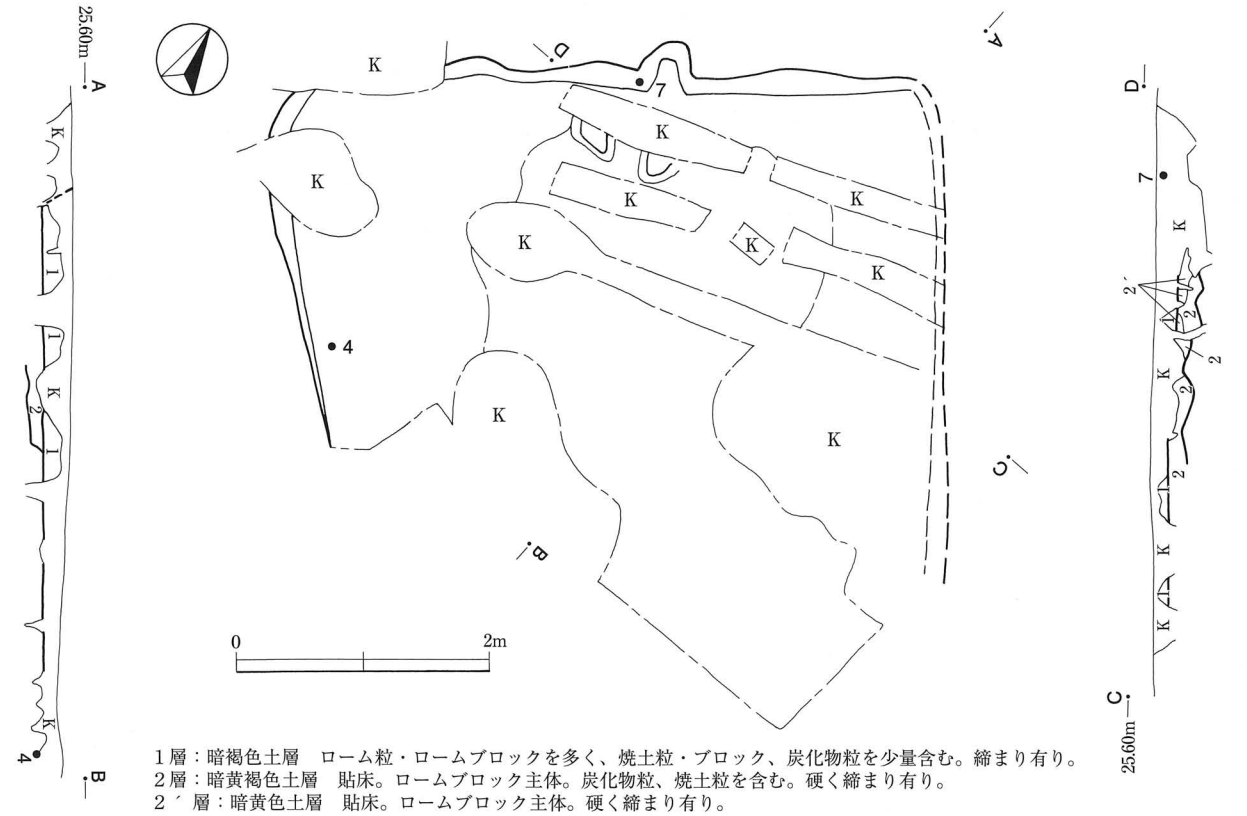
覆土の堆積と出土遺物　基本的に床面上の覆土は、1層とした暗褐色砂質土層の単一層であった。竈内には浅いピット状の掘り方があり、5層としたローム主体の土が充填されていた。5層南端の直上に5の支脚が据えられ、その手前の地山が被熱赤化していた。P1には柱痕部が認められ、P2の覆土上部には硬く締まったロームブロックを多く含む土が貼られていた。竈前の床面直上からは2の土師器甕形土器が、竈内からは1の土師器杯形土器と3のミニチュア土器が出土している。1の土器から本遺構の時期を古墳時代と捉える。4は球状土錘、5は竈に据えられていた土製支脚である。

第14号住居跡及び土坑とピット（第50，51図）

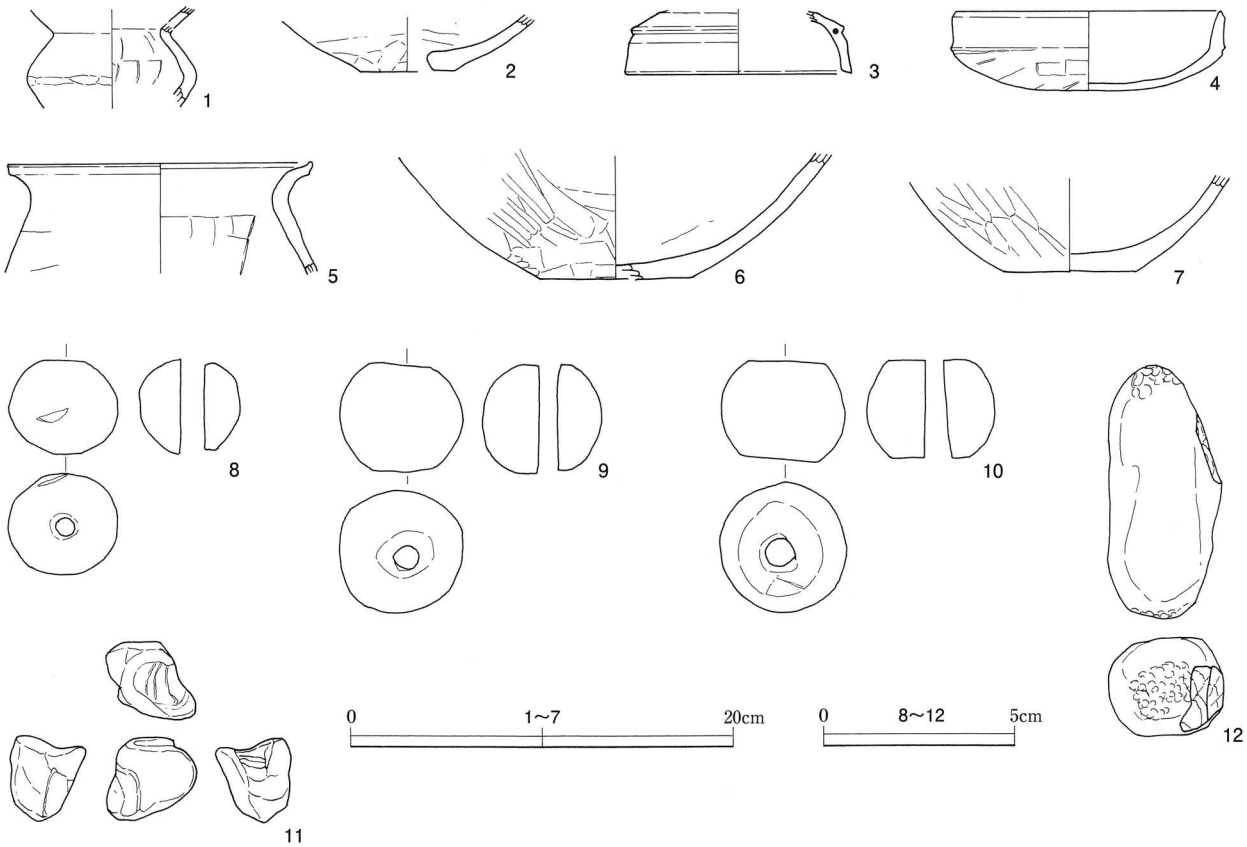
検出状況　調査区の中央南部に位置する。第14号住居跡は、南東隅と北壁から西壁の壁上部が撹乱によって失われている。また、北壁を壊している撹乱を挟んで、第14号住居跡の北側には、地山ローム層が硬化した部分と、それに付随する土坑1基（第2号土坑）、ピット3基（3～5P）、それに溝状の掘り込みが検出された。また、地山硬化部のさらに北側には、地山が焼けこんだ焼土が存在する。これらの遺構群は住居跡の痕跡の可能性がある。

規模・形態　第14号住居跡の平面は、北－南方向3.7m、東－西方向3.4mの方形を呈し、残存していた東壁の高さは15cmを測る。北壁と東壁の一部には張り出した部分が存在し、北壁の張り出し部には、焼土粒・ブロックを多量に含む黒褐色土が堆積していたが、竈かどうかは判然としない。住居跡中央部の床面は、ロームブロックを含む土（4，5層）によって貼床が施されており、ほぼ同様な範囲が硬化していた。貼床上には被熱赤化した長径15cm程の部分が認められ、貼床下からは深さ26cmのピットが検出された。

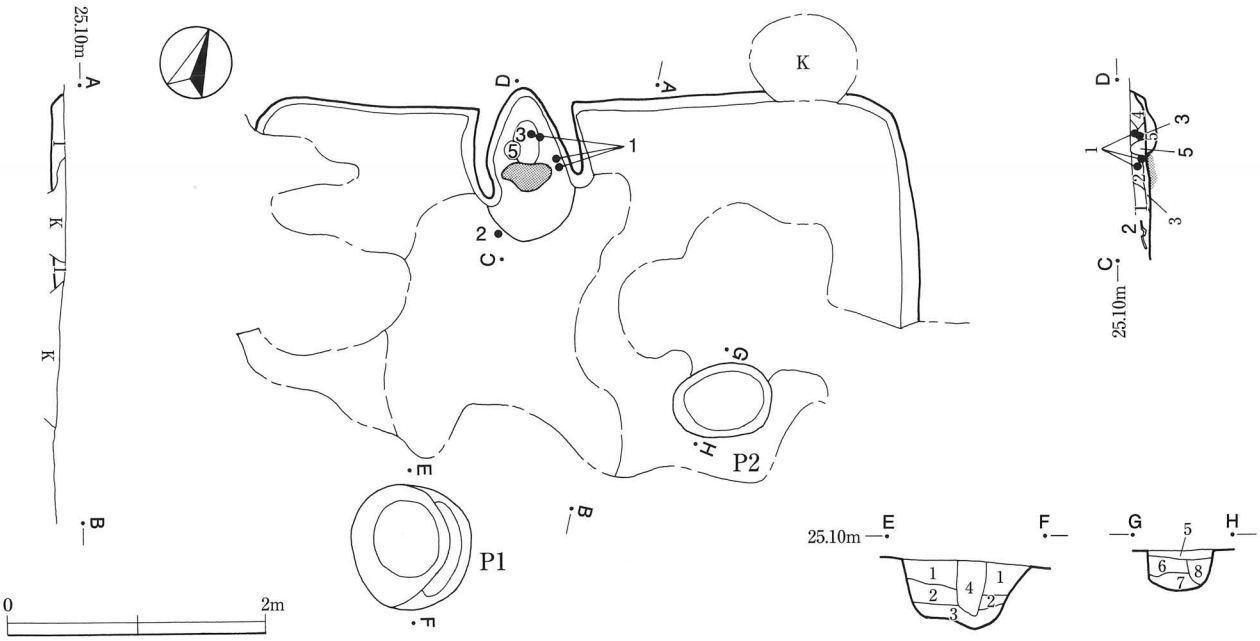
地山ローム層の硬化部は北－南方向5m、東－西方向3m程の範囲で確認され、深さ18～40cmを測る第2号土坑と3～5Pはその長軸に沿って検出された。また、第2号土坑と3Pの南側には、長さ2.4m、深さ4cm程



1層：暗褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多く、焼土粒・ブロック、炭化物粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗黄褐色土層　貼床。ロームブロック主体。炭化物粒、焼土粒を含む。硬く締まり有り。
2′層：暗黄色土層　貼床。ロームブロック主体。硬く締まり有り。

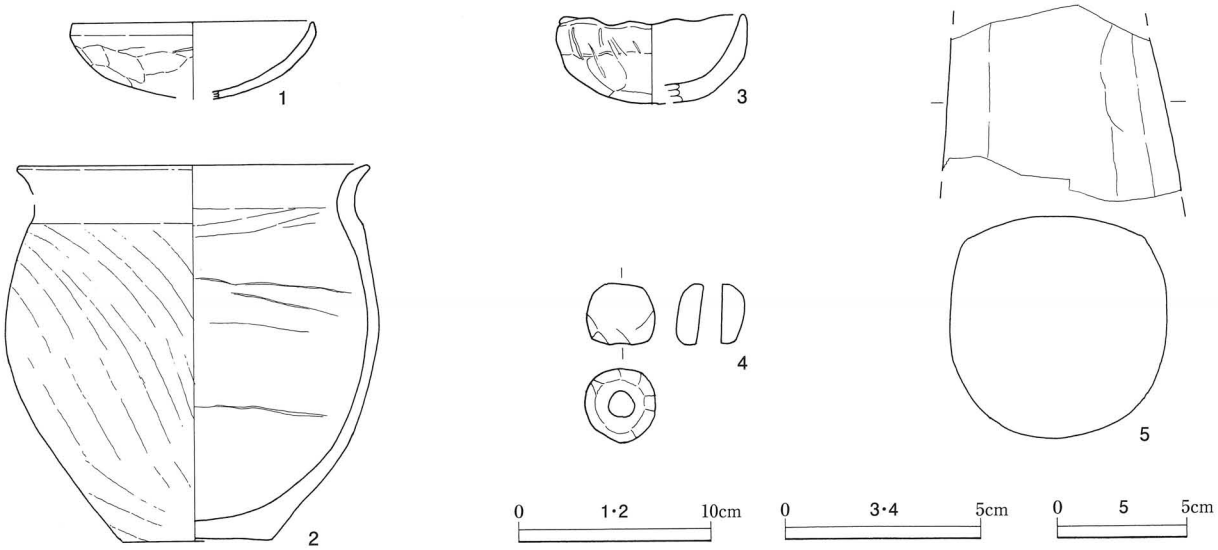


第48図　Ⅲ次10号住居跡実測図及び出土遺物

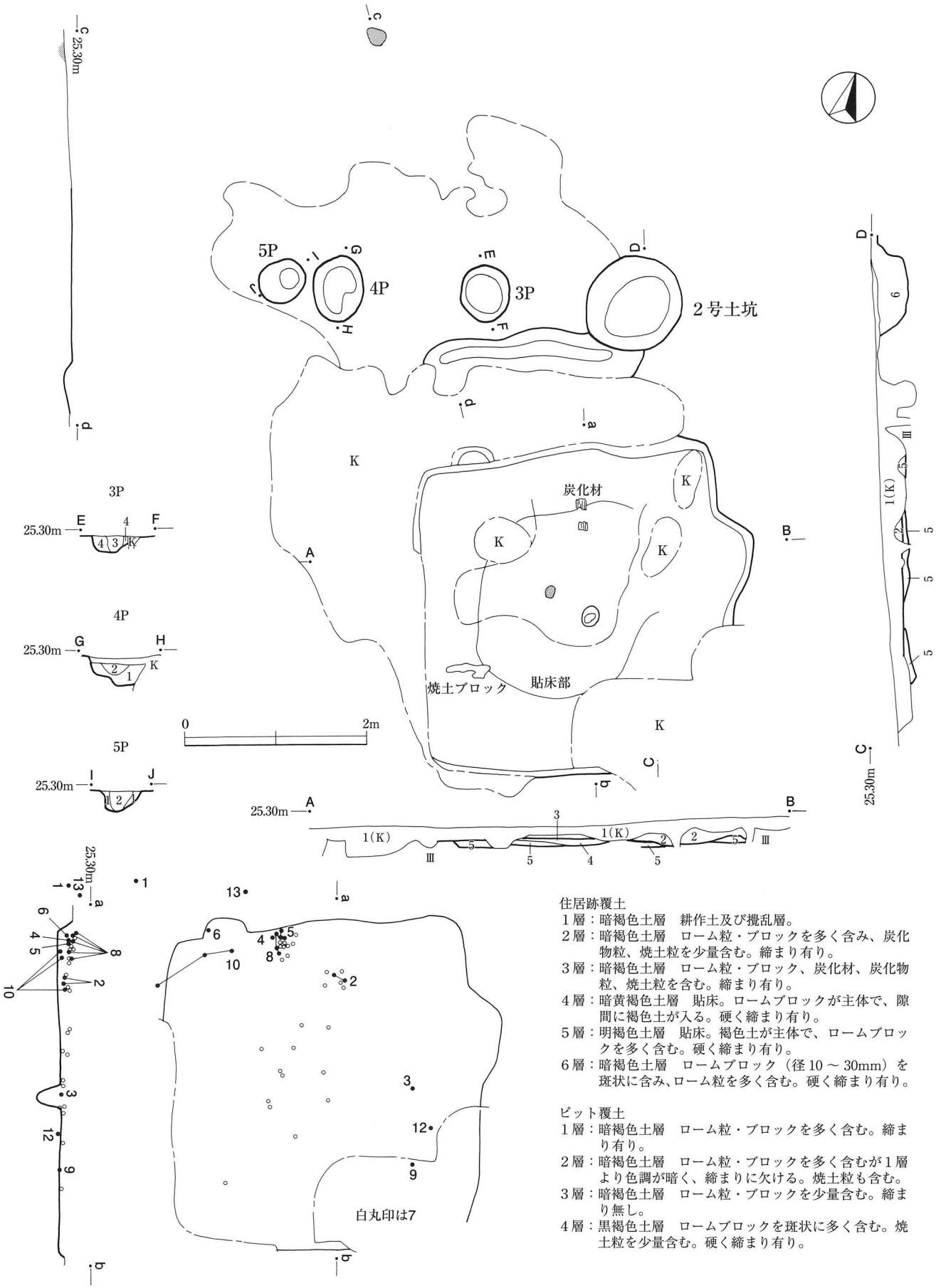


住居跡（竈）覆土
1層：暗褐色砂質土層　砂粒を多く含み、ローム粒、焼土粒も含む。締まり有り。
2層：明褐色砂質土層　砂粒、焼土粒を多く、ローム粒を少量含む。締まり有り。竈天井材。
3層：赤褐色砂質土層　焼土ブロックを多く含む。崩落した竈天井材。
4層：黒褐色砂質土層　焼土粒、黒色粒を多くも含む。締まり有り。竈煙道部
5層：暗黄褐色土層　ローム主体で、ロームブロックを多く含む。硬く締まり有り。竈下部構築材。

ピット覆土
1層：暗褐色土層　粘土化ローム、白色粘土ブロックを多く含む。硬く締まり有り、粘性無し。
2層：暗褐色土層　大形の白色粘土ブロックを多量に含む。硬く締まり有り、粘性強い。
3層：暗茶褐色土層　粘土粒を微量、赤色粒を少量含む。硬く締まり有り、粘性強い。
4層：黒褐色土層　柱痕。粘土粒、ローム粒、赤色粒、を少量含む。締まり、粘性無し。
5層：明褐色土層　ロームブロックを多く含み、大形の粘土化ロームブロックを含む。焼土粒を少量含む。硬く締まり有り。
6層：暗褐色土層　粘土化ロームブロックを多く含む。硬く締まり有り。
7層：暗褐色土層　2層よりブロックが目立たない。炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く締まり、粘性有り。
8層：暗褐色土層　ブロックがほとんど含まれない。柱痕か。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。



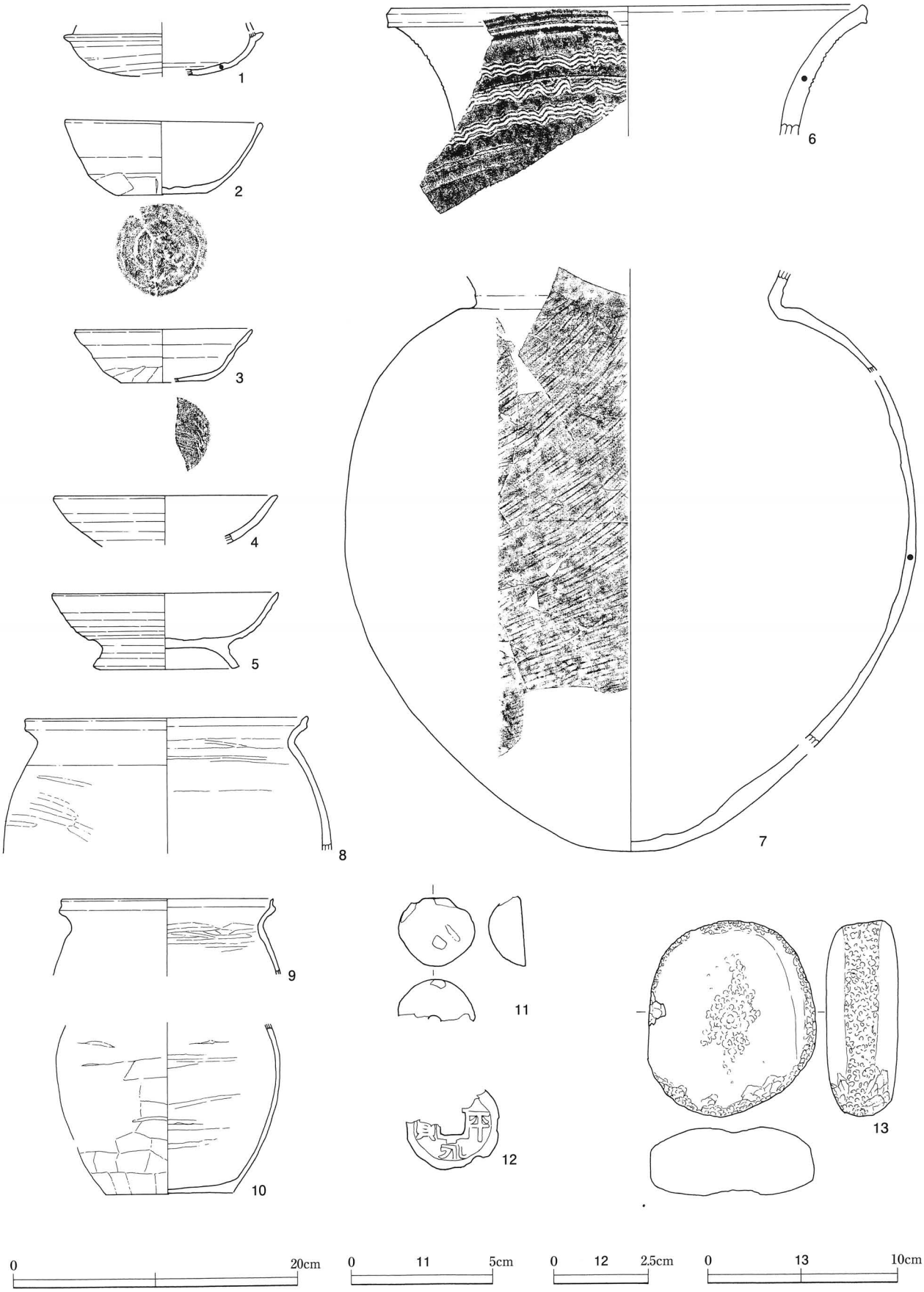
第49図　Ⅲ次11号住居跡実測図及び出土遺物



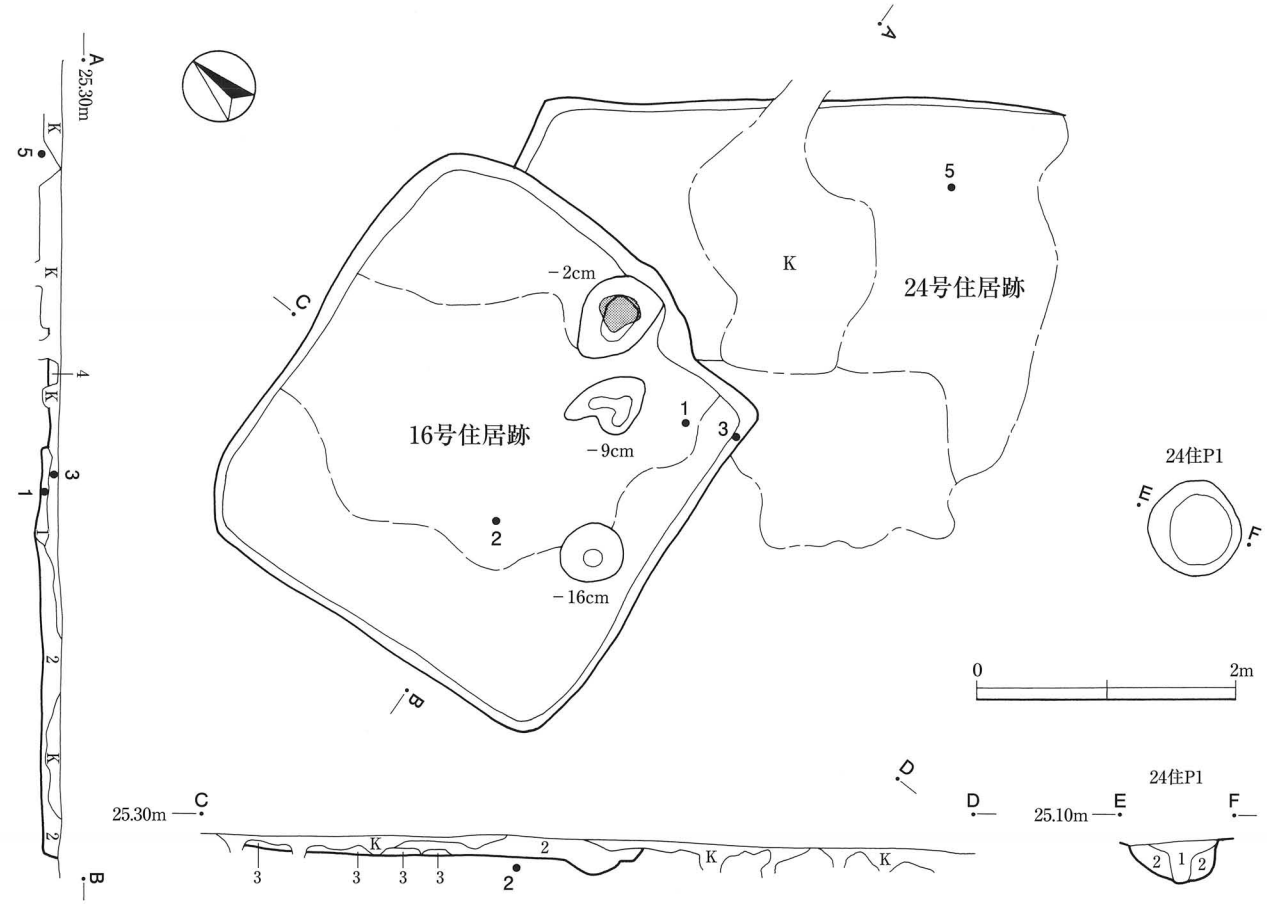
住居跡覆土
1層：暗褐色土層　耕作土及び攪乱層。
2層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
3層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック、炭化材、炭化物粒、焼土粒を含む。締まり有り。
4層：暗黄褐色土層　貼床。ロームブロックが主体で、隙間に褐色土が入る。硬く締まり有り。
5層：明褐色土層　貼床。褐色土が主体で、ロームブロックを多く含む。硬く締まり有り。
6層：暗褐色土層　ロームブロック（径10～30mm）を斑状に含み、ローム粒を多く含む。硬く締まり有り。

ピット覆土
1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含むが1層より色調が暗く、締まりに欠ける。焼土粒も含む。
3層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを少量含む。締まり無し。
4層：黒褐色土層　ロームブロックを斑状に多く含む。焼土粒を少量含む。硬く締まり有り。

第50図　Ⅲ次14号住居跡, 土坑, ピット群実測図

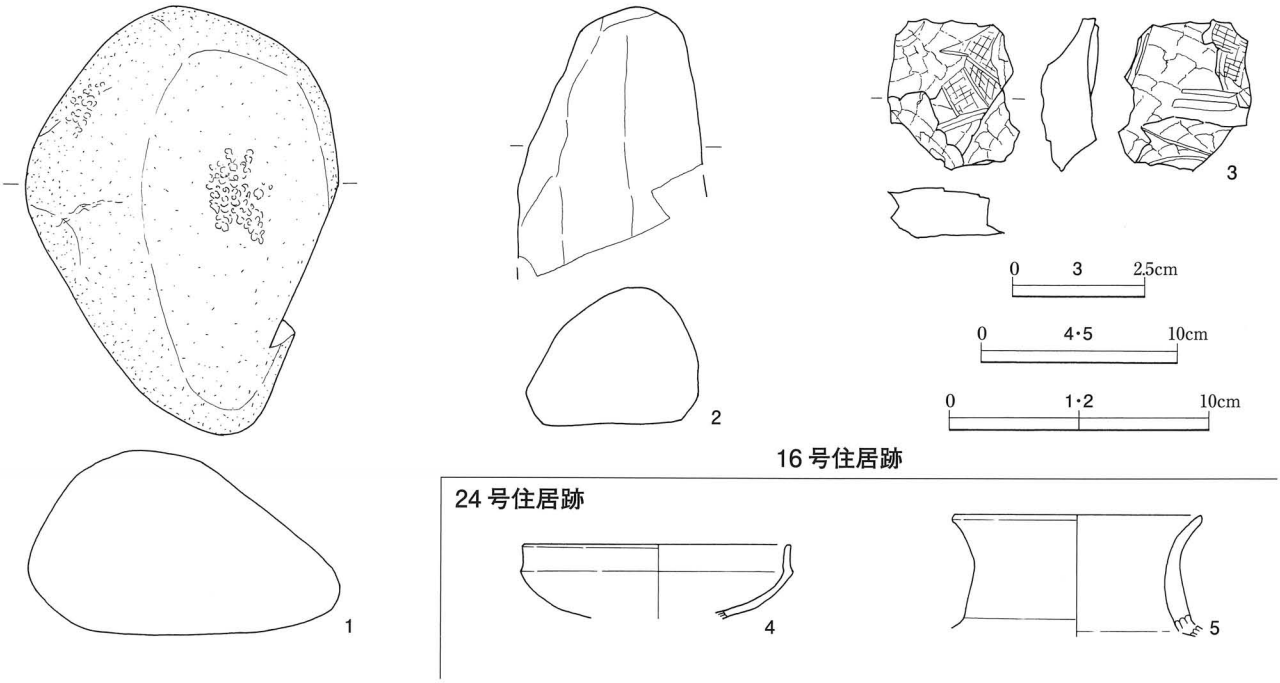


第51図　Ⅲ次14号住居跡出土遺物

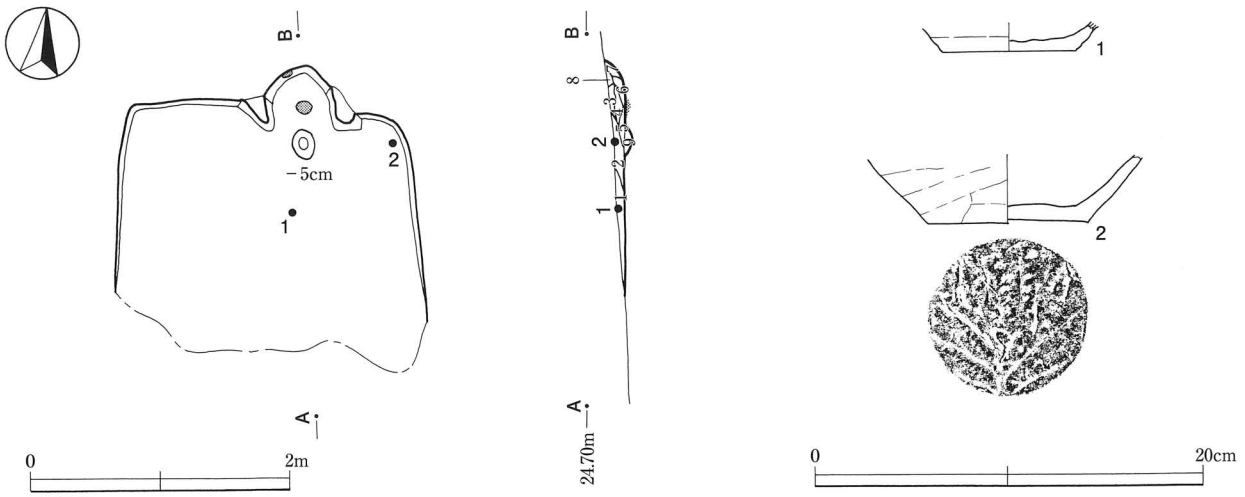


住居跡覆土
1層：黒褐色土層　16住覆土。ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層　16住覆土。ローム粒・ブロックを多く、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
3層：暗褐色土層　16住覆土。2層よりローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒を少量含む。締まり有り。
4層：暗褐色土層　24住覆土。ローム粒を多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。

24住P1覆土
1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを少量含む。締まりやや無し。
2層：暗褐色土層　大きめのロームブロックを斑状に含み、ローム粒を多く含む。硬く締まり有り。



第52図　Ⅲ次16, 24号住居跡実測図及び出土遺物



第53図
1層：明褐色土層　砂粒、ローム粒を多く含む。硬く締まり有り。
2層：暗褐色土層　砂粒、ローム粒を多く、ロームブロック、黒色粒を少量含む。硬く締まり有り。
3層：暗褐色砂質土層　竈天井材。大形の焼土ブロック、黒色粒・ブロックを少量含む。締まり有り。
4層：暗褐色砂質土層　竈天井材。硬化した大形の焼土ブロックを多量に含む。締まり有り。
5層：暗褐色土層　砂粒、ローム粒を多く含む。硬く締まり有り。
6層：暗褐色土層　竈煙道部。やや暗い色調。焼土粒、黒色粒を多く含む。砂粒、ローム粒・ブロックを少量含む。締まり有り。
7層：暗黄褐色土層　大形のロームブロック、ローム粒を多く含む。硬く締まり有り。
8層：暗黄褐色土層　6層と同質だが、焼土粒、黒色粒が目立たない。
9層：黒褐色土層　焼土・炭化物を多量に含む。

第53図　Ⅲ次18号住居跡実測図及び出土遺物

の溝状遺構が存在する。

覆土の堆積と遺物の出土状況　覆土は2，3層とした暗褐色土層が堆積するが、覆土中には僅かではあるが、燃焼行為を示す炭化材や焼土ブロックが認められた。また、3Pと5Pの覆土には柱痕部が認められた。住居跡の覆土下部からは**2**～**6**，**8**～**10**の平安時代土師器が出土し、**7**の須恵器が北壁際の覆土下部から中央部の床面直上にかけて、破片に分かれて出土した。また、**12**の隆平永寶が床面直上から検出されている。土師器や隆平永寶の出土から、本遺構の時期は平安時代と捉えられる。

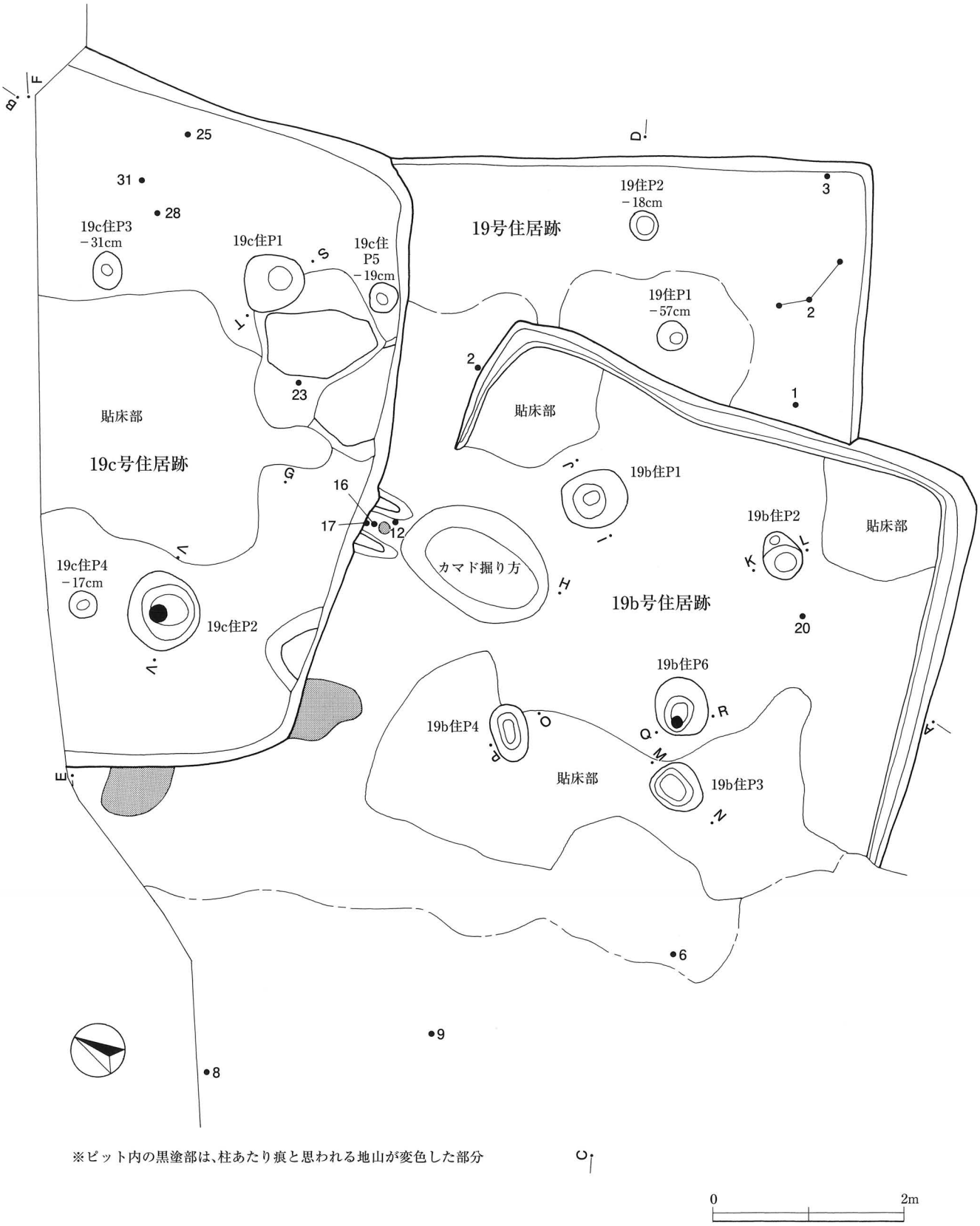
出土遺物　**1**は受部が認められる古墳時代須恵器の杯身。**6**，**7**は須恵器の甕。**2**～**5**は土師器椀形土器で、**2**の内面には黒色処理が施され、**5**には高台が付く。**8**～**9**は土師器甕形土器で、**10**の胴下部には篦削りが施されている。**11**は球状土錘で、**13**は磨石。**12**の古銭は劣化が激しく脆弱であったため、周囲の土ごと取り上げたもので、保存処理後X線撮影したところ、皇朝十二銭の隆平永寶であることが判明した。

第16号住居跡（第52図）

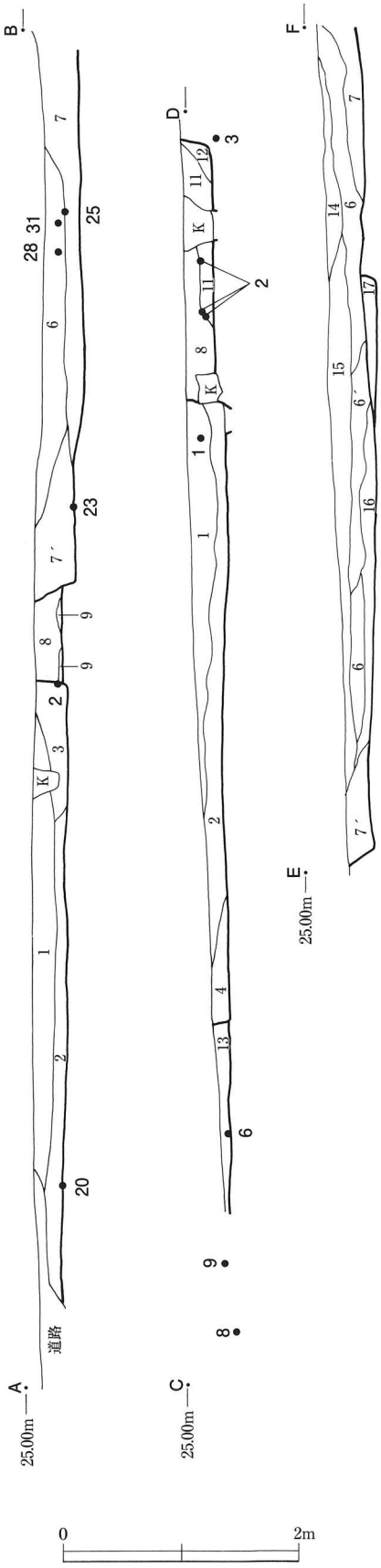
検出状況　調査区の中央部に位置する。東部が第24号住居跡に重複する。覆土同士の切り合いは観察できなかったが、床面が低い第16号住居跡の覆土中に、第24号住居跡の貼床や硬化面が確認されなかったことから、第16号住居跡が新しいものと思われる。

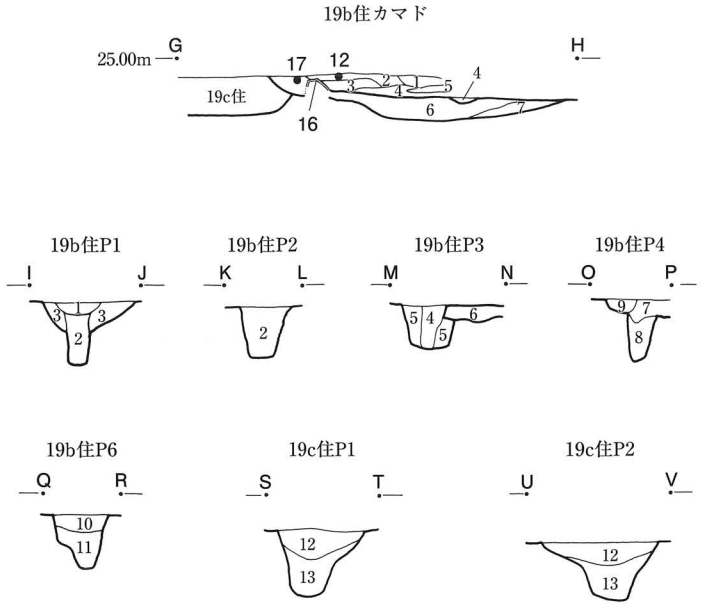
規模・形態　平面は北－南方向3.35 m、東－西方向3.25 mの方形を呈するが、竈より北側の東壁が45cm程、南側より張り出している。壁の高さは17cmを測り、竈を通る主軸方向は北－80°－東である。東壁やや南寄りにある竈には、底面に火床面が残された深さ2 cm程の窪みが残されていた。ピットは2基検出されているが、深さ9 cm～16cmの浅いものである。地山ローム層からなる床は、竈から北壁にかけて硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物　床面上には2，3層とした暗褐色土層がみられ、竈内には1層とした黒褐色土層が堆積する。南東隅の床面直上からは、**1**の敲打痕が残る台石？と**3**の滑石製剥片が、中央の床面直上から**2**の土製支脚が出土している。



第54図　Ⅲ次19, 19b, 19c号住居跡実測図（1）



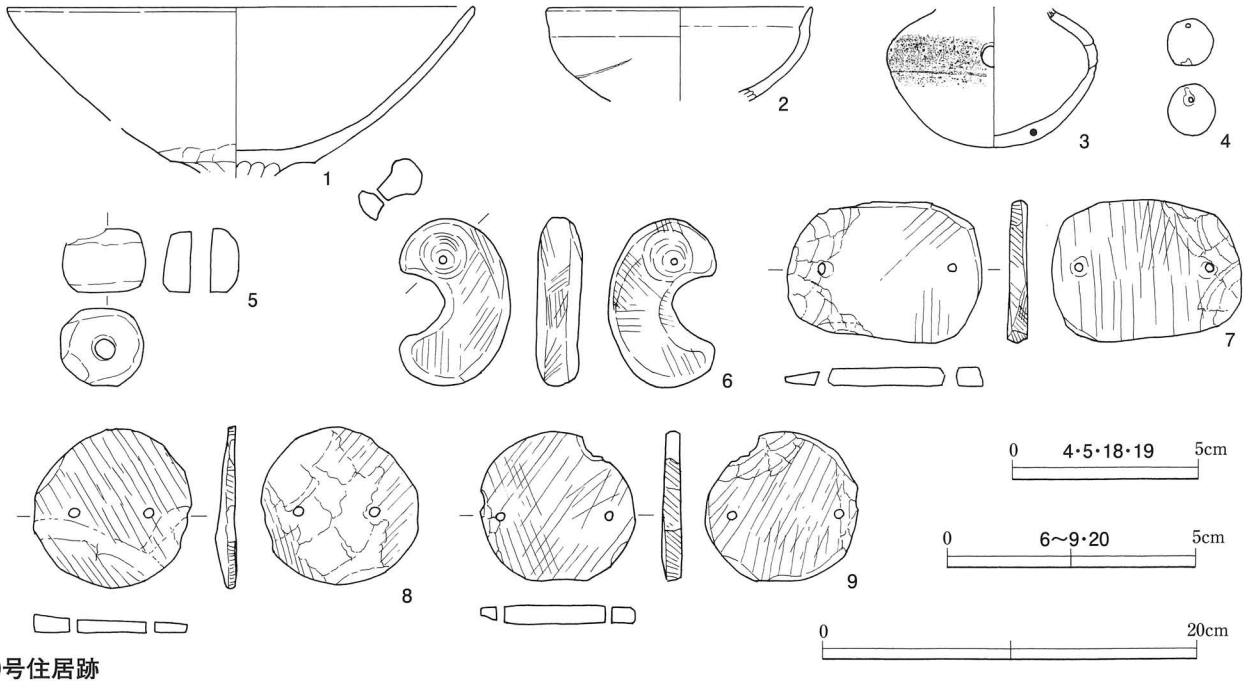


住居跡覆土
1層：黒褐色土層　19 b住覆土。ローム粒・ブロックを少量含み、焼土粒が目立つ。締まり有り。
2層：黒褐色土層　19 b住覆土。大形のロームブロック、炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。
3層：黒褐色土層　19 b住覆土。2層より大きめのロームブロックが目立つ。炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
4層：黒褐色土層　19 b住覆土。2層より褐色味がある。ローム粒･ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。
6層：黒褐色土層　19 c住覆土。ローム粒・ブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
6´層：暗褐色土層　19 c住覆土。白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物を多く含む。締まり有り。
7層：黒褐色土層　19 c住覆土。6層と同質だが、ややローム粒が目立たない。締まり有り。
7´層：黒褐色土層　19 c住覆土。6層と同質だが、やや大きめのロームブロックを含む。締まり有り。
8層：暗褐色土層　19住覆土。ローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒を少量含む。締まり有り。
9層：暗褐色土層　19住覆土。8層土を基調とするが、炭化物粒が目立ち、8層よりやや黒っぽい。締まり有り。
11層：暗褐色土層　19住覆土。8層土より大形のロームブロックが目立ち、明るい色調。締まり有り。
12層：暗褐色土層　19住覆土。9層に近似し、11層より黒味が強い。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
13層：暗褐色土層　19住覆土。ローム粒・ブロックを多く含み、焼土粒を少量含む。締まり有り。
14層：暗褐色土層　19 c住覆土。やや黄味がかる。締まり有り。竹根多い。
15層：暗褐色土層　19 c住覆土。大きめの炭化物粒、焼土粒がやや目立つ。竈材のような砂ブロックを含む。締まり有り。竹根多い。
16層：黒褐色土層　19 c住覆土。焼土ブロック、炭化物を多く含み、、ロームブロック、白色粘土ブロックを少量含む。締まり有り。
17層：暗褐色土層　19 c住貼床。やや黄味がかる。ロームブロックを多く含む。硬く締まり有り。

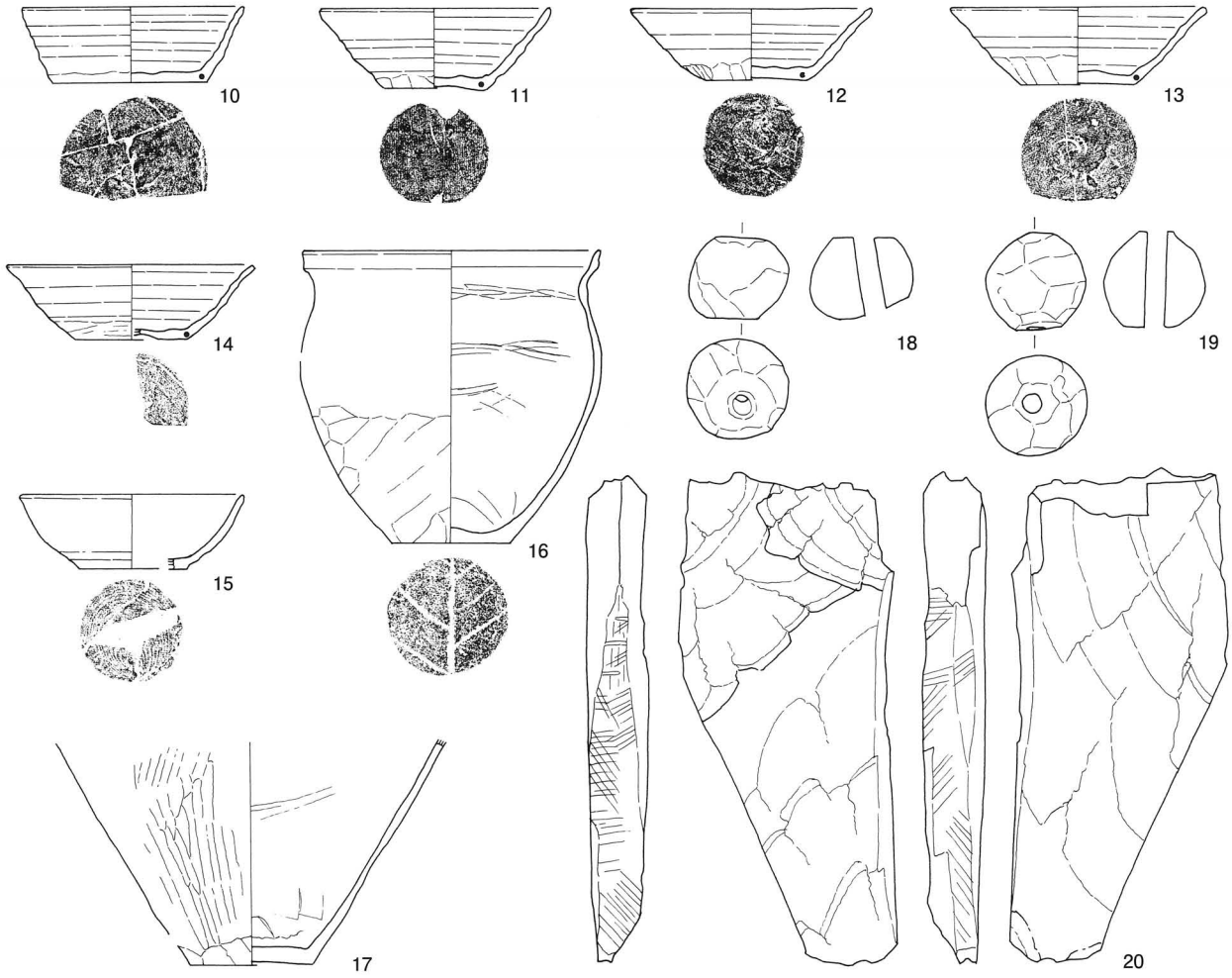
19 b住竈
1層：暗褐色土層　砂粒、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
2層：暗黄灰褐色砂質土層　天井材。灰白色粘土ブロック、炭化物粒、焼土ブロックを多く含む。下部に焼土ブロック目立つ。締まり有り。
3層：暗褐色土層　ロームブロック、焼土粒、砂粒を多く含む。締まり有り。
4層：黒褐色土層　炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
5層：暗黄灰褐色砂層　竈材。焼土粒・ブロックを少量含む。締まり有り。
6層：暗黄色土層　粘質土を基調に、黒色土、焼土ブロック、砂粒、白色粘土ブロックが混じる。締まり有り。
7層：暗茶褐色土層　貼床。ロームブロックを多く、白色粘土ブロックを少量含む。締まり、粘性有り。

ピット覆土
1層：黒褐色土層　炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層　小さめの白色粘土ブロック、ロームブロックを多く含む。締まり有り。
3層：暗黄褐色土層　大きめの白色粘土ブロック、ロームブロックを多く含み、焼土ブロックを少量含む。締まり有り。
4層：淡灰褐色砂質土層　淡灰褐色砂質土が主体で、淡灰褐色粘質土が斑状に混じる。焼土粒も多く含む。締まり有り。
5層：暗褐色土層　大きめの白色粘土ブロックが目立ち、ロームブロックを少量含む。締まり有り。
6層：暗褐色土層　貼床。粘土ブロック、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
7層：暗褐色土層　小さめの粘土ブロック、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり有り。
8層：暗褐色土層　大きめの白色粘土ブロック、小さめのロームブロックを多く含む。締まり有り。
9層：暗褐色土層　7層に近似するが、やや明るい。ロームブロック、炭化物粒、焼土粒、砂粒を多含む。締まり有り。
10層：暗褐色土層　焼土粒を少量含む。
11層：暗黄褐色土層　ロームブロックを含む。
12層：暗褐色土層　炭化物粒、焼土粒を多く含み、小さめの白色粘土ブロック、ロームブロックを少量含む。締まり有り。
13層：暗褐色土層　12層より明るい色調。大きめの白色粘土ブロックを多く含む。

第55図　Ⅲ次19, 19b, 19c号住居跡実測図（2）

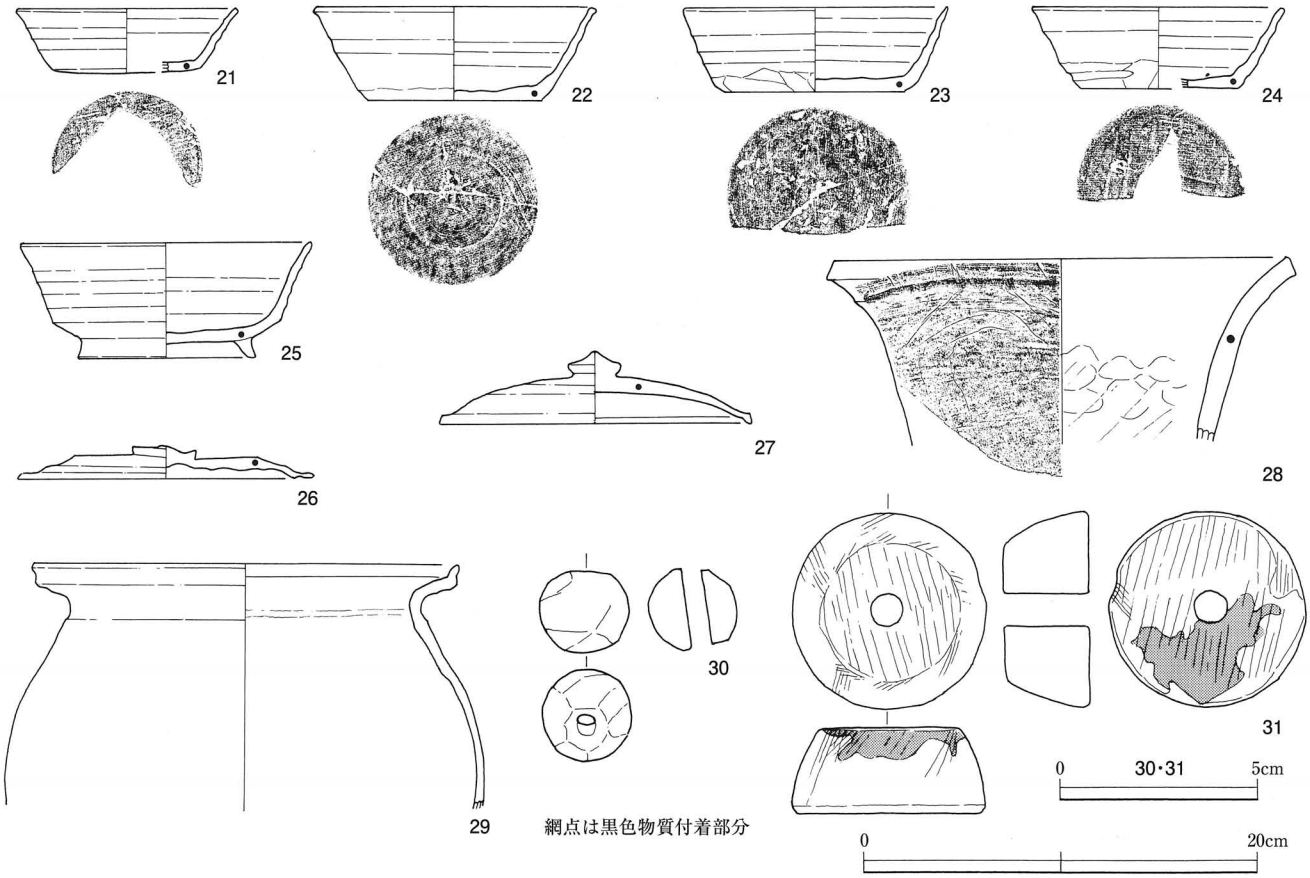


19号住居跡



19b号住居跡

第56図　Ⅲ次19, 19b号住居跡出土遺物



第57図　Ⅲ次19c号住居跡出土遺物

第24号住居跡（第52図）

検出状況　調査区の中央部に位置し、北西部が第16号住居跡と重複する。

規模・形態　平面の全体像は不明だが、北隅は角をなす。残存していた北東壁の高さは10cm程で、方向は北－45°－西である。ピットは床面残存部以外から、深さ35cmのＰ１とした１基が検出されたが、本住居跡にともなうものかは不明である。地山ローム層からなる床の一部は硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物　覆土は攪乱が著しく、４層とした暗褐色土が僅かに観察されたに過ぎない。また、Ｐ１の覆土には柱痕部が観察された。覆土下部からは**5**の土師器甕形土器が出土したことから、本遺構の時期は古墳時代と思われる。**4**は土師器の杯形土器。

第18号住居跡（第53図）

検出状況　調査区の南西部に位置する。南部は斜面のため遺存していない。

規模・形態　平面は残存部の最大東西幅2.9ｍ、北壁2.1ｍの台形を呈するらしい。北壁の高さは15cmを測り、竈を通る主軸方向は北－５°－西である。北壁やや東寄りにある竈は、袖部と火床面が残されていた。竈前には深さ５cmのピットが存在する。地山ローム層からなる床面は全面が硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物　床面上と竈部を覆って１，２層とした褐色系の土層が堆積し、竈部では崩落した天井材と思われる３，４層とした暗褐色砂質土層がみられた。また、竈前のピット内には焼土・炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積していた。覆土下部から**1**の須恵器杯が、床面直上から**2**の土師器甕形土器が出土しており、本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

第19号住居跡（第54～56図）

検出状況　調査区北西部に位置する。北部を第19ｃ号住居跡に、南部を第19ｂ号住居跡に壊されている。また、南西壁際は遺存していない。

規模・形態　残存している床面の範囲を考慮すると、

北東－南西方向8.9ｍ以上の方形の大型住居跡になる。南東壁の高さは25cmを測り、同壁の方向は北－28°－西である。地山ローム層からなる床面は壁際を除き硬化しており、西部には床面が赤色硬化した焼土が２ヶ所存在する。ピットは東部で２基検出されており、57cmの深さを有するＰ１は主柱穴になると思われる。また、重複する第19ｂ号住居跡内から検出された19ｂ住Ｐ６も、位置的に本住居跡の主柱穴の可能性がある。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的な覆土はローム粒･ブロックを多く含む暗褐色土層（８，13層）であり、床面上には炭化物粒が目立ち黒味の強い部分（９層）が、壁際にはより大型のロームブロックを含む部分（11層）が認められる。19ｂ住Ｐ６の底面には、柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が観察された。東隅の床面直上からは**1**～**3**の古墳時代土師器と須恵器が、南西部の床面直上からは**6**，**8**，**9**の滑石製模造品が出土している。以上から本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　**1**，**2**は土師器で**1**が高杯形、**2**が杯形の土器。**3**は須恵器の甕。**4**は土玉で、**5**は球状土錘。**6**～**9**は滑石製模造品で、**6**が勾玉、**7**～**9**が双孔円板。

第19ｂ号住居跡（第54～56図）

検出状況　調査区北西部に位置する。北側2/3が第19号住居跡の床面を壊し、北部の竈の煙道部が第19ｃ号住居跡の南壁を壊している。また、西壁は遺存していない。

規模・形態　平面は北－南方向5.7ｍの隅丸方形を呈し、東壁の高さは35cmを測る。北壁よりかなり飛び出たところに竈がつくられており、袖部と火床面が残る。竈を通る主軸方向は北－13°－西である。ピットは深さ40～50cmを測り、方形に並ぶ４基（Ｐ１～４）が検出された。床面は基本的に地山ローム層からなるが、北東、南東隅、および西部では貼床が施されている。東部では壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況　覆土としては黒褐色の４つの土層が確認された（１～４層）。竈には楕円形の皿状の掘り方が設けられ、その埋土（６，７層）の上面に火床面と**16**の土器を逆位に据えた支脚が設けられていた。さらに、覆土上部には崩落した天井材と思われる砂質土層（２層）が存在する。また、Ｐ１，３の覆土には柱痕部が観察された。床面直上からは**10**，**11**，**14**の須恵器と**18**の球状土錘、**20**の滑石製剥片が、竈内からは**12**の須恵器と**15**の土師器が、貼床中からは**19**の球状土錘が出土している。また、**17**の土師器も、**16**とともに竈の支脚として用いられていた。以上から本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

出土遺物　**10**～**14**は須恵器の杯。**15**～**17**は土師器で、**15**が椀形、**16**，**17**が甕形の土器である。**17**には粘土が付着する。**18**，**19**は球状土錘。**20**は側面に研磨が施された板状の滑石製剥片である。

第19ｃ号住居跡（第54，55，57図）

検出状況　調査区北西部に位置する。南半部は第19号住居跡を壊し、南壁の一部は第19ｂ号住居跡の竈煙道部によって壊されている。北半部は調査区外にあたる。

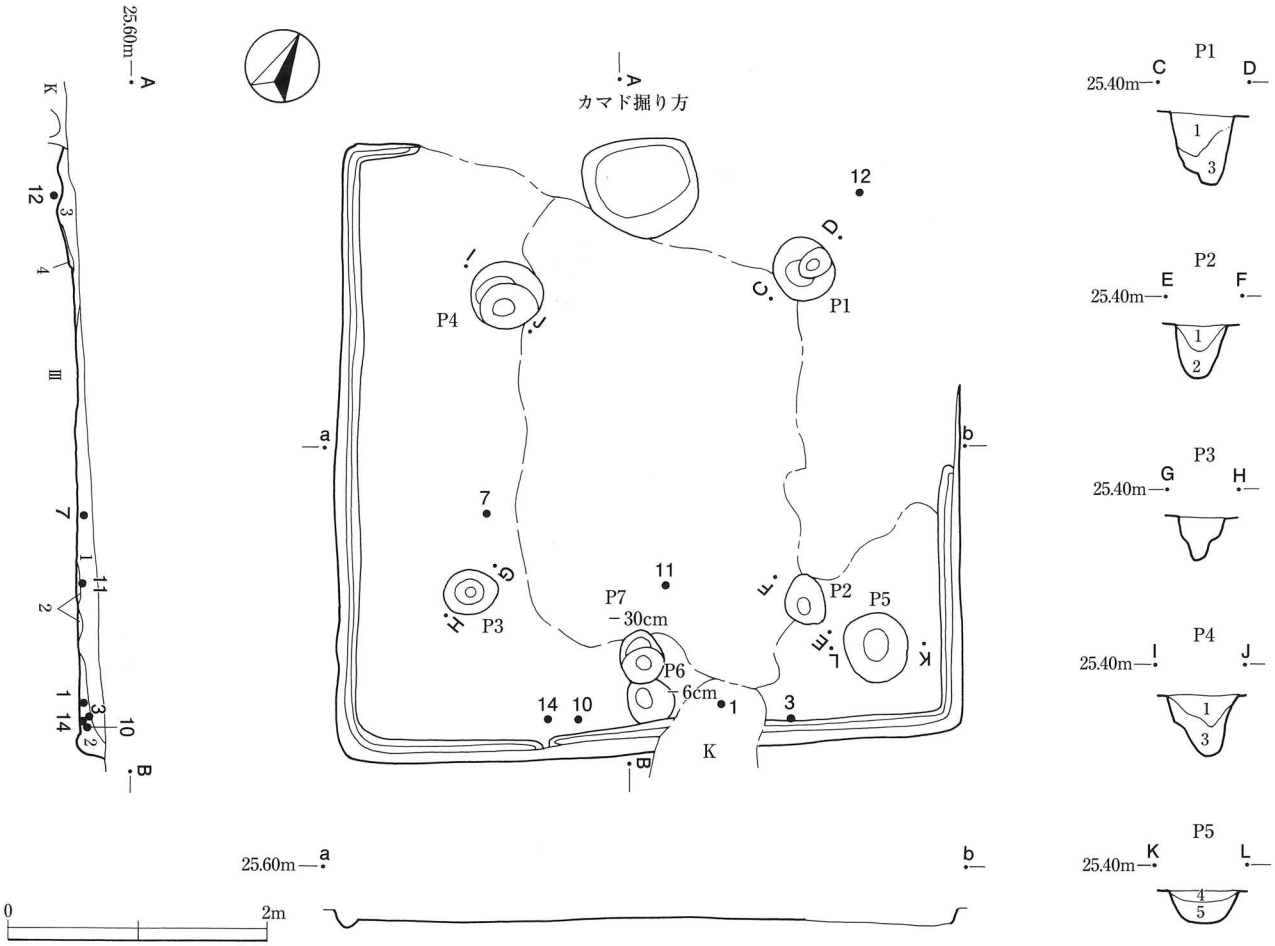
規模・形態　平面は東－西方向7.4ｍの隅丸方形を呈し、壁の高さは35cmを測る。南壁の方向はおおよそ北－75°－東である。ピットは５基検出され、うち深さ45～55cmを測るＰ１，２が主柱穴と思われる。床面は基本的に地山ローム層からなるが、一部貼床（17層）がなされている。中央部の床面は硬化しており、南壁際に地山を削り残した５cm程の高まりが２ヶ所存在する。また、東側の高まりとＰ１の間には、ローム粘土を盛ってつくられた10cm程の高まりもみられた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　断面図の６，６′，７，７′，14～16層が覆土に相当するが、Ａ－Ｂ断面とＥ－Ｆ断面の土層の対応はできていない。Ｐ２の底面には柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が観察された。床面直上からは**21**～**24**の須恵器が出土していることから、本遺構の時期は奈良･平安時代と捉えられる。

出土遺物　**21**～**28**は須恵器で、**21**～**24**が杯、**26**，**27**が蓋、**28**が広口壺である。**29**は土師器の甕形土器。**30**は球状土錘。**31**は石製紡錘車で裏面と側面の一部に黒色物質が付着する。

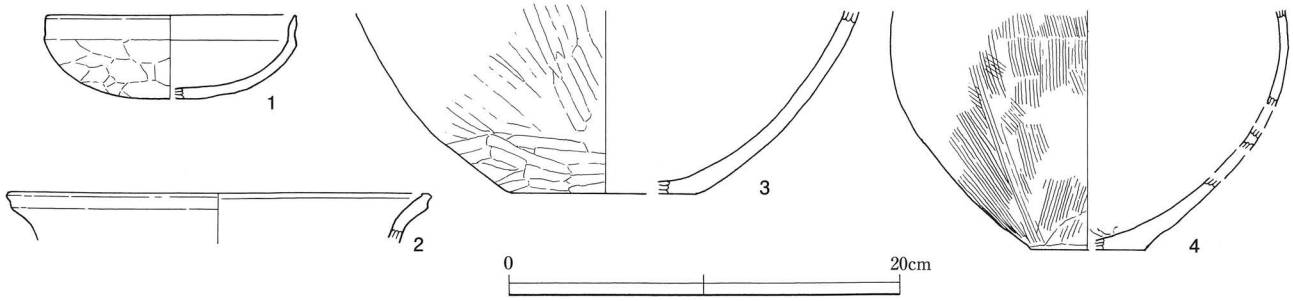
第20号住居跡（第58，59図）

検出状況　調査区中央東寄りに位置する。南東壁が第５号住居跡に接し、北部の壁と床は遺存していない。

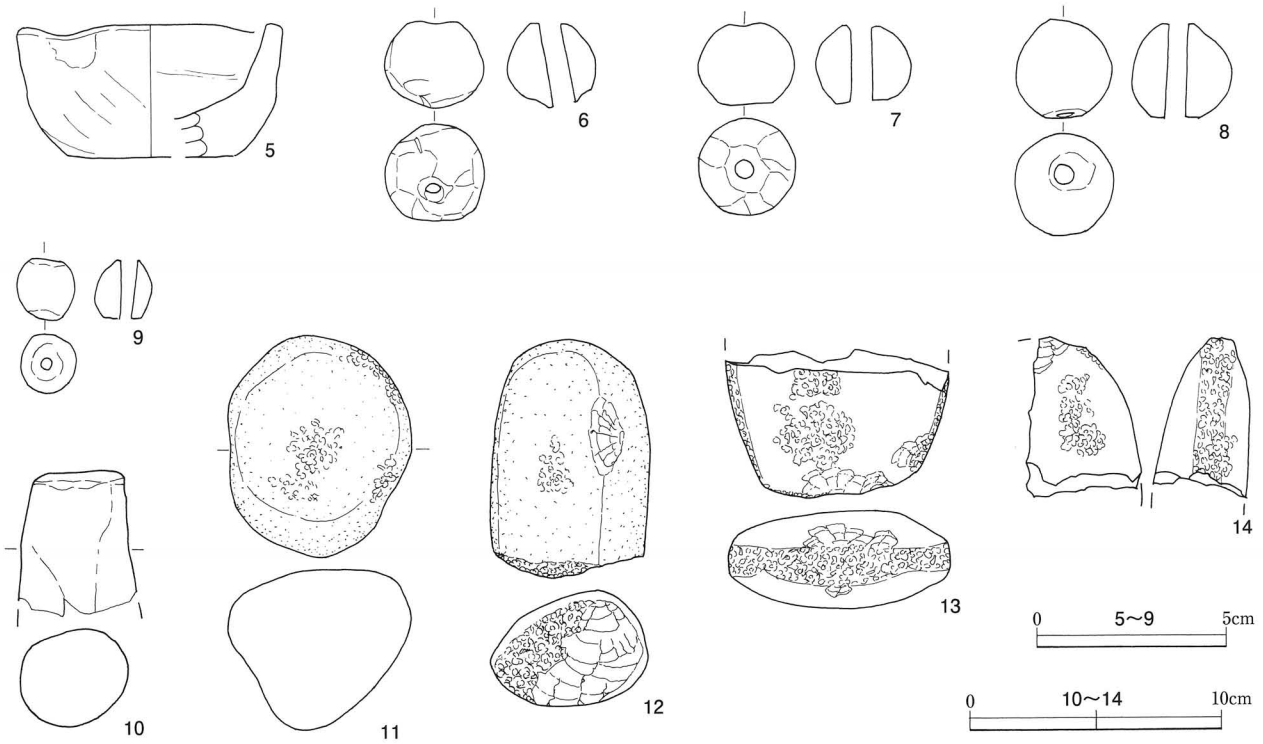


住居跡覆土
1層：明褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層　ローム粒・ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
3層：暗褐色土層　竈の掘り方内覆土。ローム粒・ロームブロック、砂粒を多く含む。焼土粒が目立つが、炭化物粒はほとんど見られない。攪乱を受けている。締まり有り。
4層：黒褐色土層　炭化物由来？の黒色土ブロックが混じる薄層。ローム粒・ブロックを含むが、焼土粒はほとんど見られない。締まり有り。

ピット覆土
1層：暗褐色土層　住居跡覆土２層に近似。ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり無し。
2層：暗黄褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。締まり無し。
3層：暗褐色土層　１層に比べローム粒を多く含み、色調がやや黄味がかる。ロームブロックを多く含み、白色粘土を僅かに含む。締まり有り。
4層：暗褐色土層　５層よりローム粒を多く含む。ロームブロックもまばらに多く含む。締まり有り。
5層：暗褐色土層　住居跡覆土２層に近似するが、暗い色調。



第58図　Ⅲ次20号住居跡実測図及び出土遺物（１）



第59図　Ⅲ次20号住居跡出土遺物（2）

規模・形態　平面は一辺4.9ｍの方形を呈し、南東壁の高さは20cmを測る。北西端から竈の掘り方と思われる掘込が検出され、それを通る主軸方向は北－26°－西である。ピットは7基検出され、うち深さ33～55cmを測り、方形に並ぶＰ１～４が主柱穴に、東隅の長径55cm、深さ25cmのＰ５が貯蔵穴に相当する。他の２基は、南東壁際中央に連なって穿たれている。地山ローム層からなる床面は主柱穴に囲まれた部分から竈掘り方にかけて硬化していた。残存する壁に沿って周溝が巡る。

覆土の堆積と遺物の出土状況　竈掘り方前の床面上には炭化物由来と思われる黒褐色土（４層）が薄くみられ、掘り方内には攪乱を受けた砂粒と焼土粒を多く含む３層が堆積していた。他の床面上は１，２層とした暗褐色土層に覆われていた。床面直上からは**5**のミニチュアと土器と**8**，**9**の球状土錘、**10**の支脚が、Ｐ１からは**1**の土師器が、Ｐ３からは**6**の球状土錘が出土している。**1**の土器から本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

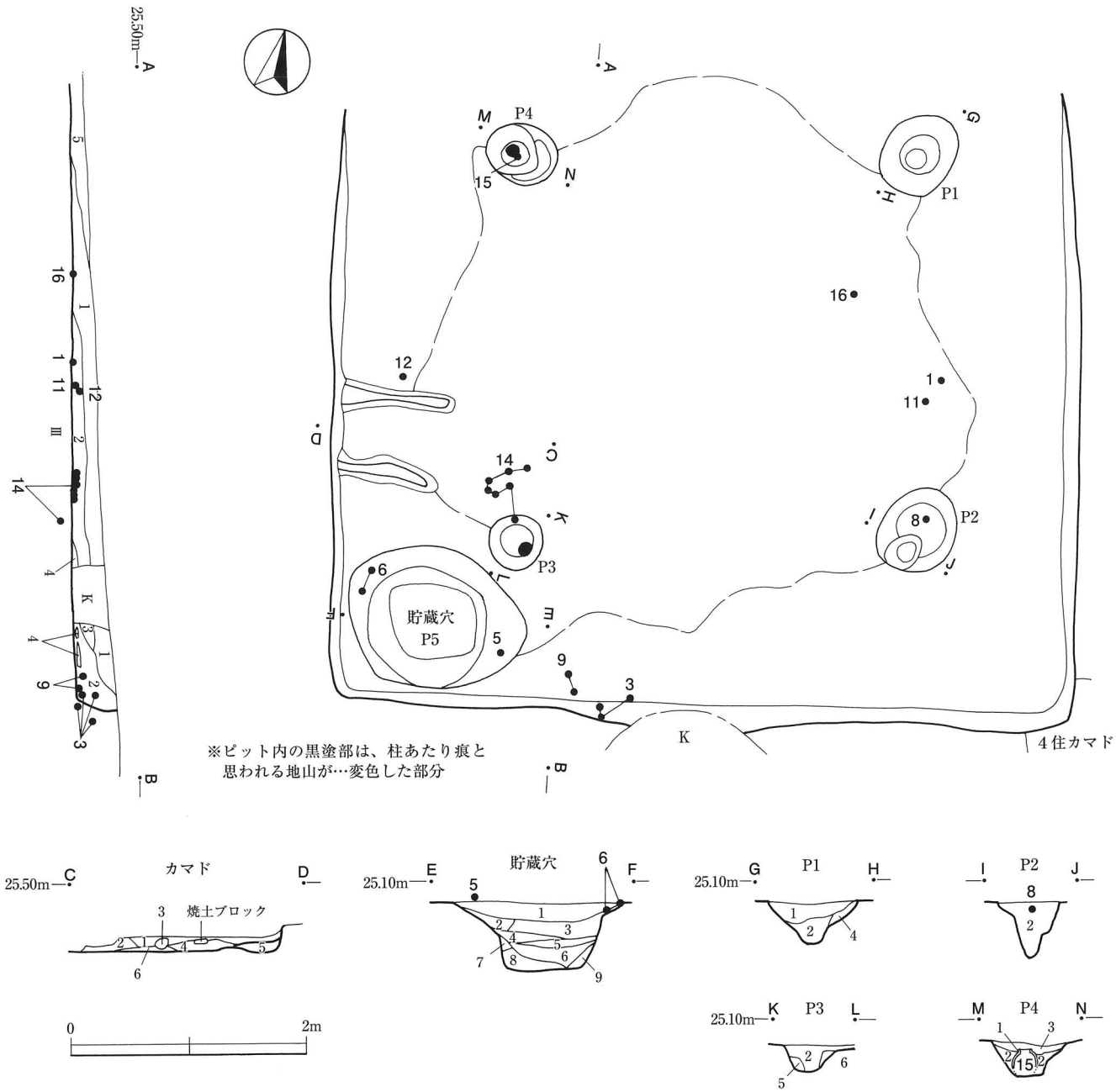
出土遺物　**1**～**4**は土師器で、**1**が杯形、**2**～**4**が甕形の土器。**4**には刷毛目が施されている。**5**がミニチュア土器、**6**～**9**が球状土錘、**10**が土製支脚、**11**，**12**が敲石、**13**，**14**が磨石である。

第21号住居跡（第60，61図）

検出状況　調査区東部に位置する。東壁が第３号住居跡に接し、北壁は遺存していない。

規模・形態　平面は東－西方向6.4ｍの方形を呈し、南壁の高さは33cmを測る。西壁南寄りに竈を有し、袖部が残る。南壁の方向は北－78°－東である。ピットは５基検出され、うち深さ21～48cmを測り、方形に並ぶＰ１～４が主柱穴に、南西隅の長径155cm、深さ57cmのＰ５が貯蔵穴に相当する。ローム層からなる床面は主柱穴に囲まれた部分から竈と貯蔵穴にかけて硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　竈には崩落した天井材と思われる砂っぽい土層が認められ、竈前の床面上と、南壁際の床面上～覆土下部かけて、炭化物由来と考えられる黒色系土層が堆積する。Ｐ１～４には住居跡覆土に近似する土層が堆積しており、Ｐ３，４の底面には柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が観察された。竈



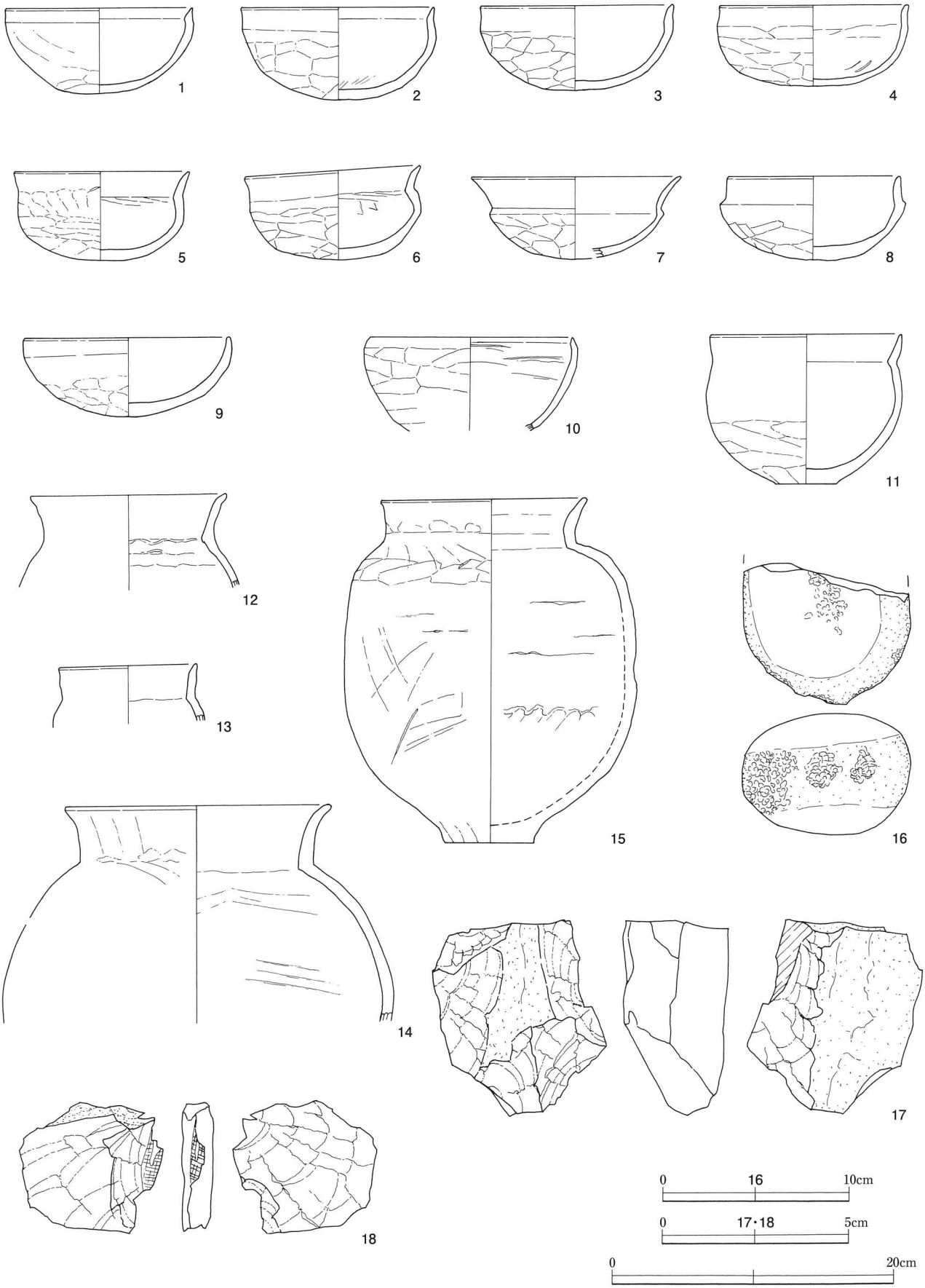
住居跡覆土
1層：暗茶褐色土層　ローム粒・ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗褐色土層　ローム粒・ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。　3層：暗黄色土層　ロームブロック。攪乱によるものか。
4層：黒色土層　床上あるいは2層下部にみられる薄層。炭化物が土壌化したものと思われる。焼土粒を少量含む。締まり無し。
5層：暗褐色土層　耕作土。ローム粒・ブロックを少量含む。締まり有り。

竈覆土
1層：黄褐色土層　天井材の崩落したものと思われる。砂っぽく、ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。締まり非常に有り、粘性やや無し。
2層：暗褐色土層　住居跡覆土2層にゆ対応。
3層：暗褐色土層　天井材のブロックが混じったもの。ローム粒を含み、上方に焼土がまとまって見られる。締まり有り、粘性やや有り。
4層：暗褐色土層　ローム粒、焼土粒を多く、炭化物粒を少量含む。焼土ブロックの西側にはロームブロック目立つ。締まり有り、粘性やや無し。
5層：暗褐色土層　煙道部の貼床と思われる。ローム粒を多く含む。締まり、粘性有り。
6層：黒褐色土層　竈焚口の炭化物が土壌化したものと思われる。ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。締まりやや無し、粘性有り。

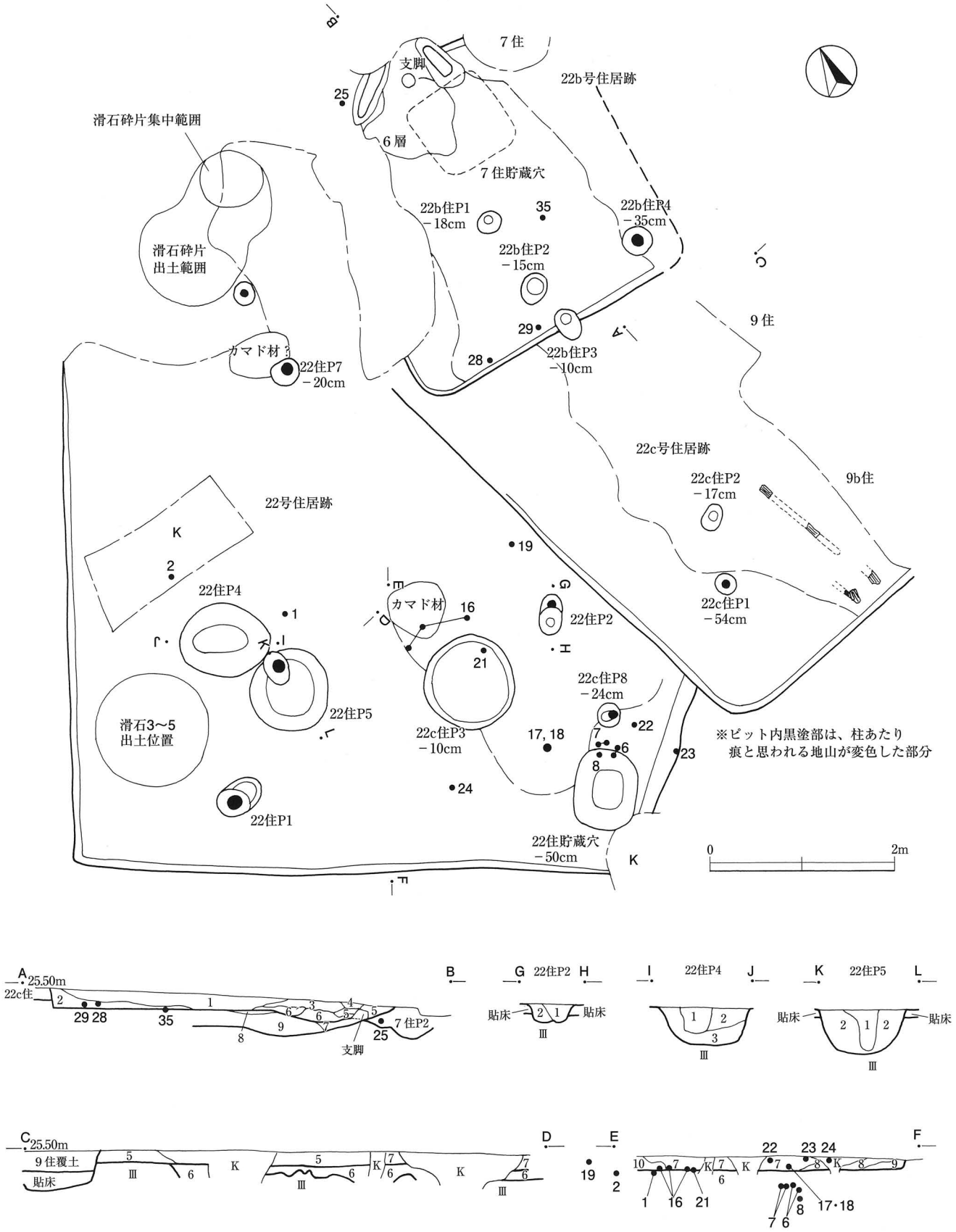
貯蔵穴覆土
1層：暗褐色土層　ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。締まり、粘性有り。　2層：暗褐色土層　ローム粒を少量含む。締まり、粘性有り。
3層：暗黄褐色土層　ロームを基調にしたもので、ローム粒・ロームブロックを含む。炭化物粒、焼土粒はほとんど見られない。締まり、粘性有り。
4層：黒褐色土層　ロームブロック、焼土粒を含む。締まりやや無し、粘性有り。　5層：黒褐色土層　ローム粒、炭化物粒を含む。締まりやや無し。
6層：暗褐色土層　5層土にロームブロックを多く含んだもの。締まりやや無し。　7層:暗褐色土層　炭化物粒、焼土粒、白色粘土ブロックが混じる。締まりやや無し。
8層：暗褐色土層　ロームブロックを多く含み、焼土粒も含む。埋め戻し土か。　9層：暗褐色土層　ロームブロックを多く含む。埋め戻し土か。

ピット覆土
1層：暗褐色土層　2層土より若干明るい色調。締まり有り。　2層：暗褐色土層　住居跡覆土2層土に対応。粘性有り。
3層：暗黄褐色土層　基調土は1層と同じだが、攪乱を受けている。　4層：暗黄褐色粘質土層　地山粘土とロームを基調とする。締まり有り。
5層：暗褐色土層　基調土は2層土と同じだが白色粘土ブロックを少量含む。締まり有り。　6層：暗褐色土層　5層土と同質だが白色粘土ブロックを多く含む。

第60図　Ⅲ次21号住居跡実測図



第61図　Ⅲ次21号住居跡出土遺物



第62図　Ⅲ次22, 22b, 22c号住居跡実測図

第22ｂ号住居跡覆土（Ａ－Ｂ断面図）
１層：暗褐色土層　ローム粒を多く含み、ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。
２層：暗褐色土層　１層に比べ黒っぽい色調。ローム粒を少量含み、炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。
３層：明褐色砂質土層　灰白色砂、焼土ブロックを多く含み、炭化物粒を少量含む。締まり有り。
４層：暗黄褐色砂質土層　竈材ブロック。砂粒、ロームブロックを多く含む。締まり有り。
５層：暗褐色土層　焼土粒をを多く含み、砂粒、ロームブロック、炭化物粒を少量含む。締まり有り。
６層：黒色土層　炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まりやや無し。
６´層：黒褐色土層　砂粒、ローム粒、炭化物粒を少量含む。締まりやや無し。
７層：暗茶褐色土層　灰白色砂ブロックと黒褐色土が斑状に混じる。焼土ブロックを多く含む。締まり無し。
８層：暗黄褐色土層　貼床。炭化物粒、焼土粒を少量含む。下部に黒色土の薄層がみられる。硬く締まり有り。
９層：暗黄褐色土層　貼床。大形のロームブロックが目立つ。炭化物粒、焼土粒を少量含む。硬く締まり有り。

第22，22ｃ号住居跡覆土（Ｃ－Ｄ，Ｅ－Ｆ断面図）
５層：暗褐色土層　22ｃ住覆土。ローム粒を多く、ロームブロックを少量含む。締まり有り。
６層：暗黄褐色土層　22，22ｃ住貼床。ロームを主体とし、ロームブロックを多く含む。硬く締まり有り。
７層：暗褐色土層　22住覆土。５層土より暗い色調。ローム粒・ブロック、焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。締まり有り。
８層：明褐色土層　22住覆土。ローム土を多く、ロームブロックを少量含む。上部に焼土ブロックが目立つ。締まり有り。
９層：明褐色土層　22住覆土。８層土と同質だが、焼土粒は見られない。締まり有り。
10層：灰白色砂質土ブロック　一部被熱赤化している。竈材か。

ピット覆土
22住Ｐ１：暗黄褐色土層　ロームブロックがやや目立つ。炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。底面に径10cmの柱あたり痕有り。
22住Ｐ２・１層：暗褐色土層　ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。
22住Ｐ２・２層：暗黄褐色土層　ロームブロック、焼土粒を少量含む。締まり有り。本層下に底面に径7cmの柱あたり痕有り。
22住Ｐ３：暗黄褐色土層　ロームブロック、焼土粒を少量含む。
22住Ｐ４・１層：暗褐色土層　ロームブロックを少量含む。締まり有り。
22住Ｐ４・２層：暗黄褐色土層　ロームブロック、炭化物粒を少量含む。締まり有り。
22住Ｐ４・３層：暗黄褐色土層　大形のロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。硬く締まり有り。
22住Ｐ５・１層：暗褐色土層　ロームブロックを多く、焼土粒を少量含む。締まり有り。
22住Ｐ５・２層：暗黄褐色土層　大きめのロームブロックが目立つ。ピット北端の本層下の底面に径12cmの柱あたり痕有り。
22住Ｐ７：暗褐色土層　ロームブロックを多く含む。締まり有り。
22ｂ住Ｐ１：暗褐色土層　貼床を掘り込んでいる。ロームブロックを少量含む。締まり有り。
22ｂ住Ｐ２：暗黄褐色土層　貼床を掘り込んでいる。ロームブロックを少量含む。硬く締まり有り。貼床の一部の可能性あり。
22ｂ住Ｐ３：暗褐色土層　貼床を掘り込んでいる。ロームブロックを少量含む。締まり有り。
22ｂ住Ｐ４：暗褐色土層　22ｂ住の貼床下から検出。ロームブロックを多く含む。締まり有り。底面に柱あたり痕有り。
22ｃ住Ｐ１：暗黄褐色土層　ロームブロックを多く含み、炭化物粒、焼土粒が目立つ。締まり有り。底面に柱あたり痕有り。
22ｃ住Ｐ２：暗黄褐色土層　ロームブロックを多く含む。硬く締まり有り。

とＰ５周辺の床面直上から覆土下部にかけて**3. 5. 6. 9, 12, 14**の土師器が、東部の床面直上から覆土下部にかけて**1, 8, 11**の土師器と**16**の石器が出土し、Ｐ４内には**15**の甕形土器が完形のまま残されていた。以上の遺物出土状況から、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

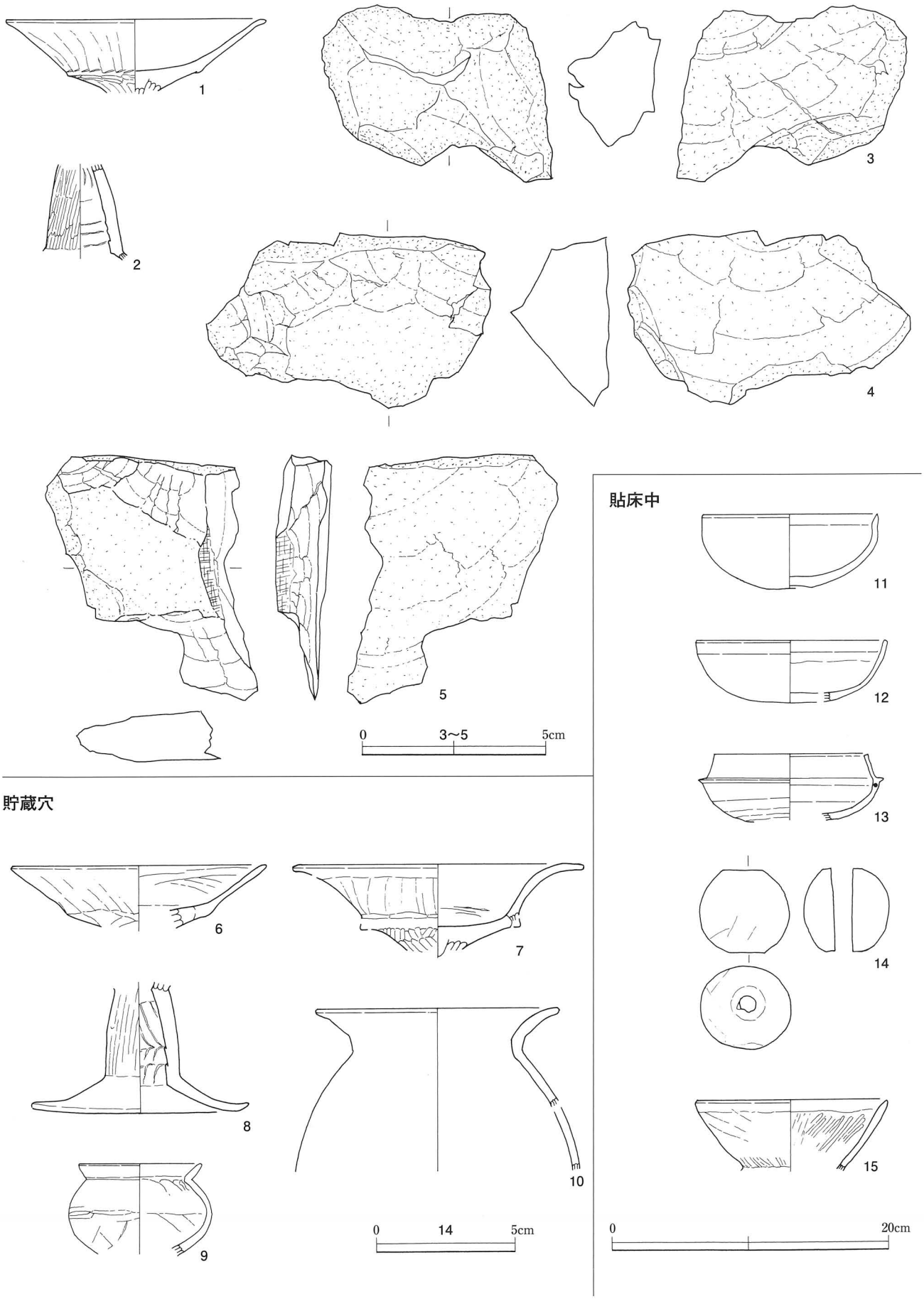
出土遺物　**1**～**15**は土師器で、**1**～**9**が杯形、**10, 11, 13**が椀形、**12, 14, 15**が甕形の土器。**16**は磨石で、**17**は滑石の原石。**18**は滑石製の剥片で、背面の剥離面の打点付近に擦れたような削り痕が残る。

第22号住居跡（第62～64図）

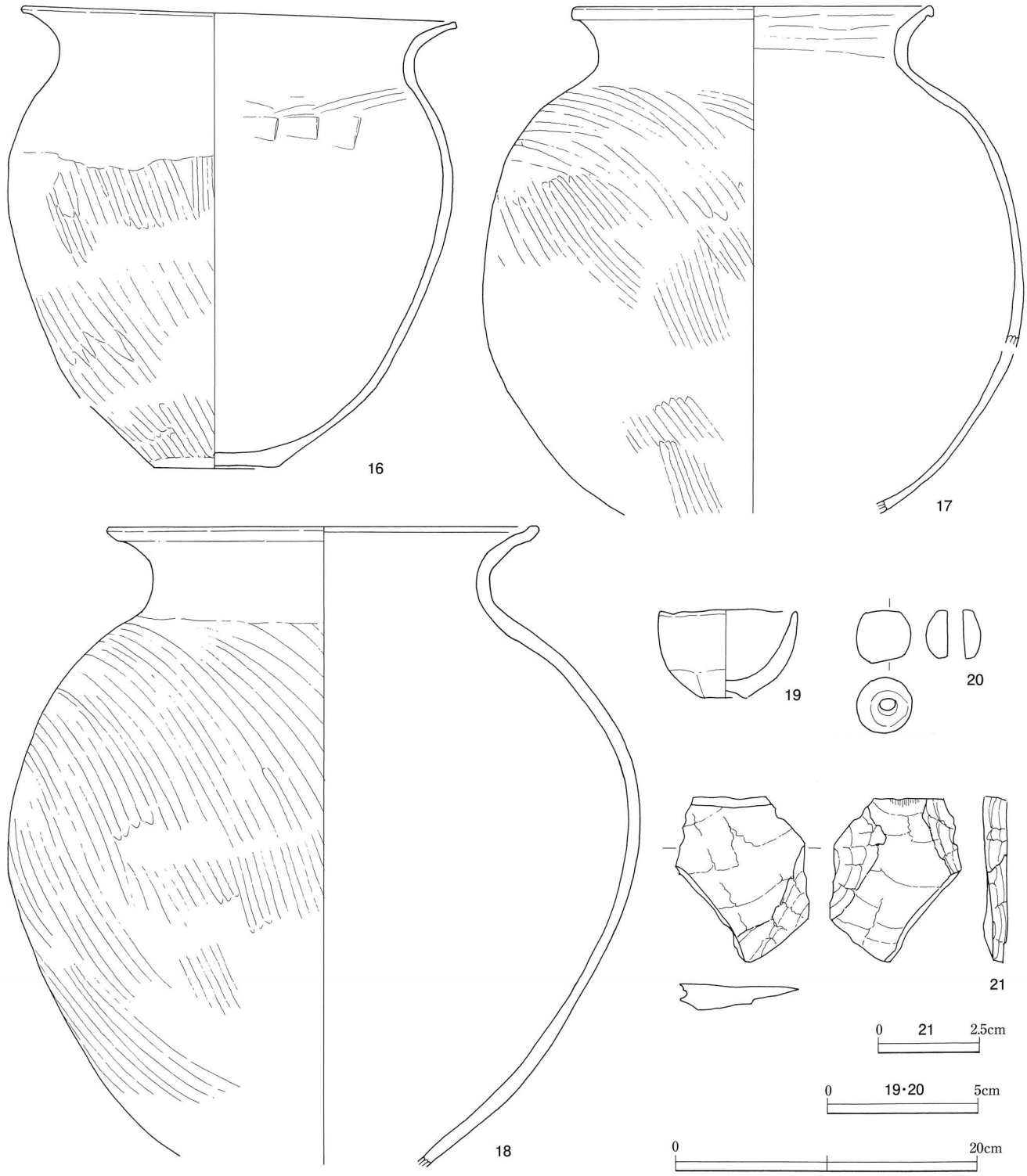
検出状況　調査区中央部に位置する。東部を第22ｂ，ｃ号住居跡に壊され、北東壁は検出されていない。

規模・形態　壁の西隅は明瞭に検出されたが、南隅は鈍角になり、また床面の残存部をみると北東－南西方向が長い不正な平面を呈している。残存する南西壁は６ｍ強で、壁の高さは12cmを測る。同壁の方向は北－29°－西である。ピットは９基検出されたが、底面に柱あたり痕と思われる地山が変色した部分がみられるＰ１，２，５，６，７，８は柱穴に、南隅の長径85cm、深さ50cmのものは貯蔵穴に相当しよう。基本的に地山ローム層を床面とするが、床面の硬化が認められた南部では、ロームを主体とした土（６層）によって貼床が施されていた。この貼床・硬化部の一端には竈材と思われる一部が被熱赤化した灰白色砂質土のブロックが存在することから、この貼床・硬化部は別の住居跡の可能性がある。一方、近接する貯蔵穴は貼床下から検出されたことから、地山ローム層を床面とする住居跡に属するものと捉えられる。なお、硬化部の砂質土と同様なブロックが北部からも検出されている。

覆土の堆積と遺物の出土状況　覆土には７～９層とした土層が対応する。遺物の出土状況を、前述した別遺構の重複を考慮して整理すると、地山ローム層を床面とする部分から出土した**1**～**5**、貯蔵穴出土の**6**～**10**、貼床中出土の**11**～**15**、南部床面硬化部の床面直上から覆土下部にかけて出土した**16**～**21**、南部床面硬化部上の覆土上部から出土した**22**～**24**に分けられる。なお、**3**

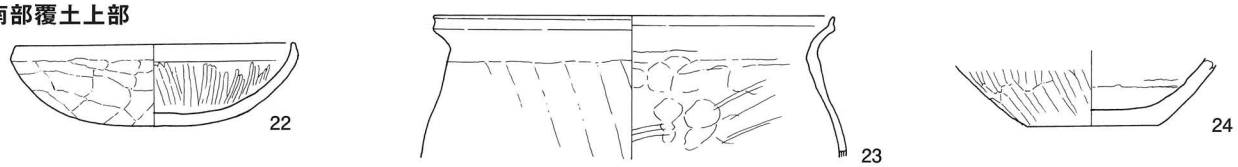


第63図　Ⅲ次22号住居跡出土遺物（1）

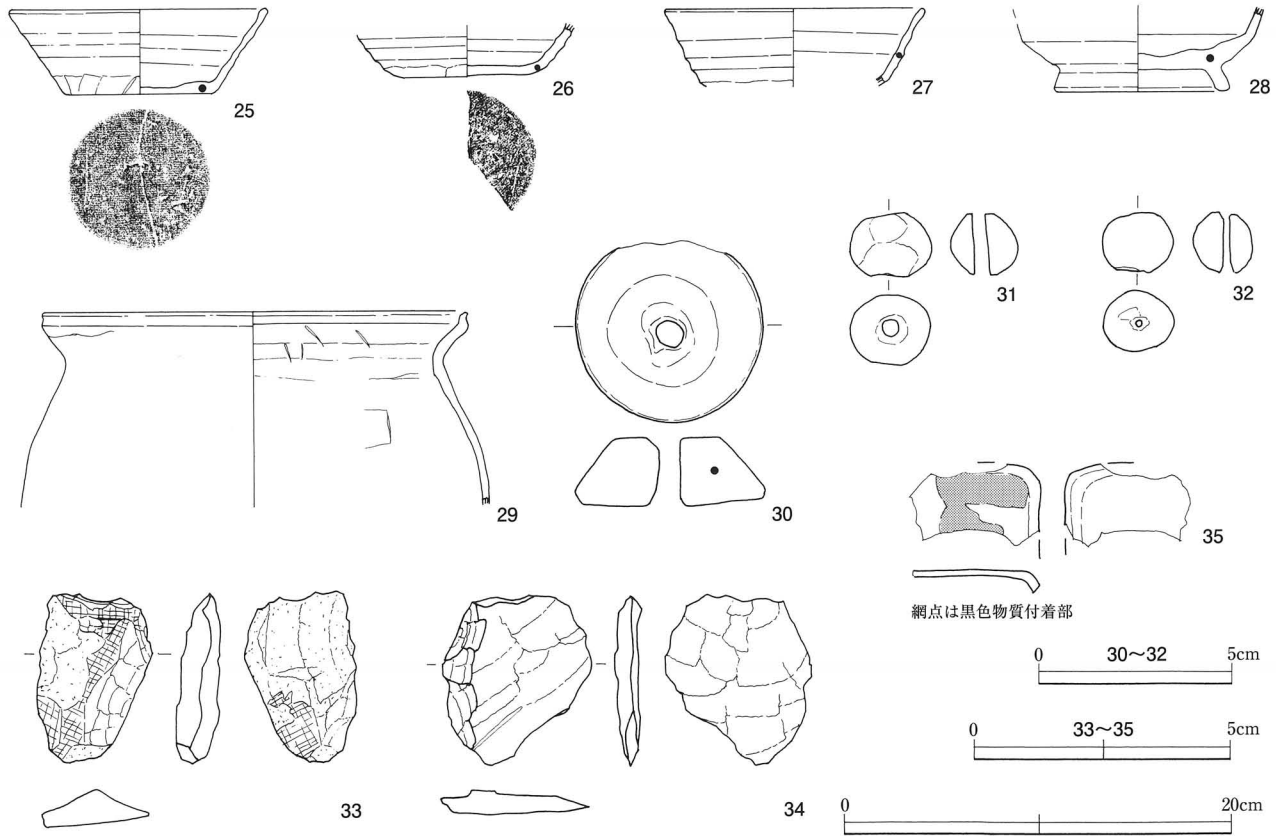


南部床面～覆土下部

南部覆土上部



第64図　Ⅲ次22号住居跡出土遺物（2）



第65図　Ⅲ次22b号住居跡出土遺物

～5の滑石は西隅の覆土中からまとまって検出され、北西部では滑石の砕片が集中する箇所が認められた。以上から本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

出土遺物　1, 2, 6～12, 15～18, 22～24は土師器で、1, 2, 6～8が高杯形、11, 12, 22が杯形、9が椀形、15が坩形、10, 16～18, 23, 24が甕形の土器。13は受部がみられる須恵器杯身、19はミニチュア土器、14, 20は球状土錘。3, 4は滑石の原石、5は板状の滑石原石を折断分割したもので、折断面の打点付近に擦れたような削り痕が残る。

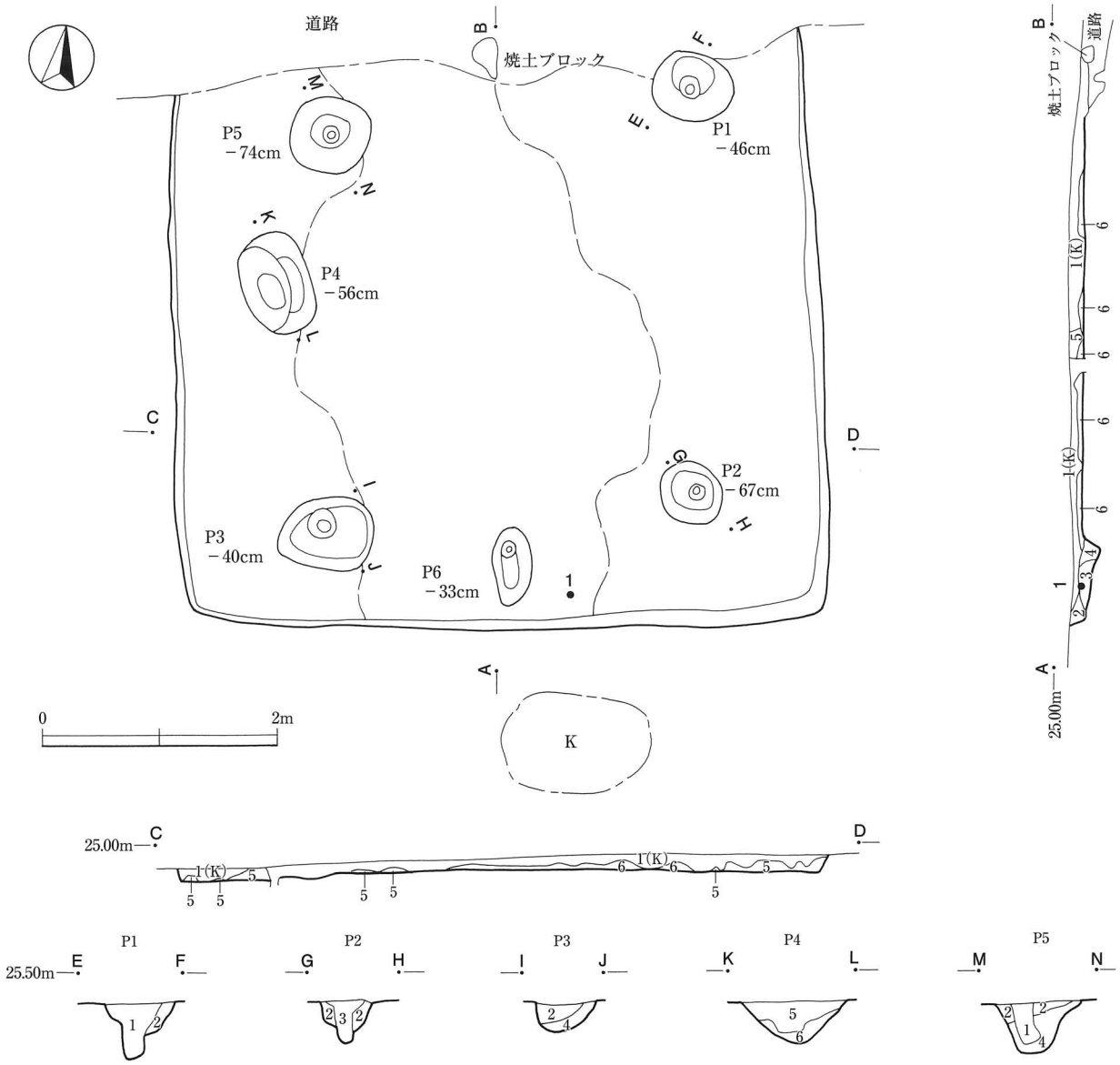
第22 b号住居跡（第62, 65図）

検出状況　調査区の中央北部に位置する。第7, 9, 22, 22 c号住居跡を壊してつくられているが、西壁は撹乱によって遺存せず、東壁はベルトの土層断面でしか確認できていない。

規模・形態　平面は北－南方向3.4 m、東－西方向推定3.3 mの隅丸方形を呈し、南壁の高さは21cmを測る。北壁中央に壁から煙道部が張り出した竈を有し、袖部と支脚が残る。竈を通る主軸方向はほぼ南北に一致する。ピットは深さ10～35cmを測る4基（P 1～4）が検出されたが、うちP 4の底面には柱あたり痕と思われる地山が変色した部分が認められた。床面は8, 9層とした暗黄褐色土による貼床が施され、南北方向に延びる帯状の硬化部が認められた。なお、貼床下からは第7号住居跡の貯蔵穴が確認されている。

覆土の堆積と遺物の出土状況　基本的な覆土は1, 2層とした暗褐色土層であり、竈前の床面上には炭化物粒を多く含む黒色土層の6層が堆積していた。床面直上からは25, 27, 29の土器と34の滑石製剥片、35の腰帯具が、竈内からは26の須恵器と32の球状土錘が、貼床中からは30の紡錘車が出土している。以上の出土状況から本遺構の時期は奈良・平安時代と捉えられる。

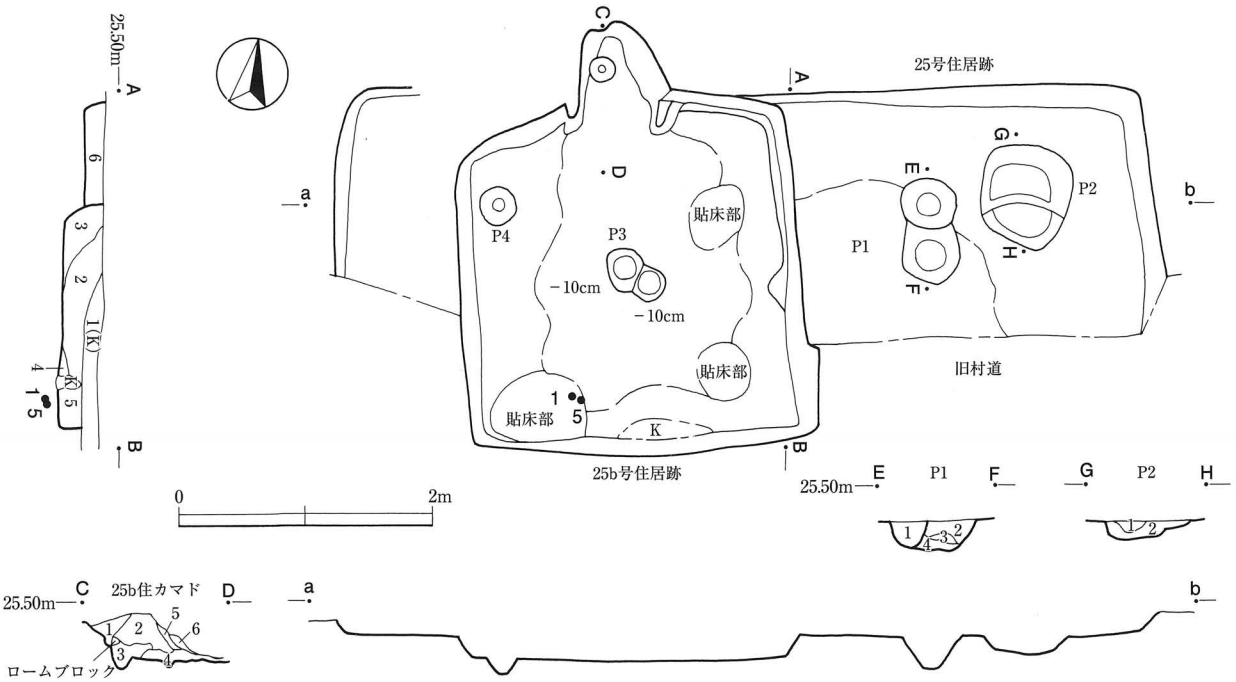
出土遺物　25～28は須恵器杯で、29は土師器甕形土器。30は還元焔焼成の須恵質土製紡錘車。31は球状土錘で、32は土玉。33は小型の滑石原石に削りが施されたもので、34は滑石製の剥片。35は腰帯具の銅製巡方の破片で、表面に漆と思われる黒色物質が付着する。



住居跡覆土
1層：暗褐色土層　耕作による攪乱層。白色粘土ブロック、粘土化したロームブロックを多く含む。締まり有り。
2層：暗茶褐色土層　ロームブロックを多く、黒色土粒、焼土粒を少量含む。締まり無し。
3層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを斑状に多く含む。締まり有り。
4層：暗褐色土層　ローム粒・ブロックを斑状に少量含む。炭化物粒も少量含む。締まり有り。
5層：暗黄褐色土層　ローム粒・ブロックを多く含む。締まり有り。
6層：暗茶褐色土層　ローム粒・ブロックを斑状に多く含む。炭化物粒、焼土粒も多く含む。締まり有り。

ピット覆土
1層：暗褐色土層　ローム粒を多く、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒を少量含む。締まり有り。
2層：暗黄橙褐色粘質土層　ロームブロック、白色粘土ブロック斑状に多く含む。硬く締まりあり。
3層：暗褐色土層　ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒を多く含み、大形の炭化材が目立つ。締まり有り。
4層：暗橙褐色粘質土層　白色粘土ブロックを斑状に多量に含む。硬く締まり有り。
5層：暗褐色土層　ローム粒を多量に含み、粘土ブロック、ブロックを多く含む。黒色土粒、焼土粒も少量含む。締まり有り。住居跡覆土５層に近似。
6層：暗黄褐色粘質土層　粘土ブロック、ロームブロックを斑状に多く含む。硬く締まり有り。

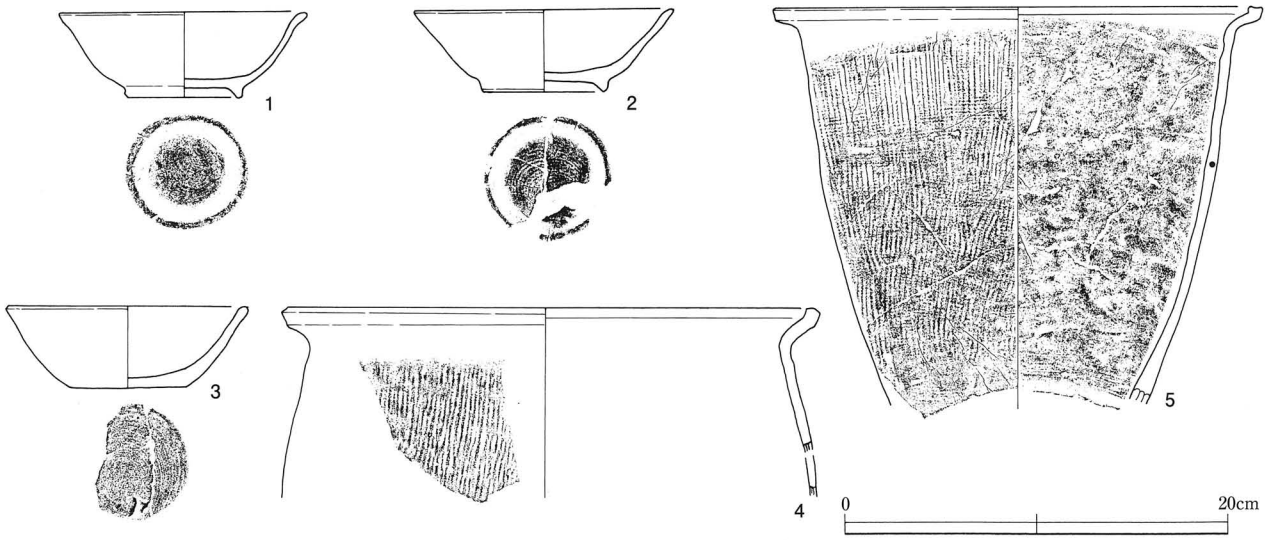
第66図　Ⅲ次23号住居跡実測図及び出土遺物



住居跡覆土
1層：暗褐色土層　旧村道。ローム粒を、焼土粒を含む。とても硬く締まり有り。
2層：暗褐色土層　25 b住覆土。ローム粒、炭化物粒、焼土粒を含む。締まり、粘性有り。　3層:暗褐色土層　25 b住覆土。ローム粒を含む。締まり、粘性有り。
4層：暗褐色土層　25 b住覆土。ローム粒、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり、粘性有り。
5層：暗褐色土層　25 b住覆土。細かいローム粒を少量、細かい焼土粒を僅かに含む。締まり非常に有り、粘性有り。
6層：黄褐色土層　25住覆土。ローム粒、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり有り、粘性やや無し。

25 b住竈覆土
1層：暗褐色土層　竈煙道部と思われる。ローム粒を、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり、粘性有り。
2層：黄褐色土層　竈天井材と思われる。焼土粒・ブロックを含み、炭化物粒もまばらに含む。締まり、粘性有り。
3層：暗褐色土層　竈煙道部と思われる。炭化物粒、焼土粒を含む。締まり、粘性有り。　4層：黒褐色土層　炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まりやや無し、粘性有り。
5層：暗褐色土層　炭化物粒、細かい焼土粒を含む。締まりやや無し、粘性有り。　6層：黄褐色土層　焼土粒を含み、炭化物粒をまばらに含む。締まり、粘性有り。

ピット覆土
P1・1層：暗褐色土層　ローム粒、焼土粒をまばらに含み、炭化物粒を僅かに含む。締まり、粘性無し。
P1・2層:暗褐色土層　ローム粒（細かいものから径10mmくらいまで)、焼土粒をまばらに含み、炭化物粒を僅かに含む。床面と同じくらい硬く締まる。
P1・3層：暗褐色土層　締まり、粘性無し。フカフカしている。　P1・4層：黄褐色土層　締まり、粘性有り。
P2・1層：暗褐色土層　ローム粒・ブロック（径10mm程)、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。締まり、粘性やや無し。
P2・2層：暗褐色土層　1層より若干明るい色調で、締まり、粘性有り。ローム粒、炭化物粒、焼土粒をまばらに含む。
P3：暗褐色土層　ローム、炭化物粒、焼土粒を多く含む。締まり、粘性有り。　P4：暗褐色土層　炭化物粒、焼土粒を含む。締まり、粘性有り。



第67図　Ⅲ次25, 25b号住居跡実測図及び出土遺物

第22 c号住居跡（第62図）

検出状況　調査区の中央北部に位置する。第9，9 b，22 b号住居跡に北部と東部を壊され、西部は第22号住居跡を壊している。

規模・形態　残存していた西壁は5.3mで、方向は北－18°－西である。南壁の高さは10cm程で、ピットは2基検出されており、P 1とした柱穴状のピット底面には柱あたり痕が認められた。床面は第22号住居跡と共通する6層によって貼床が施されており、西壁際を除く床面は硬化していた。

覆土の堆積と遺物の出土状況　観察された覆土は5層とした暗褐色土層の単一層であり、南部からは床面より若干浮いた状態で炭化材が検出された。遺物は奈良・平安時代に該当する土師器、須恵器を含む土器の小片等が出土している。このことと、他住居跡との重複関係から、本遺構の時期は、奈良・平安時代と捉えられる。

第23号住居跡（第66図）

検出状況　調査区の西部に位置する。北壁は旧村道の影響で遺存していない。

規模・形態　平面は東－西方向5.65 mの方形を呈し、南壁の高さは15cmを測る。北部の旧村道による撹乱下からは竈の火床面と思われる焼土ブロックが検出されている。竈を通る主軸方向は北－9°－西である。ピットは6基検出されており、うち方形に並ぶ深さ23～48cmのP 1～3，5が主柱穴と思われる。床面は地山ローム層からなり、南北方向に延びる帯状の硬化部が認められた。

覆土の堆積と出土遺物　覆土上部は撹乱層で、床面上には5，6層としたロームブロックを多く含む土層が堆積する。P 1，2，5の覆土には柱痕部が観察された。**1**，**2**は土師器杯形土器で、**1**は床面直上出土である。このことから、本遺構の時期は古墳時代と捉えられる。

第25，25 b号住居跡（第67図）

検出状況　調査区の中央部に位置する。第25号住居跡は旧村道と第25 b号住居跡の構築によって壊されており、北壁付近約1/3が確認できたに過ぎない。

規模・形態　第25号の平面は、東－西方向6.15 mの方形を呈し、北壁の高さは17cmを測る。北壁の方向は北－82°－東である。東部からは深さ15～25cmの皿状のピットが2基検出され、地山ローム層かなる床面の中央付近は硬化していた。第25 b号の平面は、北－南方向2.9 m、東－西方向2.7 mの方形を呈し、壁の高さは30cmを測る。北壁中央に壁から煙道部が突出する竈を有し、短い袖部が残る。竈を通る主軸方向は北－15°－西である。ピットは中央部、西壁際、竈内の3個所で検出された。床面は基本的に地山ローム層かなるが、部分的に貼床が施され、中央部が硬化していた。

覆土の堆積と出土遺物　第25号の覆土は6層とした黄褐色土層の単一層である。遺物は土器小片が出土したにすぎない。

第25 b号の床面上には2～5層とした暗褐色土層が堆積する。竈には天井材や煙道部が良く残り、燃焼部には炭化物粒を多く含む黒褐色土層が堆積する。**1**～**4**は土師器で、**1**，**2**は台付椀形、**3**は椀形、**4**は甕形の土器である。**5**は須恵器の甕もしくは甑。いずれも覆土中の出土であり、これらの遺物から第25 b号の時期は平安時代と捉えられる。

V. まとめ

今回のⅢ次にわたる大作台遺跡の発掘調査では、弥生時代１軒、古墳時代21軒、奈良・平安時代16軒の住居跡が確認され、当該期の集落の存在が明らかになった。また、早期～中期の縄文土器や、中世以降の塚状遺構も２基検出され、複数の時代にわたって、当地が繰り返し人々に利用されていたことが理解された。

弥生時代の遺構については、第Ⅰ次調査で後期の住居跡が１軒（Ⅰ次３号）検出されたのみであるが、遺構外（後世の遺構内も含む）からは中期～後期に至る弥生土器破片が多数出土しており、中期から活動痕跡が認められる遺跡として注目される。

古墳時代では、Ⅰ次１，２号住居跡で前期に該当する刷毛目が施された甕形土器等が出土している他は、中期～後期にかけての住居跡が主体となる。遺物としては、滑石製模造品の出土が目立ったが、特に、Ⅲ次７号住居跡から集中して検出された双孔円板群は、孔間距離にいくつかのまとまりが認められるもので、穿孔技法を考える上で興味深い資料である。また、Ⅲ次１号住居跡の貼床上面で検出された赤色土は、付編に掲載した偏光顕微鏡観察とＸ線回析分析の結果により、貼床土が270～325℃程度以上、750℃未満の熱を受け赤色化した焼土であることが想定されたが、通常の炉址と異なり表面が硬化していたことや、その上面に棒状の土製品が遺存していたことなど、今後さらに検討していく必要がある事象といえる。

奈良・平安時代の遺物としては、「志太」と書かれた墨書土器（Ⅱ次５号住居跡出土）、皇朝十二銭の隆平永寶（Ⅲ次第14号住居跡出土）、腰帯具の銅製丸鞆（Ⅲ次９号住居跡出土）及び銅製巡方（Ⅲ次22ｂ号住居跡出土）が、律令期の信太郡内の様相を考察していく上で興味深い遺物といえる。ちなみに、「志太」の墨書土器は、同じ信太地区内の信太入子ノ台遺跡からも発見されており、皇朝十二銭の出土は村内初となる。

このように、大作台遺跡は古代信太郡における当地域の位置付けを明らかにしていく上で重要な集落遺跡といえるが、ここで今回出土した須恵器の編年的位置付けを行い、今後、集落構成を復元していくための手掛かりとしたい。

須恵器杯の編年的位置付け

出土須恵器で主体をなすのは、新治窯跡群産と思われるものである。そのため、赤井博之氏による同窯跡群産の須恵器編年［赤井1998］に基づき、各住居跡出土の須恵器杯の編年的位置付けを行う。検討にあたっては、新治窯跡群産須恵器の特徴となっている胎土に白色雲母粒を含み、底径指数（底径／口径×100）と、器高指数（器高／口径×100）が算出できる杯を対象にした。

Ⅱ次５住出土須恵器杯　覆土から出土した１～４が該当する。法量比は**1**が底径指数50.75、器高指数31.34、**2**が底径指数56.06、器高指数30.30、**3**が底径指数57.14、器高指数31.75、**4**が底径指数45.16、器高指数29.03である。法量比でみると**2**，**3**が「東城寺段階」～「東城寺桑木段階」の窯跡資料に相当するが、**1**，**4**は該当する窯跡資料が無く、赤井氏と佐々木義則氏が、消費地遺跡出土の杯を対象に編年を試みた際の「６類」の法量比に対応する［赤井・佐々木1996］。「６類」は新治窯跡群終焉期の９世紀第３～４四半期に位置付けられたもので、やはり消費地遺跡出土須恵器から想定した赤井氏編年の「X_3段階」に相当する。「法量比にばらつきをみせる。形態も体部が内彎するものが認められるようになり、焼成も悪く、灰黄色や橙色を呈するものが多くなる。」とされる「X_3段階」の特徴を加味すると、**2**，**3**も含め、対象とした４個体の当住居跡出土須恵器杯は、９世紀末～10世紀初頭の「X_3段階」に該当する可能性がある。

Ⅲ次７ｂ住出土須恵器杯　床面直上から出土した**81**が該当する。法量比は底径指数60.00、器高指数34.55であり、８世紀第４四半期～９世紀第１四半期とされた「東城寺桑木段階」～「小高村内段階」の窯跡資料に相当する。体部下端に篦削りが認められることも、当該段階であることに矛盾しない。

Ⅲ次９ｂ住出土須恵器杯　覆土出土の**11**と竈覆土１

層から出土した13が該当する。法量比は11が底径指数61.43、器高指数34.29、13が底径指数66.92、器高指数30.77である。法量比でみると、11が8世紀第4四半期～9世紀第1四半期とされた「東城寺桑木段階」～「小高村内段階」に、13が8世紀中頃～同第3四半期とされる「東城寺寄居前A段階」～「東城寺段階」に相当する。この法量比による位置付けを裏付けるように、底部が一方向の粗い撫で整形の11に比べ、13は体部下端の篦削りの幅が狭く、底部整形も多方向の篦削りであるなど、より古相の整形技法を示す。

Ⅲ次19ｂ住出土須恵器杯　床面直上から出土した10，11，14と覆土出土の13が該当する。法量比は10が底径指数69.92、器高指数33.33、11が底径指数42.06、器高指数35.71、13が底径指数45.07、器高指数30.28、14が底径指数44.12、器高指数30.15である。法量比でみると、10が8世紀中頃とされる「東城寺寄居前A段階」に近似するのに対し、11，13，14は9世紀第3四半期とされる「小野1号窯段階」に相当する。11，13には「小野1号窯段階」に特徴的な体部下端における幅の広い篦削りと、底部における一方向一回の篦削り整形が認められる。

Ⅲ次19ｃ住出土須恵器杯　床面直上から出土した21，23，24が該当する。法量比は21が底径指数67.54、器高指数28.95、23が底径指数69.12、器高指数32.35、24が底径指数61.54、器高指数32.31である。法量比でみると、21，23が8世紀中頃とされる「東城寺寄居前A段階」に、24が8世紀中頃～同第4四半期とされる「東城寺寄居前A段階」～「東城寺桑木段階」に相当する。23の底部整形は多方向の篦削りであり、「東城寺寄居前A段階」の整形技法から外れるものではない。また、上記の法量比による位置付けは、重複するⅢ次19ｂ号住居跡から出土した須恵器杯の編年的位置付けとも矛盾しない。

Ⅲ次22ｂ住出土須恵器杯　床面直上から出土した25が該当する。法量比は底径指数54.81、器高指数33.33であり、9世紀第2四半期とされた「東城寺寄居前B段階」の窯跡資料に相当する。

以上の須恵器杯の編年的位置付けにより、奈良・平安時代については、少なくとも8世紀中頃～10世紀初頭までの期間、集落が営まれていたことが想定される。

最後に、遺存状態が悪く、遺構や遺物の複雑な検出状況を呈した現地調査において、根気よく発掘し、多くの貴重な記録を残された調査担当者や作業員の方々に敬意を表すると同時に、その成果を本報告書に全て反映できなかったことを反省し、本文の結びに代えたい。

引用・参考文献

赤井博之・佐々木義則　1996 「新治窯跡群産須恵器杯ＡＩの変化―消費地の様相―」婆良岐考古 18　婆良岐考古同人会

赤井博之　1998 「古代常陸新治窯跡群基礎的研究―奈良・平安時代の須恵器編年を中心に―」婆良岐考古 20　婆良岐考古同人会

大川清・大島秀俊編　1977 『茨城県美浦村　虚空蔵貝塚』美浦村教育委員会

大竹房雄他　1986 『常陸笹山』美浦村教育委員会

奥富雅之他　1996 『興津地区遺跡群　高野台遺跡　原畑遺跡　稲荷山遺跡』美浦村教育委員会

駒沢悦郎　2009 『茨城県教育財団文化財調査報告　第 317 集　大谷貝塚』茨城県教育財団

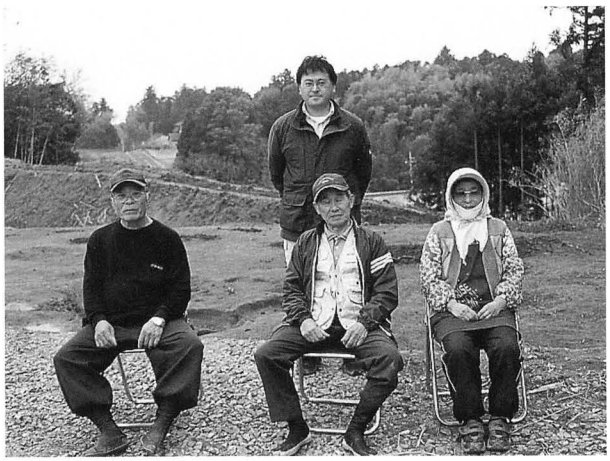
豊崎卓　1970 『東洋史上より見た　常陸国府・郡家の研究』山川出版社

中村哲也　2009 「貝ヶ窪貝塚の浮島Ｉ式土器―浮島式土器をめぐる研究史探訪・その２―」茨城県考古学協会誌 21

西村正衛　1968 「茨城県稲敷郡美浦村興津貝塚（第１次調査）」学術研究 17　早稲田大学教育学部

美浦村教委　2001 『茨城県稲敷郡美浦村　美浦村遺跡分布調査報告書および美浦村遺跡分布図』美浦村教育委員会

美浦村史編さん委員会　1986 『美浦村石造物資料集』美浦村教育委員会



付編

大作台遺跡で検出された赤色土の分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

美浦村信太に所在する大作台遺跡は、霞ヶ浦南岸の沖積低地に臨む台地上に位置する。台地は、稲敷台地の東部に相当し、霞ヶ浦に流れ込む小河川により開析された支谷が分布する。信太付近の台地は、下末吉海進後の海退期に形成された河成段丘である上位台地Ｃに区分され、その形成年代はおよそ10万年前前後とされている（貝塚ほか編，2000）。これまでに行われた発掘調査において本遺跡は、弥生時代から平安時代の集落跡が確認されている。

本報告では、３次調査で検出された古墳時代中～後期とされる住居跡において、その床面で認められた赤～橙色に変色した土を対象とし、薄片作製による偏光顕微鏡観察とＸ線回折分析を行い、鉱物の被熱による変化の状況から、被熱の有無と被熱した場合にはどの程度の温度であったかなどについて検証する。

１．試料

分析の対象とされた焼土は、大作台遺跡３次調査で検出された第１号住居址床面の焼土址である。第１号住居址の床面は、地山とされるローム層の上位に堆積する1J3層とされる暗褐色土とその上位に堆積する1J2層とされる貼床土から構成されている。貼床土は、やや硬化した褐色を呈するロームである。

発掘調査所見によれば、焼土址は、床面上に最大幅140cm以上にわたって広がっており、表面は赤色を呈し、硬化しており、光沢を有する。部分的に橙色を呈する範囲も認められている。また、炭化物は少量散在する程度とされている。また、焼土址の断面は、表層の１層から３層まで分層されており、１層は1J2層が赤化した赤褐色土、２層および２’層は1J3層が赤化した暗褐色土および赤褐色土、３層は地山のロームが赤化した赤黄色土とされている。

試料は、焼土址１層より赤色部（試料名：炉址焼土（赤））と橙色部（試料名：炉址焼土（橙））が各１点ずつ採取され、さらに焼土址に近接する貼床土から１点（試料名：貼床（炉址に接する部分））、焼土址から離れた部位の貼床土から１点（試料名：貼床（NSベルト下））が採取された。

本報告では、炉址焼土（赤）と貼床（NSベルト）の２点を対象として薄片作製による偏光顕微鏡観察を行い、炉址焼土（赤）を対象としてＸ線回折分析を行う。

２．分析方法

（１）薄片作製観察

薄片観察は、試料を0.03mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片を作製するために試料を樹脂で固化した後に、ダイヤモンドカッターにより22×30×15mmの直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、＃180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で＃2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

（２）Ｘ線回折分析

空気乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉砕し、無反射試料板に充填し、Ｘ線回折分析試料（無定方位試料）を作成する。作成したＸ線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc.のＸ線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製 MultiFlex Divergency Slit：1°

Target：Cu（Kα）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite 湾曲	Recieving Slit：0.3mm
Voltage：40kV	Scanning Speed：2°/min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3 ～ 65°

３．結果

（１）薄片作製観察

偏光顕微鏡下において焼成の状況について観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量（＞50%）、中量（20 ～ 50%）、少量（５～ 20%）、微量（＜５％）およびきわめて微量（＜１％）という基準で目視により判定した。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。

１）炉址焼土（赤）

本試料は、粗粒シルト～中粒砂サイズの砕屑片を少量程度含む砂混じり粘土である。鉱物片としては、石英、斜長石、黒雲母、角閃石、斜方輝石、イディングサイト、不透明鉱物などが認められる。岩片としては、花崗岩、デイサイト、頁岩、チャート、安山岩、スコリア、風化岩などが含まれる。その他の砕屑片としては、植物珪酸体および火山ガラスが認められる。基質は淡褐色～褐色を呈するシルトおよび粘土からなり、セリサイト、酸化鉄、有機物などを含む。基質には、径 0.3 ～ 1 mm 大の酸化鉄結核が微量程度分布し、枝分れ状のクラックや孔隙が中量程度分布している。

基質の酸化鉄結核およびイディングサイト中の酸化鉄は、赤味が強く、直交ポーラー下において弱い偏光を示す。赤味は表面部のものほど強い傾向が認められる。この赤味の強い色調は、水酸化鉄が高温被熱により赤鉄鉱化したことによる変化とみられる。水酸化鉄は、普通 270 ～ 325℃程度の熱を受けると脱水し、赤鉄鉱へ変化することが知られている（吉木，1959）。

２）貼床（NS ベルト下）

本試料は、粗粒シルト～粗粒砂サイズの砕屑片を微量程度含む砂混じり粘土である。鉱物片としては、石英、カリ長石、斜長石、角閃石、斜方輝石、単斜輝石、かんらん石、イディングサイト、緑廉石、不透明鉱物などが認められる。岩片としては、頁岩、チャート、脈石英などが含まれる。その他の砕屑片としては、植物片、植物珪酸体および火山ガラスが認められる。基質は淡褐色～褐色を呈するシルトおよび粘土からなり、セリサイト、酸化鉄、有機物などを含む。基質には、枝分れ状をなすクラックや孔隙が少量程度分布している。

基質中に分布する水酸化鉄は褐色を呈して点在するが、結晶性は不良であり赤味を有するものは認められず、水酸化鉄の赤鉄鉱化はないものと判断される。

（２）Ｘ線回折分析

Ｘ線回折図を図１に示す。なお、文中で（）内に示したものは、Ｘ線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、Ｘ線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

供試試料では、石英（quartz）、斜長石（灰長石：anorthite）、赤鉄鉱（hematite）が検出されたほか、緑泥石（クライノクロア：clinoclore）、雲母鉱物（イライト：illite）を示唆する回折が認められる。

4．考察

粘土を加熱していくと、種々の鉱物が生成し、あるいは逆に変態して消失する。例えば、五十嵐（2007）は、偏光顕微鏡下で観察される長石類や石英の溶融、針状ムライトの生成などから、土器の焼成温度推定が可能なことを述べ、800℃から1250℃強までの範囲内の各温度における鉱物変化の指標を設定している。その中で最も低い温度で生じる鉱物変化は、800℃で生じる角閃石の酸化角閃石への変化であるが、前述したように炉址焼土（赤）の薄片観察では、角閃石の酸化角閃石への変化は認められていない。したがって、炉址焼土（赤）が被熱していた場合でも、その温度は800℃未満であったことは確実である。ただし、ここで炉址焼土（赤）は、対照試料とした貼床（NSベルト下）と比べて、基質自体に赤色化している。

ところで、東村（1990）は、粘土の焼成に伴う鉱物変化としてカオリナイト、バーミキュライト、緑泥石、イライト、斜長石、カリ長石、ムライト、クリストバライトの各鉱物が消失、あるいは生成する温度を示している。これらのうち、カオリナイトやバーミキュライトなどの粘土鉱物は、通常はX線回折によって確認されることから、粘土の焼成に伴う鉱物変化はX線回折でも確認されることが多い。X線回折を行った場合、イライトは950℃までしか存在しないので、イライトの回折スペクトルが検出されない場合は950℃以上の被熱であり、さらに斜長石およびカリ長石は1100℃までしか存在しないため、斜長石の回折スペクトルが検出された場合は1100℃以下の被熱温度と推定される。逆に、ムライトが検出されれば1050℃以上、クリストバライトが検出されれば1200℃以上の温度が推定される。

炉址焼土（赤）では、750℃以上の熱を受けて消失する緑泥石を示唆する回折が認められている。したがって、仮に熱を受けていたとしても750℃以下での被熱であると見られる。このことは、上述した薄片観察による角閃石の状況と整合する。さらに、X線回折では赤鉄鉱が検出された。赤鉄鉱は、薄片観察でも述べたように、水酸化鉄が270～325℃程度の熱を受けることにより生成される鉱物である。ただし、赤鉄鉱は、土壌中において含鉄鉱物の風化によっても生成される鉱物でもある。今回の分析では、炉址焼土の被熱前の土に相当する可能性がある貼床試料の薄片観察において水酸化鉄が認められたが、その赤鉄鉱化は認めることができなかった。したがって、炉址焼土中の赤鉄鉱は、被熱により水酸化鉄が変化したものである可能性が高い。

以上述べた鉱物の状況から、炉址焼土（赤）が採取された焼土は、貼床の土が270～325℃程度以上で、750℃未満の熱を受けたために赤化したと考えられる。

引用文献

東村武信，1990，古代技術など 土器．改訂考古学と物理化学．学生社，171-186.

五十嵐俊雄，2007，土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発．徳永重元博士献呈論集，パリノ・サーヴェイ株式会社，281-297.

吉木文平，1959，鉱物工学．技報堂，710p.

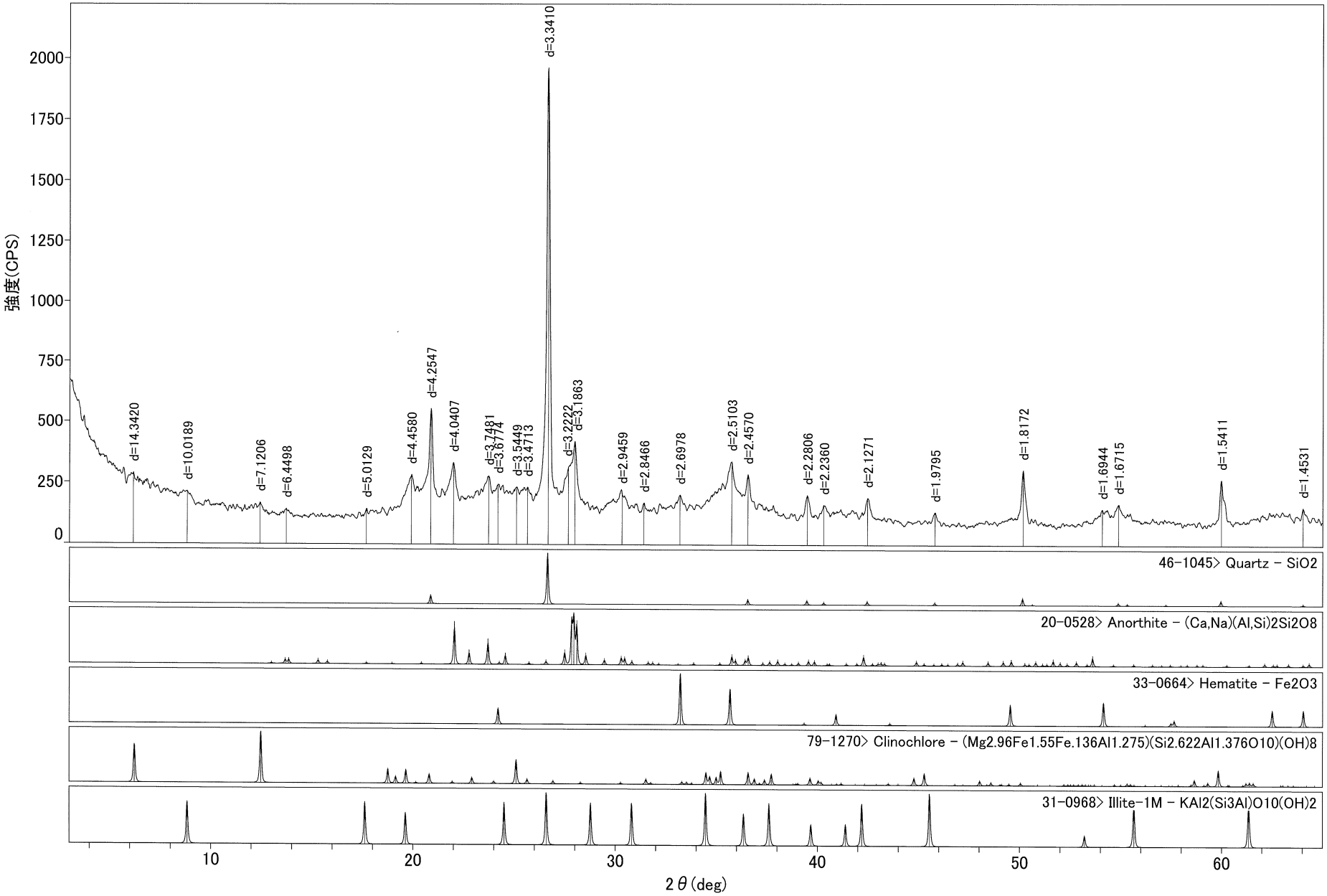
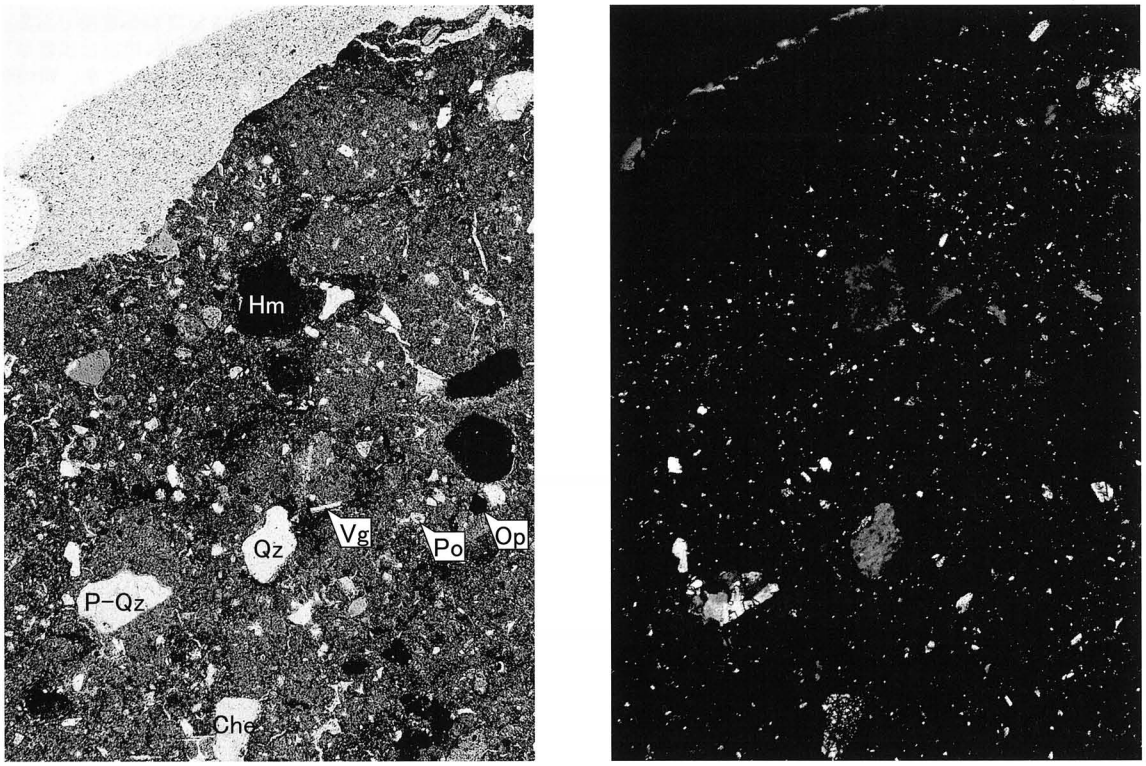
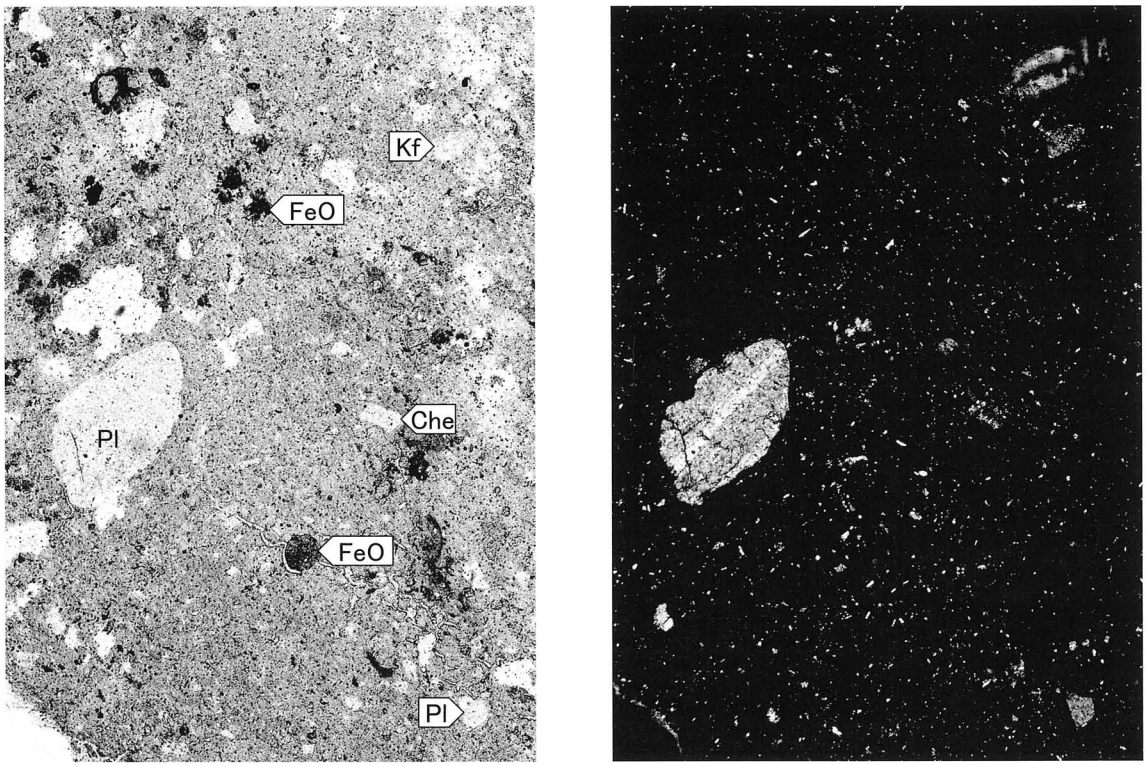


図１．炉址焼土(赤)のＸ線回折図

図版１　薄片



１．炉址焼土（赤）



0.5mm

２．貼床（NS ベルト下）
Qz: 石英．Kf: カリ長石．Pl: 斜長石．Op: 不透明鉱物．Che: チャート．
P-Qz: 多結晶石英．Vg: 火山ガラス．Hm: 赤鉄鉱（酸化鉄結核）．Po: 植物珪酸体．FeO: 水酸化鉄．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

縄文・弥生土器観察表

・整形・文様欄の→は施文順序で、櫛描文の（　）は工具の歯数を示す。縄文の附１は附加条１種、附２は附加条２種である。
・胎土欄の白は不透明白色の、透は透明もしくは半透明白色の、灰は灰色の、黒は黒色の、雲は雲母（白雲は白雲母、黒雲は黒雲母）の砂礫・鉱物粒が、赤は赤色の軟質物質が、繊維は繊維状物質の痕跡がみられることを示す。また、微は微粒であることを、粗は粗粒であることを表す。
　なお、白・透は長石や石英と、黒は角閃石と思われ、灰は摩耗した角の取れた砂礫である場合が多い。
・変形爪形文のＡ類、Ｂ類は [中村 2009] による。

Ⅰ次１号住居跡

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調（外／内）	焼成	備考
第７図	1	c 層	刺突文　太沈線文	白粗・透粗	淡褐／褐	良	
	2	c 層	縄文ＲＬ？→平行沈線文	白・透	暗橙褐／橙褐	良	
	3	c 層	平行沈線文　口唇部に縄文	白微	白灰褐／白灰褐	良	
	4	c 層	平行沈線文　口唇部に縄文附１ＲＬ＋２Ｌ	白微	淡褐／暗褐	良	
	5	c 層	平行沈線文　口唇部に刻み	白・透	暗赤褐／暗褐	良	
	6		櫛描文（３本）	白微	淡褐／橙褐	良	
	7	c 層	櫛描文（４本）	白粗・透・白雲	褐／褐	良	
	8	c 層	櫛描文（５本以上）	白・透	褐／褐	良	
	9	a，b 層	箆描き沈線文	白・透	橙褐／橙褐	良	
	10	c 層	縄文附１・ＲＬ＋２Ｌ　口唇部に縄文？	白・透	黒赤褐～黒褐／褐	良	
	11		縄文附１・ＲＬ＋２Ｌ　口唇部に縄文	白微	暗褐／褐	良	
	12	Ｐ１内	縄文附１・ＬＲ＋２Ｒ　口唇部に縄文	白微	暗褐／淡橙褐	良	
	13	c 層	縄文附１・ＲＬ＋２Ｌ	白	黒褐／褐	良	
	14	c 層＋２住 f 層	縄文附１・ＬＲ＋２Ｒ　無文帯あり		黒褐／黒褐	良	外面煤付着
	15	c 層	縄文附１・ＬＲ＋２Ｒ	白微	暗橙褐／橙褐	良	
	16	c 層	縄文附１・ＲＬ＋２Ｌ　底部に木葉痕	白	褐／褐	良	底部復元径　6.6cm

Ⅰ次２号住居跡

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調（外／内）	焼成	備考
第８図	28	f 層	平行沈線文	白・透	黒灰褐／黒灰褐	良	
	29	f 層	平行沈線文	白・透	黒灰褐／黒灰褐	良	内面に剥落あり
	30	f 層	平行沈線文	白・透	暗褐／淡橙褐	良	内面と破断面に黒色物付着
	31	f 層	櫛描文（３本）	白・透	淡褐／橙褐	良	
	32	f 層	櫛描文（３本）　縄文	白粗・透・白雲	黒褐／暗褐	良	破断面に種子圧痕
	33	f 層	縄文ＲＬ・結節	白粗・透・白雲	淡橙褐／橙褐	良	内面に黒色物付着
	34	f 層＋１住 c ５層	縄文ＲＬ・ＬＲ・結節	白粗・透・白雲	褐／褐	良	内面に黒色物付着
	35	覆土上部	撚糸文Ｒ	白微	淡褐／橙褐	良	

Ⅰ次３号住居跡

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調（外／内）	焼成	備考
第８図	41	床面直上＋ g 層＋１住床面直上＋１住 c 層＋２住 f 層	複合口縁部　縄文附１・ＲＬ＋２Ｌ→下端に刻み胴部　縄文附１・ＲＬ＋２Ｌ→頸部　櫛描文（６本）内面　箆撫で	白 透粗 白雲	橙褐／橙褐	良	復元口径　16.8cm 復元頸径　11.1cm
	42	床面直上	縄文附１・ＲＬ＋２Ｌ→櫛描文（６本）	白粗・透・白雲	暗褐／黒灰褐	良	41 と同一個体？
	43	Ｐ１内＋１住 c 層	縄文附１・ＬＲ＋２Ｒ	白粗・透粗・白雲	暗褐／淡橙褐	良	内面と破断面に黒色物付着
	44	床面直上	縄文附１・ＬＲ＋２Ｒ		黒褐／黒褐	良	外面煤付着
	45	g 層	縄文ＲＬ	白粗・透・白雲	暗褐／橙褐	良	
	46	床面直上	縄文ＬＲ	白粗・透・白雲	淡橙褐／淡橙褐	良	
	47	床面直上	撚糸文Ｒ	白微	淡橙褐／淡橙褐	良	内面に黒色物付着

第Ⅲ次調査区出土

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調（外／内）	焼成	備考
第 25 図	1	９住	表裏　条痕	繊維	橙褐／黒褐	良	
	2	１住	縄文ＬＲ	繊維	暗褐／褐	良	
	3	１住	貝殻腹縁文	繊維	褐／白褐	良	
	4	２住	縄文Ｌ	繊維	橙褐／黒褐	良	
	5	25 b 住	縄文ＬＲ・ＲＬ	繊維	暗褐／褐	良	
	6	３住	撚糸文？	繊維	黒褐／暗褐	良	復元底径　4.8cm
	7	６住	縄文附２・ＲＬ×２Ｒ？	繊維	暗褐／橙褐	良	
	8	４住	連続爪形文（平行沈線→爪形列）	繊維	暗褐／橙褐	良	
	9	１住	連続爪形文（平行沈線→爪形列）	白・黒・小礫	橙褐／橙褐	良	
	10	６住	縄文→連続爪形文（押し引き）	白粗・透粗・小礫	黒褐／褐	良	
	11	１住	連続爪形文（押し引き）　平行沈線文	白・透	暗褐／褐	良	
	12	１住	変形爪形文Ａ類	白・透	淡褐／淡褐	良	

第Ⅲ次調査区出土

図版番号		出土位置	整形・文様	胎土	色調（外／内）	焼成	備考
第25図	13	1住	有節平行線文	白・透・黒	淡褐／淡褐	良	
	14	1住	有節平行線文	白・透	淡褐／橙褐	良	
	15	19 c住	有節平行線文　刻み	白・透・灰	淡褐／淡褐	良	
	16	4住	変形爪形文A類　刺突文	白微	暗褐／橙褐	良	
	17	22住	変形爪形文B類　平行沈線文	白・透	淡褐／橙褐	やや良	
	18	6住	輪積痕　波状貝殻文	白微・透・白雲？	褐／淡橙褐	良	
	19	6住	波状貝殻文	白微・透・黒	褐／橙褐	良	
	20	9住	条線文　貝殻腹縁文	白・透・黒	淡褐／淡褐	良	
	21	3住	輪積痕　縄文L	白・透	赤褐／赤褐	良	
	22	9住	沈線　縄文LRL	白・透・灰	橙褐／黒褐	良	
	23	25 b住	縄文LRL→沈線	白・透・黒	褐／暗褐	良	
	24	4住	縄文LR	白・透	橙褐／橙褐	良	
	25	3住	微隆起線→縄文LR	白粗・透	橙褐・褐／橙褐・褐	良	
	26	4住	微隆起線→縄文LR	白・透	黒褐／淡褐	良	
	27	4住	平行沈線文　口唇部に縄文	白微	橙褐／暗褐	良	
	28	22住	平行沈線文（工具先端ささくれ？）口唇部に縄文原体圧痕	白・透	淡褐／暗褐	良	
	29	1住	櫛描文（3本）　刻みの付いた隆帯	白微・透	橙褐／橙褐	やや良	
	30	6住	平行沈線文	白・透	淡橙褐／褐	良	
	31	3住	平行沈線文	白・透	黒褐／橙褐	良	
	32	24住	平行沈線文	白・透	橙褐／淡褐	良	
	33	25 b住	平行沈線文	白微・透・灰	褐／褐	良	
	34	1住	平行沈線文	白・透	暗褐／橙褐	良	
	35	6住	平行沈線文　口唇部に刻み	白微・透微	淡橙褐／暗褐	やや良	
	36	9住	櫛描文（3本）　口唇部に縄文附1・RL＋2L	白・透・灰	淡褐／暗褐	良	
	37	3住	櫛描文（3本）	白・透	淡褐／橙褐	良	
	38	3住	櫛描文（3本）	白微	橙褐／橙褐	良	
	39	7住	櫛描文（3本）	白・透・灰	淡褐／黒灰褐	良	
	40	6住	櫛描文（3本）	白微・透・黒	灰褐／	良	
	41	19 c住	櫛描文（3本）→縄文附1・RL＋2L	白微・透	橙褐／橙褐	良	
	42	25 b住	櫛描文（3本）　口唇部に縄文	白・透・灰	褐／暗褐	良	
	43	9住	櫛描文（3本）	白・透・灰	淡橙褐／橙褐	良	
	44	2住	櫛描文（3本）　口唇部に刻み	白・透	橙褐／暗褐	良	
	45	9住	櫛描文（3本）	白・透	暗赤褐／黒褐	やや不良	
	46	3住	櫛描文（4本）	白・透・黒	褐／黒褐	良	
	47	1住	櫛描文（3本）	白・透	淡褐／淡橙褐	良	
	48	1住	櫛描文（3本以上）	白微	淡橙褐／淡橙褐	良	
	49	2住	櫛描文（4本）	白・透	淡橙褐／黒灰褐	良	
	50	2住	櫛描文	白・透	暗赤褐／暗赤褐	良	土師器？
	51	3住	櫛描文（3本以上）　隆帯　竹管状工具による円形刺突文	白・透	暗褐／黒褐	良	
	52	6住	刷毛目　口唇部に刻み	白・透・灰	暗褐／暗橙褐	良	
	53	4住	縄文附1・RL＋2L　口唇部に縄文	白・透・黒	淡橙褐／淡褐	良	
	54	22住	縄文附1・RL＋2L	白・透	暗褐／橙褐	やや良	
	55	1住	縄文附1・RL＋2L　口唇部に縄文	白・透	黒褐／淡褐	良	
	56	22住	無文の複合口縁下端に縄文原体圧痕　頸部に縄文附1・RL＋2L？　口唇部に縄文	白粗・透粗・白雲	暗褐／褐	良	
	57	6住	複合口縁下端に刺突　口唇部に刻み	白粗・透粗・白雲	褐／暗褐	良	
	58	1住	縄文附1・LR＋2R→貼瘤・刺突	白・透	淡褐／暗褐	良	
	59	9住	縄文附2・LR×L？→貼瘤　複合口縁部無文	白粗・透粗・白雲	褐／褐	良	
	60	2住	沈線（篦状工具）による格子目文	白	淡褐／淡褐	良	
	61	11住	縄文附1・LR＋2R　底部に布目痕	白・透・灰・赤	淡褐・暗褐／淡褐	良	底部復元径　8.0cm

土師器・須恵器観察表

・法量欄の単位はcm、（　）は復元値。整形欄の→は整形順序を示す。胎土欄の表記は縄文・弥生土器観察表に同じ。
残存率欄の（　）は図示した部位での値。なお、ミニチュア土器は土製品観察表に掲載した。

Ⅰ次１号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第７図 17	ｃ層	土師器 壺		内外面－撫で	白微	内外面－白灰 褐	良		内面上部に赤色 塗彩
第７図 18	ｃ層	土師質 須恵 器？		内面に櫛歯による波状文 口唇部　面取り、若干の摘み上げ	白 透 雲	外面－黒褐 内面－橙褐	良		
第７図 19	ａ、ｂ層	中世土 器 焙烙？		内外面－撫で	白粗 透 白雲	外面－黒褐 内面－暗褐	不良		
第７図 20	床面直上 ＋ｃ４層	土師器 壺	胴径　17.0 底径　3.8	外面－磨き 内面－篦撫で	白微	外面－橙褐～ 暗赤褐～黒褐 内面－暗赤褐 ～黒褐	良	(80%)	
第７図 21	Ｐ１覆土	土師器 高杯形 脚部		内外面－撫で	白 透	外面－淡褐～ 暗赤褐 内面－淡褐	やや 不良	(80%)	
第７図 22	ｃ４層＋ｃ層 ＋２住ｆ層	土師器 甕形	頸径（16.0）	外面－刷毛目 内面－撫で	白微	外面－黒褐～ 淡褐 内面－褐～黒 褐	良	(35%)	外面に煤付着
第７図 23	床面直上 ＋ｃ４層	土師器 甕形	頸径（16.0）	外面－口縁部　刷毛目 →ヨコナデ 胴部　刷毛目→撫で 内面－刷毛目	白微	外面－橙褐～ 暗橙褐 内面－橙褐～ 暗赤褐	良	(50%)	

Ⅰ次２号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第８図 36	ｆ層	土師器 鉢形	口径（21.0）	外面－複合口縁部　ヨコナデ 胴部　刷毛目 内面－撫で	白微	外面－淡橙 褐・黒褐 内面－淡褐	良	(15%)	
第８図 37	ｆ層	土師器 壺形	口径　19.2	外面－複合口縁部　ヨコナデ 胴部　刷毛目→下部撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白微	内外面－橙褐	良	(40%)	
第８図 38	ｆ層	土師器 甕形	口径（16.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 肩部　刷毛目→撫で 胴部　刷毛目→篦削り 内面－口縁部　刷毛目 胴部　撫で	白 透	外面－淡橙褐 ～黒褐 内面－淡褐	良	(20%)	胴部に煤付着
第８図 39	ｆ層＋ｅ層	土師器 甕形	口径（17.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 頸部　指頭押捺 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透 黒	外面－赤褐 内面－褐	良	(20%)	口縁部内外面に 赤色塗彩

Ⅱ次２号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第11図 1	覆土下部	土師器 甕形	口径　22.0	外面－口縁部　ヨコナデ 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡橙 褐	良	(15%)	
第11図 2	床面直上	土師器 甕形	口径（19.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡赤褐 内面－淡橙褐	良	(20%)	
第11図 3	覆土下部	土師器 甕形	口径（27.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	外面－暗褐・ 橙褐 内面－淡褐	良	(30%)	
第11図 4	床面直上	須恵器 高杯脚 部		轆轤成形 ４単位の透かし	白微	内外面－暗灰	良	(50%)	

Ⅱ次３号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第12図 1	貼床中	土師器 杯形	口径（16.0）	内外面－口縁部　ヨコナデ	白微 透微	内外面－暗褐	良	（10%）	外面黒色塗彩
第12図 2	覆土	土師器 杯形	体径（16.0）	内外面－撫で	白微 透微	外面－黒褐 内面－褐・黒褐	良	（10%）	内外面に黒色塗彩
第12図 3	床面直上	土師器 甑形	孔径（12.0）	外面－篦撫で 内面－撫で	白	外面－黒褐 内面－橙褐	良	（15%）	無底
第12図 4	床面直上 ＋覆土	土師器 甕形	口径（19.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 頸・胴部　撫で 内面－口縁部　篦撫で→ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 雲	外面－暗褐・橙褐 内面－褐	良	（20%）	

Ⅱ次４号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第14図 1	床面直上	土師器 甕形	口径（20.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗橙褐 内面－暗褐・淡橙褐	良	（15%）	
第14図 2	覆土	土師器 甕形	口径（12.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－黒褐～暗赤褐 内面－黒褐・橙褐	良	（15%）	外面に被熱による剥落あり
第14図 3	覆土	須恵器 杯	口径　（9.0） 体径（11.0）	轆轤成形	白	内外面－灰	良	（10%）	
第14図 4	床面直上 ＋覆土	須恵器 蓋	径　（12.0） 器高　3.5	轆轤成形	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰 内面－褐	やや 良	（30%）	

Ⅱ次５号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第15図 1	覆土	須恵器 杯	口径（13.4） 器高　4.2 底径（6.8）	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り 底部　手持ち一方向篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－灰	良	（45%）	
第15図 2	覆土	須恵器 杯	口径（13.2） 器高　4.0 底径　7.4	轆轤成形 外面－体部下端　撫で 底部　手持ち多方向篦削り	白粗 透粗 白雲	外面－橙～灰 内面－灰	やや 不良	（85%）	
第15図 3	覆土	須恵器 杯	口径　12.6 器高　4.0 底径　7.2	轆轤成形 外面－体部下端　撫で 底部　回転篦切り→撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－白灰	やや 不良	（85%）	
第15図 4	覆土	須恵器 杯	口径（12.4） 器高　3.6 底径（5.6）	轆轤成形 外面－体部下端　撫で 底部　回転篦切り→撫で	白粗 透粗 白雲	外面－黒灰 内面－暗褐	やや 不良	（20%）	
第15図 5	覆土	須恵器 杯	口径　13.4 器高　4.45 底径　7.6	轆轤成形 外面－体部下端　撫で 底部　回転篦削り（撫でに近い）	白粗 透粗	内外面－淡灰	やや 良	（20%）	底部に「志太」の墨書
第15図 6	覆土	土師器 甕形	口径（20.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－橙褐	良	（40%）	
第15図 7	覆土	土師器 甕形	口径（14.0） 胴径（14.8）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴上部　撫で 胴下部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透	内外面－暗赤褐	やや 不良	（40%）	

Ⅱ次６号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第16図 1	床面直上	須恵器 杯	口径（14.0）	轆轤成形	白	内外面－淡灰	良	（10%）	
第16図 2	床面直上	須恵器 杯	口径（13.0）	轆轤成形	白粗 透粗	内外面－淡灰 内面－灰	良	（15%）	

Ⅱ次６号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第16図 3	床面直上	須恵器 杯	口径（14.0）	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り	白粗 透粗	内外面－青灰	不良	（10%）	
第16図 4	床面直上	須恵器 高台付 盤	口径（15.0） 器高　3.4 台径　9.4	轆轤成形 外面－底部　回転撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	良	（70%）	
第16図 5	床面直上	土師器 甕形底 部	底径　（8.0）	外面－篦削り 内面－篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗褐～ 黒褐 内面－橙褐	良	（20%）	

Ⅱ次７号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第17図 1	床面直上	土師器 杯形	口径　13.4 器高　5.2	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　磨き	白 透 黒	内外面－淡橙 褐～暗褐	不良	（80%）	
第17図 2	床面直上 ＋覆土	土師器 鉢形	口径（12.0） 器高　7.3 底径　（4.0）	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透	外面－赤褐～ 暗褐 内面－橙褐	良	（30%）	
第17図 3	床面直上 ＋覆土 ＋遺構外	土師器 甕形	口径　10.6 胴径　12.0 器高　12.9 底径　7.2	外面－口縁部　ヨコナデ 頸部　指頭押捺　胴部　撫 で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白微 透	外面－橙褐 赤褐～暗褐 内面－橙褐	良	100%	底部に線状痕
第17図 4	攪乱	土師器 甕形	口径（13.0）	外面－口縁部　輪積痕→撫で 胴部　篦撫で 内面－撫で	白 透 雲	外面－赤褐～ 暗褐 内面－褐	不良	50%	
第17図 5		土師器 甕形	口径（16.0） 胴径（16.6） 器高　14.0 底径　5.1	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白微	外面－赤褐～ 橙褐～黒褐 内面－黒褐～ 褐	良	60%	
第17図 6	床面直上 ＋覆土	土師器 底部	底径（8.0）	外面－篦撫で 内面－篦撫で 底部に線状痕	白粗 透粗	外面－暗赤褐 内面－褐	良	（25%）	外面煤付着 内面に被熱による剥落あり
第17図 7	（11号土坑） 覆土	土師器 杯形	体径　11.0 底径　3.4	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦削り 内面－篦撫で	白 透 黒	外面－橙褐 内面－褐～黒 褐	良	（90%）	
第17図 8	（11号土坑） 覆土	土師器 杯形	口径（16.0）	外面－篦撫で 内面－撫で	白 透	外面－橙褐 内面－暗赤褐	良	（25%）	
第17図 9	（11号土坑） 覆土	土師器 杯形	口径（14.0）	内外面－撫で	白	内外面－橙褐	良	（25%）	
第17図10	（11号土坑） 覆土	土師器 杯形	口径　13.4 器高　5.6	外面－口縁部　ヨコナデ 体上部　輪積痕→撫で 体下部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦撫で	白 透 灰	内外面－淡橙 褐 内面－褐	良	70%	
第17図11	（11号土坑） 覆土	土師器 椀形	口径（12.0）	内外面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透	外面－暗赤褐 内面－橙褐	良	50%	
第17図12	（11号土坑） 覆土	土師器 甕形	口径（12.0）	外面－輪積痕→撫で 内面－撫で	白微	外面－暗赤褐 内面－暗褐	良	（50%）	
第17図13	（11号土坑） 覆土	土師器 甕形	口径（11.6） 胴径（16.0） 器高　15.8 底径　4.8	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦削り→撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白 透	外面－ 胴部　褐～黒 褐 底部　赤褐 内面－褐	良	65%	

Ⅱ次１号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図 1	覆土	土師器 杯形	口径　8.0 器高　6.6 底径　7.0	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦撫で	白 透 黒	外面－淡橙褐 ～黒褐 内面－淡橙褐	良	45%	

Ⅱ次１号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図２	覆土	土師器 杯形	口径（13.4） 器高　3.5	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透	外面－赤褐～暗褐 内面－橙褐	良	80％	内面黒色処理

Ⅱ次５号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図４	覆土	土師器 杯形	口径　（7.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で 内面－口縁部　磨き	白 透	内外面－淡褐	良	（15％）	
第21図５	覆土	土師器 杯形	口径　（8.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦削り 内面－口縁部　撫で	白 透	外面－赤褐・黒褐 内面－黒褐・橙褐	良	（20％）	
第21図６	覆土 （壁面）	土師器 杯形	口径　（8.0）	内外面－撫で	白 透 黒	外面－赤褐 内面－橙褐	良	（25％）	
第21図７	覆土 （壁面）	土師器 高杯形 脚部	口径　（8.0）	外面－撫で 内面－篦撫で	白 透	外面－暗褐 内面－橙褐	良	（35％）	

Ⅱ次６号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図８	３層	土師器 壺形	頸径　（6.0）	外面－磨き 内面－篦撫で	白 透 黒	内外面－淡褐	良	（20％）	
第21図９	覆土	土師器 甕形	口径（20.0）	内外面－撫で→ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	内外面－褐	良	（10％）	
第21図10	覆土	土師器 高杯形 脚部	裾径（13.0）	外面－撫で 内面－輪積痕→撫で	白 透	内外面－橙褐	良	（35％）	

Ⅱ次８号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図11	覆土	土師器 高台付 椀形	台径　（7.2）	轆轤成形 底部　撫で	白 透 黒	内外面－暗褐	良	（70％）	
第21図12	覆土	土師器 甕形	口径（22.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白 透 黒 白雲	内外面－淡橙褐～暗橙褐	良	（50％）	外面に砂混り粘土付着

Ⅱ次９号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図13	２層 ＋７住覆土 ＋遺構外	土師器 胴下部	底径　6.4	轆轤成形 外面－胴下部・底部　篦削り 内面－磨き	白 透	外面－暗赤褐 内面－黒褐	良	（90％）	

Ⅱ次10号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図14	底面直上 ＋覆土	土師器 杯形	口径（16.0） 器高　5.3 底径　（4.8）	内外面－篦撫で	白 透	外面－褐～暗褐 内面－赤褐～黒褐	良	25％	
第21図15	底面直上	土師器 杯形	口径　14.8 器高　5.6	内外面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透	外面－暗赤褐～暗褐 内面－暗褐～褐	良	90％	

Ⅱ次10号土坑

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図16	底面直上	土師器 杯形	口径 15.4 器高 6.8 底径 4.0	内外面－撫で	白 透 黒	外面－赤褐 内面－褐	良	100%	
第21図17	底面直上	土師器 甕形	口径 (9.0)	内外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗灰褐 内面－白灰褐	良	(20%)	
第21図18	底面直上	土師器 甑形	孔径 (10.0)	外面－篦削り 内面－撫で	白 透	外面－黒褐 内面－橙褐	良	(35%)	無底
第21図19	底面直上	土師器 甕形	口径 (16.6)	内外面－輪積痕→撫で	白微 黒	外面－褐～黒褐 内面－橙褐	良	(75%)	

Ⅱ次ピット

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図20	2P	須恵器 蓋	径 (14.0)	轆轤成形	白粗 透粗 白雲	内外面－褐	やや 良	(20%)	酸化焔焼成
第21図21	3P	須恵器 蓋	径 (13.0)	轆轤成形	白 透	内外面－褐	良	(5%)	酸化焔焼成
第21図22	31P底面直上	土師器 甕形	口径 (20.0)	外面－口縁部 ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐 内面－暗褐	良	(45%)	

Ⅱ次塚状遺構

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第23図3	3層	土師器 器台形	頸径 3.4 孔径 1.0	内外面－篦撫で	白 透 黒	外面－橙褐 内面－褐	良	(70%)	

Ⅱ次遺構外

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第23図5	表土	土師器 杯形	口径 14.0 器高 5.3	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で	白 透	外面－淡褐 内面－淡橙褐	良	90%	
第23図6		土師器 杯形	口径 (13.2) 器高 6.0	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透	内外面－淡橙褐	良	45%	
第23図7	表土	土師器 杯形	口径 (12.0)	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で	白 透 黒	内外面－淡褐	良	(35%)	
第23図8	表土	土師器 高杯形	口径 (9.0)	外面－杯部 撫で 脚部 磨き 内面－脚部篦撫で	白 透	外面－淡橙褐 内面－淡褐	不良	(80%)	

Ⅲ次1号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第28図1	P2覆土上部	土師器 杯形	口径 14.0 器高 5.3 底径 3.7	外面－口縁部 ヨコナデ 内面－篦撫で	白多 透	内外面－淡橙褐・黒褐～暗赤褐	良	95%	

Ⅲ次2a号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第29図1		土師器 杯形	口径 14.4 器高 5.0	外面－撫で 内面－磨き	白 透	外面－赤褐 内面－暗赤褐	良	85%	内外面赤色塗彩

Ⅲ次３号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第31図 1	床面直上	土師器 杯形	口径 13.9 器高 4.1	外面－体部 篦撫で 底部 撫で 内面－口縁部 ヨコナデ	白微 透 赤 黒	内外面－暗褐 ～褐	良	100%	内面黒色塗彩
第31図 2	床面直上 ＋覆土	土師器 杯形	口径（14.0）	内外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－黒褐	良	（35%）	内外面黒色処理
第31図 3	覆土	土師器 高杯形		外面－磨き 内面－篦撫で	白 透 黒	外面－赤褐 内面－淡橙	良	（95%）	外面赤色塗彩
4	覆土	土師器 甕形	口径（14.0）	内外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白 透	外面－暗赤褐 内面－黒褐	良	（20%）	
第31図 5	床面直上 ＋覆土下部	土師器 甕形	胴径（35.0） 底径 （9.8）	外面－磨き 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗褐～ 黒褐 内面－淡橙褐 ～黒褐	やや 良	（20%）	
第31図16	床下土坑	土師器 高杯形 杯部	口径（33.0）	外面－丁寧な撫で 内面－撫で	白 透 灰	外面－淡褐～ 黒褐 内面－淡褐～ 淡橙褐	良	（25%）	17と同一個体
第31図17	床下土坑	土師器 高杯形 脚部	裾径 23.0	内面－撫で	白 透 灰	外面－淡褐～ 黒褐 内面－淡褐～ 淡橙褐	良	（70%）	16と同一個体
第31図18	覆土下部	土師器 台付椀 形？	口径（13.0）	内外面－撫で	白 透	外面－橙褐 内面－黒褐	良	（25%）	内面黒色処理
第31図19	床下土坑	土師器 杯形	口径（18.0）	内外面－撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐 ～暗褐 内面－橙褐～ 黒褐	やや 不良	（25%）	

Ⅲ次４号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第33図 1	床面直上	須恵器 杯	口径 11.0 器高 4.3	轆轤成形 外面－体部下部 撫で 底部 回転篦撫で	白 透	内外面－青灰	良	40%	
第33図 2	Ｐ１覆土上面	灰釉陶 器 椀	口径（11.0）	轆轤成形	透 黒	内外面－白褐	良	（15%）	内面に施釉
第33図 3	覆土	土師器 杯形	口径（20.0）	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透	外面－淡橙褐 ～橙褐 内面－淡橙褐	良	（20%）	
第33図 4	床面直上	土師器 甕形	口径（17.0）	内外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白微	外面－暗橙褐 内面－橙褐	良	（20%）	
第33図 5	２層	土師器 甕形	胴径（23.0）	外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 胴部 篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡橙褐 内面－淡褐	良	（15%）	
第33図 6	床面直上	土師器 甕形	底径 （8.0）	外面－胴部 撫で・篦削り 底部 篦削り 内面－撫で	白微	外面－暗橙褐 内面－暗褐	良	（20%）	
第33図 7	床面直上	土師器 甕形	胴径（28.0）	外面－胴上部 撫で 胴下部 磨き 内面－撫で	白粗 透粗 白雲 赤	内外面－淡褐	良	（30%）	

Ⅲ次５号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第37図 1	床面直上	土師器 杯形	口径 13.0 器高 5.3	外面－口縁部 ヨコナデ 底部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 灰 黒	内外面－淡褐	良	85%	
第37図 2	覆土	土師器 杯形	口径（15.0）	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で 内面－口縁部 ヨコナデ	白微	外面－暗橙褐 ～赤褐 内面－褐～黒 褐	良	45%	
第37図 3	床面直上	土師器 椀形？	体径（14.0）	内外面－撫で	白微	内外面－暗橙 褐	良	（40%）	
第37図 4	覆土	須恵器 杯	体径（16.0）	轆轤成形 外面－篦撫で	白 透	外面－暗灰 内面－灰	良	（10%）	
第37図 5	覆土	土師器 甕形	口径（20.0）	内外面－ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	内外面－灰褐 ～暗褐	やや 不良	（20%）	
第37図 6	床面直上 ＋Ｐ３覆土	土師器 甕形	口径（32.6） 胴径（40.0）	外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 磨き 内面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白粗 透粗 黒雲	外面－橙褐・ 暗褐 内面－褐～暗 褐	良	（25%）	

Ⅲ次６ｂ号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第37図11	４層＋ ６住床面直上 ＋６住覆土	土師器 杯形	口径（13.0）	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ	白微 微	内外面－褐～ 黒褐	良	（20%）	内外面黒色処理

Ⅲ次６号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第38図13	覆土	土師器 杯形	体径 15.0	内外面－撫で	白微 透微	外面－黒褐 内面－暗褐～ 黒褐	良	（45%）	内外面黒色処理
第38図14	床面直上 ＋覆土	土師器 杯形	口径 13.2 器高 4.8	内外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白微 透微	外面－暗褐～ 黒褐 内面－褐～暗 褐	良	80%	内外面黒色処理
第38図15	床面直上 ＋覆土	土師器 杯形	口径 11.8 器高 4.1	外面－篦撫で 内面－撫で	白 透	外面－黒褐 内面－暗褐	良	（20%）	内外面黒色処理
第38図16	覆土	土師器 杯形	体径（16.0）	内外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐 内面－暗褐	良	90%	
第38図17	床面直上 ＋２層 ＋覆土	土師器 杯形	口径（13.6） 器高 5.1	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 黒	内外面－褐	良	45%	
第38図18	１、２層	土師器 杯形	口径（13.2）	外面－篦撫で 内面－撫で	白 透	外面－黒褐～ 暗褐 内面－暗褐	良	（20%）	内外面黒色処理
第38図19	覆土	土師器 鉢形	口径 （9.0） 器高 5.2 底径 5.0	外面－口縁～胴部 撫で 胴下部 指頭押捺 内面－撫で	白 透 灰	外面－淡褐～ 暗橙褐 内面－暗橙褐	良	50%	
第38図20	覆土	土師器 甕形	口径（15.0）	内外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白粗 透粗 白雲	外面－褐 内面－淡褐	良	（15%）	
第38図21	覆土下部	土師器 甕形	胴径（26.3）	外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で 内面－篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡褐	良	（25%）	
第38図22	覆土下部	土師器 甕形	底径 7.6	外面－胴・底部 磨き 内面－篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐・ 暗褐 内面－淡褐	良	（15%）	

Ⅲ次６号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第38図23	床面直上 ＋覆土下部 ＋覆土＋Ｐ３	土師器 甕形	底径　8.2	外面－胴・底部　撫で 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐・暗褐 内面－淡褐～暗褐	良	(35%)	

Ⅲ次７号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第40図１	覆土	土師器 高杯形	口径 (18.0)	外面－撫で 内面－篦撫で	白 透 灰	外面－橙褐 内面－淡褐	良	(20%)	
第40図２	覆土 ＋Ｐ５覆土	土師器 杯形	口径 (16.0) 器高　5.8 底径　3.9	外面－体部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透	内外面－淡褐	良	40%	
第40図３	滑石集中部 ＋滑石集中部貼床中	土師器 杯形	口径 (13.0) 器高　6.0	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透 赤	外面－淡橙褐・淡赤褐 内面－淡褐～暗褐	やや不良	75%	体部一部剥落
第40図４	Ｐ６　１層	土師器 杯形	口径　14.2 器高　4.4 底径　(3.8)	内外面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透 灰	内外面－橙褐	良	40%	
第40図５	貼床中	土師器 杯形	口径 (16.0) 器高　5.2	内外面－撫で	白微 透微	外面－橙褐 内面－暗褐～淡褐	良	(20%)	
第40図６	Ｐ６　１層	土師器 甕形	口径 (19.2)	内外面－指頭押捺→撫で	白微 透 灰	外面－淡褐 内面－橙褐	良	(25%)	
第40図７	床面直上 ＋覆土	土師器 甕形	頸径 (28.6)	外面－刷毛目 内面－撫で	白 粗	外面－暗褐 内面－黒褐・淡褐	良	(25%)	

Ⅲ次７ｂ号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第43図80	床面直上	須恵器 杯	口径 (11.0) 器高　3.8 底径　(6.6)	轆轤成形 外面－体部下端　撫で 底部　回転篦切り→撫で	白粗 透粗	内外面－灰	良	30%	
第43図81	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径 (12.8) 器高　4.8 底径　(7.0)	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り 底部　手持ち一方向篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－灰	良	40%	
第43図82	覆土	須恵器 杯	口径　13.0 器高　4.8 底径　7.4	轆轤成形 外面－体部下端・底部　撫で	白	内外面－淡灰	良	70%	
第43図83	貼床中＋ ７住床面直上 ＋７住覆土	須恵器 高台付 杯	口径 (15.2) 器高　7.4 台径 (10.3)	轆轤成形 外面－底部　回転撫で	白粗 透粗	外面－暗灰 内面－灰	良	35%	
第43図84	床面直上	須恵器 高台付 盤	口径　20.4 器高　3.1 台径　12.0	轆轤成形 外面－底部　回転撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－青灰・褐	やや不良	85%	
第43図85	覆土	須恵器 甕又は 甑	口径 (29.6)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　平行線文叩き目 内面－当て具痕→撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－青灰	良	(20%)	
第43図86	床面直上	土師器 甕形	口径 (20.4)	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗褐 内面－褐	良	(20%)	
第43図87	貼床中	土師器 甕形	口径　22.2	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐 内面－暗橙褐	良	(20%)	88と同一個体と思われる
第43図88	貼床中	土師器 甕形		外面－磨き 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐 内面－暗橙褐	良	(15%)	87と同一個体と思われる

Ⅲ次８号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第44図１	覆土	須恵器 杯	底径 (8.0)	轆轤成形 外面－底部　回転篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	良	(25%)	

Ⅲ次９号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第46図１	覆土	土師器 甕形	口径 (20.2) 胴径 (20.6)	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡橙褐～橙褐 内面－淡橙褐～暗褐	良	(25%)	
第46図２	床面直上	土師器 甕形	口径 (21.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡褐	良	(25%)	
第46図３	覆土 ＋７住覆土 ＋22ｂ住覆土	土師器 甕形	胴径 (42.6)	外面－平行線文叩き目 内面－当て具痕	白	外面－青灰 内面－淡灰	良	(10%)	

Ⅲ次９ｂ号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第47図11	覆土	須恵器 杯	口径 14.0 器高 4.8 底径 8.6	轆轤成形 外面－体部下端　粗い撫で 底部　削り →手持ち一方向粗い撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－灰	良	100%	
第47図12	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径 13.2 器高 5.0 底径 8.2	轆轤成形 外面－底部　回転篦切り→撫で	白粗 透粗	内外面－淡青灰	良	70%	
第47図13	カマド１層	須恵器 杯	口径 (13.0) 器高 4.0 底径 (8.7)	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り 底部　回転篦切り →手持ち多方向篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－青灰	良	30%	
第47図14	床面直上 ＋カマド内 ＋覆土 ＋９住覆土	須恵器 杯	口径 13.7 器高 4.6 底径 8.5	轆轤成形 外面－体部下端　粗い撫で 底部　篦削り →手持ち一方向粗い撫で	白粗 透粗	内外面－淡灰	良	90%	
第47図15	カマド内	須恵器 短頸 壺？	口径 (20.0) 胴径 (28.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　平行線文叩き目 内面－当て具痕→撫で	白微 透	内外面－暗灰	やや 良	(25%)	
第47図16	覆土 ＋９住覆土	須恵器 高台付 杯	口径 (13.2) 器高 5.2 台径 9.0	轆轤成形	白粗	内外面－灰	良	(30%)	
第47図17	カマド内	土師器 甕形	口径 (12.0) 胴径 (14.0)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴上部　篦撫で 胴下部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗褐 内面－黒褐～淡褐	良	(20%)	
第47図18	覆土	土師器 甕形	口径 (20.1)	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗褐 内面－淡褐	良	(20%)	
第47図19	覆土	土師器 甕形	底径 (13.2)	外面－磨き 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－暗橙褐～黒褐 内面－暗褐	良	(20%)	
第47図20	カマド４層 ＋カマド内	土師器 甕形	胴径 (29.3)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴上部　撫で 胴下部　磨き	白粗 透粗 白雲	外面－褐 内面－黒褐	良	(20%)	

Ⅲ次10号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第48図１	覆土	土師器 坩形	頸径 (6.1) 胴径 (8.9)	外面－撫で 内面－篦撫で	白微 透	外面－褐・黒褐 内面－橙褐～暗橙褐	良	(20%)	

Ⅲ次 10 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 48 図 2	覆土 ＋Ｐ５覆土	土師器 甑形	底径　(5.0) 孔径　1.0	外面－篦削り 内面－撫で	白 透 黒	外面－淡橙褐・黒褐 内面－褐・黒褐	良	(45%)	
第 48 図 3	床面直上	須恵器 蓋	径　(12.0)	轆轤成形 内外面－撫で	白 透 灰	外面－灰 内面－白灰	良	(10%)	
第 48 図 4	床面直上	土師器 杯形	口径　14.4 器高　4.2	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透	内外面－暗褐	良	50%	
第 48 図 5	覆土	土師器 甕形	口径 (16.2)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡褐 内面－淡橙褐	良	(30%)	
第 48 図 6	覆土	土師器 甕形	底径　(8.0)	外面－胴部　粗い磨き 底部　撫で 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡褐～黒褐 内面－褐・橙褐	良	(25%)	
第 48 図 7	カマド内	土師器 甕形	底径　7.0	外面－胴部　丁寧な撫で 底部　撫で 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡橙褐 内面－淡褐・暗赤褐	良	(45%)	胴部下端に灰色の付着物

Ⅲ次 11 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 49 図 1	カマド内	土師器 杯形	口径 (13.0) 器高　(4.1)	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白粗 透粗 白雲 赤	外面－淡褐～橙褐 内面－淡褐	やや良	(50%)	
第 49 図 2	床面直上	土師器 甕形	口径　18.6 器高　19.8 胴径　19.7 底径　7.8	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で　底部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白微 透	内外面－褐	良	85%	外面に黒色部と剥落部あり

Ⅲ次 14 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 50 図 1	攪乱	須恵器 杯	体径　14.0	轆轤成形 外面－体部下部　回転篦削り	白微 少	外面－暗青灰 内面－白灰	良	(20%)	
第 50 図 2	覆土下部 ＋覆土	土師器 椀形	口径　14.2 器高　5.2 底径　6.2	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り 底部　回転篦切り→撫で 内面－磨き	白 透	外面－橙褐 内面－黒褐	良	70%	内面黒色処理
第 50 図 3	覆土下部 ＋覆土	土師器 杯形	口径 (12.6) 器高　3.7 底径　(6.0)	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り 底部　手持ち多方向篦削り	白 透	内外面－黄褐	良	30%	
第 50 図 4	覆土下部	土師器 椀形	口径 (16.0)	轆轤成形 内面－撫で	白 透 白雲	外面－淡橙褐 内面－黒褐～橙褐	良	(20%)	
第 50 図 5	覆土下部	土師器 高台付 椀形	口径 (16.0) 器高　5.5 台径　10.2	轆轤成形 外面－底部　撫で 内面－磨き？	白粗 透粗 白雲	内外面－淡橙褐	良	65%	
第 50 図 6	覆土下部	須恵器 甕	口径 (34.4)	外面－３本櫛歯による波状文	白粗	外面－青灰 内面－淡青灰	良	(20%)	外面に自然釉
第 50 図 7	床面直上 ＋覆土下部	須恵器 甕形	胴径 (40.4)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　平行線文叩き目 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部－当て具痕→撫で	白粗 少 (円砂) 透粗 少 (円砂)	内外面－淡灰	良	(30%)	

Ⅲ次 14 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 50 図 8	覆土下部 ＋覆土	土師器 甕形	口径（20.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡褐 内面－褐	良	（35％）	
第 50 図 9	覆土下部 ＋覆土	土師器 甕形	口径（15.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－黒褐	良	（20％）	
第 50 図10	覆土下部 ＋攪乱	土師器 甕形	胴径（16.0） 底径　9.0	外面－胴部　篦削り 底部　撫で 内面－篦撫で	白 透 灰	内外面－橙褐	良	（40％）	

Ⅲ次 24 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 52 図 4	表採	土師器 杯形	口径（14.0）	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦撫で 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白微 透	外面－褐～暗褐 内面－淡褐	良	（45％）	
第 52 図 5	覆土下部	土師器 甕形	口径（13.0）	内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－淡褐～黒褐 内面－淡褐	良	（15％）	

Ⅲ次 18 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 53 図 1	覆土下部	須恵器 杯	底径　（7.0）	轆轤成形 外面－底部　回転篦切り →手持ち一方向撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	良	（25％）	
第 53 図 2	床面直上	土師器 甕形	底径　8.4	外面－胴部　撫で 底部　木葉痕 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－暗褐	良	（100％）	

Ⅲ次 19 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 56 図 1	床面直上 ＋覆土	土師器 高杯形	口径（25.5）	内外面－口縁部　ヨコナデ 杯部　撫で	白 透 灰	内外面－橙褐	良	（60％）	
第 56 図 2	床面直上 ＋壁溝内 ＋覆土	土師器 杯形	口径（14.6） 孔径　1.0	外面－口縁部　ヨコナデ 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白 透	内外面－淡橙褐	良	（35％）	
第 56 図 3	床面直上	須恵器 ハソウ	胴径（10.4） 孔径　1.1	外面－胴下部～底部　撫で 沈線間に櫛歯による波状文	白	内外面－灰	良	（90％）	内面底部に自然釉

Ⅲ次 19 b 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 56 図10	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径（12.3） 器高　4.1 底径　（8.6）	轆轤成形 外面－体部下端　撫で 底部　回転篦切り→撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	やや 良	30％	
第 56 図11	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径　12.6 器高　4.5 底径　5.3	轆轤成形 外面－体部　撫で 体部下端　篦削り 底部　一方向一回篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－灰	良	75％	
第 56 図12	カマド内 ＋表採	須恵器 杯	口径　13.4 器高　3.9 底径　5.7	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り 底部　回転篦切り →手持ち一方向篦削り	白粗 透粗 黒	内外面－灰	良	60％	
第 56 図13	覆土	須恵器 杯	口径（14.2） 器高　4.3 底径　6.4	轆轤成形 外面－体部下端　篦削り 底部　回転篦切り →手持ち一方向一回篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－淡褐	良	50％	
第 56 図14	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径（13.6） 器高　4.1 底径　（6.0）	轆轤成形 外面－体部下端　粗い撫で	白粗 透粗 白雲	外面－黒褐 内面－淡褐	不良	（35％）	

Ⅲ次 19 b号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第56図15	カマド内 ＋表土	土師器 椀形	口径　12.4 器高　4.1 底径　5.9	轆轤成形 外面－胴上～中部　撫で 底部　回転糸切り 内面－磨き	白 透 灰	内外面－橙褐	良	65%	
第56図16	カマド支脚	土師器 甕形	口径　16.3 器高　16.2 胴径　16.5 底径　6.4	外面－口縁部　ヨコナデ 胴上部　撫で 胴下部　篦削り 底部　木葉痕 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－橙褐	良	75%	
第56図17	カマド支脚	土師器 甕形	底径　6.8	外面－胴部　磨き 胴部下端　篦削り 底部　木葉痕 内面－篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐 内面－暗褐	良	(25%)	外面胴中部と胴部下端、底部に粘土付着

Ⅲ次 19 c号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第57図21	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径 (11.4) 器高　3.3 底径　7.7	轆轤成形 外面－底部 手持ち一方向？篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	良	50%	
第57図22	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径 (14.6) 器高　4.8 底径　9.0	轆轤成形 外面－体部下端　回転撫で 底部　回転撫で	白 灰	内外面－淡灰	良	40%	
第57図23	床面直上	須恵器 杯	口径 (13.6) 器高　4.4 底径　9.4	轆轤成形 外面－体部下端　粗い撫で 底部　回転篦切り→手持ち一方向複数回篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	やや良	45%	
第57図24	床面直上 ＋覆土	須恵器 杯	口径 (13.0) 器高　4.2 底径　8.0	轆轤成形 外面－底部　回転撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡褐	良	30%	
第57図25	覆土	須恵器 高台付 杯	口径 (15.0) 器高　5.9 台径　9.0	轆轤成形 外面－体部下端　粗い撫で	白粗 灰粗 (円 砂)	内外面－灰	良	40%	
第57図26	覆土	須恵器 蓋	径　(7.6) 器高　1.6	轆轤成形 外面－天井部　回転篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	良	25%	
第57図27	覆土	須恵器 蓋	径　16.2 器高　3.7	轆轤成形 外面－天井部　回転撫で	白 白雲	内外面－淡灰	良	60%	
第57図28	覆土	須恵器 広口壺	口径 (24.2)	外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　平行線文叩き目 内面－口縁部　ヨコナデ 胴部　当て具痕→撫で	白 透粗	内外面－淡灰 ～青灰	良	(20%)	
第57図29	床面直上 ＋覆土	土師器 甕形	口径 (22.0) 胴径 (24.7)	内外面－口縁部　ヨコナデ 胴部　撫で	白粗 透粗	外面－淡褐 内面－褐	良	(20%)	

Ⅲ次 20 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第58図 1	P 1 内＋攪乱	土師器 杯形	口径 (12.8) 器高　4.4	外面－口縁部　ヨコナデ 体部　篦削り 内面－口縁部　ヨコナデ 体部　撫で	白粗 透粗 白 雲？	内外面－黒褐	良	35%)	外面黒色処理 内面黒色塗彩
第58図 2	2 層＋覆土	土師器 甕形	口径 (22.0)	内外面－口縁部　ヨコナデ	白 透	外面－橙褐 内面－暗褐	良	(15%)	
第58図 3	覆土下部 ＋攪乱	土師器 甕形	底径 (10.0)	外面－胴部　磨き 底部　撫で	白粗 透粗 白雲	外面－黄 内面－白褐	良	(20%)	
第58図 4	1 層＋覆土	土師器 甕形	胴径 (20.5) 底径　(8.0)	外面－胴部　刷毛目 底部　撫で 内面－篦撫で	白	外面－暗褐 内面－淡橙褐 (底部　黒褐)	良	(25%)	

Ⅲ次21号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第61図 1	床面直上	土師器 杯形	口径 13.6 器高 6.2	外面－口縁部 ヨコナデ 体上部 撫で 体下部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で？	白 透 灰	内外面－橙褐	良	100%	
第61図 2	覆土下部 ＋覆土	土師器 杯形	口径 14.0 器高 6.7	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐・黒褐 内面－橙褐	良	60%	
第61図 3	覆土下部 ＋２層	土師器 杯形	口径 13.8 器高 6.1	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 灰	内外面－赤褐・橙褐	良	95%	内外面口縁部～体上部に赤色塗彩
第61図 4	覆土下部 ＋２層 ＋貯蔵穴１層	土師器 杯形	口径 13.7 器高 5.7	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で	白 透 灰	内外面－赤褐・橙褐	良	95%	
第61図 5	覆土下部	土師器 杯形	口径 12.6 器高 6.4	内外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 灰	外面－橙褐 内面－淡橙褐	良	70%	
第61図 6	床面直上 ＋２層 ＋貯蔵穴内	土師器 杯形	口径 12.6 器高 6.8	外面－口縁部 ヨコナデ 体上部 撫で 体下部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で	白 透	外面－赤褐・暗褐 内面－暗褐・淡褐	良	100%	
第61図 7	２層＋Ｐ２内	土師器 杯形	口径 15.0	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 灰	内外面－赤褐	良	25%	
第61図 8	Ｐ２覆土上部	土師器 杯形	口径 12.5 器高 6.0	外面－口縁部 ヨコナデ 体上部 撫で 体下部 篦削り	白 透 灰	内外面－淡橙褐	やや良	90%	
第61図 9	覆土下部 ＋覆土	土師器 杯形	口径 15.0 器高 5.7	内外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 灰	内外面－橙褐	良	95%	
第61図10	２層	土師器 椀形	口径 14.5	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で	白微 透	内外面－褐	良	(30%)	
第61図11	覆土下部	土師器 椀形	口径 13.8 器高 10.8 底径 4.3	外面－口縁部 ヨコナデ 体上部・底部 撫で 体下部 弱い篦削り 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 丁寧な撫で	白微 透	内外面－赤褐	良	95%	底部を除く内外面赤色塗彩
第61図12	覆土下部	土師器 甕形	口径 14.2	外面－口縁部 ヨコナデ 内面－口縁部 撫で	白 透 灰	外面－橙褐 内面－黒褐	良	(35%)	
第61図13	覆土 ＋貯蔵穴 １～９層	土師器 椀形	口径 10.0	内外面－撫で？	白 透	外面－橙褐 内面－褐	やや良	(50%)	
第61図14	覆土下部＋ Ｐ３覆土上部	土師器 甕形	口径 19.2 胴径 28.2	外面－撫で？ 内面－篦撫で	白 透 灰 赤	内外面－淡橙褐	良	(70%)	
第61図15	Ｐ４内	土師器 甕形	口径 15.0 器高 25.0 胴径 21.0 底径 6.4	外面－口縁部 ヨコナデ 肩部 篦削り 胴部 篦撫で 底部 撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で	白 透 灰	外面－橙褐・黒斑 内面－橙褐	良	100%	

Ⅲ次22号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第63図 1	覆土	土師器 高杯形 杯部 杯部	口径 19.2	外面－口縁部 ヨコナデ 杯部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 杯部 撫で	白微 透	内外面－橙褐	良	(90%)	
第63図 2	攪乱	土師器 高杯形 脚柱部		外面－磨き 内面－絞り成形 輪積痕→撫で	白 透 灰	内外面－淡橙褐	良	(100%)	
第63図 6	貯蔵穴覆土上部 ＋貯蔵穴内	土師器 高杯形 杯部	口径 19.2	内外面－口縁部 ヨコナデ 杯部 撫で	白微 透	内外面－橙褐	良	(30%)	
第63図 7	貯蔵穴覆土上部 ＋貯蔵穴内	土師器 高杯形 杯部	口径 (21.6)	外面－口縁部 ヨコナデ 杯部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 杯部 撫で	白微 透	内外面－橙褐	良	(90%)	
第63図 8	貯蔵穴覆土上部	土師器 高杯形 脚部	裾径 16.0	外面－柱部 磨き？ 裾部 撫で 内面－柱部 輪積痕→篦撫で 裾部 撫で	白粗 透 灰	内外面－橙褐	良	(100%)	
第63図 9	貯蔵穴内 ＋覆土 ＋9住表土	土師器 椀形？	口径 (9.0) 胴高 (10.5)	外面－口縁部 ヨコナデ 体上部 撫で 体下部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 指頭押捺→篦撫で	白微 透 灰	外面－赤褐・暗褐 内面－暗褐・淡褐	良	(30%)	
第63図10	貯蔵穴内 ＋覆土	土師器 甕形	口径 15.0	内外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 篦撫で	白 透 灰	外面－淡橙褐 内面－黒褐	良	(25%)	
第63図11	貼床中 (22ｂ住部)	土師器 杯形	口径 (13.0) 器高 5.5 底径 3.3	内外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 黒	内外面－白褐	良	50%	
第63図12	貼床中 (22ｂ住部) ＋22ｂ住覆土	土師器 杯形	口径 15.0 器高 5.7	内外面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 黒	内外面－淡褐	良	50%	外面～内面口縁部赤色塗彩
第63図13	貼床中 (22ｂ住部)	須恵器 杯	口径 (11.2) 体径 (13.6)	轆轤成形 外面－体上部－撫で 体下部－回転篦削り	白微	内外面－灰	良	(30%)	
第63図15	Ｐ８付近貼床中	土師器 坩形	口径 14.0	内外面－口縁上部 ヨコナデ 口縁下部 篦撫で 内面－口縁上部 ヨコナデ 口縁下部 磨き	白 透 黒	内外面－淡橙褐	良	(65%)	
第64図16	床面直上 ＋覆土	土師器 甕形	口径 (28.9) 器高 30.8 胴径 (29.5) 底径 8.0	外面－口縁部 ヨコナデ 胴上部・底部 撫で 胴下部 磨き 内面－口縁部 ヨコナデ 胴部～底部 篦撫で	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐～暗褐 内面－淡褐～暗褐	良	25%	
第64図17	南部床面 ～覆土下部	土師器 甕形	口径 (22.0) 胴径 (36.0)	外面－胴部 磨き 内面－口縁部 ヨコナデ	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐・黒褐 内面－淡褐	良	(30%)	
第64図18	南部床面 ～覆土下部	土師器 甕形	口径 28.8 胴径 42.1	外面－胴部 磨き	白粗 透粗 白雲	外面－淡褐～橙褐 内面－淡褐	良	(90%)	
第64図22	南部覆土上部 ＋覆土	土師器 杯形	口径 15.0 器高 4.2	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦削り→撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 磨き	白 透 赤	外面－褐 内面－黒	良	75%	外面口縁部～内面黒色塗彩
第64図23	南部覆土上部	土師器 甕形	口径 21.0	外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 胴部 指頭押捺→篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡褐	良	(15%)	
第64図24	南部覆土上部	土師器 甕形	底径 6.8	外面－胴部 磨き 底部 撫で 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	外面－橙褐 内面－淡橙褐	良	(70%)	

Ⅲ次 22 b 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 65 図25	床面直上	須恵器 杯	口径 13.5 器高 4.5 底径 7.4	轆轤成形 外面－体部下端 篦削り 底部 回転篦切り →手持ち多方向篦削り	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	やや 良	65%	
第 65 図26	カマド内	須恵器 杯	底径 (6.0)	轆轤成形 外面－体部下端 粗い撫で 底部 回転篦切り →手持ち多方向粗い撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－灰褐	良	(35%)	
第 65 図27	床面直上 ＋カマド内 ＋Ｐ２内	須恵器 杯	口径 (13.6)	轆轤成形 外面－体部下端 撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡灰	良	(45%)	
第 65 図28	覆土	須恵器 高台付 杯	台径 9.0	轆轤成形 外面－体部下端 回転篦撫で 底部 回転篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－淡褐	やや 良	(90%)	
第 65 図29	床面直上 ＋覆土	土師器 甕形	口径 (22.0)	外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 胴部 篦撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－橙褐 ～褐	良	(20%)	

Ⅲ次 23 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 66 図 1	床面直上	土師器 杯形	口径 20.8 器高 7.8	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 黒	外面－橙褐～ 淡橙褐 内面－淡橙褐	良	90%	
第 66 図 2	住居南側攪乱	土師器 杯形	口径 (14.6) 器高 4.8	外面－口縁部 ヨコナデ 体部 篦撫で 内面－口縁部 ヨコナデ 体部 撫で	白 透 黒 赤	内外面－淡褐	良	25%	

Ⅲ次 25 b 号住居跡

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第 67 図 1		土師器 台付椀 形	口径 13.2 器高 4.5 台径 6.2	轆轤成形 外面－口縁部～体部 撫で 底部 回糸切り→撫で 内面－磨き	白 透 灰	外面－淡褐 内面－黒褐	良	80%	内面黒色処理
第 67 図 2	覆土	土師器 台付椀 形	口径 13.6 器高 4.4 台径 6.6	轆轤成形 外面－口縁部～体部 撫で 底部 回糸切り 内面－磨き	白 透	外面－淡褐～ 暗赤褐 内面－黒褐	良	80%	内面黒色処理
第 67 図 3	覆土	土師器 椀形	口径 12.8 器高 4.3 底径 6.0	轆轤成形 外面－口縁部～体部 撫で 底部 回糸切り 内面－撫で	白 透 灰	内外面－淡橙 褐	良	90%	
第 67 図 4	覆土	土師器 甕形	口径 (28.0)	外面－口縁部 撫で 胴部 平行線文叩き目 内面－撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－黒褐	不良	(15%)	
第 67 図 5		須恵器 甑形？	口径 26.0	外面－口縁部 ヨコナデ 胴部 格子目文叩き目 内面－当て具痕→撫で	白粗 透粗 白雲	内外面－暗灰	良	50%	

土製品観察表

・土錘、紡錘車の長さ・高さは、穿孔方向の計測値で、幅は穿孔方向と直行する方向の最大値。
・長さ・高さ、幅・口径、孔径の単位はcmで、（　）は復元値。重さの単位はｇ。
・胎土欄の表記は土器に同じ。残存率欄の（　）は図示した部位での値。

Ⅰ次１号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第７図	24	ｃ４層	球状土錘	3.2	3.3	0.7	26.0	撫で	暗褐	白微	良	95%	
	25	覆土	球状土錘	2.3	3.0	0.4	16.8	撫で	褐	白・透	良	100%	

Ⅱ次３号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第13図	5	貼床中	球状土錘	2.9		0.8	7.7	撫で	橙褐	白・透	良	30%	
	6	覆土	球状土錘	3.2	3.3		16.4	撫で	淡褐	白・透	良	50%	
	7	床面直上	球状土錘	2.6	2.8	0.7	19.7	撫で	淡褐・橙褐	白微	良	100%	
	8	覆土	紡錘車	2.6	5.3		38.1	撫で	暗褐	白・透	不良	80%	

Ⅱ次４号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第14図	5	覆土	管状土錘		4.1	1.6	121.2		橙褐～暗褐	白・透	良	欠損品	

Ⅱ次５号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第15図	8	カマド覆土	支脚		6.5		190.0	撫で	外面－褐	白粗・透粗・灰	不良	欠損品	
									内部－桃～橙褐				

Ⅱ次遺構外

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第23図	10		球状土錘	1.8	1.7	0.4	4.1		暗褐	白微	良	100%	孔部摩滅
	11		ミニチュア土器	2.5	口径(2.8)		8.1	手捏ね・撫で	淡橙褐	白微	良	40%	

Ⅲ次１号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第28図	2	床面直上（２層上面）	球状土錘	3.2	3.2	0.8	32.6	撫で	橙褐・黒褐	白・透	良	100%	孔部摩滅
	3	床面直上（２層上面）	土製勾玉？	4.0	3.1	厚さ2.0	17.6	手捏ね→指頭押捺→撫で	橙褐	白・透	やや良	100%	
	4	攪乱	土製円板？		3.4	厚さ1.4	11.0	手捏ね→指撫で	淡褐・橙褐	白微	良	90%	
	5	火床面直上	棒状土製品	34.8	6.0	4.8	770.0	撫で・篦撫で	橙褐	白･透･黒	良	98%	
	13	貼床中	ミニチュア土器		底径3.8		10.3	手捏ね→撫で	黒褐	白･透･赤	やや良	(70%)	

Ⅲ次３号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第31図	6	覆土下部	ミニチュア土器	4.0	口径(7.0)		37.3	手捏ね→指撫で	橙褐	白・透	良	25%	
	7	床面直上	球状土錘	3.3	2.8	0.8	16.7	撫で	淡橙褐	白・透	良	100%	
	8	覆土下部	球状土錘	2.4	2.5	0.6	12.0	撫で	暗褐	白粗・透粗	やや不良	100%	
	9	覆土	球状土錘	2.0	2.2	0.7	8.6	撫で	橙褐	白・透	良	100%	
	10	貼床中	球状土錘	2.5			7.3	撫で	淡褐	白･透･黒	良	45%	

Ⅲ次４号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第34図	8	覆土	球状土錘	2.4	2.9	0.8	19.4	撫で	白褐・灰褐	白・透	良	100%	
	9	覆土	球状土錘	2.7	2.9	0.6	18.3	撫で	淡橙褐・黒褐	白・透	良	90%	
	10	床面直上	球状土錘	2.5	3.0	0.7	19.7	撫で	淡橙褐・暗褐	白・透	やや良	85%	
	11	１層	球状土錘	2.9	3.2	0.7	28.2	撫で	淡褐・橙褐	白･透･黒	良	100%	
	12	覆土	球状土錘	2.7	2.9	0.4	20.9	撫で	淡褐・淡橙褐	白・透	良	100%	
	13	床面直上	球状土錘	2.1	2.5	0.4	10.2	撫で	淡褐	白微・黒	良	100%	

Ⅲ次４号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 34 図	14	覆土	球状土錘	1.9	2.2	0.4	6.8	撫で	淡褐・橙褐	白・透	良	45%	

Ⅲ次５号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 37 図	7	Ｐ１	球状土錘	2.6	2.9	0.8	9.0	撫で	橙褐	微白	良	45%	
	8	Ｐ３	球状土錘	4.4	4.4	0.7	8.6	撫で	淡橙褐	微白	良	90%	

Ⅲ次６号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 38 図	24	Ｐ５	支脚	13.5	9.0		397.6	撫で	淡赤褐	白・透	やや良	45%	先端摩滅
	25	床面直上	管状土錘	7.6	5.2	1.8	94.9	撫で・指頭圧痕	淡橙褐・淡褐	白・透	やや良	50%	
	26	床面直上	管状土錘	6.2	4.5	1.8	55.5	撫で・篦撫で？	褐・黒褐	白・透	良	45%	
	27	床面直上	紡錘車	4.5	1.4	0.5	19.2	表面撫で、側面磨き	淡褐・黒褐	白粗・透粗・白雲	良	50%	
	28	覆土	球状土錘	2.7	3.2	0.7	19.4	撫で	淡褐・橙褐	白・透	良	100%	
	29	Ｐ５	球状土錘	2.5	3.3	0.6	25.0	撫で	淡橙褐	白・透	良	100%	
	30	床面直上	球状土錘	2.8	3.1	0.8	23.5	撫で	褐・黒褐	白・透	良	100%	
	31	床面直上	球状土錘	2.7	2.9	0.6	16.8	撫で	黒褐・橙褐	白・透・黒	良	95%	孔部摩滅

Ⅲ次７号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 40 図	8	床面直上	球状土錘	3.0	3.4	0.6	30.8	撫で	淡橙褐・黒褐	白微・透	良	100%	孔部摩滅

Ⅲ次７ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 43 図	89	覆土	球状土錘	3.1	3.5	0.6	35.2	撫で	褐	白・透・黒	良	95%	
	90	床面直上	紡錘車	6.8	4.3	1.4	109.0	撫で	橙褐	白微	良	50%	孔部摩滅

Ⅲ次８号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 44 図	2	覆土	球状土錘	1.9	3.1	0.5	12.7	撫で		白・透	良	100%	
	3	覆土	球状土錘	2.3	4.3	0.5	14.8	撫で		白微・透	良	100%	

Ⅲ次９号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 46 図	4	床面直上	支脚	13.3	10.0		－	指頭圧痕	橙褐	砂･白微･金雲	不良		欠損品
	5	覆土	支脚	9.1	6.2		－	撫で	赤褐・橙褐	白・透	不良		欠損品
	6	Ｐ４	球状土錘	1.9	2.0	0.4	8.2	撫で	暗褐	白微・透	良	100%	
	7	覆土	球状土錘	1.9	2.0	0.4	8.3	撫で	暗褐	白微・透	良	100%	

Ⅲ次９ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ･高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 47 図	21	床面直上	球状土錘	2.1	2.0	0.4	7.6	撫で	暗褐	白微・透	良	100%	
	22	床面直上	球状土錘	1.9	2.1	0.4	9.0	撫で	橙褐	白微・透	良	100%	
	23	床面直上	球状土錘	1.9	2.0	0.4	8.2	撫で	橙褐	白微・透	良	100%	
	24	床面直上	球状土錘	2.0	2.1	0.4	9.1	撫で	橙褐	白微・透	良	100%	
	25	床面直上	球状土錘	2.0	2.1	0.4	9.7	撫で	橙褐	白微・透	良	100%	
	26	床面直上	球状土錘	2.3	2.2	0.4	11.1	撫で	橙褐	白微・透	良	100%	
	27	床面直上	球状土錘	2.2	2.1	0.4	10.3	撫で	暗褐	白微・透	良	100%	
	28	覆土	球状土錘	1.8	2.0	0.4	7.7	撫で	橙褐	白微・透	良	100%	
	29	床面直上	球状土錘	2.2	2.5	0.4	14.5	撫で	橙褐	白微・透	良	100%	

Ⅲ次 10 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 48 図	8	覆土	球状土錘	2.5	2.9	0.6	19.9	撫で	淡褐	白 微・橙・黒	良	100%	
	9	覆土	球状土錘	3.0	3.3	0.5	31.8	撫で	淡橙褐	白・透・黒	良	100%	
	10	覆土	球状土錘	2.6	3.4	0.6	36.0	撫で	橙褐	白・透	良	100%	
	11	覆土	?	2.2	2.4		15.8	指頭圧痕？	橙褐	白 微・透	良	?	

Ⅲ次 11 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 49 図	3	カマド内	ミニチュア土器	2.4	口径 (5.0)		9.8	外－篦撫で、内－撫で	橙褐	白・透・黒	良	35%	
	4	攪乱	球状土錘	1.6	1.9	0.5	6.2	指頭圧痕	橙褐	白微	良	100%	
	5	竈底面直上	支脚	7.8	8.7		－	撫で	橙褐	砂・白	不良		破損品

Ⅲ次 14 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 51 図	11	覆土	球状土錘	2.5	2.8	0.5		撫で	淡橙褐	白・透	良	45%	

Ⅲ次 16 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 52 図	2	床面直上	支脚	10.5	7.2		－	撫で	橙褐	砂・白	不良		破損品

Ⅲ次 19 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 56 図	4	覆土	土玉	1.3	1.4	0.1	2.9	撫で	橙褐	白微	良	100%	
	5	覆土	球状土錘	1.7	2.2	0.4	10.1	撫で	淡橙褐	白・透	良	100%	

Ⅲ次 19 b 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 56 図	18	床面直上	球状土錘	2.3	2.8	0.5	20.1	撫で	橙褐	白・透・灰	良	100%	
	19	貼床中	球状土錘	2.7	2.8	0.5	22.5	撫で	橙褐・黒褐	白・透・灰	良	100%	

Ⅲ次 19 c 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 57 図	30	覆土	球状土錘	2.1	2.3	0.5	12.4	撫で	橙褐	白 微・透	良	100%	

Ⅲ次 20 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 59 図	5	床面直上	ミニチュア土器	3.5	口径 (7.0)		37.6	撫で	橙褐	白・透・灰	不良	30%	
	6	Ｐ３	球状土錘	2.3	2.6	0.5	16.2	撫で	暗褐	白・透	良	100%	
	7	覆土下部	球状土錘	2.2	2.6	0.6	15.2	撫で	淡褐	白 微・透	良	100%	
	8	床面直上	球状土錘	2.7	2.7	0.5	19.5	撫で	橙褐	白・透・灰	良	100%	
	9	床面直上	球状土錘	1.7	1.7	0.4	4.5	撫で	淡褐	白 微・透	良	100%	
	10	床面直上	支脚	5.7	4.6		－	撫で	淡褐	白・透	やや不良		欠損品

Ⅲ次 22 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 63 図	14	貼床中	球状土錘	3.1	3.3	0.6	6.7	撫で	淡褐	白微	良	100%	
第 64 図	19	南部床面～覆土下部	ミニチュア土器	3.0	口径 (4.6)		18.8	撫で、胴下部篦削り	淡褐・黒褐	白・透	良	60%	
	20	南部床面～覆土下部	支脚	1.7	1.9	0.5	－	撫で			良	100%	

Ⅲ次 22 b 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ・高さ	幅	孔径	重さ	成形・整形等	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第 65 図	30	貼床中	紡錘車	1.8	5.0	0.6	40.2	撫で	灰	白・橙・白雲	良	95%	須恵質
	31	覆土	球状土錘	1.7	2.1	0.4	6.1	撫で	淡褐	白微	良	100%	
	32	カマド内	土玉	1.6	1.9	0.2	4.8	撫で	暗橙褐	白微	良	100%	

石器観察表

・長さ・幅・厚さの単位はcmで、重さの単位はｇ。
・両極石片は、両極打法による剥離痕を残す石片。

Ⅰ次１号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第７図	26	ｃ４層	敲石	12.9	6.7	5.4	600.0	流紋岩	敲打痕は先端部と連続する側縁部に集中する他、稜部にも残る。
	27	ｃ２層上面	敲石	10.0	6.5	4.4	370.0	流紋岩	敲打痕は表面が僅かに剥落する程度のもの。

Ⅰ次２号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第８図	40	ｆ層	砥石	3.3	3.6	1.3	18.7	流紋岩	破片。砥面は表面と側面にみられる。裏面は破損面。

Ⅰ次３号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第８図	48	Ｐ１	磨製石斧	6.9	5.3	2.4	110.0	凝灰岩	破損品。全面研磨。

Ⅱ次３号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第13図	10	覆土		5.7	8.6	1.5	57.6	凝灰岩	背面に礫面を残す剥片を素材とし、刃部状の端部が両面とも摩滅している。

Ⅱ次塚状遺構

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第23図	4	盛土	磨製石斧	6.5	3.8	2.2	6.70	砂岩	破片。全面研磨。

Ⅱ次遺構外

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第23図	9		磨石	10.9	9.2	4.2	700.0	安山岩	表裏面摩滅。側面敲打痕。表裏中央部に敲打による凹みあり。

Ⅲ次調査区出土

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第26図	62	19ｃ住床面		4.1	7.8	0.8	25.1	黒雲母片岩	破損品。表面と裏面の一部を研磨。刃部状の端部は研磨されているが摩滅は認められない。
	63	18住覆土	石鏃	2.3	1.8	0.7	3.0	安山岩	平基無茎鏃。片面に礫面を残す。

Ⅲ次１号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第28図	6	１層	砥石	7.5	4.2	6.0	164.0	砂岩	砥面は凹んでいる。
	7	３層	砥石	6.0	4.4	1.5	50.1	砂岩	破損品。板状の砥石で、敲打による整形痕を残す。被熱の痕跡あり。
	8	３層	磨製石斧	2.4	2.1	0.9	6.2	緑色凝灰岩	刃部を欠損する。全面研磨。

Ⅲ次３号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第31図	11	覆土	砥石	4.6	3.5	1.3	17.8	流紋岩	表面と左側面が砥面。
	12	床面直上	両極石片	2.8	2.4	1.2	7.7	チャート	分割した円礫を素材とする。

Ⅲ次４号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第34図	16	１層	砥石	8.2	5.1	3.3	116.9	砂岩	破片。表面が砥面。
	17	覆土	砥石	9.7	4.0	3.2	128.6	砂岩	破片。砥面に敲打による整形痕を残す。
	18	覆土	石核	2.8	5.0	1.3	17.8	チャート	表面が作業面であり、打面と裏面に礫面を残す。

Ⅲ次６号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第38図	32	覆土	砥石	5.3	5.6	1.1	49.6	砂岩	表面と２側面が砥面。

Ⅲ次６ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第37図	12	４層	砥石？	6.5	3.8	1.0	26.2	黒雲母片岩	表面に研磨痕がみられ、裏面の縁部に調整剥離が施されている。

Ⅲ次７号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第 43 図	91	覆土	砥石	5.8	4.3	3.4	73.7	凝灰岩	破損品。ほぼ全面が砥面。

Ⅲ次９号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第 46 図	10	床面直上	スクレイパー	5.9	9.5	1.2	77.7	ホルンフェルス	背面が礫面の剥片を素材とし、末端部に剝離を施し刃部を作出している。

Ⅲ次 10 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第 48 図	12	覆土	敲石	6.8	3.1	2.6	69.3	砂岩	棒状の礫の両端部に敲打痕がみられる。

Ⅲ次 14 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第 51 図	13	攪乱	磨石	10.6	9.0	3.7	592.0	安山岩	表裏面摩滅。側面敲打痕。表裏中央部に敲打による凹みあり。

Ⅲ次 16 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第 52 図	1	床面直上	台石？	17.0	12.1	7.4	1980.0	石英砂岩	円礫の２ヶ所に敲打痕が残る。

Ⅲ次 20 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第 59 図	11	覆土下部	敲石	8.8	7.2	6.3	567.0	石英砂岩	円礫の平坦面と稜部に僅かに敲打痕がみられる。被熱赤化。
	12	攪乱	敲石	9.6	6.4	4.6	425.0	安山岩	棒状礫を分割したもので、その分割面に敲打痕がみられる。
	13	廃土	磨石	5.9	8.8	4.0	276.0	石英砂岩	破損品。表裏面摩滅。側面敲打痕。表面にも敲打痕あり。
	14	覆土下部	磨石	6.4	4.6	3.8	150.0	安山岩	破片。表裏面摩滅。側面敲打痕。表面にも敲打痕あり。

Ⅲ次 21 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第 61 図	16	床面直上	磨石	8.7	9.0	6.6	625.0	石英砂岩	破損品。表裏面摩滅。側面、表面にも敲打痕あり。

金属製品観察表

・長さ・幅・厚さの単位は cm で、重さの単位は g。

Ⅱ次５号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 15 図	9	覆土	鉄製鎌	17.8	3.8	0.4	83.2	先端部欠損。曲刃。

Ⅱ次塚状遺構

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 23 図	1	周溝	寛永通宝	2.45	2.45	0.1	2.4	孔 0.55cm 四方。
	2	Ⅰ層	寛永通宝	2.55	2.55	0.1	2.2	孔 0.5cm 四方。

Ⅲ次４号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 34 図	15	１層	鉄製鎌	9.6	3.5	0.3	30.4	先端部欠損。曲刃。

Ⅲ次９号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 46 図	9	表採	銅製丸鞆	1.8	2.8	0.8	8.6	

Ⅲ次 14 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 51 図	12	床面直上	隆平永寶		2.4		－	孔幅 0.6cm。

Ⅲ次 22 ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 65 図	35	床面直上	銅製巡方	1.6	2.5	0.1	1.7	破片。表面に黒色物質付着。

滑石製品観察表

・長さ・幅・厚さ・孔径・孔間距離の単位はcmで、重さの単位はｇ。
・未加工のものを原石、原石を分割等加工したものを素材とした。

Ⅱ次３号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第13図	9	覆土	双孔円板	3.9	3.5	0.5	12.2	2.50	研磨

Ⅱ次７号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第13図	9	覆土	双孔円板	2.5	2.7	0.5	3.8	1.40	研磨、樋状の削り

Ⅱ次１号土坑

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第21図	3	覆土	剥片	2.2	2.8	0.9	5.3	背面の一部礫面、主要剥離面に削り痕

Ⅲ次１号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第21図	9	５層上面	剥片	3.1	3.5	0.7	8.4	
	10	４層	研磨剥片	2.2	2.1	0.4	2.4	表裏面研磨、側面折断・礫面・削り
	11	４層	無孔円板	2.2	2.3	0.4	3.7	研磨
	12	攪乱	剥片	9.1	6.7	2.2	93.0	背面礫面

Ⅲ次２ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第29図	2	覆土	剥片	4.6	6.0	4.3	82.0	横長剥片を分割、打面礫面

Ⅲ次３号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第31図	13	覆土下部	勾玉	3.7	2.2	0.5	6.3		研磨
	14	覆土下部	双孔円板	2.2	2.4	0.4	2.7	1.30	研磨、側面の一部削り
	15	床面直上	剥片	9.1	6.7	2.2	93.0		背面と打面の一部礫面

Ⅲ次４号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第34図	19	床面直上	素材	4.1	3.9	1.1	18.0	板状の原石を分割、表面に刃痕
	20	覆土	石核？	6.4	10.8	1.4	106.3	素材は剥片状の原石、剥離面の打点付近に擦れたような削り痕

Ⅲ次５号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第37図	9	床面直上	原石	6.5	5.7	2.3	118.8	板状

Ⅲ次６号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第38図	33	覆土	原石	2.7	4.3	1.4	14.9	

Ⅲ次６ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第37図	10	床面直上	剥片	6.5	3.8	1.0	26.2	

Ⅲ次７号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第40図	9	覆土	素材	3.9	3.0	1.5	15.6		礫面、剥離
	10	覆土	剥片	3.0	1.4	1.3	5.0		礫面、折断面
	11	床面直上	剥片	2.3	4.1	0.9	9.8		剥離面
	12	床面直上	剥片	2.3	1.8	0.5	2.2		剥離面、折断面
	13	滑石集中区	剥片	2.5	1.0	0.4	0.8		剥離面、折断面
	14	滑石集中区	剥片	2.3	0.7	0.2	0.4		剥離面、折断面
	15	覆土	研磨剥片	1.6	1.0	0.3	1.1		表裏剥離面、側面研磨
	16	滑石集中区	勾玉	4.1	2.6	0.5	8.9		研磨
	17	覆土	臼玉	0.45	0.45	0.35	0.11		研磨
	18	覆土	臼玉	0.47	0.50	0.40	0.08		研磨
	19	覆土	臼玉	0.41	0.46	0.35	0.05		研磨
	20	覆土	臼玉	0.48	0.48	0.34	0.10		研磨

Ⅲ次７号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第 40 図	21	床面直上	臼玉	0.41	0.40	0.43	0.12		研磨
	22	覆土	臼玉	0.42	0.42	0.21	0.05		研磨
	23	覆土	臼玉	0.42	0.41	0.33	0.10		研磨
	24	覆土	臼玉	0.46	0.48	0.35	0.13		研磨
	25	覆土	臼玉	0.44	0.43	0.35	0.10		研磨
	26	覆土	臼玉	0.44	0.43	0.38	0.12		研磨
	27	覆土	臼玉	0.40	0.45	0.23	0.06		研磨、欠損品
	28	覆土	臼玉	0.45	0.45	0.27	0.08		研磨
	29	覆土	臼玉	0.47	0.49	0.34	0.12		研磨
	30	覆土	臼玉	0.42	0.44	0.32	0.12		研磨
	31	滑石集中区	臼玉	0.48	0.48	0.40	0.14		研磨
	32	滑石集中区	臼玉	0.45	0.45	0.34	0.12		研磨
	33	滑石集中区	臼玉	0.44	0.44	0.39	0.13		研磨
	34	滑石集中区	臼玉	0.49	0.48	0.41	0.13		研磨
	35	滑石集中区	臼玉	0.45	0.47	0.39	0.14		研磨
	36	滑石集中区	臼玉	0.47	0.47	0.33	0.12		研磨
	37	滑石集中区	臼玉	0.44	0.45	0.32	0.10		研磨
	38	滑石集中区	臼玉	0.39	0.40	0.34	0.07		研磨
	39	滑石集中区	臼玉	0.47	0.47	0.32	0.10		研磨
	40	滑石集中区	臼玉	0.45	0.48	0.31	0.11		研磨
	41	滑石集中区	臼玉	0.47	0.45	0.31	0.09		研磨
	42	滑石集中区	臼玉	0.46	0.46	0.29	0.09		研磨
	43	滑石集中区	臼玉	0.45	0.42	0.22	0.07		研磨
	44	滑石集中区	臼玉	0.44	0.42	0.31	0.08		研磨
第 41 図	45	滑石集中区	双孔円板	2.3	2.4	0.2	2.4	0.75	研磨
	46	滑石集中区	双孔円板	3.6	3.7	0.3	4.0	0.90	研磨
	47	滑石集中区	双孔円板	2.5	2.6	0.3	2.1	0.90	研磨
	48	滑石集中区	双孔円板	2.1	2.3	0.2	2.1	0.90	研磨
	49	床面直上	双孔円板	2.5	2.7	0.3	2.9	1.05	研磨
	50	滑石集中区	双孔円板	3.1	3.0	0.4	5.2	1.05	研磨
	51	滑石集中区	双孔円板	2.2	2.3	0.3	2.3	1.05	研磨
	52	滑石集中区	双孔円板	2.1	2.1	0.3	2.1	1.05	研磨
	53	滑石集中区	双孔円板	3.4	3.4	0.3	5.8	1.05	研磨
	54	滑石集中区床中	双孔円板	2.6	2.6	0.3	3.0	1.10	研磨
	55	覆土	双孔円板	3.5	3.6	0.3	6.5	1.20	研磨
	56	滑石集中区	双孔円板	2.4	2.5	0.3	2.7	1.20	研磨
	57	滑石集中区床中	双孔円板	3.0	3.0	0.4	5.7	1.20	研磨
	58	滑石集中区床中	双孔円板	2.3	2.5	0.3	2.8	1.20	研磨
	59	床面直上	双孔円板	3.6	3.5	0.3	7.8	1.25	研磨
	60	覆土	双孔円板	2.6	2.5	0.2	3.2	1.25	研磨
	61	滑石集中区	双孔円板	3.0	2.8	0.4	5.1	1.25	研磨
	62	床面直上	双孔円板	2.6	2.9	0.3	3.1	1.25	研磨
	63	滑石集中区	双孔円板	2.4	2.5	0.2	2.3	1.25	研磨
	64	滑石集中区	双孔円板	2.0	2.3	0.3	2.1	1.25	研磨
第 42 図	65	覆土	双孔円板	3.2	3.4	0.3	6.0	1.35	研磨
	66	覆土	双孔円板	2.6	2.8	0.2	2.7	1.35	研磨
	67	覆土	双孔円板	3.0	3.2	0.4	6.4	1.35	研磨
	68	滑石集中区	双孔円板	2.9	3.2	0.3	5.2	1.35	研磨
	69	滑石集中区	双孔円板	2.8	2.8	0.3	3.9	1.35	研磨
	70	覆土	双孔円板	3.4	3.7	0.4	8.9	1.40	研磨
	71	滑石集中区	双孔円板	2.7	3.1	0.3	4.1	1.40	研磨

Ⅲ次７号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第 42 図	72	覆土	双孔円板	3.7	3.5	0.3	6.6	1.45	研磨
	73	滑石集中区	双孔円板	3.5	3.5	0.3	5.8	1.65	研磨
	74	覆土	双孔円板	3.5	3.9	0.4	10.5	1.70	研磨
	75	滑石集中区	双孔円板	3.7	3.8	0.3	7.4	1.70	研磨
	76	滑石集中区	双孔円板	3.5	3.7	0.3	6.3	1.70	研磨
	77	滑石集中区床中	双孔円板	3.5	3.9	0.4	6.9	1.70	研磨
	78	滑石集中区	双孔円板	4.1	4.3	0.3	9.3	1.85	研磨
	79	覆土	双孔円板	3.1	3.7	0.3	5.7	1.90	研磨

Ⅲ次７ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 43 図	92	カマド内	単孔円板	2.1	2.2	0.3	2.2	研磨

Ⅲ次８号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 44 図	4	攪乱	無孔円板	2.0	2.0	0.4	2.4	研磨

Ⅲ次９号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔径	備考
第 46 図	8	覆土	剣形模造品	3.7	1.5	0.35	2.7	0.35	研磨

Ⅲ次 16 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 52 図	3	床面直上	剥片	2.9	2.5	1.10	10.2	折断、削り、刃痕

Ⅲ次 19 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔間距離	備考
第 56 図	6	床面直上	勾玉	3.5	2.3	0.9	11.2		研磨
	7	覆土	双孔円板	3.0	4.0	0.4	8.1	2.70	研磨
	8	床面直上	双孔円板	3.3	3.2	0.4	4.8	1.50	研磨
	9	床面直上	双孔円板	3.1	3.2	0.4	6.7	2.20	背面と打面の一部礫面

Ⅲ次 19 ｂ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 56 図	20	床面直上	研磨剥片	10.2	4.5	1.3	86.5	分割した板状の剥片の２側面に研磨を加えている

Ⅲ次 19 ｃ号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	孔径	備考
第 57 図	31	覆土	紡錘車	5.0	5.0	2.2	78.3		研磨、裏面と側面の一部に黒色物質付着

Ⅲ次 21 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 61 図	17	貯蔵穴１層	石核？	5.3	4.7	2.8	77.8	原石を素材にしたもので、表裏面と上面に礫面を残す
	18	床面直上	剥片	3.6	3.8	0.8	12.8	側縁から剥がされた剥離面の打点付近に擦れたような削り痕

Ⅲ次 22 号住居跡

図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 63 図	2	覆土	原石	4.9	7.9	2.7	68.7	
	3	覆土	原石	5.0	6.3	3.0	106.2	
	4	覆土	素材	6.9	5.9	1.6	57.3	板状の原石を折断したもの、折断面の打点付近には擦れたような削り痕
第 64 図	21	南部床面～覆土下部	素材剥片	4.2	3.4	0.5	10.2	主要剥離面の打点付近に擦れたような削り痕、周囲折断

Ⅲ次 22 ｂ号住居跡

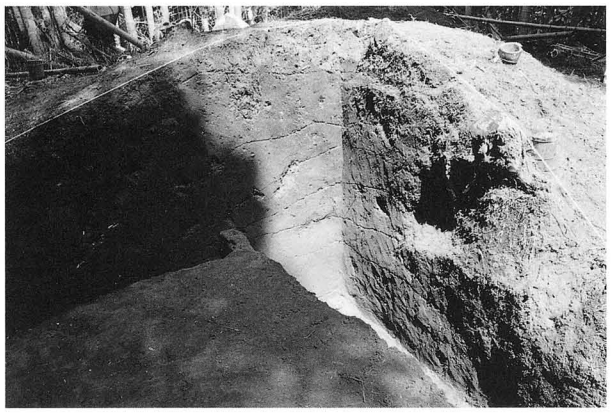
図版番号		出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第 65 図	33	貯蔵穴１層	素材	3.4	2.3	0.8	7.0	小形の原石に剥離、削りを施したもの
	34	床面直上	剥片	3.4	2.9	0.5	5.3	

写真図版

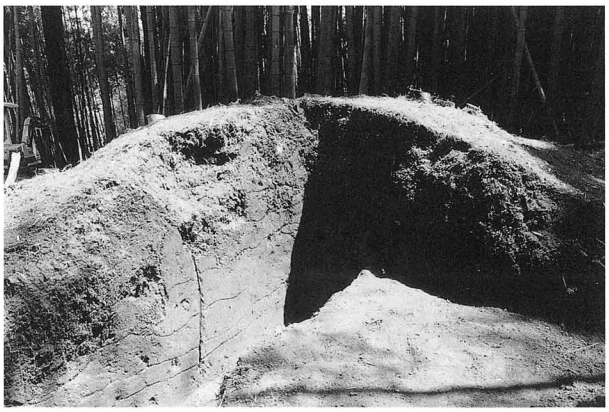
PL.1

Ⅰ次塚状遺構

塚上にあった坂碑

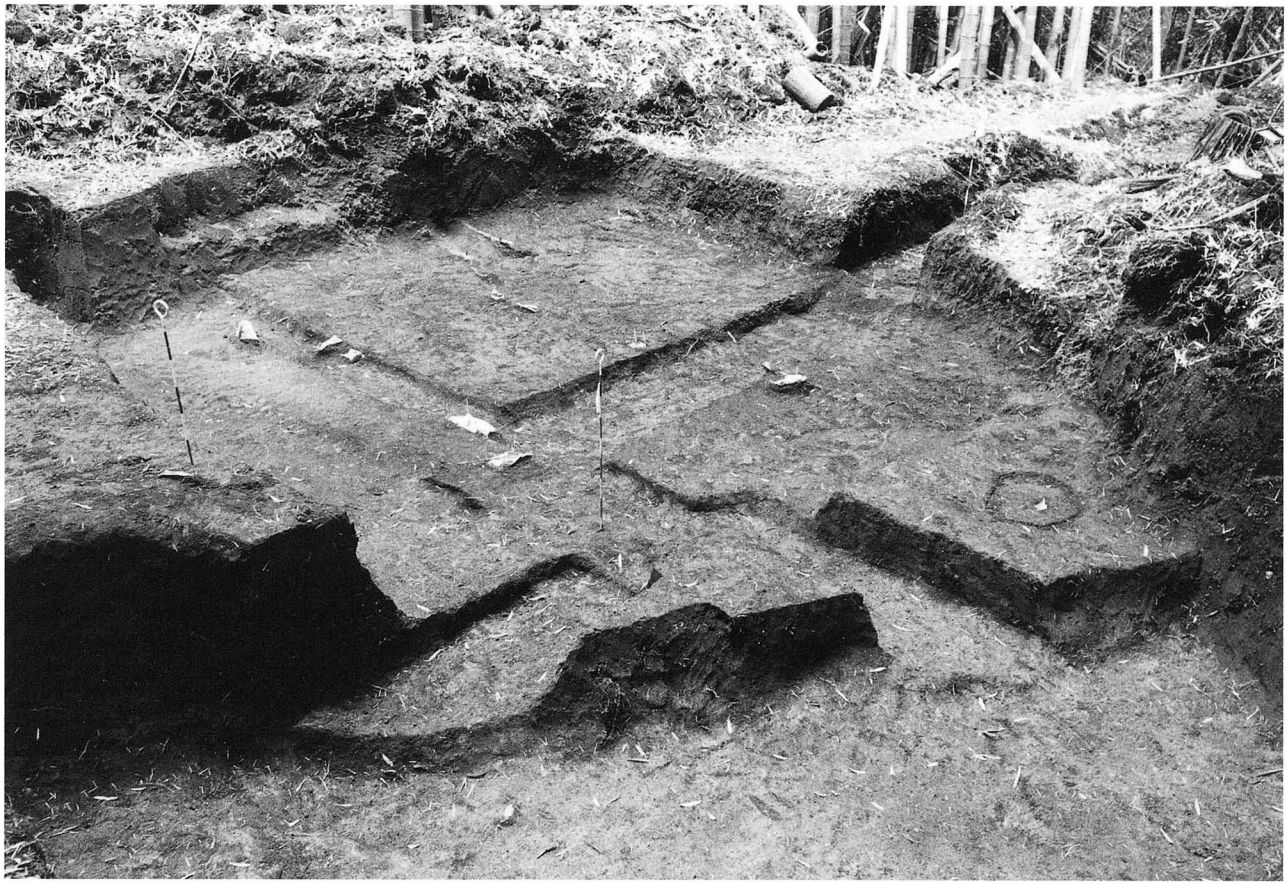


塚状遺構断面(南東より)

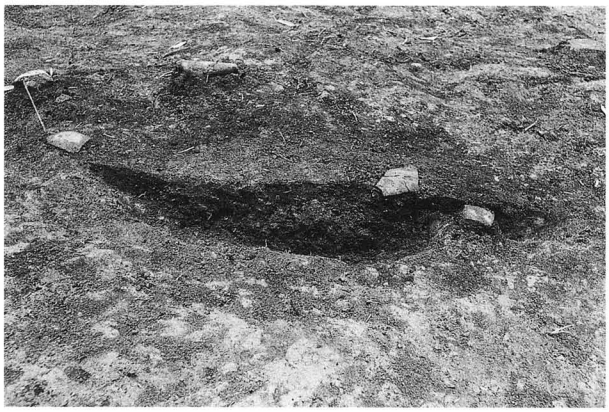


塚状遺構断面(北西より)

Ⅰ次T－1西壁断面



Ⅰ次住居跡群(南西より)



Ⅰ次１号住居跡炉址

Ⅰ次１号住居跡Ｐ１

Ⅰ次１号住居跡Ｐ４断面

Ⅰ次３号住居跡Ｐ１断面

PL.3

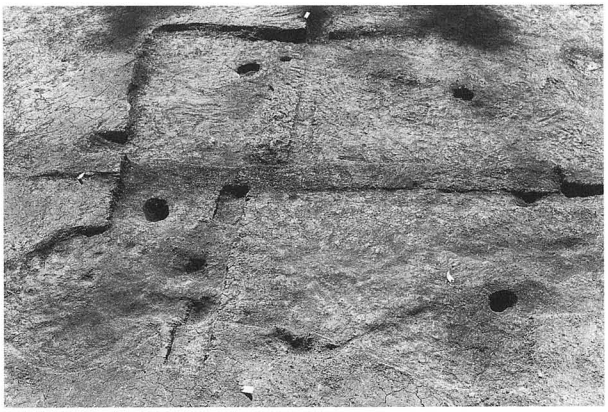
Ⅱ次調査区より旧余郷入方面を望む

Ⅱ次調査区近景（西より）

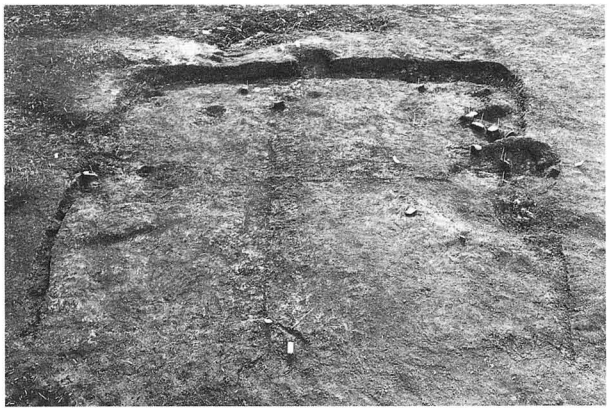
Ⅱ次調査区近景（東より）

Ⅱ次調査終了状況（北西より）

Ⅱ次調査区基本土層



Ⅱ次１号住居跡（北より）



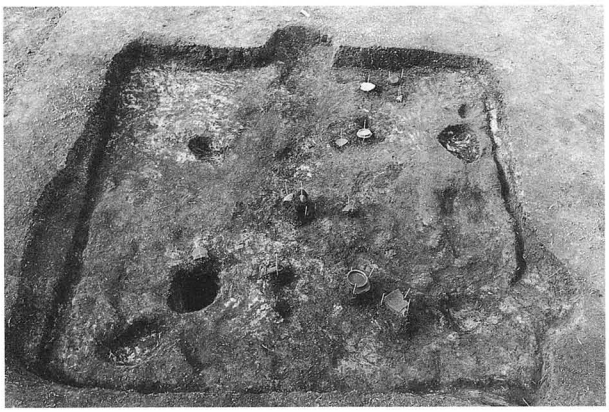
Ⅱ次２号住居跡（東より）

Ⅱ次２号住居跡カマド（南より）

Ⅱ次３号住居跡（北より）

Ⅱ次３号住居跡貯蔵穴貼床状況

Ⅱ次３号住居跡貯蔵穴（南より）

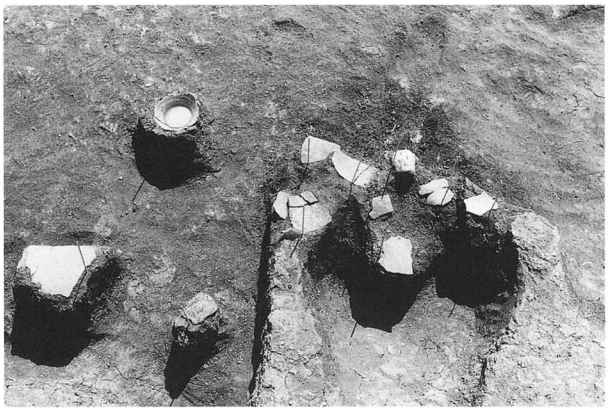


Ⅱ次４号住居跡（南より）

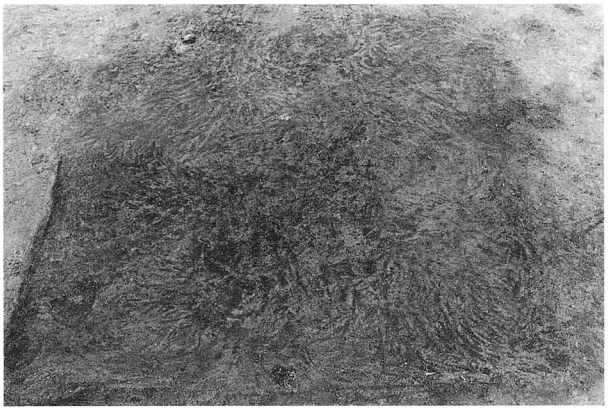
Ⅱ次４号住居跡（北西より）

PL.5

Ⅱ次５号住居跡(西より)

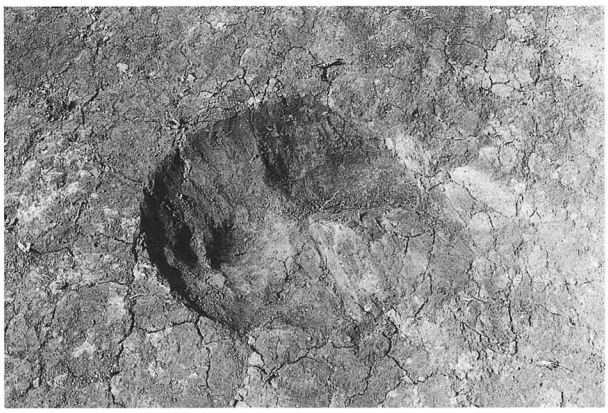


Ⅱ次５号住居跡カマド(北より)



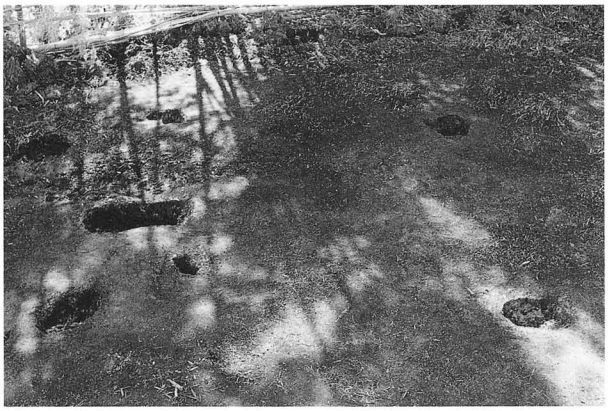
Ⅱ次６号住居跡(南より)

Ⅱ次７号住居跡(北西より)

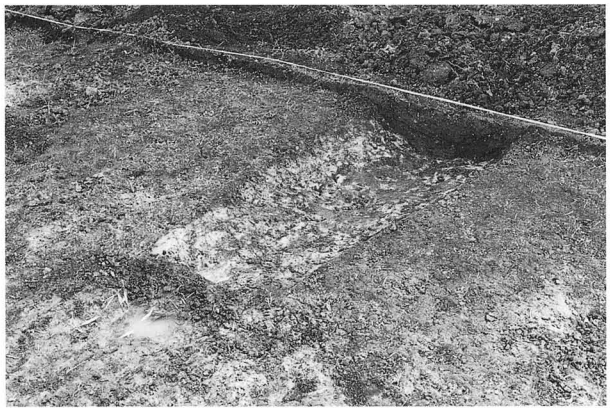


Ⅱ次７号住居跡貯蔵穴(11土)(南東より)

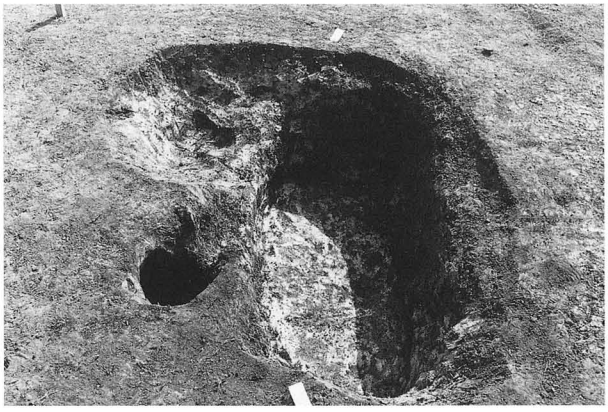
Ⅱ次１号土坑（北より）



Ⅱ次３号土坑・１～５Ｐ（北より）

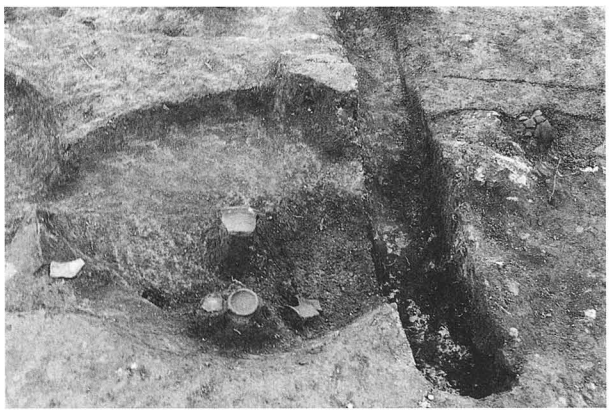


Ⅱ次４号土坑（北西より）

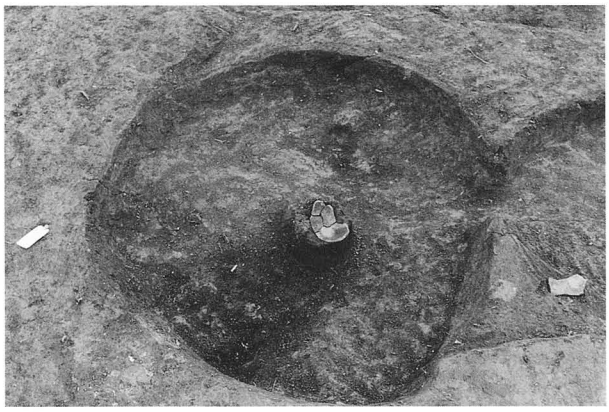


Ⅱ次６号土坑・28Ｐ（西より）

Ⅱ次７号土坑（西より）



Ⅱ次８号土坑（西より）



Ⅱ次９号土坑（西より）

Ⅱ次10号土坑（西より）

PL.7

Ⅱ次６～15Ｐ（北西より）

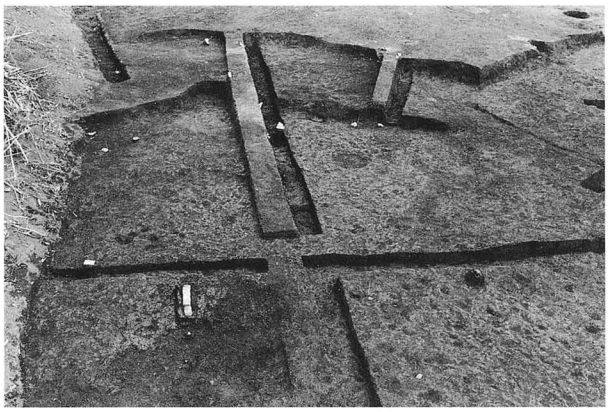
Ⅱ次塚状遺構（南より）

Ⅱ次塚状遺構周溝（西より）

Ⅱ次塚状遺構週溝（北より）

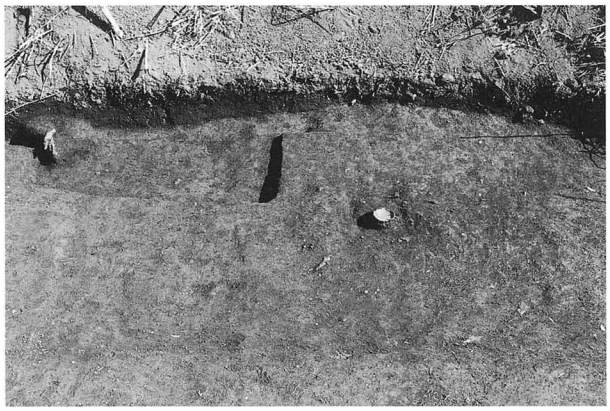
Ⅱ次塚状遺構断面（南より）

Ⅲ次調査区空撮（右が北）

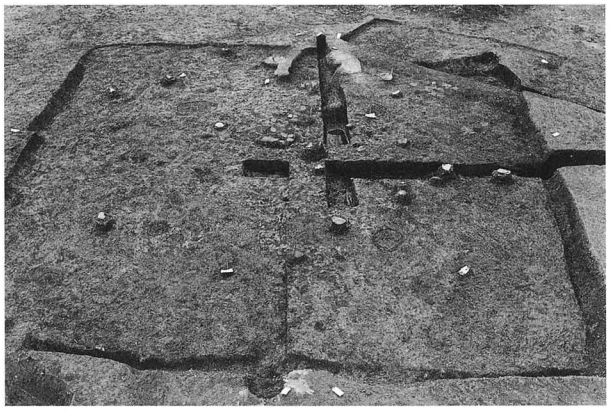


Ⅲ次１号住居跡（北より）

Ⅲ次１号住居跡土器（１）出土状況



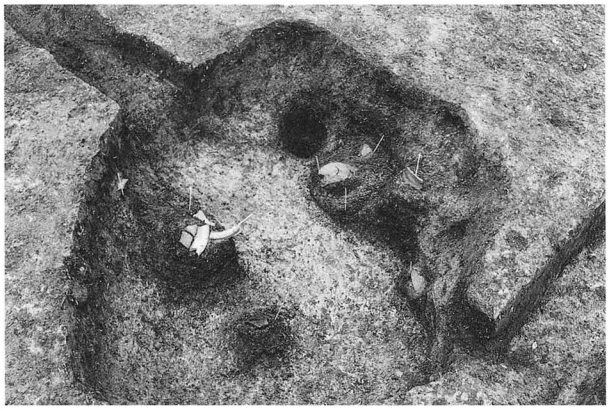
Ⅲ次２号住居跡（西より）



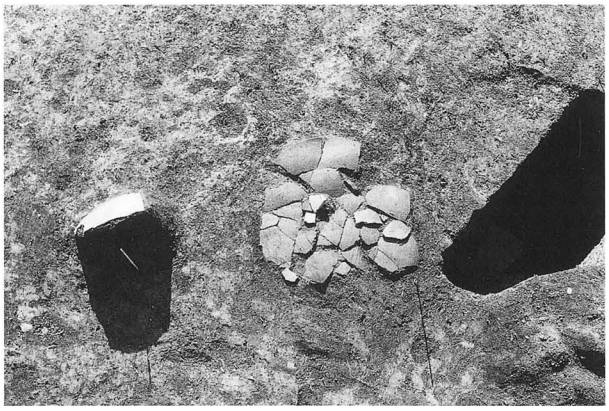
Ⅲ次３号住居跡（南より）

PL.9

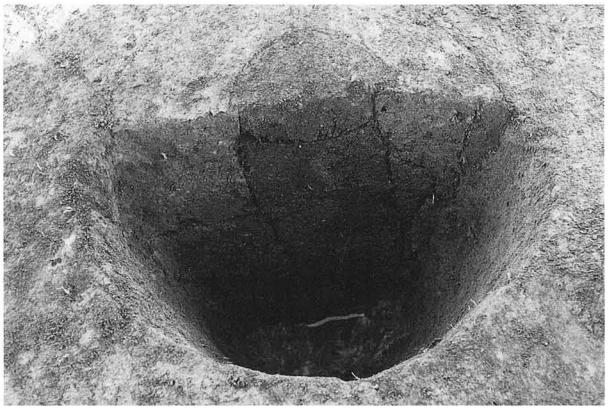
Ⅲ次３号住居跡床下土坑断面



Ⅲ次３号住居跡床下土坑（南より）



Ⅲ次４号住居跡土器（７）出土状況



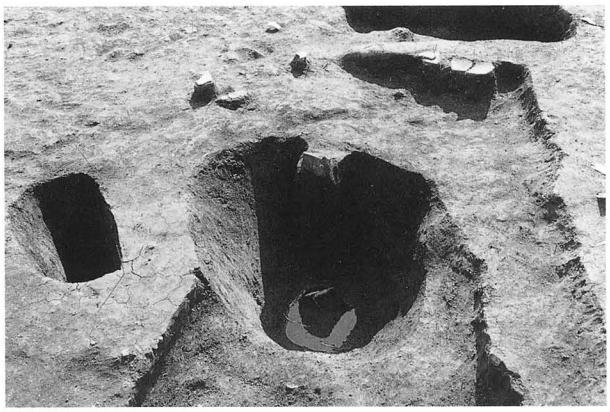
Ⅲ次４号住居跡Ｐ２断面

Ⅲ次４号住居跡

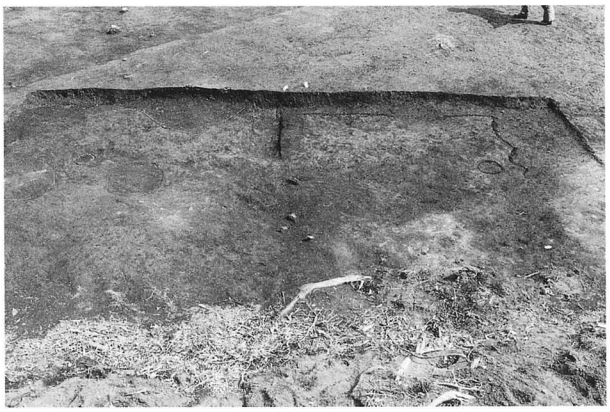
Ⅲ次５，６，６ｂ号住居跡（北西より）

Ⅲ次５号住居跡カマド・貯蔵穴（南より）

Ⅲ次６号住居跡カマド（南より）

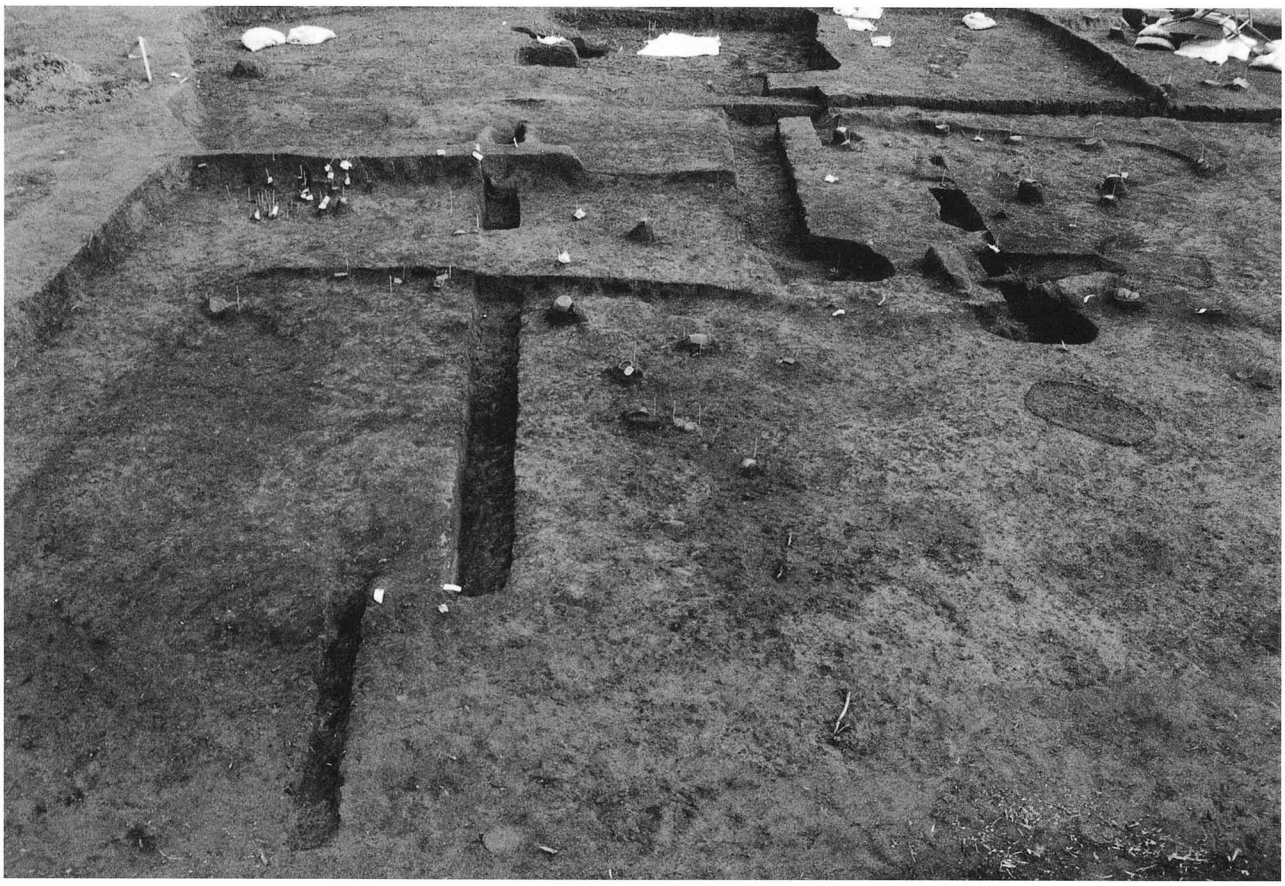


Ⅲ次６号住居跡貯蔵穴（東より）



Ⅲ次８号住居跡（北より）

PL.11



Ⅲ次７，７ｂ号住居跡（北より）

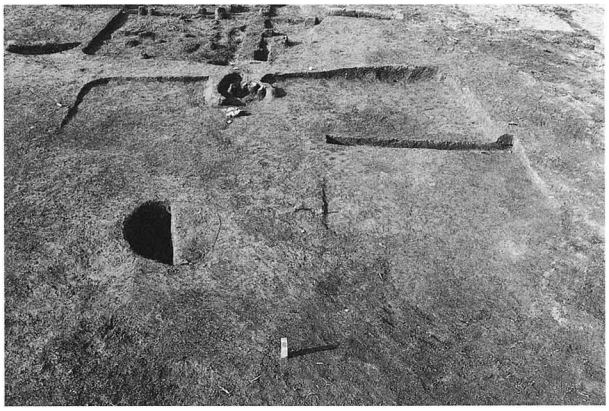
Ⅲ次７号住居跡滑石製品集中部

Ⅲ次7ｂ号住居跡遺物出土状況（北より）

Ⅲ次９号住居跡（西より）

Ⅲ次９ｂ号住居跡（西より）

Ⅲ次10号住居跡（南より）

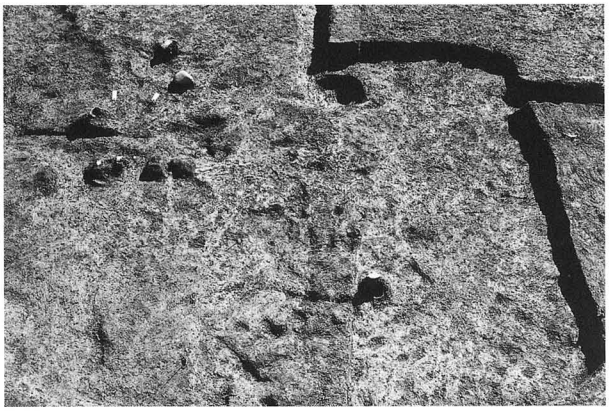


Ⅲ次11号住居跡（南より）

Ⅲ次11号住居跡カマド（南より）

Ⅲ次14号住居跡（北より）

Ⅲ次２号土坑３～５Ｐ（西より）



Ⅲ次16号住居跡（西より）

Ⅲ次18号住居跡（南より）

Ⅲ次18号住居跡カマド（南より）

PL.13

Ⅲ次19, 19ｂ号住居跡（南より）

Ⅲ次19号住居跡勾玉出土状況

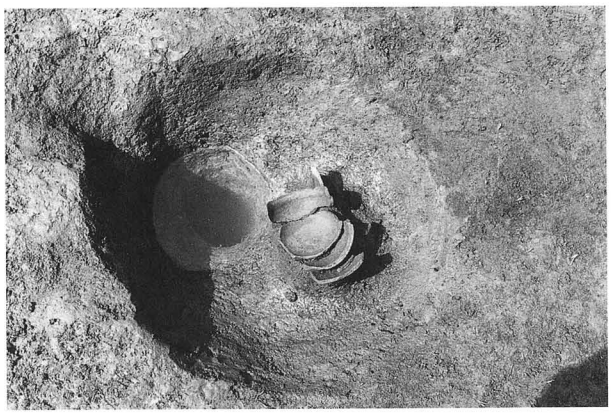
Ⅲ次19ｂ号住居跡カマド（南より）

Ⅲ次19ｃ号住居跡（東より）

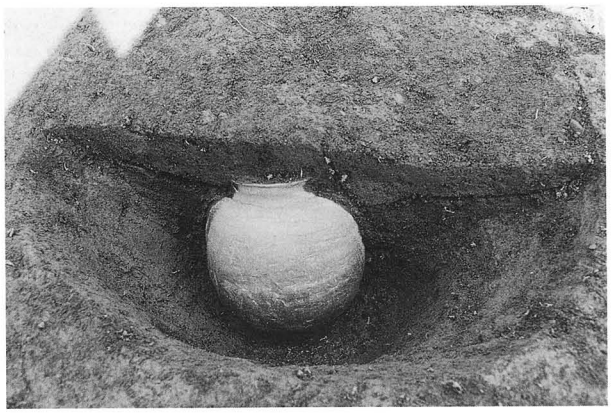
Ⅲ次19ｃ号住居跡紡錘車出土状況

Ⅲ次21号住居跡（西より）

Ⅲ次21号住居跡カマド（東より）



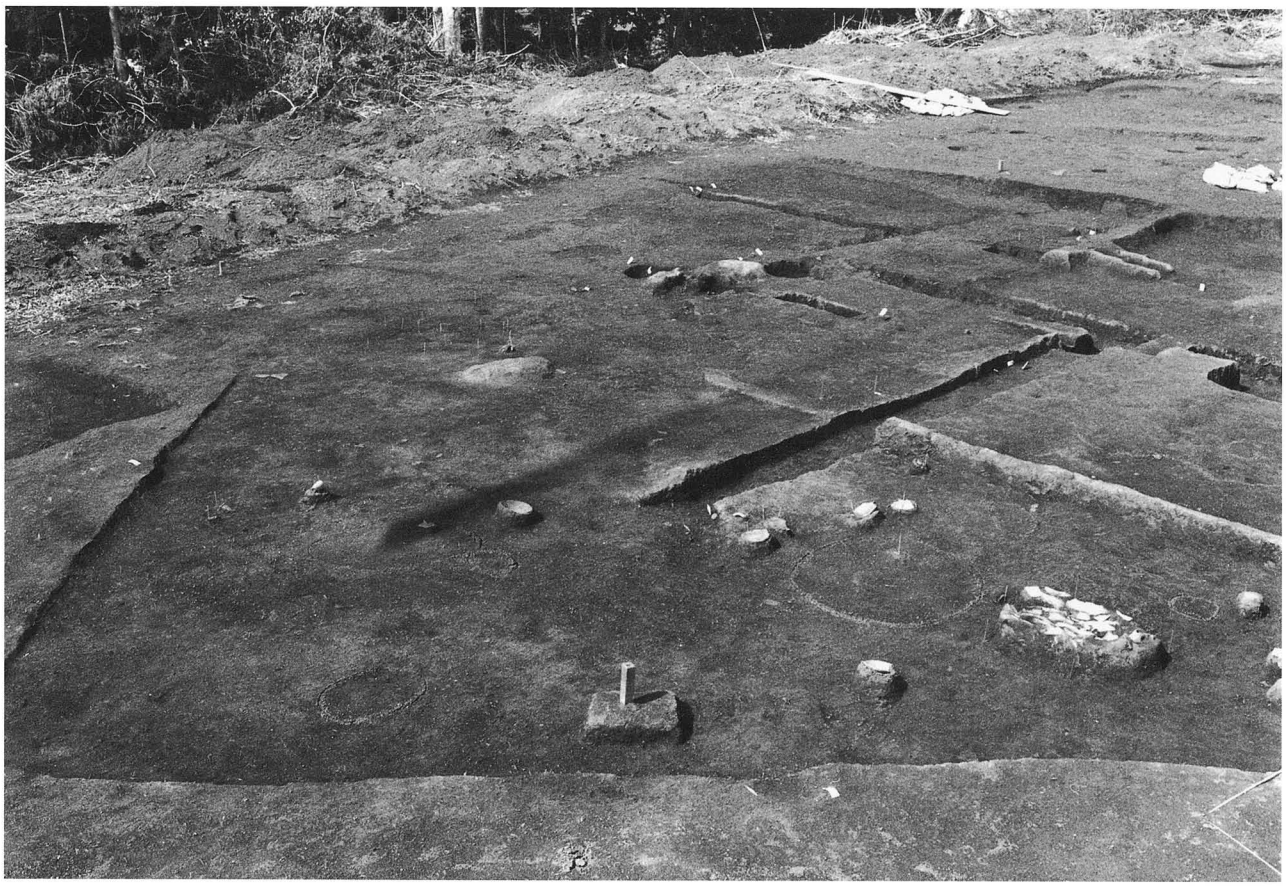
Ⅲ次21号住居跡Ｐ２遺物出土状況



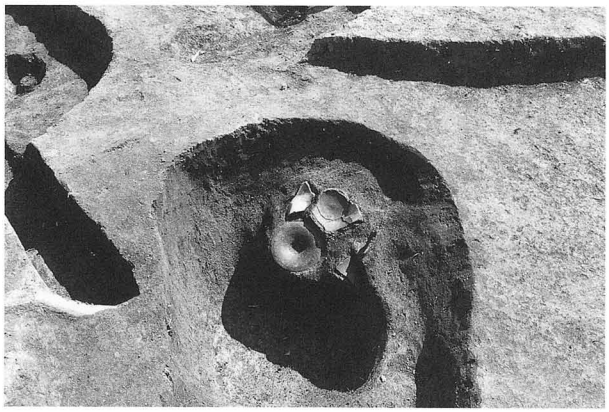
Ⅲ次21号住居跡Ｐ４遺物出土状況

Ⅲ次20号住居跡（南より）

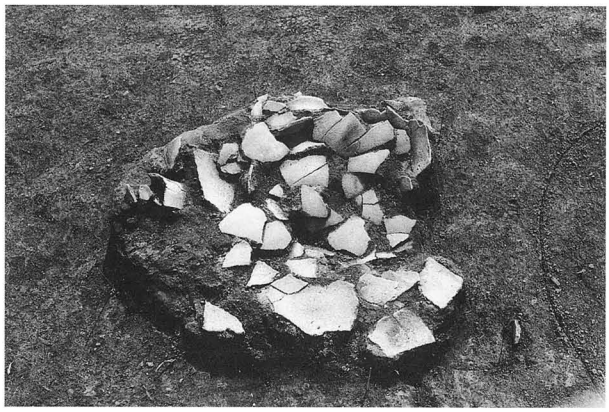
PL. 15



Ⅲ次22号住居跡（南西より）



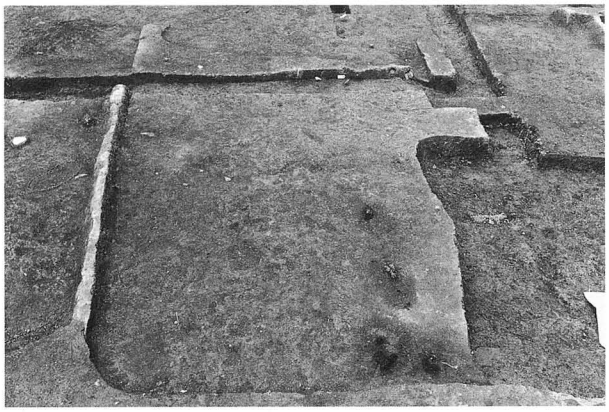
Ⅲ次22号住居跡貯蔵穴



Ⅲ次22号住居跡土器（17, 18）出土状況

Ⅲ次22ｂ号住居跡（南より）

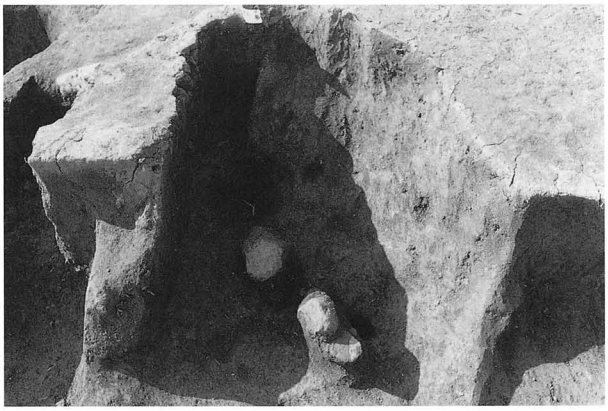
Ⅲ次22ｂ号住居跡カマド（南より）



Ⅲ次22ｃ号住居跡（南より）

Ⅲ次23号住居跡（北より）

Ⅲ次24号住居跡（北より）



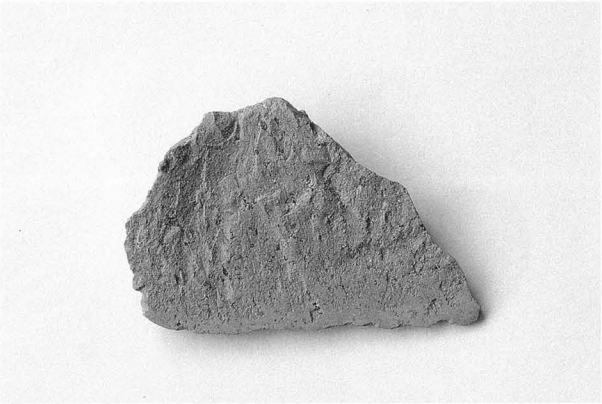
Ⅲ次25ｂ号住居跡カマド（南より）

Ⅲ次25, 25ｂ号住居跡（南より）

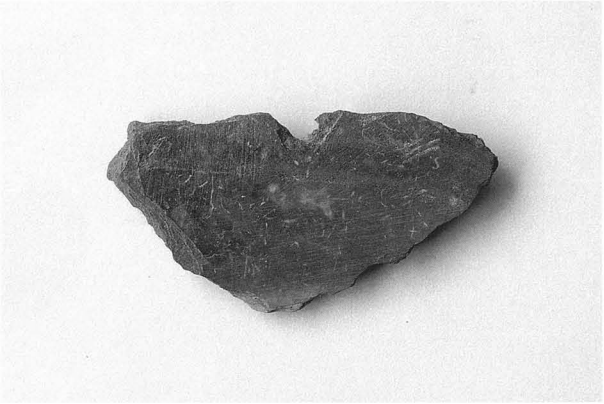
PL.17

Ⅱ次５号住居跡出土須恵器（５）底部墨書（画像処理）

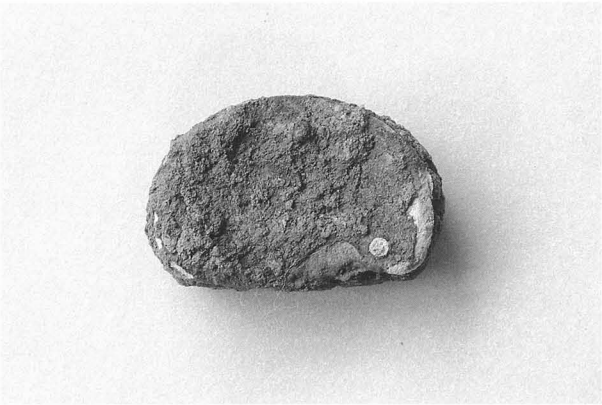
Ⅲ次14号住居跡出土隆平永寶（Ｘ線写真）



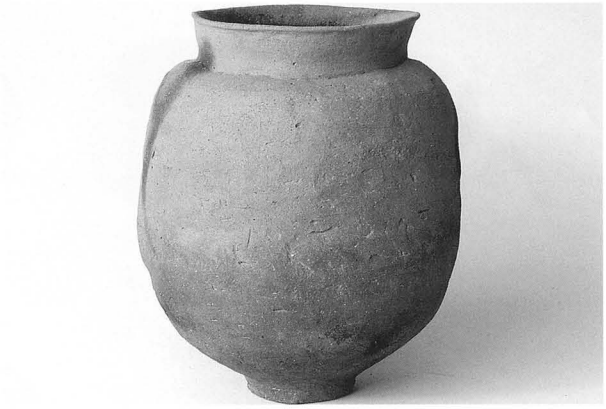
Ⅱ次第３号住居跡出土石器(10)



Ⅲ次出土石器(第26図62)

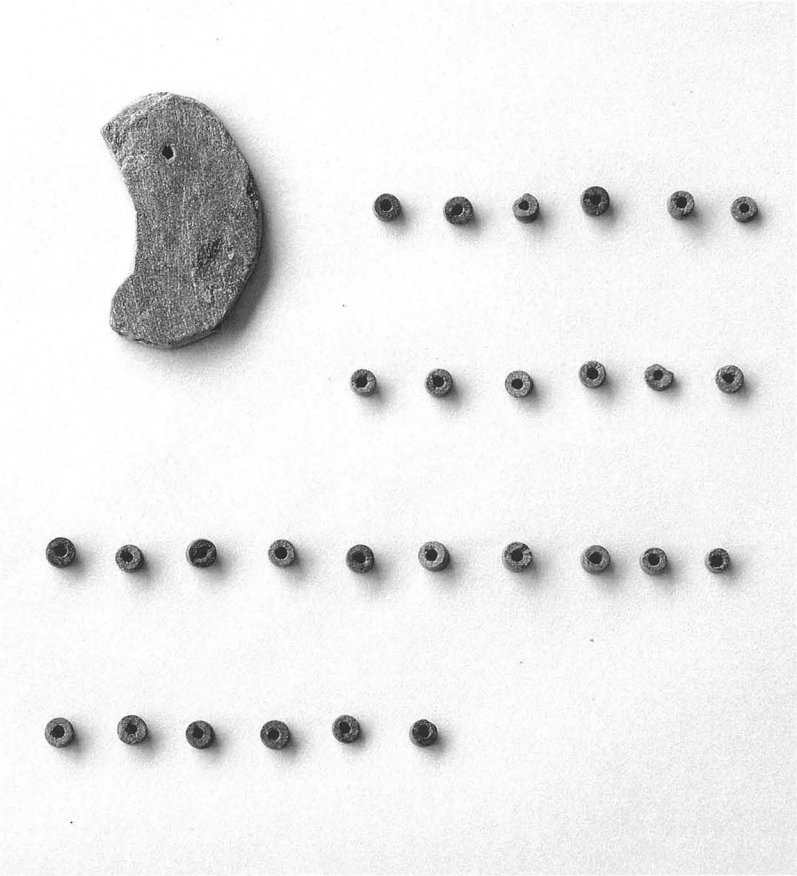


Ⅲ次第９号住居跡出土丸鞆(裏)



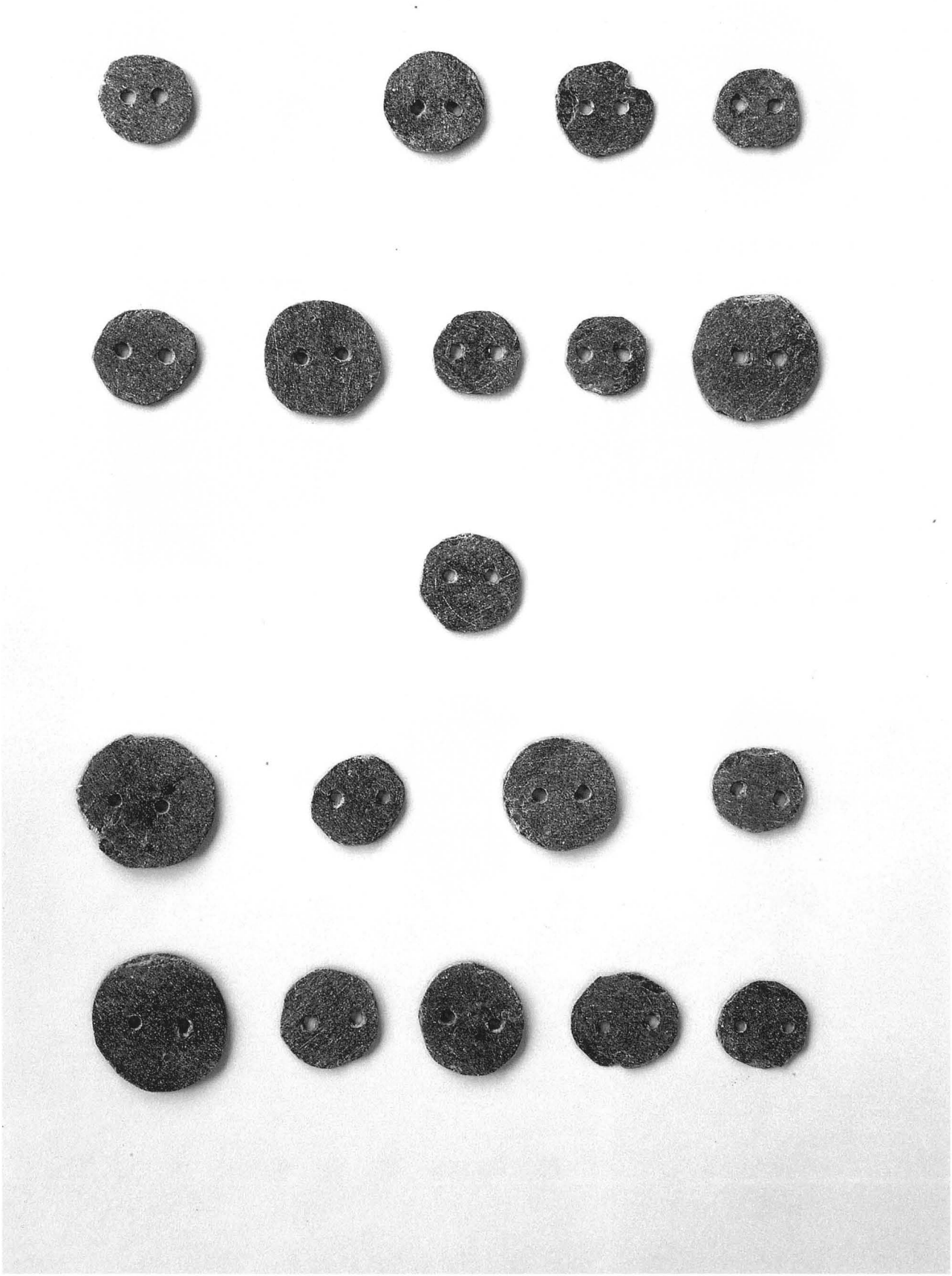
Ⅲ次第21号住居跡出土土器(15)

Ⅲ次第１号住居跡出土土製品(５)

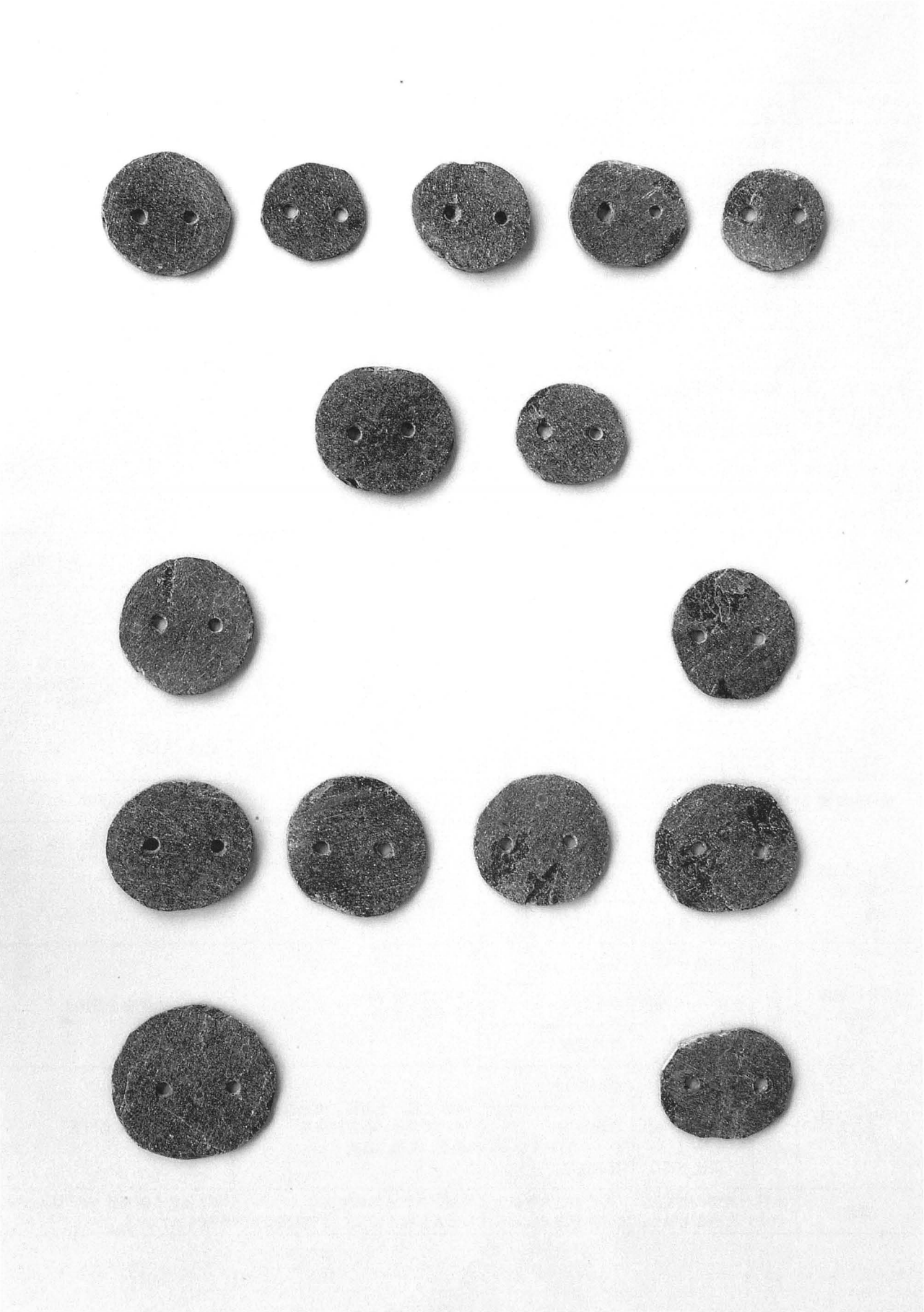


Ⅲ次第７号住居跡出土滑石製模造品(左上から勾玉16、臼玉17～44)

PL.19



Ⅲ次第７号住居跡出土滑石製模造品（左上から双孔円坂45～64）



Ⅲ次第７号住居跡出土滑石製模造品（左上から双孔円坂65～79）

報告書抄録

ふりがな	おおさくだいいせき
書名	大作台遺跡
副書名	第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編者名	中村哲也
著者名	中村哲也
編集機関	美浦村教育委員会
発行機関	美浦村教育委員会
発行機関所在地	〒300-0404　茨城県稲敷郡美浦村土浦2359番地　美浦村文化財センター
発行年月日	西暦2011年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大作台遺跡（おおさくだいいせき）	茨城県稲敷郡（いばらきけんいなしきぐん） 美浦村大字信太（みほむらおおあざしだ） 字作久保2013外（あざささくぼほか）	08442	104	35度 99分 39秒	140度 31分 54秒	第Ⅰ次 20030525 ～20030704	約100㎡	土砂採取に伴う記録保存発掘調査
						第Ⅱ次 20070219 ～20070329	約1,500㎡	
						第Ⅲ次 20080121 ～20080512	約1,700㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大作台遺跡 第Ⅰ次	集落跡	弥生時代	住居跡1	弥生土器、土師器、須恵器 磨製石斧 球状土錘	
		古墳時代	住居跡2		
		中・近世	塚状遺構1		
大作台遺跡 第Ⅱ次		古墳時代	住居跡2	土師器、須恵器 鉄製鎌、古銭	「信太」の墨書土器出土
		奈良・平安時代	住居跡5		
		中・近世	塚状遺構1		
大作台遺跡 第Ⅲ次		古墳時代	住居跡17	弥生土器、土師器、須恵器 滑石製遺物、石製紡錘車 巡方、丸鞆、古銭	隆平永寶、腰帯具出土
		奈良・平安時代	住居跡11		
		時代不明	住居跡2		

要約	大作台遺跡の所在地は、古代の信太郡信太郷に推定される地域であり、今回の3次にわたる調査でも、「信太」と書かれた墨書土器や、腰帯具が出土し、古代の信太を考えていく上で貴重な成果が得られた。

茨城県稲敷郡美浦村　**大作台遺跡**　—第Ⅰ～Ⅲ次発掘調査報告書—

発行年月日　平成 23（西暦 2011）年 3 月 31 日

編集・発行　美浦村教育委員会
〒 300-0404　茨城県稲敷郡美浦村土浦 2359
美浦村文化財センター（陸平研究所）TEL 029-886-0291

Ibaraki, Ōsakudai Site

Miho Village Board of Education 2011